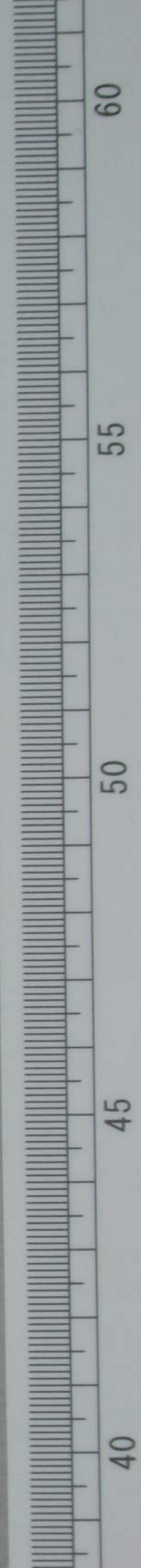


早稻田大學出版部發行

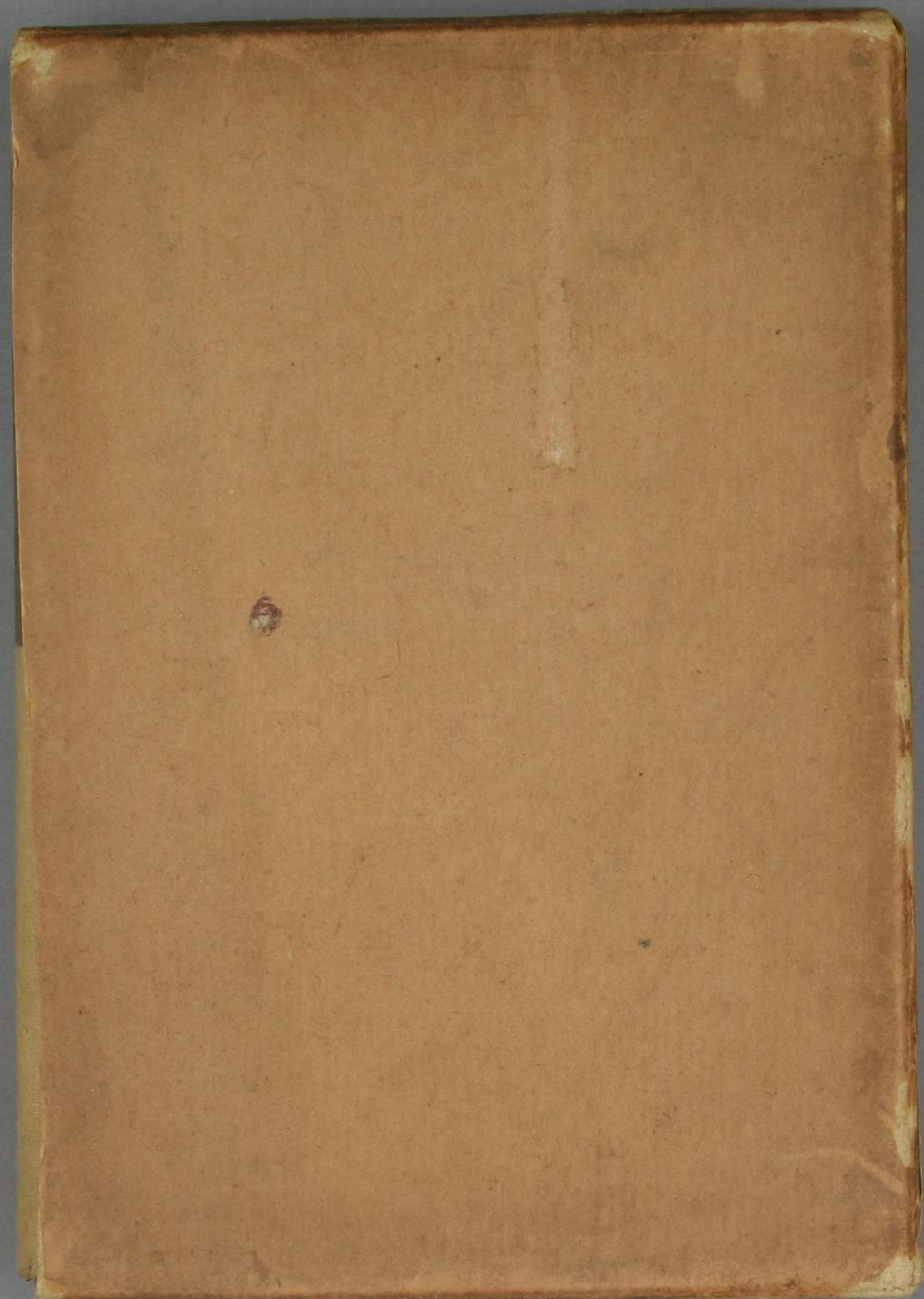
長門漫筆

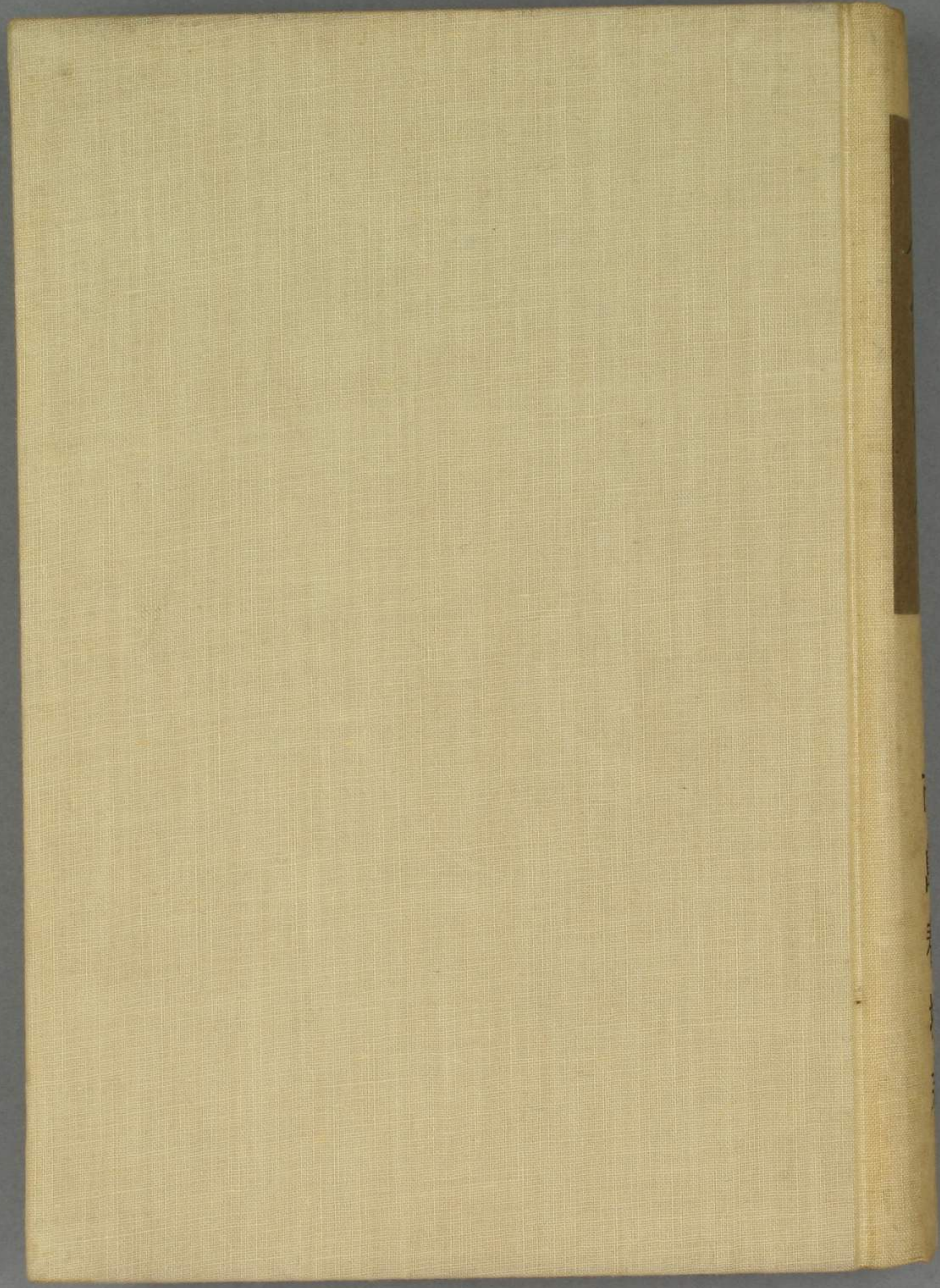
市島春城著



春城漫筆

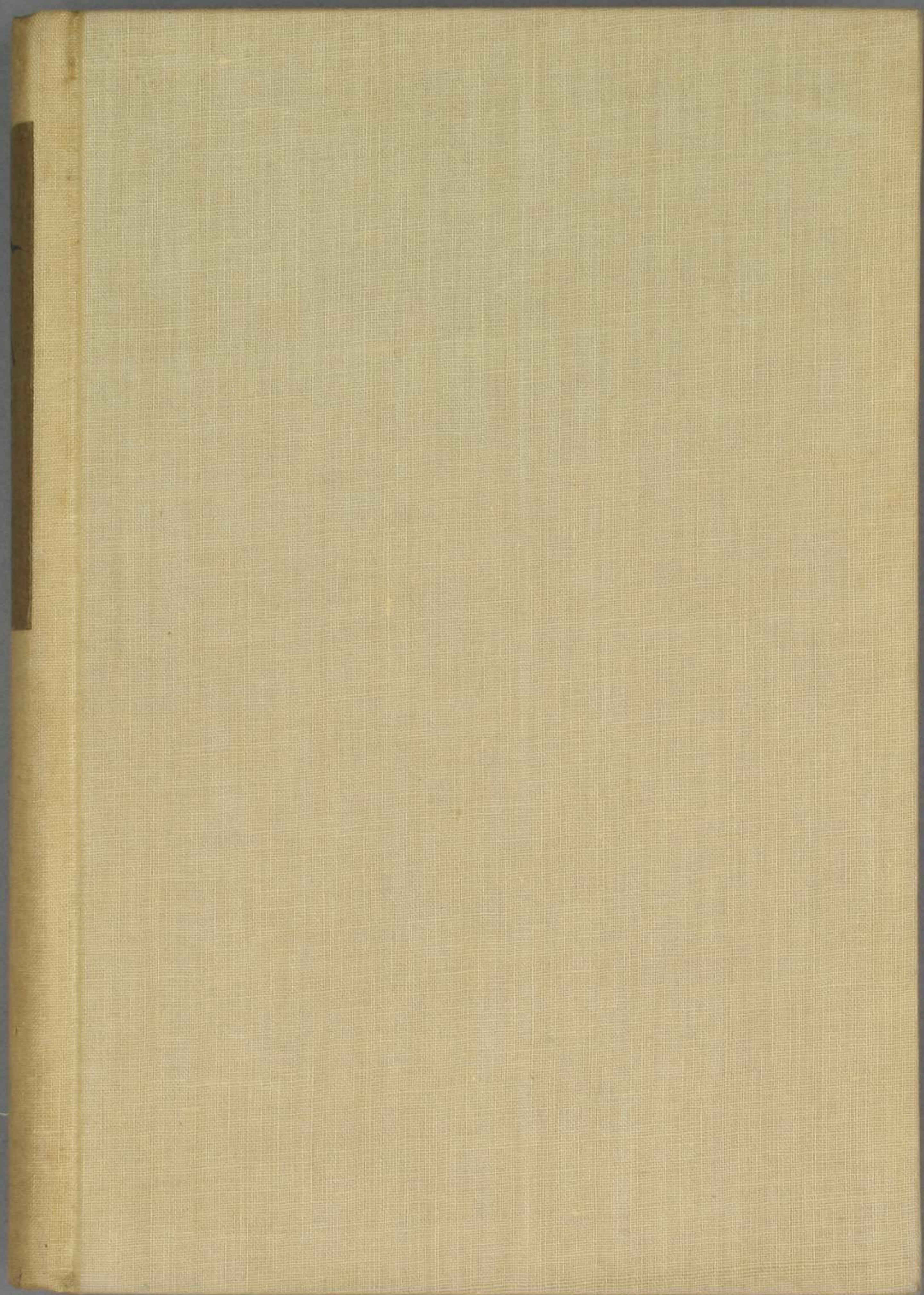
市島春城著

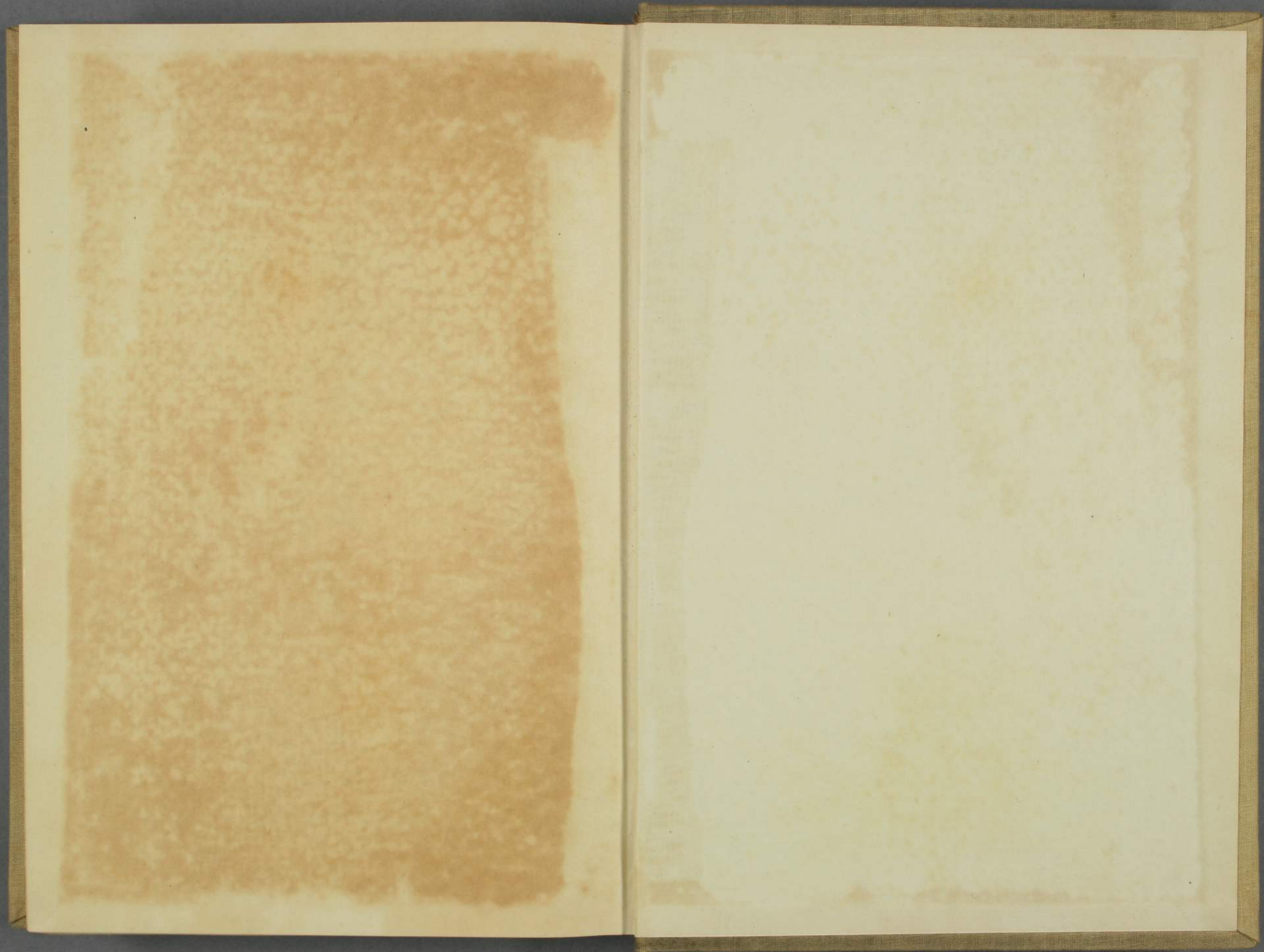




春城漫筆

市島春城著







長何漫筆



序言

私は毎年一冊の隨筆を出すことが近年の例となつてゐる。實は毎年の暑中休暇に、無聊を遣うため、漫りに筆を走らすのが、いつしか積んで原稿となるのだ。本年の夏はいつもよりも暑熱が烈しく、身の置き所に困しんだ位で、常に毎日四五の來客があるのだが、それもピツタリ足を止め、各般の會合も概して見合はされ、知人は山に海にと出かけて、訪れても多くは留守である。

私は無聊の家居一日のつらさをしみぐと感じた。そこで已む

なくまぎれる爲めに筆を把り始めたが、汗を流しての執筆は決して愉快でない。併し慣れるといふことは妙なもので、毎日續けると、執筆の間は兎に角まぎれて暑熱を忘れ、一日でも執筆を廢すると、却つて不愉快を感じるやうになり、暑中六十日間ブツ通して執筆をつゞけ、どうやら暑氣と戦ひ果せた。その産物が即ち此の隨筆である。

私の隨筆はいつも内容が空疎で恐縮するが、此度のも亦同様である。隨分問題の多い世の中であるから、政治、經濟、社會の事相に就て書けば材料は豊富であるに相違ない。併し政治や社會などの問題に觸れて警世的の筆を揮ふことは私の柄に無い。

隨分若い頃には悲憤症慷慨病に罹つて世間並に此等の活問題に觸れたこともあつたが、今は全くそれがいやになつた。實は、暑中のうさ晴らしに、汗を流して世相に對する不平を漏らすなどは莫迦げてゐる。機械文明の眞只中まっただなかに立ち、毎日齷齪日を送つてゐるのがたまらないほどつらい。どうかしてせめて暑中だけでも神經を弛めて、のんびりして見たいと思ふのが私の偽らざる情である。私は、家に居ながらも靜閑なる境地に身を置いた氣持で、私が好むまゝなる筆を弄して見たいと、益もないことを毎夜漫りに考へて、翌朝それを筆作するのが、六十日間の日課であつた。

私は此の隨筆の執筆中偶然銀座街頭で英國製の砂時計を獲た。これは蒙昧時代の時器ではあるが、機械細工を全く離れ、そして音響を少しも發せず、立派に時器の役をなしてゐる。私は静閑の境地に身を置く同伴としてこれほどよいものはないと案頭に置いて親しんだ。此の時器は機械文明の騒々しさを冷笑するかにも思はれて、私を静閑の境地に立たしめるには與つて大いに効があつた。私は此の時器に對し幾度となく思つた。機械文明も此の時器のやうに聲もなく冷静に用を足すやうにならねば極致に達したとは云へない。決して蒙昧期の物だと侮つてはならぬと。實を云へば、これほど皮肉のものはないので、自分の

隨筆もこれに學ばねばならぬとも感じたが、才疎にして到底その冷靜の皮肉を學ぶことの出来ないのを恥ぢる。

要するに、私の隨筆は閑耳目の記載に過ぎない。實は無用のものであるけれども、無用之用と云ふこともある。若し世間多くの人々の内で、忙劇に煩はされ、心身の弛緩を思ふこと私のごとくであり、静閑の境地に身を寄せて見たいと思ふ人があつたら、此の無用の書にも幾分用立つことが見出さるゝかも知れない。私は敢てそれを期待するとき不遜の心を持たないが、若し此の漫筆が聊かでも無用の用たるを得ば私の仕合せである。

昭和四年十一月

著者識

春城漫筆目次

走馬燈

上

良寛禪師の逸事……………	一頁
二儒に就ての珍聞……………	七
大隈老侯を憶ふ……………	九
名刀の如き田中伯……………	一八
日本女子大學の追憶……………	二四
山田奠南を憶ふ……………	二七
聖恩枯骨に及ぶ……………	三〇
内田魯庵君に就て……………	三六

目次

目次

同名異人……………四〇
 契沖阿闍梨……………四二
 鍛形蕙齋……………四四

下

東西藝術の相異……………四七
 塔……………五七
 地方の家庭美 附失業対策……………六三
 新しい住宅建築と茶室造……………七六
 文藝と金融……………八四
 演説思ひ出譚……………一〇一
 結婚叢談……………一二
 昔の嫁さがし……………二九

民衆藝術……………一二
 人形の話……………二九
 蒐集家七則……………三四
 黒部の谿谷をたづねて……………三八
 頼山陽と骨董……………四七
 記念事業の傑作……………五九
 熱海の逍遙書屋を観るの記……………六三
 赤保々……………七二

はしがき……………
 身體の偽りは衣服也……………
 裸詩……………
 裸體の快味……………
 宮崎の裸祭……………
 曝書……………

禪の淨裸々……………
 炎熱を知らぬ人……………
 赤裸の講義……………
 裸體の變遷……………
 裸百貫……………
 裸樹……………

赤裸の眞實……………
 赤裸々の告白……………
 橘曙覧の裸歌……………
 寒詣り……………
 蛙……………
 裸字……………

目次

目次

土井鑿牙	裸體美人の御注進	青崖の豪放
愛川と紅葉	賀客を裸にす	裸體の新婦
裸體の顔世御前	裸兵の敬禮	露佛
裸體畫	不本意の裸體	交際の祕訣
餘録		

訪書餘談

馬琴と北越雪譜	一九〇
早稻田大學の二大奇書	二三四
書畫圖書の複製に就て	二五二
三十六人家集	二四〇
異國叢書	二四六
佛人の日本觀	二五六

臺灣志と日本紀行	二六〇
夷狄の國へ	二六二
頼山陽朱批の江馬細香詩集	二七九
福地櫻癡父子	二八八
吾郷の大數學家	二九五
朝倉雜話と心學のポスター	二九八
隨筆家細川十洲	三〇五
田中智學氏の日蓮傳	三〇八
讀書の鼓吹(ラヂオ放送)	三二一
講義録文學	三二六
大隈家の反故しらべ	三三二

竹頭木屑錄

目次

神武大皇の御銅像……………三六五

北野の菅廟を拜して……………三六六

泉岳寺の義士碑……………三六八

天平時代の紙の品目……………三六九

北海道の地名……………三七三

二箇の官印……………三七四

雨の詩趣……………三七八

家園雜興……………三六一

新緑……………野趣……………朝顔……………夾竹桃

墓……………蝶……………蛛網……………蟬蛙……………

廢瓦……………三六八

酒數則……………三六九

枕に就て……………三九三

五山詩佛の好諱……………三九七

無舌……………三九九

俗語の長所……………三九八

新潟の朝市……………四〇一

斷髮令の悲喜劇……………四〇七

吾等(リンドパーク自傳の書名)……………四〇八

外人と勳章……………四一〇

映畫の爲めの猛獸狩……………四一〇

三白と赤化……………四二二

砂時計に感あり……………四二三

ペーパー・カッター……………四二五

東西文明の調不調……………四二九

哲學者流の撞着……………四三〇

目次

鰻道樂……………四二
魚類の飛行機運搬……………四三
燕巢と同趣の食物……………四三
賣品にあらざる賣品……………四四
雅邦の當意即妙……………四六
外人の見たる男色の惡風……………四七
不自然な脚色……………四八
江戸奴の大言壯語……………四九
梅曆の中の通客……………四〇
美術として見た女帯……………四二
文晁の進學圖……………四三
登山具を見て……………四五
惡客……………四六

震災當時の思ひ出……………四一
墨に謝するの詞……………四二

附載

市島春城翁の『頼山陽』……………内田魯庵…四四

春城漫筆目次終

目次

春城漫筆

市島春城 著

走馬燈 上

良寛禪師の逸事

良寛禪師が中國筋に二十年ばかりゐた間の事が一向に知れない。此の長い間には四國にゐたこともあると云へど、其の事跡も明かでない。然るに土佐にゐたころ、近藤椿園が雨にふりこめられて、良寛の庵に一夜の宿を借りたことが、椿園の隨筆にのつてゐるのは眞に幽谷の蹊音で、惟一の資料とも云ふべきもので、其の記事が如何にも良寛を髣髴させてゐる。嘗て郷友田

代亮介氏から大略を聞いたが、其の宿を借りた旅人の名が知れなかつたので、特に田代氏を煩はして、取調べて貰つた所、すべてが分明して隨筆の原文の寫しも手に入つた。即ち其際の旅客が前に書いた近藤椿園であることが其時に知れたのである。此人は通稱近藤又兵衛と云ひ、又萬丈とも云うて、江戸の小日向新屋敷に住居し、嘉永元年戊申の十月廿七日七十三歳で歿し、法名を椿園萬丈信士と云うたなどが知れた。實は越後に解良氏といふ舊家があつて、良寛とは深い縁因があり、其頃の解良家の主人は榮重というて、和歌を詠んだので、椿園と歌の上で交りがあつた。解良の家が良寛に縁因の深いことを後に知つて、椿園は昔語りの認めある隨筆を寄せたのだといふことである。其の隨筆は「寐覺の友」といふ書であると聞いた。すべて此等の事は解良氏が田代氏の間に答へた文に據つて爰に記す。扱て其の文は左の如くである。

土佐の國に行しとき、城下より三里ばかりこなたにて雨いたう降り、日さへくれぬ。道より二丁ばかり右の山の麓にいぶせき庵の見えけるを、行て宿乞ひけるに、としの頃四十ばかりなる僧の、ひとり爐をかこみて居しが、喰ふべきものもなく、風ふせぐべきすまもあらばこそといふ。雨だにしのぎ侍らば、外に何かは求めんとて強てやどかりて、さよ更るまで相

對して爐をかこみ居るに、この僧、初にものいひしより後は一言を云はず。坐禪するにもあらず。眠るにもあらず。口のうちに阿彌陀ぶちと唱ふるにもあらず。何やらの物語しても唯微笑するばかりにて有しにぞ、おのれおもふやう、こは狂人ならめと、其夜は爐のふちに寐て、曉にさめて見れば、僧も爐のふちに手枕してうまいし居ぬ。扱明けはてぬれど、雨は宵よりも強くふりて、起出べきやうもなければ、晴れずとも、せめてしも小雨にならんまで宿かし給はんやといふに、いつ迄なりともと答へしは、きのふ宿かせしより猶うれしかりし。日の巳のこく過る頃に、麥の粉湯にかきたて、くはせたり。扱この庵の内を見るに、たゞ持佛堂の木像の如來のひとつたてると、窓のもとに小さおしまづきを居て、其上にふみ二冊置たるより外は、何ひとつたくはへもてりとも見えず。このふみ、何の書にやと見れば、唐刻の莊子なりし。そがなかに、僧が詩作と覺しくて、古詩を草書にかけるがはさまりある。唐歌ならはねば其巧拙は知らざれども、其草書の筆の見事なる事、目を驚かさばかりなりしゆゑ、笈おひのうちの扇二本取出て、贄を乞ひけるに、言下に筆を染ぬ。一つは梅に鶯の繪、一つは不二の高嶺を繪がきしなりしが、今は其贄はわすれたれど、ふじの繪の贄の末に、かくいふ

ものは誰、越州の産了寛書と有しをば覺え居ぬ。其日も又暮ちかきに、雨は猶時じくにふりてやまざりしにぞ、其夜も、きのふのごとく、僧とともに爐のかたはらにいねしが、明れば、いつしか空はれて、日の光かやきぬ。例の麥の粉くらひて立出る時、二夜の報謝の爲に、いさ、か錢を與へけれど、かゝるもの、何にかはせんとてうけひかず。其ころざしにもたらんも本意ならねば、引かへて紙と短冊與へけるをば、よろこびてうけ納ぬ。こは、今ははや三十とせ餘りむかしの事なるが、ちかきとし、橘茂世といへる者の著せし北越奇談と題せし書に、了寛は越後國其地名をば橘何某といふ豪家の太郎子にて、幼少より、書をよむ事ばかりを好み、殊に能書なりしが、古人の風を慕ひ、さしも富貴の家を嗣ぐ事をいとひ、終に遁世して行方しれずと。はた其家にありし時の事どもつばらにせるせしを見れば、かの土佐にて逢ひし僧こそはと、すゞろに其昔思ひ出されて、一夜寐覺の袖をしぼりぬ。

此の記事は、簡單ながら、良寛の風骨をよく描寫してゐるやうに思ふ。其の荒れたる庵室に寢具もなく、喰ふには粥の外に何もなく、櫛たを焚いて對座しながら、問はるれば答へ、問はざれば黙々として、無愛相であり、共に爐邊に臥して無頓着なありさま、翌日も雨が晴れないので

滞留をと望めば、洒々として其の意に任かすなど、良寛の生き寫しである。良寛の事をいろいろに書いたものはあるが、多くは潤色を加へてあるが、この文ほど、よく寫してゐるものは無いやうに思はる。又想ふ、

對君君不語、不語意悠哉、帙散床上書、雨打簾前梅

といふ良寛の詩がある。此の客に對して無言の處に悠たる禪意がある。床上の亂帙、雨の簾を打つ景、さながら此の時の作の如き觀がある。

序ながら尙一事書き添へることがある。それは相馬御風氏が「良寛坊物語」に書いてゐる一遺事で、私には初耳であるからおもしろく感じた。それは、良寛が倉卒座右の本に「おらが本」と、藏書印でも捺すやうに無心に書きつけて、さてあとから、その本は他より借りたのであることに氣がついたと云ふ、極めて簡單無味で、挿話となす資格がないやうな逸話であるが、私には此事を妙に面白く感じた。良寛の庵室生活には、寢具と飲食の調度はあつたにしても、他には幾んど無一物の境遇で、書物などは、「萬葉集」其他詩卷があつたとしても、それは懇意の家から借りて來たものであつて、自家の藏書などは、一冊も無かつたのであらう。それを、落書

きをするものに事を缺いて、他人の書物に「おらが本」と書きこんだなどは、良寛が如何に無心無頓着であるかを現はすもので、あとから他借の本と氣が附いて、わるいことをしたと、悔いたらしく御風氏の書いたのは却つて當らず、恐らく良寛は平氣であつたであらう。「おらが本」と書いたと云うても、良寛の本と云ふのではなく、持つ人の誰れにも通ずる言葉である。深く大きく考へれば、書物は共通のもので、展轉持主を換へれば、どの人にも「おらが本」である、と大きく禪理をこね廻はす所に良寛の磊落の處があるので、或は、無心で書いたのではなく、コンナ心持で書いたのかも知れない。兎に角、良寛にありさうな逸事で、事は簡だが意は深長なるを覺える。

尙他に書き添へるべき事は、先頃吾が郷國の大河津村平澤金三郎氏が、其の親戚原田家の所藏である、良寛の手簡類數卷と遺器二點とを携へ來て示された。原田家には、先代に正貞といふ人が良寛と交りが深く、其家に良寛の物が残つてゐると云ふが、私の目を喜ばしたものは手鞠と抹茶の茶碗であつた。手鞠は徑一寸三分許のもので、精巧の裝飾なきも、花卉などの縫のあるもので、箱書に赤城山人の和歌があつた。

きみが名はながき春日に此手まりつきせず代々に傳へやはせむ

此の赤城山人といふは原田家の親族で、齋藤二郎と稱し、家塾をひらいて學徒に教授した學者で、勤王家の高橋精一郎の如きも此門から出たのだ。此人の嫡男齋藤木は曾て早稻田大學の講師として漢文を教へたので、私も交はりがある。茶碗は西京の六兵衛が折紙を添へてゐること、繪瀬戸で頗る時代があるから、器それ自身に相當の價がある。貧僧の所持品には不似合のものであるから、其の由來を尋ねると、越後の豪家山田權左衛門が禪師に與へたので、それを原田家へ預けて置き、來訪の都度それで茶を喫したと傳へてゐる。良寛の遺墨は必らずしも珍らしくないが、其の手澤の器物の二つ迄傳はつてゐるのは珍らしい。

一一 儒に就ての珍聞

「事實文編」の著者五弓久文の抄録本を購ひ得て讀むに、往々耳新らしい逸聞がある。聞書のことだから、誤りがなにも云へないが、爰に一二を摘録する。

儒者山本北山が、田沼意次の悪政に憤慨して暗殺を企てたことなどは珍聞である。又古賀精里が、江戸に住しながら佐賀訛りがいつまでも脱けないで、御前講義に將軍を困らせたこともおもしろく思はれた。云く、――

一島田立助の説に、龜田鵬齋、臨終の時、子弟に向つて言けるは、我今日迄秘し置けるなれども今日は命の盡くる目なれば、先輩の義事を言はずして可ならんや。前年田沼侯朝政を擅にしける時、天下皆これを嫉惡せざるものなし。然れども其の威權に畏れて一人のこれを指摘する者なし。山本北山、此頃富士見御寶藏番與力を勤めけるが、田沼侯の威福を擅するを憤り、且天下の爲に大蠱を除かんとて、登城の節御立關先にて待受け、一刀に斬殺し、後潔く死せんと心決し、其前夜、余を其家に招き馳走し、酒後、人を退け竊かに曰く、足下と我とは眞に知己なり、今日此大事を企つ、事成れば速死耳、唯平生の交誼他と異なるを以て終身の別を告ぐと、涙をばら／＼と流せり。此時余の心以爲らく、若し吾之を止むれば反つて害せんことを畏れて、永訣を惜み、後事迄いろ／＼話し、歸途、北山幼少の時の乳母根岸に住居して在りけるもの、方へ往き、此事を告げて、意を授け之を止めしむ。此

乳母は實に北山の母の如く愛する老婆の事とて、聞きて大に驚き、乃ち往きて泣きて止めければ、北山も遂に思ひ止まりたる也と語りたるよし。

一或人の説に、精里先生の言葉は、晩年迄矢張肥前言葉のこりて居たるよし。其故は、先生特命ありて文恭院様御前にて御講釋被致候節、講畢り、先生御前を退出の後、文恭院様、御側に伺候せる人へ、彌助はあれでも學問には長じて居るかは知らね共、おれには兎角言辭がわからぬと上意あれば、御側衆、仰之通彌助言葉は分り兼候得共、學問には餘程達せしものに御座候と申上げたるよし。

大隈老侯を憶ふ

大隈侯が世を去られてから既に七年を経過した。私は老侯存世の時分につく／＼感じたことがある。むかしローマが隆盛であつた頃、世界のあらゆる國々は、ローマを中心としてこれを景仰した。そこで古い諺に「世界の道はローマに通ず」というた。自分は老侯に感じて此の語

に倣ひ、「世界の道は早稲田に通ず」というたことがある。と云ふ譯は、世間では老侯を以て世界の偉人というてゐる。これは決して侯に阿諛する言ではない。凡そ外國から人が日本へ來ると、その人が官途にある者であらうと在野の者であらうと、そんな差別はなく、あらゆる階級の人が早稲田を訪はぬ者はなかつたのである。そして彼等は、大隈侯に面接することを以て光榮とし、これを本國への第一の土産とするのであつた。苟くも日本の事情を知らうとする者は、その最も簡便な方法として大隈侯を訪問し、一時間にも足らぬ説を聞いて満足したものである。即ち侯に接するを以て日本のあらゆる方面の事情に通ずるの捷徑としたものであつた。地位高き外國の貴紳、新聞記者、學者なども、日本に來て外務大臣に見えよまゐるよりも、むしろ在野の大隈侯を訪うて談ずる方が國際的にも有力でありまた有効であるとして、必らず何を差措いても大隈侯を訪うたものである。公けの國際機關たる外務省を閉却し、霞ヶ關を素通りにして、早稲田へと自動車走らせた者が多かつたのである。

大隈侯の外人に對する一舉一動は國を背負つての一舉一動であつた。侯一個の私の一舉一動ではなかつた。侯の一言一行は直ちに電信や其他の通信を以て世界の各地に傳へられ、それが

日本帝國の代表的言動と認められ、頗る重きをなしたことは何人も許す所であつた。

早稲田の如き、都市の一隅にあつて、兎もすると東京市の地圖に見落されさうな草深い邊鄙な所へ、遠く千里の波濤を蹴つて來た外人が必らず車を驟らすといふのも、畢竟茲に世界的偉人があつた故である。その侯たる、官に在らうがなからうが、其身分の如何に拘らず、あらゆる階級の外人を早稲田に引きつけたものだ。

斯かる邊鄙な土地が恰も昔日のローマの如く、世界の道がすべてこゝに通じてゐたといふのは甚だ奇觀である。若し茲に日本と世界列國の通路の圖を作つたとすると、ドンな圖が出来るであらうか。殆んど世界から導かれる蛛絲の如き線は何百何千と東京の西北隅の一地點に集中するの奇觀を呈することであらう。

よく聞く話であるが、外人が日本へ來るには大概二つの目的を持つて居る。その二つの目的といふは、大隈侯に謁すること、富士山を見ることである。成る程これは面白い事と思はる。大隈侯が日本一の人物であると共に富士山も亦日本一の名物であるに相違ない。世界に幾多の峻峰があるにしても、富士の如く、火山作用で出來た美しい姿容と風雅な趣をそなへた山

はいづれにもない。その山が日本の首都東京に於て居ながらにして朝夕望むことが出来るといふわけであるから、外人がこれを見るのを樂みに、はる／＼來て驚歎の目をみはるのも無理はない。爰に偶然だが此の二つの對象に不思議に似寄つたことのあるのは一奇と謂ふべきである。

富士は古來日本の國鎮と仰がる、ほどの名山で、その崇高なる態度をみては、如何なる者も敬虔の情を捧げずにはゐられないのである。その巍然天半に聳える風貌は、どうしても萬嶽の王たる品位がある。そこで人間に若し比較を求めたら、誰れが此の富嶽の品位と態度を備へて居るだらう。恐らく大隈侯の外に比較すべき人はなからうと思ふ。外人が日本へ來る二大目的として此の二大物を選んだ所に頗る興味が感ぜらるゝ。

日本でも古來富嶽を見るのを大なる興とした。今日こそ鐵道其他の交通の便が開けて富士を見ることも容易だが、交通の不便であつた昔には、たやすくこれを見ることは出来なかつた。九州方面の人は勿論、上方^{かみかた}方面の人々でも、生涯に一遍富士を見たいと、千里を遠しとせず、この目的のために旅をしたものだ。頼山陽の言ひ草ではないが、英雄豪傑は常に切取りを事とし、甲の地を取つて乙へ移し、乙の地を取つて丙へ移すこと、掌中に弄するが如くであつたが、こ

の富士だけは如何ともし難く、之れを見るために多くの豪傑ははる／＼足を勞したものだと言つてゐる。

富士は屹立一萬尺ともいふべき大山で、扇を倒にした如くに東海の天に懸つてゐる。これを居ながらにして見ることの出来る國が十三州ある。事實此の山は甲駿にあるにしても、十三州の人々は皆各自の國のものと考へてゐる。否、十三州のみでない、全國の者が皆吾が物の如くに考へて居る。都合のよいことには、富士に似た山が方々にあつて、それが代理でいもあるかの様に其の地方々々の名を冠^{かぶ}り、仙臺富士だの津輕富士だのと言つて、朝夕之れを仰いで富士を見た心地を感じてゐるのである。そこには、明かに、日本全土の人々の魂に、富士といふものが深く根ざされてゐることを物語るものでなければならぬ。

大隈侯は佐賀の人である。併し侯は肥前の人々の專有の人物ではない。その住宅は東京にあつたとはいへ、東京のみの人物ではない。日本到る處の津々浦々、侯に接したと否とにか、はらず、恰も慈父のごとくこれを仰いだ。その趣は富士と同様である。或る者は大隈侯を日本の國寶だと云つた。富嶽を國鎮と云ふのと同様の見方である。大隈侯も國家の重鎮であつたに相

違ない。

富嶽と大隈侯には似寄りが多いが、茲に不幸なることには似ないことが一つある。即ち富嶽は永久に存するであらうが、大隈侯は人間である約束により遂に亡びねばならなかつた。侯の英靈侯の精神は不滅で、長へに國家を護り國民を導くであらうが、其の形骸は已に亡びた。此の點は富嶽の永久に存すると異つてゐる。我々の國の爲めに悲しむのは此の點にある。若し富嶽が一夜のうちに地底に沈み、永久に之れを仰ぐことが出来なくなつたら、人は如何に驚くことであらう。侯の薨去は富嶽の一夜に沈んだと同じ様なものだ。國民が至誠の情を捧げて哀慟したのも偶然でない。

侯は朝にあると野にあるとの別なく、その日々夜々の言論は世の中を照らす大なる光明であつた。侯の言論は都下幾十の新聞に掲げられ、それが全國の各新聞に轉載され、ほとんど例として一二段は必らず侯の言説を以て埋めたものであつた。新聞の編輯者も讀者も一日侯の言論を其の紙上に闕いては甚だ物足らぬと感じたものだ。侯の言論が不斷に世を指導感化したことは實に測り知られざるほどである。侯の言論は俗流を超越してゐた。故に世人は、國家の重要

問題がおこる毎に、侯は之れに對し如何なる見解を下すかと、興味を以て待設け、その指導に聽いて向背を決したものだ。新聞紙を以て世を照らす燈臺に譬へるならば、侯の言論はそれに注ぐ油であり、それに點する電氣であつた。幾十幾百幾千の新聞紙が、侯の言論により、どの位光彩を放つたか、知れない程である。然るに侯逝いて爰に七年。毎日掲げられた侯の言論はここに斷絶した。それから、各新聞皆寂寞を感じ、天地は何となく薄闇くなつた様に感ぜらる。世を指導するものは侯一人に限らないとしても、侯のごとく多方面に偉大な感化を與へた人は恐らく他に無いであらう。侯を失つたのは、全く燈臺の電氣や油が遽かに減じた様なものである。

日本の政治家で臺閣に立つて世を指導する人はある。併しその人一人たびその地位を去れば、同時に啞となつて仕舞ふのが常である。畢竟權力や地位が爲す業で、地位と權力に離るれば平々凡々である。所謂の官僚的政治家は皆これである。伊藤山縣二公にせよ、此の範圍を脱するとは出来ぬ。伊藤公は才幹ある政治家と謂はれたが、野に立つてどれだけ國家社會を指導したか、到底大隈侯とは比較にならぬ。

大隈侯は藩閥の人でなかつた。従つて臺閣に立つ機會が多く無かつた。假令ひ立つても、久しく其の地位を保つことが出来なかつた。侯の生涯は大體不遇で、在野の人であつた。他の藩閥政治家ならば、野に下れば何處にゐるかさへわからぬ位なものであるのに、侯は長い在野生活を一日もあだに過ぎすことなく、頗る勤勉に國家百般のことに努力され、侯の活動の消息の知れない日とは無かつた。侯の生涯こそ、眞に生きがひのある生涯であつたと云ふことが出来る。

侯は藩閥者流に對して一大敵國であつた。朝に在る時は、藩閥者流は侯を抑へるに聯合の力を以てせざるを得なかつた。侯は野に在つても藩閥者流に憚られた。藩閥者流が其の専恣を擅にすることの出来なかつたのは、偏へに此侯あるが爲めであつた。侯は、權力なしに、居ながらにして彼等の暴慢を制したのである。此の點に於ては、侯の力は帝國議會のそれにも比すべきである。否、或はそれ以上であつたかも知れない。

侯の生命は政治にあつたことは云ふまでもないが、侯ほど多方面に能力を持った人は多くない。政治に就て云へば、侯は財政に通じ、外交に通じ、亦經濟に通じた人である。大抵の人は、

老いると思想がふるほけて、保守に傾きやすいが、侯は常に新しい知識を得るにぬけ目がなかつた。それ故に思想は常に新らしく、若い者をして後へに障若たらしめた。侯が晩年二十數年の間文化運動に大なる働きをされ、目ざましい効果があつたことは争はれぬ事實であるが、西洋あたりでは敢て珍らしいでもないが、日本では老人の晩年に見る希有の事と云ふべきである。畢竟侯は進取の氣力に富み、兼ねて文明を以て日夕の食物とされたから、常に時勢に先んじ、世を導くことが出来たのである。侯は明治維新起身の初めから棺を蓋ふまで文化運動を以て終始された。維新の初めから思想が新らしく、生涯少しも退歩と云ふことなく、常に世に先んじて終焉を告げられたが、多く例の無いことである。

或は侯などの大人物が朝に立つ間の割合に短かつたことを惜むものもあるが、侯の如く、朝にあらうが野にあらうが、間斷なく國家を念とし國民を指導するに怠りの無い人は、朝に立つた間は短かつたと云うても強ち惜むべきでない。侯は在野の人として國民に親しみ、國民の友として又國民の師範として在朝者の爲し能はざる所を多く爲した。國民が在野の侯より得た利益や薰陶は實に鉅大のものであつた。侯が若し終始臺閣に居られたとしたら、國政の幸であつ

たに相違ないけれども、教育的、社會的の薰陶までは手が延びなかつたであらう。侯が政治以外に大なる働きをされたのは、寧ろ不遇から生じた賜と云はねばなるまい。

今は國歩艱難で、俊傑を思ふ時である。誰が起つて此の時艱を濟ふであらうか。國民の指導者たるべき政治家は見渡す所甚だ乏しい。政黨の首領などというても餘りに人物が小さい。これを超越して眞に國民の父と呼ばれ師と仰がる、者は何處にあるか。侯逝いて七年、坐るに天地の寂寞黯淡を覚え、感慨に堪へないものがある。

名刀の如き田中伯

拙著隨筆に「趣味の人田中青山伯」といふを書いたのが機縁となつて、去月青山會館に伯を迎へて、祝賀の宴を張つた時に、私は伯の趣味方面を擔任して聊か陳べる所があつた。併し伯の多くの趣味の内第一に數へねばならぬ刀劍趣味に就ては、私は全く門外漢であるので、嘗て伯より語られた事の眞の一端だけを談ずるに過ぎなかつた。幸ひに會が畢つて後、私が嘗て

聽いて忘れたことを質問する機會を得て、詳細に知ることが出來たから、こゝにそれを録して遺忘に備へる。

田中伯が名刀の仲介で高杉晋作と師弟の關係を結んだといふ話は、伯の傳に大切な關係のある挿話だが、その名刀は安藝の佐伯の莊藤原貞安の作で、永祿六年八月吉と銘が切つてあつて、中身が二尺六寸で、薩摩の浪人梶原鐵之助、本名左近允嘉右衛門さこんのしょうの差料であつた。伯が慶應元年四月十日大和十津川に逃れた時、紀州日高郡の温泉場に梶原と交つて懇親の間柄になり、伯の佩力備前祐春と交換したのが、此の刀の由來である。伯は此の刀を誇りとして私かに愛したが、高杉に會した折、高杉より佩刀拜見と望まれて之れを示すと、高杉も其名刀に驚き、頓みに食指動き、切に割愛を請はるゝのを辭退も成りかねて、師弟の關係が許さるゝならばと、それを條件に其刀を與へた時、高杉は謙遜して、自分は貴下の師たるべきものでない、併し便利とあれば、いつまでも弊宅に居らるゝことを辭せぬと、爰に長州の俊豪と土佐の俊豪が結託の端を發したのだが、一振の刀が薩人から土佐人、土佐人から長州人に移り、薩長土の連衡を形づくるに至つたのも奇縁であるとは伯の直話である。

他の刀劍談は、國家の大切な慶事を祝するの意を以て、明治大帝に最も愛重の刀を献上に追んだ話で、其の一は、明治二十八年一月十四日、日清役の大捷を祝するため、伯が宮内省の高等官總代として廣島の大本營に参候、拜謁を賜はつた際献上に追んだ一刀は一文字助宗で、最も貴重のものである。陛下は嘉納あらせられ、常に軍刀として長く佩用遊ばした。丁度伯が獻刀の折、岩崎彌之助氏よりも備前助平の刀を献上した。其際土方宮内大臣が待立してゐたのを伯は顧みて、伯は陛下に、此の助平の刀は、此處に居る土方が老いて益々盛んなるが如く、作は古い、なか／＼の業物でありますと申上げたといふ餘談もある。

他の一刀は、日露戦役祝捷の意を表するため、明治四十年十月、陛下が陸軍特別大演習御統監の爲め茨城縣結城に鳳輦を進められた際、其の祕藏の名刀備前友成の作を獻ぜられた。此の刀は結城に因みがあり、鶯丸と名づけて足利家の寶刀である。伯このたびの献上には二首の國風を添へられた。

みいくさは戦ふ毎に勝山の城につたへし太刀たてまつる

大前にさゝぐる太刀のつかの間もわれはわすれじ君が恵みを

此の鶯丸と云ふは、後花園天皇の御宇、足利持氏の遺孤安王、春王が、其の遺臣に擁されて、結城なる結城氏朝に依つて兵を擧げたけれども、將軍義教は大軍を發して結城を攻め、氏朝は戦死し、安王、春王は小笠原大膳大夫政康及び長尾因幡守豊景の爲めに擒にせられ、京都に送らる、途中、美濃の吉野ヶ原に殺された。義教は小笠原の戦功を賞して足利家重代の此刀を與へた。小笠原の子孫は越前の勝山に封ぜられ、此刀は勝山の寶物として傳へられたので、伯の國中に此の勝山を引いて祝意を表してゐるのである。後に此刀は對馬の宗伯の家に移り、それが又青山伯の手に歸したので、頗る歴史があつて、結城の大演習に地名の因縁があり戦勝に因める勝山にも縁のあるもので、あの折の獻上品としては洵に此上のないものであつた。

以上は親しく伯に就て聞いた事實であるが、伯は刀劍の鑑識では當代の第一人者で、壯年から此の方面に興味があられたことは、前記刀劍の交換談に於ても窺ふことが出来る。恐らく、伯の多方面の趣味も、刀劍の趣味が中樞となつて生じて來たものであらう。全體刀劍の趣味程高尚のものはない。伯が他の方面の趣味に就ても總べて高雅の域に達して居らるゝのは、其の人格の現はれであるけれども、刀劍の如き高い趣味がそこに導いたものではあるまいか。言ふ

までもなく、趣味は共通のものであるから、何事にか高い趣味を有てば、他の趣味も亦高い處に行くのである。私は伯が作庭の趣味、圖書の趣味、詩歌書道の趣味、其の何れに於ても普通人に超越するもの、あるのは、刀劍のやうな高尚の趣味が其源をなしてゐるからであるやうに感ずる。實は伯それ自身も名刀の如き人であるやうに思ふ。實に切れ味のよい人だ。伯の物に就ての裁斷は直截で少しも躊躇されない。どんな難題でもスバリ／＼と切り開かれる。それが決して輕舉でなく、必らず責任を負うて行はれる。伯はよく口にせらるゝが、事若し行違へば切腹あるのみと。伯の責任は斯やうに重いもので、徒らに切腹を口にせらるゝのでなく、眞に心に斯く誓つて居らるゝことは、伯の人格を知るものは之れを疑はない。伯が御府ぎよふの文獻を史局に謄寫せしめた如き、史局の感荷して措かざる所であるが、伯は之れに就ても、若し聖上よりお叱りを受ければ、切腹するまでの事と、伯の覺悟は實に偉いものである。すべて趣味家は愛惜の心があるだけ執着がつき纏ふのであるが、伯に於ては全く選を異にして、人に物を與へる事は、さながら敝履を棄てるが如き觀がある。此の點に於ても甚だ切れ味がよい。併しこれに就ても伯に主義があるので、濫りにするのではない。必らず物の置き處を案じ、己れが藏す

るよりも、その方に行けば一層珍重もされ、大切に保管もされると思ふ時に、一切の執着から自からを脱して、幾んど無雜作であるかのやうに、淡泊に、どんな貴重物でも手離されて、毫も惜む所がない。私なども、伯と談笑の間に、國寶たるべき二三の文獻を早稻田の文庫に頂戴してゐる。伯は性急の人で、苟くも贈ると決すると寸時の用捨なく、直ちに其物を贈り届けて下さる。私が伯を名刀に比するのは、決して諛諛でない。名刀を以て譬へる外に比喩が全く無いほど切れ味がよいのである。しかし、名刀の如き伯の性格は往々人の意表に出づるので、動もすれば人の誤解を招くことがある。伯は一旦抜きたる刀を徒らに收めることをされぬ。即ち截きりらずんば已まぬと云ふ癖がある。自から信ずる所に邁進して、俯仰天地に恥づるなきは、大丈夫の心事、さもあるべきことで、痛快は即ち痛快であるけれども、如斯は世間の贖贖者流の意表に出で、伯の皎潔なる心事が理解されず、逆に難癖をつける者のあるのは、いつの世にもある習で、外部から見れば伯は種々迷惑して居らるゝやうだが、伯自身は一向意に介して居られない。そして伯は常に信條を語り、世の中に難しとするものは決してないと斷言されてゐる。如何にも一刀兩斷の前には難の字は無い筈だ。伯は名刀を愛する人であり、亦名刀其物

であると云ふ所以である。

日本女子大學の追憶

日本女子大學も創立後三十年に近く、成瀬校長を失つてから既に十年を経過してゐる。私は成瀬仁藏氏とは昵懇で、氏が私の郷國新潟で北越學館を起した時も、私は發起の一人で、氏の事業を助けた關係がある。氏が都下に來て女子大學の創立を企てた頃は、私は早稻田大學の經營に當つてゐたのだが、氏は毎日自轉車を驅つて必らず私を訪ふのが例であつた。此の學校の創立もなかく困難で、當時日本に女子の大學は不必要だといふ説すらあつた位である。氏が五七の富豪を藥籠中に收めるまでの苦心は容易なことではなかつた。氏は獻身的の熱心家であつたが、人に對して自説を少しも陳べず、虚心に人の説を聞くを例とした。毎日の訪問であるから獻策の材料にも窮した。そして早稻田大學に於ても募金の必要があつたので、餘り種明しをすることも出来なかつたが、氏はそれでも倦むことなく訪ねて來て、いろいろのことを相談

された。勿論私のみを訪問された譯ではなく、他に五六の知友を毎日訪はれたことが後日分つた。斯る準備期が長く續いて、さて女子大學が起つたが、初めから評判が善かつた。校舎も立派に築かれ、寄宿舎其他の經營も調つた五六年の後に、成瀬校長は久方振に私を訪ねて來られて云はるゝには、女子大學の今日あるを致したのは創立の際諸君の贊助に依るのであるが、此の贊助を賜つた人々で一たびも學校へ足を履入れられないのが七八人ある。けふは特別の御案内に來たのだ。どうか是非來觀を願ひたいとあつて、某月某日と約された。私も餘りに冷淡に打過ぎたことを恥ぢ、定められた日に出かけて見ると、三好退藏、島田三郎、松村介石などの人々も來會されて、講堂から寄宿舎、料理の研究所、花園、乳牛の飼養所まで隈なく案内されて、一巡するに約二時間を要した位、大規模の設備があるのに一驚を喫した。殊に寮舎の整然として、どの室でも清潔に保たれてゐるのを見て深く感服した。流石に女子の學校にふさはしい種々趣味的の工夫があるのにも目を怡ばした。成瀬校長五六年苦心の跡を一舉して見たのは實に贅澤の沙汰であるとも思つた。退いて成瀬校長がこゝ迄經營するにどんなに心血を瀝いだかに思ひ到つて、感慨無量であつた。多分他の人々も皆感を同じうしたであらう。一巡済んで

晚餐の饗應を受けたが、其の西洋料理はすべて學生諸子の手にかけてたもので、給仕に斡旋した十数の女子も皆學生であつた。卓上、成瀬校長は創立の際の苦心談をされたが、今でも耳底に残つてゐる挿話は、氏が創業奔走時代に宿泊した下宿屋は或る不景氣の烟草屋の二階で、其の室の天井が頭が達する程低く、階子が危険を感じるほど揺ら／＼する、不安固のものであつた。然るに或る時バトロンが馬車に乗つて刺を通せられた。其の折節幸か不幸か、居り合はせたとで斷ることも出來ず、已むなく二階で應接した時は實に片身が狭かつたとの追憶談が出たが、氏は身を奉ずること斯くまで薄く、何事も犠牲にして偏へに創立に努力された、その貴い閱歷談には我等は感激に堪へなかつた。氏の演説が了り、居並ぶ一同にどうか遠慮なく所感を陳べて下さいと云はれた時、一同は互ひに顔を見合はせて、創立の際の成瀬君の熱心には随分困つたねと云うたのが一同の挨拶で、誰れも所懐を陳べるものが無かつたが、此の異口同音の簡單な挨拶こそ、當時成瀬氏が我々を日々歴訪して随分五月蠅がらせたことを率直に語つたもので、反面には氏が如何に熱心であつたかを言外に物語つたものである。

成瀬氏は學校が隆盛となつても創業時代の精神を少しも變ずることなく、自身は孤獨生活を

どこまでも續けて、獻身的に學校を護り立てた。かくの如くして校風が隆興しない筈はない。女子の學校は兎もすると弊のあるものなのに、女子大學が創立校長を失つても、儼然どこの家庭からも好評を博してゐるのは、後繼者其人を得て居るからでもあるが、成瀬氏の人格と其の遺訓に據ると云はざるを得ない。

山田奠南を憶ふ

私が明治十七年越後の高田に赴き、「高田新聞」の創刊に筆を執つた時、亡友山田奠南（喜之助）は私を餞して、長篇の一詩を寄せた。それは唐紙全紙に書かれ、書もよく出來てゐたから、高田で一幅に表装して、常に編輯局に掲げてゐたが、いつしか失せて、後年思ひ出して捜したけれども所在が知れないので、せめては其の詩の書抜きがほしいと、創刊頃の「高田新聞」を調べてもらつて僅かに得た。奠南は單に此詩を私に與へたのみでなく、私の號を春日山に因んで春城と撰んでくれた上に、印まで刻させて贈られた友誼があるので、私としては此一篇の

詩を委棄し去るに忍びない情がある。詩中に私の敢て當らない溢美の句もあるから之れを隨筆に收めるのは氣が咎めるけれども、こゝに收めて置かなければ、或は亦失ふ虞れもあるからと思つて、敢てこゝに收めることにした。其詩は、

送市島子謙之高田

子謙膽大而氣雄。決然振袂將遠行。酒三杯歌三疊。折柳其奈別離情。知君野性不可羈。

焉能屈身把青紫。知君久抱屠龍劍。一揮試截斷橫路豺狼與虎兒。同窗嘗講泰西文。

才子群中最推君。丈夫畢竟耻瓦全。奮爲清明策奇勳。長風萬里吹短髮。高歌一曲氣鬱勃。

去矣明朝官道春。風光卻屬激昂人。

私は此の詩を讀むにつけても、轉た亡友を憶ふの情に堪へざるものがある。奠南は有賀長雄氏と共に大阪から帝大に入つたもので、共に吾が同窓の秀才であつた。そして私は最も奠南と親しかつた。奠南は法科に入つたから、吾等と室は異なつたが、卒業後辯護士となつて、其の事務所を構へた所は屋並みに藝者屋のある出雲町であつて、現に兩隣りが藝者が住んでゐた。私は其頃新橋の角の服部誠一の九春社に「内外政黨事情」といふ新聞に執筆してゐた頃で、便

宜上晝の内は奠南と同居してゐた。此の奠南の住居の背中合せに北川といふ割烹店があつて、奠南の物干しから其二階に通じ得るやうになつてゐたので、殆んど日々出かけた。いつも二階から突發的に手を鳴らしたので北川を驚かした。奠南は磊落の性質で、よく氣が合つた。其頃は互ひに貧乏で、立派な衣服などは持合はず、僅かに共通に一通り紳士らしい服を調へたけれども、共通の不便は兩人連れ立つて遊びに出ることが出来なかつた。ある朝例の如く奠南の居を訪ふと、奠南は得意に前夜の事を語り出した。それは某所に妓を召した處が、その妓に相當の教育があつて、自分に詩を求めるから、往きなり即興の詩を書いて示すと、直ちに次韻の詩を書いたが、それが案外よく出来てゐたのに驚いたと云うて、其内君にも紹介すると云うた。ある朝又行くと、奠南は苦り切つてゐる。まだ朝食前だから北川へ附合へと云ふから、どうしたのかと聞いて見ると、女中の老婆が主人の寢所へ夜這ひをしたといふ椿事を聞いて一笑したが、奠南は怒つて即夜放逐したので、今朝は朝飯が喰へない仕末であることが分つた。

聖恩枯骨に及ぶ

御大典の折、聖恩枯骨に及んで、叙位の御沙汰を受けた者の中に、私の郷里では遠藤七郎が
ゐる。此人は私と同郡で、私の家とは多少の縁故もあるから、こゝに聊か私の知る所を書いて
其人を表彰しよう。

遠藤氏は累代其の居住地の地葛塚くづかに功勳のある家で、前代に水利を治した人があり、郷黨はそれ
を徳とし、祠堂を建て、其人を祀つてゐる。其居住地に近く村杉と云ふ温泉場がある。今は一
層繁昌してゐるが、之れを開いたのも遠藤で、それは今度叙位の御沙汰を受けた七郎氏である。
此の家には代々公益の爲めに盡した人が出たので、傳へるに足ることが少なくない。其の祖先
は會津から來た浪人であるとかいふが、これが餘程奇抜の人であつたらしく、幕府が葛塚に屬
する或る地を取上げようとしたとき、自から私財を抛つて之れを買収したと傳へられてゐる。
其後又幕府が事に託して同じことを繰返さうとした時には、手を換へて幕吏に賄賂を贈つて僅

かに喰ひ留めることを得たといふが、その賄賂の使ひ方が甚だ奇抜であつた。それは黄白の實
物を贈つたのではなく、奉書紙の包みに金額を記したものを贈つたので、願意が届けば、これ
だけの金を贈ると約束したやうなものであつた。幕吏も遠藤を信じて、正金を受取らずに願意
を納れたが、實は遠藤に一杯喰はされたのであつた。眞逆に事が濟んで賄賂の催促も出來かね、
空券で事が濟んだが、遠藤を知る周囲のものは後患を氣遣つて、いろ／＼忠告をするものもあ
つた。遠藤は笑つて、先方で督促すれば表沙汰にする。自分が敗訴となれば頭が無くなるまで
の事だと云うて平氣であつたと、當時の記録に書き残されてあるのを此頃一覽した。

以上の如き奇抜な父祖から生れた七郎の行動が常に奇抜であつたのも血筋は争はれないもの
である。幕府の親藩である會津の浪人を祖とする遠藤が、戊辰の際、會津を敵として勤王の爲
めに執掌したのは妙な縁因である。越後には勤王の名家は少からずあるが、遠藤の如く、民兵
を編制してまで官軍を助けたものは無い。遠藤の組織した民兵は北辰隊と云うて、私財はその
爲めに幾んど傾け盡したのである。前原一誠、奥平謙輔が越後に來て、特に民間の有志から拔
いて、遠藤と私の郷人伊藤退藏とを官務に當らしめたのも偶然でない。

遠藤七郎は學問があり、詩畫をよくした。會津の家老職の子である、山川健次郎男が、會津落城の後奥平に救はれて、越後に來た折には、前後二回までも遠藤の家の世話になつたのも、祖先が會津出身であることを思ひ合はせると、宿縁があるかにも思はるゝ。其頃山川男は斯波誠と變名してゐた。同藩の小川亮と共に遠藤家に寄宿した山川男は十六歳の青年で、男は今日でも遠藤の庇蔭を感謝し、今度の贈位を大いに喜んで居らるゝと聞いた。山川男の話と云ふを聞くに、遠藤家には藏書が澤山あつて、殊に本居宣長、平田篤胤の著はした圖書が多く備はつてゐたので、山川男も専ら此等の圖書に親しむの機會を得たと語られてゐる。遠藤は山川男の篤學に愛でて、藏書は何にても勝手に搜して讀まれよと、庫の鍵を委されてゐたと云ふ。コンな縁因で七郎の遺兒謙次郎、恭平の兩人は、嘗て山川男が預つて居られたことがある。然るにどう云ふ仔細があつてか、兩人共亡命して所在が知れないと云ふことだ。七郎の弟義助が山川男の令兄浩氏の家の厄介になつてゐたことがあると聞くが、その人の消息も知りかねる。七郎も晩年は頗る窮して、山陽の僞筆を書いて酒に換へたと云ふ逸話も残つてゐる。遠藤の畫は南畫風で、可なりの域に達してゐるが、四條派を學んだのが始まりで、幕末に春園といふ四條派の畫

家が越後に漫遊した時、遠藤は之れを家に厚遇して畫を學んだ。これが畫筆を把るの始まりであつたのだが、この時分國事探偵がいろ／＼身を窶して越後へ入り込んだもので、私の家へも、貴正と云ふ、和歌の名人が來たことがある。これは後に薩摩の探偵であることが知れたが、此の春園も矢張り探偵であつたのを、七郎は心からこれに師事したのであつた。遠藤は窮困の間に東京に歿した。葛塚の墓碑には至誠院果滿圓成居士と刻してある。家藏に前原と奥平の遺墨が存してゐるが、共に遠藤に關係があるから、爰に抄録する。一通は前原が遠藤七郎の母に與へた書狀で、東京から發してゐる。婦人の讀み得るやう假名文に書かれ、越後にありし折いろいろ厄介になつたことを謝し、先頃出京された折は龜相であつたと詫び、七郎も無事だと報じ、(七郎も東京に出でゐたと見える) 自分も閑を得て越後へ遊びに行きたいなどと云つて居るが、全文を載せるほどのものではない。唯注目すべきは尙々書き三四行である。

尙々、幾へにも御用心專もじと存候、お安事、おまへさま子ぶんに、かへす／＼も御たのみ申候

お安は前原の妾である。それを託することが此の書狀の眼目であらう。

他の一は遠藤が機智を弄して奥平に書かせた、五百字にも餘る堂々たる文章で、唐紙全紙に例の得意の筆を振つてゐる。初め遠藤は新潟の妓阿市あいちに請はれ、奥平に揮毫を頼んだが、奥平はあの氣象だから、何ぞ妓輩の爲めに筆を把らんやと一蹴した。そこで遠藤は妓の爲めに辯疏し、此の妓は尋常のものでない。曾て外人に思はれたが、斷然擯けて従はなかつた。所謂る降る雨利加アツカに袖を濡さぬ亞流であると言うたので、奥平は急に容を改め、斯る烈女の爲めならば揮毫を辭せずと、昔し高尾が越後から出たことなどを冒頭に書き、(高尾が越後の頸城くびきに生れたと云ふ傳説を取つたと見える)越後には往々烈婦を生ずるといつて阿市の事に及び、外人に貞操を賣らなかつたことを賞揚し、傍ら風紀に及び、例の慷慨の筆を振つてゐるが、落款には嚴めしい官名まで署してゐる。新潟には外人に肌を許さなかつた妓はあつたであらう。當時外人は夷狄のごとく嫌はれたから、事實あつたと想像するけれども、此妓が賞揚に値するかは疑問である。恐らく遠藤に一杯喰はされて、きまじめの奥平が此妓を偉えいくしたのであるかとも思はる。其の文は左の如し。

妓高雄者新潟之産也、姿容絶世、貞操無比、萬乘之主、傾其國以購之、矢死不動、是不爲

利疚也、白刃以脅之、守節不屈、是不爲威惕也、既潔既勇、是不亦妓中之丈夫乎、吾聞之、君子之澤百世不斬、其流風餘烈、被及於青樓者、必有存于今者矣、戊辰之秋、余從軍北征、自柏崎海路襲新潟、橫槩之餘、上青樓飲焉、操絲竹於坐者二十餘人、肌肉玉雪、髮漆黑、美則美矣、貞則吾不知也、於是乎慨然歎曰、所謂君子之澤者固不足信、而其流風餘烈果安在哉、今新潟既爲開港之地、夷館築焉、彼與我既有人禽之別、而又其以威若利、疚且惕之者、豈特曩者所謂萬乘主之比哉、彼以其利與威沈溺恫喝之、則其雪肌玉膚汚染于腥臊、又何恠焉、余竊爲吾高雄悲之、越明年己巳、妓阿一介友人伊藤退藏求餘書、餘書不下晉人、豈爲一妓人揮筆哉、不許、既而又寄書遠藤七郎曰、今新潟爲互市之地、身既爲妓、則其勢不得不唯命之聞、吾將以脫妓籍、庶幾不爲彼所汚染乎、余聞而慨然大息曰、君子之澤果不泯矣、流風餘烈今猶存矣、高雄之英靈精魂、抃喜于地下者如何哉、余又爲阿一惜一揮筆哉、於是乎行政之暇書以贈之、死者復生、生者不慙、是謂之忠貞、況余未死乎、詩曰、白珪之玷尙可磨也、斯言之玷不可爲也、阿一々々勉之々々、明治己巳三月初八、參謀兼假佐州知民事源居正、書佐州川原田聽政廳 □ □

内田魯庵君に就て

内田魯庵君は終に不歸の客となつた。私は友人として此の人を失つたことを悲むばかりではない。文藝界殊に圖書界に斯人を失つたことを大なる損失と思ふ。

魯庵君と私の交りも久しいことである。私が大隈侯や重野博士を總裁並に會長に戴いて、圖書刊行會を創めて、一期了つた時であつたやうに思ふが、魯庵君其他の圖書通を大隈總裁邸へ招待して、會の成績を私から報告した際に、私が塙檢校の「羣書類從」編纂事業と此の會の事業とを比較して、敢て譲らないと云ふやうなことを言つたのを、魯庵君は、其席では黙してゐたが、歸つてから、手簡を私に寄せて私の言の不遜を咎められた。此の手簡は私に對する挑戦狀であつたかも知れんが、私は魯庵君の注意を厚く謝して直ちに返簡を投じたので、それから君と交はることになつた。後日魯庵君の云ふには、君も案外宏量の人だ。あの時上げた手紙は言葉咎めをしたやうなもので、君から返簡を受取り、却つて恐縮したと詫言を云はれた。丁度

其頃安田善之助氏（今の善次郎氏）を中心として、欣賞會といふがあつた。魯庵君や幸田露伴、林若樹、三村竹清氏など四五の人が會員で、珍書の持寄りや研究が毎月安田氏の横網の宅に行はれた。私も和田萬吉君と共に誘はれて其會に臨むことになり、魯庵君とは益々親しくなつた。魯庵君或る時私の宅に來られて、圖書館といふものはどんなものだと問はれた。私は其頃早稲田の圖書館を預つてゐた。魯庵君は丸善の圖書顧問で、其の機關雜誌に執筆されてゐた頃と思ふ。魯庵君は圖書通ではあるが圖書館には關係がないから、圖書館に就ての専門知識を得たいと三四の質問を齎らして來られたのであつた。君が其後圖書館協會員となり、長く其の評議員となられた動機は、恐らく私を訪問された頃から發したらしく思はるゝ。私と君との交りは、圖書館協會に於て最も永く續いたのである。別して徳川頼倫侯が會の總裁であられた頃には、君も殆んど缺席なしに評議員會に列し、總裁の侯から特別に招かるゝ折なども始終同席で、圖書の交は益々濃やかになつた。それから稀書複製會が興るに迫んでも、君も同人の内に加はり、十年間此の會の爲めに種々の協議をなし、珍書の研究もした。私のやうな文人でないものが、文人たる魯庵君に長く交り且つ長く親しんだのは、全く圖書が連鎖となつたからである。

魯庵君は圖書の通人として何人も許した人であつた。いくら通人でもおのづから好む所に偏するものである。例へば、日本の圖書に通ずる人は外國の圖書を閑却したり、或る學科の圖書にのみ専らであつたりすることは普通免れ難いことであるが、魯庵君の圖書趣味は如何にも廣汎の區域に涉つて、殆んど除外が無かつたかに思はる。私などの到底及びもつかなかつたことは、君が外國の圖書に廣く通じてゐたことであつた。恐らく君が丸善商店の顧問であつた地位が、此の方面を開拓するに非常の力があつたに相違ない。いくら潤澤豊富の圖書館にゐても、日進月歩の圖書を間斷なく輸入する書店にゐて、先づ到着品に目を曝らす機會を有する便利に較べては同日の論でない。魯庵君が、どんな大圖書館の館長や司書よりも外國の圖書に知識があつたのは、其の便利の地位が然らしめたと云ふが妥當であらう。君は久しく「學燈」に外國圖書の紹介をした。その紹介の爲めに多く珍奇の圖書を涉獵されたに相違ない。文學書はお手のものであるが、そればかりでなく百科の圖書に目をさらされたことも、書店の顧問なり「學燈」の主筆として當然の事とは云へ、實は趣味が廣くなければ出來ない業である。君の外國の圖書に就ての鑑識はこれが故に益々廣く開拓されたに相違ない。君は必ずしも自から圖書を

寄せ集める人では無かつたやうである。恐らく君の境遇はコレクションとなることを許さなかつたと思ふ。併しコレクションの陥り易い弊は、好む所に偏して範圍を制限するに在るが、君は蒐集家で無かつただけに、博大的鑑賞家たることを得たと云ひ得るであらう。

魯庵君は文壇の批評家であつただけに、皮肉の人であつた。随つて君が愛玩する圖書も皮肉のものであり、君が圖書に就ての多くの文も亦皮肉であつた。私は君が批評家として文壇にどれだけの權威があつたかに就ては語ることを避けるが、圖書の鑑賞家として君の皮肉性が存分の働きをしたと思ふ。全體一ト癖ある書物を鑑別して、それを奇書とし希觀書とするには皮肉の着眼を要するものである。鑑賞家には皮肉の着眼が大切で、君の圖書に就ての文章に他人の及び難い所のあるのは、一つは引例が内外に涉つて該博である點にもあるが、凡眼者が輕々に看過する、ある隠れた特徴や、外國の圖書に通ずるもので無ければ氣のつかぬ點などを鋭利に抉出摘發するにあつた。乃ち君の批評家たる靈筆は圖書の上に十分光を放つた。君の皮肉の着眼で平凡と見える圖書を一ト癖あるものにした例も少からずある。

君の晩年の精力は多く圖書の上に注がれ、遺された文章に圖書に關したものが少くない。

「學燈」あたりに掲げられたものがどれほどあるか、今調べて見る違もないが、君の圖書に對するいろいろの文章を編纂したら、多分巨冊を爲すであらう。そしてそれが君のいろいろの創作や批評などに較べて、却つて高點を博し得るものであるかも知れぬ。世には創作や批評を爲す文人は少なくないが、圖書に通じて間斷なく其の研究を發表し、又紹介を勉めた人は寥寥たるもので、恐らく魯庵君を第一に推さねばならぬと思ふ。私は圖書界に此人を失うたことを深く悲しみ且つ惜しまざるを得ぬ。

擱筆に臨んで數言を書き添へたい。私が拙著「隨筆賴山陽」を出版した時、一部を魯庵君に贈つた所、數月の後「中央公論」に君の論評が出た。魯庵君から特に送られたそれを見ると、可なりの長篇であるのに驚いた。多分、君の皮肉は微細に及んで、完膚なき迄に拙著はコキ卸されたこと、恐る／＼読んで見ると、半ばは拙著を評してあるが、多くは私の性格が評論してあつて、讚辭が餘りに多く、特に私を山陽と比較してゐる處などは君の批評が全く外れてゐると思つたが、どこを尋ねても皮肉の攻撃がないので案外に感じた。私は君とは長い交りであるが、公けにも私しにも君から批評された事はこれが初めてであつて、君が私をどう思つてゐるか、始めて分つた。敢て自から當らない評が澤山あるけれども、知己の言も少なくないので、私は其の友情の淋漓たるに感激を禁じ得無かつた。君の批評の全文は「隨筆賴山陽」の重版の場合に附録にしたいと思つてゐるが、重版は期し難いから、爰に此の隨筆の巻尾に附しておく。

同名異人

世間同名異人の例は多くあつて珍らしくもないが、大抵は時代が異つたり、其人の性格や志操が全く異つて、似ても似つかぬものが多いのであるが、爰に時代も境遇も志操までも同じである同名異人があつて、其人は共に著名の支那人である。

日本の書畫界に知られてゐる僧獨立は、清朝を奉ずることを厭うて日本に來り、長崎で隱元禪師の感化を受け、剃髮して僧となつた人だ。此頃は我邦で明末の志士を尊敬したので、獨立も時人に崇敬を受けた。殊に此人は能書であつたので、雪山、立岱、廣澤、東江などいふ書道の大家も此人に私淑して、其の流を汲むに至つた。此人は名を戴曼公と云つたが、同じく戴曼公

を名乗つた獨立と云ふ人が、同時代に支那にある。此人も矢張り清朝を奉ずることを厭ふ、明末節義の人で、國變後、身を託する處がなく、秀峰山に入つて僧となつた。不思議なことには、日本へ來た獨立に戴笠の號があつたが、他の獨立も戴笠と云つて、共に詩を能くしたから、明代の詩集にはいくつか其詩が採つてあるが、どの獨立の詩か、支那人にも辨別がつかないのも無理はない。唯兩人の異なるのは其の出貫地にある。日本へ來た獨立は杭州仁和の人で、他の獨立は蘇州吳江の人であることが相違で、支那にゐた獨立は名を耘野と云つたことも相違の一點である。この事は支那に久しく遊んでゐる今關天彭氏から聞いた事實で、斯うまで似寄りの同名異人は珍らしいから爰に收めて置く。

契沖阿闍梨

國學の泰斗契沖阿闍梨は加藤清正の重臣の子で、熊本には深い因縁がある。近年熊本で彌富破麿雄といふ人が書いたものを見るに、私は端なく契沖が我が郷土越後にも因縁のあることを

知つて一種の感に打たれた。先づ契沖の先代に就て語ると、其祖父下河又左衛門元宜が加藤清正に仕へて五千石の祿を食み、文祿の役には留守を預つたほどの重臣で、其子の元眞の代となつては一萬石の祿を食んだものだ。それは清正の二代忠廣の時である。此元眞の弟に元全と云ふがある、それが即ち契沖の父である。若し忠廣が無事であつたならば、契沖も立派な武士であつたのであらう。然るに徳川氏の嫉視を受けて加藤家が國除かれ、契沖の家も壹萬石から浪人に成り下つたので、契沖の父元全は身の寄せ所に窮して越後村上の松平大和守に仕へたのである。契沖の兄下河瀬兵衛元氏と、後に熊本の不動院の住職となつた弟の快旭は、村上なる父の許に身を寄せたが、元全は終に村上に歿したから、契沖と村上是淺からぬ因縁がある。但し契沖は村上へは足を入れなかつたやうである。契沖の委しい經歷は世に知れても居るから、私はこれ以上語ることが欲しないが、只あのやうな優れた希有の人物が吾が郷土に縁因あることに感激して、つくづく思ふのに、世の有爲轉變は不思議なものである。いくら武門のならひとは云へ、豊公時代にあれ程榮えた加藤家が一朝没落の非連に會するとは、其加藤家と君臣關係であつた下河の子弟がこゝに無常を感じて、一家二人迄僧となつたのも偶然でない。併し此の

一轉機により契沖は百世不朽の名を博するに至つたことを思ふと、實に人間の運命の一轉機ほど不思議でもあり亦大切でもあるものは無い。天が下河家の悲運に乗じて斯る大家を下したことを思ふと、吾等は大なる感激に打たれざるを得ない。下河家が無事であつたとすれば、契沖も快旭も僧にはならず、立派な武士で世を過したであらうけれども、それにした處で恐らく「武鑑」を搜しても其名がわかりかねる位のものであつたらう。

鋏形蕙齋

浮世繪師のあまたある中で、經歷に異彩のあるものが一人ある。其人は私の郷國越後に縁因のある北尾政美、後の鋏形蕙齋で、越後から出た疊職を父として、寶曆十一年といふ昔し生れた。初め北尾重政に學び、本姓赤羽氏であるのを、師の姓を名乗り、立派な浮世繪師として世に立つた。草双紙などの挿繪が此人に依つて書かれたものは少なくない。殊に名所の圖を作るに名を得て、神田明神に捧げた江戸全市の鳥瞰圖は名高かつた。此人の經歷に珍なることは、

三十五六歳の時、感ずる所あつて、全く浮世繪の筆を投じ、志を本繪に轉じて一家を開くに至つた事である。浮世繪師で狩野、土佐、四條などの本繪を學んだものは決して少なくない。併し多くは浮世繪の地を作る爲めの研究であつた。葛飾北齋などは八宗兼學とも云ひ得るほど、多方面に本繪を學んでゐるが、どこまでも浮世繪師で終始した。本繪を書くものが浮世繪に轉じた例はいくらかもあるやうだが、浮世繪から本繪に轉じ、そして成功した例は、蕙齋を外にして私は著名の例を知らない。蕙齋は狩野派も學んだが、尤も私淑したのは光琳派で、其中にも中村芳中を喜び、且つ谷文晁にも學んだと傳へられてゐる。斯人の畫にはどことなく光琳の風が見える。殊に草略の畫法を始めたのは、芳中あたりより脱化したものではあるまいか。出版された書譜類は多く人に喜ばれた。私なども隨喜者の一人である。彼れがいろいろの畫譜を著した内に工藝用の繪手本があるが、斯るものを出したのは斯人が祖であらう。すべて此等の畫には蕙齋の落款を見るが、誰れか此人が北尾政美の後身であると思ふ者があらうか。彼れは晩年福井侯に召されて其お抱へ繪師となり濟ました。全體尙古の趣味があつたので、大田南畝、中村佛庵、屋代引賢、狩谷椽齋などの名流と交り、益を受けることも少なく無かつた。老後は

雍髮して紹眞と名乗り、法眼ほふげんを氣取つて、立派な生活を營んだ。文政七年三月二十一日、六十四歳で病歿したが、あの當時、浮世繪師より出で、榮達彼れの如きは少ない例である。私は幼年より此人の畫を好んだ。敢て郷國を同じうする緣因からのみ推獎するのではない。

走馬燈 下

東西藝術の相異

日本人が西洋に心酔して、一概に彼れに學ばんと馳せたのは誤りであつた。今は反動がおこつて、日本主義が主張されてゐる。反省の時は來た。靜かに彼我的長短を比較すべきである。我邦の藝術其他種々の物が、西洋と趣味を異にし、又其の根柢を異にしてゐることを冷かに研究すべき時である。西洋には西洋流の文化があるやうに、日本には日本流の文化があつて、其歴史、其形式、其趣味が全く異つてゐることを思ふと、文化の優劣論がこゝに起り、彼れを學ぶべきや、將た彼れをして學ばしむべきやが實際の問題となつて來る。私などは決して偏頗な國粹論者でない、亦戀舊論者でもない。公平の立場から、日本の藝術には西洋と根本に異なる所があつて、西洋も遂には日本に學ばねばならぬと信じてゐるものである。そして既に學び始

めつ、ある事實をいくらか捉へてゐる。

大體を云ふと、西洋の藝術はメカニカルで、日本のはスポンテイニアスだと云うてよからう。西洋のは機械的で、日本のは手藝的である。西洋のは幾何學的で、日本のは放漫式である。西洋のは單純で、日本のは複雑である。極めて分り易い例を擧げると、衣裳其他の文様もんざうなどがよく兩者の特徴を現はしてゐる。西洋のは必らずシメトリカルでなければならぬことになつてゐる。則ちいろ／＼の文様が錯綜してゐても、必らず或る間隔を置いて、それが規則立つて繰り返されねばならぬ、即ちそこにシメトリが保たれてゐる。日本のは之れに反し頗る放漫で、文様を錯綜に任せて、おのづから調和が取れてゐるが、シメトリカルではない。元祿頃の派手な文様を見ると、驚くべきほど放漫のものがあつて、規則立つた所はいくら尋ねても見當らないが、その放漫の處に妙もあり、意匠家の技能もそこに在るのである。その文様を作るには、尺度もコンパスも不要であつて、奔放自由に任せてゐる。これは僅かに一例に過ぎないが、彼我藝術の相違はおよそ此の趣があるのである。

互に腕力を角するボクシングと角すまに就て見るも、ボクシングもレッツシングも頗るメカニカ

ルであるのに對し、日本の角すまとなると、四十八手と云うて、それ／＼手があつて、其の藝術的なる所が西洋のと異つてゐる。法式を離れて力士がそれ／＼の思ひつき手心で取ることがスポンテイニアスで、人の思料の外にある。そしてその取り方の態度姿勢などを以て巧拙を定め、卑怯未練を以て最も恥づべき事として、足が一步土俵から踏み出せば、それが負けとなる。各力士にはそれ／＼特別の手があり長所があると共に短所があつて、それにつけ込むのだから、決して力ばかりの働きでない。名人となると、端倪す可からざる變化があつて、それに對抗する者にも、同じく端倪す可からざる奇變がある。法則はありながら、これほどスポンテイニアスのものはない。腕力の角闘に於て既に東西に如斯きの差がある。

西洋の音楽と日本の音楽を較べて見ても、第一、西洋のピアノの如きは頗る複雑の機械である。其他も皆機械的であるから、譜さへあれば奏することが出来る。(巧拙があつても)日本では三味線が最も發達したもので、僅かに三すぢの糸で驚くべき音楽を奏する。これには最初外國人は理解が出来なかつた。後に漸く理解して驚歎したと云ふが、其の三筋の糸に觸る、指の緩急は全く經驗から來るので、決して機械的でない。但だ三味線は室内狹隘の處に生れたから、

西洋のごとく野外に大奏樂を爲すに適しないけれども、其の藝は、長い間の訓練により極致に達してゐる。そして鍛鍊を経た結果として、喜怒哀樂を現はすのみでなく、此の四情を理想化して現はすまでに進んでゐる。此點になると、西洋のは、或る除外はあるにしても、喜怒哀樂を赤保にあらはすことが主となつてゐるやうに見える。日本の音樂がアイデアライズしてある近い例は義太夫の語り聲であらう。西洋人は犬の吠える聲に近いなどと罵れども、あれなどは遠く佛教から來た聲で、堪へ難い情を忍び、之れを抑へ之れを呑みこむ、それが一種云ふ可からざる聲を養つたので、佛教に於ては聲明シヤウメイに因つて發し、それが平家琵琶、平家琵琶から謠曲義太夫と、追々と轉化したもので、其のアイデアライズされた歴史は決して簡單でない。

音樂に次いで特色を以て世界に誇るに足るものは舞踊である。日本の舞踊は世界に類のないものであり、亦極致に達してゐるものである。此點に於ても、西洋の踊りが如何に單純で、其の文化が進んでゐる割合に、舞踊が未だ原始的の範圍に居ることは寧ろ不思議である。日蓮研究に熱心な田中智學氏は、早くから日本の舞踊の世界に超絶してゐることに着眼し、今より四十幾年前始めて坪内博士に會した時、日本が世界に誇るべきものが二つある。一は宗教で一は

舞踊だと云うたことを近頃田中氏から聞いて面白いと思つたが、坪内博士も曾て自宅に舞踊の練習所まで設けて、いろいろ研究されたことがあるので、日本の舞踊に就ては曾て博士から聞いたことがある。其の大意を擧げると、

○舞踊には二つの種類がある。それは自演と觀賞とで、自演と云ふのは、人に見せるが趣意でなく自から踊るが趣意である。觀賞は自から踊るのではなく、人に踊らせて見るのが主意である。即ち前者は日本の盆踊りや西洋の舞踏がそれで、後者は日本の優美なる多くの踊りがこれに屬するのだ。そこで自演に屬する踊りは自から立ちまじつて踊るので、見えは格別構はないが、觀賞は人に委するのだから、見えが最も大切である。兩者の間に截然たる區別がある。然るに此の觀賞的舞踏と云ふものは、昔しギリシヤあたりにはいくらかあつた様だが、まづ日本以外にはない。日本特有の舞踏と云うて差支へない。

○更に他の方面より舞踏を觀察すれば、「手足の舞」と「全肢體の舞」と區別することが出来る。西洋の踊りは即ち「手足の舞」である事は多言を要せない。而して日本の踊りは、單純なのは「手足の舞」ばかりのものないではないが、複雑なものになると「全肢體の舞」であ

る。踊りの師匠に云はせると、手一つ擧げるにも五體は悉くこれが爲めにはたらき、どの部分も懶惰なるを許さんと云ふ位なものである。この一點が實に日本舞踏の特色で、世界に無い所である。

○又舞踏は律呂的、形美的、表情的の三つを兼ねて居ると兼ねないのがある。西洋でも日本でも苟くも舞踏と云ふからにはリズムミカルでないのはない。即ち皆律呂的であるが、形美的と表情的は西洋の舞踏には殆んどあるかなしで、絶無とは云はないが、決して多量には無い。これに反して日本の舞踏には實に多量に備つてゐる。此點が日本舞踏の大特色である。

○既に云ふ如く日本の舞踏は觀賞的であるから、形美的であるのも表情的(劇的)であるのも無理はない。即ち形美的と云ふのはグレースフルの態度を云ふのである。手の動き足の舞ひ、四體の屈し且つ伸び、十指のはたらきに至るまで、其の形の美を極めるのが即ち日本舞踏の特色で、中には其の働きの内に自然情を發現することもまゝあるが、これが表情的と云ふので、これらの藝は演劇と密接の關係を有してゐる。すなはち人形をつかつてをつた時

代から大關係があるのだ。恰かも人形の眞似を當時の人がなしたごとく、人形の動作を舞踏に取り入れたのも決して少なくはあるまい。なんにしる徳川太平の世の中數百年に涉つて、鍛へにきたへあげたのだから、實に非常な發達である。

○日本舞踏の形美の一として、女がいたく男に媚び諂らふ狀のあるのも、男が女に對して一種のいやみらしい態度をなすのも、皆徳川期の淫靡の風俗極端に達した享保頃の風を移したので、今日其の形を改めないのは寧ろ奇とすべきである。

更に作庭園治の術に就て見るに、日本のは西洋と絶對に異つてゐる。西洋人は自然を楽しむとよく口に云ふが、事實決してさうでない。

夏目漱石氏の實歴談の内にもあつたと思ふが、月夜のそゞろ歩きが西洋人には何の故か分らず、別して雪を賞することなどは、如何に説明しても理解せしめることが出来なかつたと云ふ。又ある人の別荘に自然石が多く雜陳してあつたのを見て之を褒めた所が、その主人は不審の顔をして、そんな邪魔物は近日取除くのだと云うたとあるが、案外西洋人は自然を喜ばない。彼等は樹木を喜ばないではないが、其の作庭は、例の如く方形、圓形、六角形などに地を劃して

花壇を作る事が得意で、不相變シメトリカルで、東洋的風韻などは一切無い。英國で有名な詩人ポーブが風流を嗜むの餘り、思ひ切つて自家の理想を實現したと云ふ庭は、どんなものかと思ふと、邸内に大なる洞穴を穿つて、その中に人が休息し得るやうにしたと云ふから、可なりに大きな洞穴であることが想像されるが、さて此の大詩人が最も苦辛した意匠は何かと云ふと、此の洞穴の内部全體に隙き間もなく、大小の貝殻を装置したと云ふのである。貝殻を裝飾に供することは、江の島あたりにはザラにあることで、日本では俗氣厭ふべしとして、高級の風流人の唾棄する所である。

併し西洋でも、ウォルツウオルスやベン・ジョンソンの如き詩人が日本趣味の庭園を愛したらしい記事はないでもない。ベン・ジョンソンは、自然の山水に擬した庭のある家が、他人の手に移ると共に庭園が新主人の爲めに模様替へをされたことを云うてゐる。矢張り夏目氏が云云してゐるのと同日の談である。日本の作庭園治は他の藝術の如く意匠が豊富で、自然の山水をいろ／＼に縮寫して園中のものですることを園治の方式とし、著名の庭が澤山に遺つてゐるのでも分る。初めは印度に倣つて、須彌山しゆみせんなどに形どる一種の式が輸入されたけれども、其の

千遍一律の式が日本の嗜好に適はず、後には、公卿、大官人は、それ／＼の別荘などに思ひ思ひの工夫をやつて、作庭は非常の發達を遂げ、作庭に流派を生ずるまでに至つた。兎に角、作庭に多般の意匠があつて、根柢から西洋のと趣を異にしてゐる。

更に繪畫に就て見ても、西洋と日本にはそれ／＼特色が異つてゐる。西洋のは重い油の顔料を用ゐてゐるが、日本人はその國民性に隨つて淡泊の墨を貴び、彼れが寫實を旨とするに反して、これは理想化を貴び、一氣呵成に筆の運ぶに任せて風韻の生動を喜んでゐる。しかし日本畫は支那より師承したものが少なくないから、寧ろ東洋と西洋の比較となるのである。唯奔放自然の發達に任せた浮世繪に於ては純乎たる日本藝術が存し、西洋人は日本人に先んじて之れを激賞してゐる。若し西洋人が我が浮世繪を研究して其の美を感じた如くに他の諸藝術に對しても相當の理解があつたら、必らず浮世繪の如く、尙それ以上にも鑑賞するであらう。現に西洋藝術も追々行詰るので、我が藝術に着眼し、それに倣つて活路を開いたりしてゐる者は着々ある。我が能樂に倣つて舞臺の革新を圖つてゐる如きも著しい例である。但だ西洋人は換骨奪胎が巧みである爲めに、邦人の氣の附かない摸倣がいくらかもある。實を云へば、日本の藝術は

ど特色の多いものはない。随つて之れを手に入れるまでには相當の努力を要する。西洋人の理解の速かでないのも不思議はない。機械を用ゐない陶磁器や彫刻物、其他尙云ふべきものは少からずあれども、多くは、前に舉げたものと同じく、西洋ものと特色を異にしてゐる。日本の産業の内、農業のごとき、西洋では専ら機械を用ゐてゐるのに、日本ではさながら盆栽や家園を手にかけるやうに、一家總がかりで、すべて手で扱つてゐる所などは世界に無い式である。これは風土の關係さまざまの事情に依るのであるが、畑を耕すに身を屈して栽培する、機械耕作を事とする外國では到底これに習ひ難しとして、日本人の屈身を冷笑したものが、今は追々農事に其の必要を感じつゝあるのだ。大農の行はれ難い國情の下に園藝的の農作が行はれてゐるなど、日本はどこまでも日本式で特色の誇るべきものが甚だ多いのに、それを閑却して強ひて西洋に趁らんとするは何故であらう。すこしは日本人に自尊心があつてほしい。

塔

寺院を訪うて其の境内に入ると、何よりも先きに、目に入るものは塔である。否、寺の境内に入るまでもなく、遠くから見ても林梢を抜き、巍然雲漢に聳えて、寺の所在を語るものは塔である。日本の如く樹木の多い國、殊に例として樹木で圍繞されてゐる寺院に、高い塔が天を摩して、其の赤く塗つてある色が緑なす樹木と映發する趣は如何にも崇高で、寺の第一の飾は塔であると云はねばならぬ。

塔は或る意味に於て寺の廣告のやうなものだ。本來塔には舍利しゃりが置かれ、聖靈の祀られてゐる所であるのだから、塔は崇拜の中心で、昔は必らず本堂の前面に設けたと云ふが、佛教が追々衰微に赴くにつれて塔の本義を失ひ、恰も裝飾であるかの如くに取扱はれ、其の位置なども亂脈になつたけれども、本來、寺に最も大切なものは塔であつたのだから、其の結構に工人が憂き身を盡したものである。今日、佛に對する信念は薄らいだけれども、塔は猶建築美術の範

とされてゐる。漫然見れば、どの塔も似たり寄つたりで、層の數に最も目が注がれ、高い塔まど俗衆に喜ばれる傾きがあるが、實はそんな單純のものでない。年代に依り頗る建築に特徴があり、形式にも違ひがある。渡邊省亭が其の修業時代に、其の師菊池容齋に伴はれて谷中の天王寺を同覽し、歸宅後、塔の某層に就て所見を師より問はれて、省亭はそれが答へられず、泣かされた話も残つてゐる位で、相當に注意を拂へば、見遁すことの出来ない特徴があるのである。奈良の諸刹は佛敎隆盛時代のものであるから、建築法も極致に達してゐる。法隆寺の五重の塔などは、頗る建造に用意があつて、上層ほど段々屋根が小さくなつてゐて、最下の臺とも見るべき堂が割合に大きいから、坐りがよく、屋根が軽いやうに見えて、安然であるかの感じを與へるが、實はそこに建築家の意匠があるのであつて、私などは如何に立派な塔でも、安然の感じを與へないのは嫌ひである。後世の塔は、上層、下層、屋根の廣がりが、上ほど狭くなつてゐるけれども、際立つて差を覺えない位であるから、さながら直立の烟突を見るが如く、不快を覺える。屋根の構造にもいろいろの工夫があつて、古い塔には頗る技巧を弄してゐる。藥師寺の東塔はよく引合に出るものだが、あれは三重の塔であるけれども六重の塔の如くに見える。

其の構造の大略を云ふと、各層の間に中二階の様なものがあつて、それに庇ひさしが出てゐるので層が倍數に見えるのだ。此の作り方は甚だ趣がある。又屋根の構造にもいろいろ意匠があつて、大抵は外反そとそりであるのに、内反うちそりもある。寶生寺の五重の塔の屋根は此式で作られ、甚だ趣はあるが、製作は六かしいに相違ない。兎角、莊重に見せると否とに優劣があるので、高い塔が決してよいとは限らない。十三重の塔などは危あぶななげに見えて、莊重の趣は全く無い。畢竟、頂上も最下も各層の大きさが餘り異つてゐない爲めに、直立した柱でも見る如くで、唯危なく感ずるのみである。塔の建築に何よりも大切であるのは、釣合の調和だ。末世の塔はどれを見ても釣合を失してゐる。

又塔の上頭に装置する金屬で作つた螺旋のやうなものがある。これは九曲してゐるので九輪と云うてゐるが、水烟と云ふ方が正しい名だ。これを塔の上頭に装置することは面白い意匠であるが、これも塔の高さとよく釣合が取れないと、アチ毀しになる。別して十層以上もある塔に之れを取り附けるには、釣合を取ることが甚だ困難で、名工の工夫に待たねばならぬ。藥師寺の東塔にも此の水烟が取りつけられてゐるが、流石によく釣合が取れてゐる。尙又下から仰

いで見ても分りもしないが、専門家の説く所に據ると、此の塔の水烟の頂上には蓮の蕾があつて、其下の裝飾に天人と舍人親王の書かれた銘が刻んであるのだ。

塔の内部の結構などは私共に委しく分る筈がないが、いづぞや八坂の五重の塔を解きほごして組直したことがある。此の塔も飛鳥朝のものと言はれてゐるから、古意の存してゐることは申すまでもない。さてこの解きほごしの爲めに塔内結構の秘密が始めて知れた。塔内には全塔を貫く柱がある。これが塔全體を支へる大切な役目をつとめる外に、重大な役目がある。それは何かと云ふと、舍利の埋めてある函の蓋の重しとなつて靈物を保護することが其の使命であるのだ。更に委しく云ふと、舍利を納めてある石器の上に石礎があつて、其の石礎に柱の突起部を承ける穴があつて、柱はこれにシツクリ填つて、塔と共に萬代不動となる所に此の柱の意義がある。専門家の測量に依ると、柱の突起部を承ける石礎の穴の直徑は三尺八寸三分、深さが八寸二分、舍利穴の底までが深さ一尺四寸と録されてゐる。多少の異同はあるにしても、これが上代の塔の内部の結構である。然るに追々變化して徳川時代になると、柱は塔の上部から鎖を以て吊され、石礎には達しないので、ブラ／＼遊んでゐるやうな構造となつた。畢竟、震災

などに備へる爲めに工夫したものであらう。建築上進歩した考でもあらうが、故實には甚だ遠ざかつてゐる。コンな工合に段々變遷したことを考へると、末代の塔は色々の點にどれほど墮落したか、想像に餘りある。

塔を作るに嚴しい宗教上の法則があつたのが、追々と亡びた。其の一つの原因は、眞言、天台などの佛敎が東漸してから、舍利を多寶塔に納めて崇拜する例が開けて、塔に重きを置かなくなつたことが、塔の精神を奪ひ去つて、塔があつてもなくてもよい事になつた。これなどが塔の建築術を亂した大原因であらう。奈良朝時代には、塔を建てる位置は最も大切に考へられ、或る地點で無ければ納まらなかつたものが、塔が其の精神を失つてからは、無意味の飾り物として扱はれ、物置でも建てるやうに明き地の埋草にしたとき趣がある。今では塔の原意を釋ぬべき上代のものがいくらかも残つてゐないから、大切に保護しなければならぬ。想ひ起せば、維新忽々の際は、古刹の塔が邪魔物にされて、賣物になつたこともある。奈良の猿澤池畔の興福寺の塔などは二三百圓で古金屋が落札し、全部を焼却して金屬を獲んとしたこともある。幸ひに識者の注意でそれを喰ひ留めたのは仕合せであつたが、當時を思ふと、悚然たらざるを得

ないものがある。

地方の家庭美附失業対策

いづぞや或る雑誌に都下上流の家庭の風儀や特徴を連載した時、私は其の雑誌に、地方豪家の家庭をこそ寧ろ都下に紹介すべきである。田舎の家庭には頗る美風があつて、都人士の學ぶべきものが少なからずある。何故にそれを列挙して参考の資料としないのかと勧めたのは、十年許り前の事であつたが、私は今日猶同じ冀望を有つてゐる。言ふまでもなく家庭は一小天地で、其の風紀の善悪良否は、社會に大影響を及ぼし、大きく云へば國家の盛衰隆替にも關係を及ぼし、此上もない大切な問題である。

然るに近來の風潮を見るに、都會は益々萬能の府となつて、あらゆる事柄の型は都會から發し、其の善惡に拘らず、地方はそれに學び、それに倣ひ、唯及ばざることを恐るゝの趣がある。都會はさながら金甌無闕の樂土でもあるかの如く、地方人は之れにあこがれて、日々夜々之

れに趁り就くものが多い中に、地方の素封家などで居を都會に移すものも少なからずある。亦労働者も同じく都會地に憧慄もどれて都會に來り集まる舉句かひ失業に泣き、田舎には却つて労働者の缺乏を感じるやうな仕末で、實に困つたものであるが、労働者の事は後に説くとして、先づ地方の素封家に就て云ふと、此等が續々都會に來ることは由々しき大事である。彼等が都會地に移るのは、強ち地方に在る邸宅を捨て、移るのではなく、東京に別莊を構へる氣でもあらうが、其の地方を去ることの影響は甚だ大なるものがある。極端に云ふと、地方に於て祖宗以來涵養された家庭の美風を全く破壊し去るものとも云へるのである。近來地方に小作爭議が頻々と起つて、大地主は其の煩に堪へず、それを避ける爲めに東京に居を移すことが已むを得ないと云ふであらうが、實は小作爭議は一時的の葛藤で、之れを阻止するの道は、寧ろ大地主が依然居村を離れず、父祖以來の溫情を小作に注ぐに在るのである。此の溫情ほど兩者を結束するに力強いものはない。然るに大地主が邸宅を空しうして留守となり、朝夕見るものは番頭、手代に過ぎぬとあつては、小作が他人行儀になるも勢ひの自然で、爭議を益々助長するものではあるまいか。

地方の富豪の家庭、殊に大地主の家庭に於ては、小作を他人とはせず、家庭の準社員として扱つてゐる所が少なくない。これが實に美風で、地主小作間の關係を圓滿に保つ所以もこゝにあるのである。全體地方は都門に比すれば保守的で、父祖以來の家法が儼乎として守られ、その家法の前には家の主人も頭を下げねばならぬ。随つて長い關係を有する小作も、因襲上、家法とあれば我儘も云へないことになつて、爰に平和があるので、地方富豪の家庭美はさまざまあるけれども、私は時節柄之れを先づ擧げねばならぬ。

地方の家庭には、敦厚恭謙の美風がある。これが保守の生み出す美德で、地方家庭の權威も誇りもこゝにあるのだ。所謂る舊家と云ふ所には、如何に主人公が年若く當世流でハイカラであつても、家風を破ることは、一家眷族や周圍の環境が容易に許さないで、田舎に居ればそれが續きもするが、都會に移れば即日都會化して、そんな美風は忽ちに失はれるのである。

田舎は都會地に較べれば何事も不便勝である。別して邊陲の地に於ては、都門とは非常の懸隔がある。随つて此の不便に打勝つ爲めに多少の勤勞を要する。その勤勞は、老若男女の別なく、舉家共同して執らねばならぬ。卒然として考へれば、甚だ厄介であるやうだが、實は趣味

もそれから生ずるのである。東京のやうに何から何まで不自由不便が無くては趣味も索然たらざるを得ぬ。例へば、來客があつて酒食を饗するにも、電話をかければ立ちどころに辦ずる。裁縫を必要とすれば仕立屋が來る。汚れ物は洗濯屋が持つて行く。外に出るには電車あり自動車がある。栓をひねれば水も出で、燈も耀き、瓦斯も出る。家人は幾んど勞することなく、坐しながら何もかも辦じ得る。如何にも調法で、地方人の羨むのも無理はないやうであるが、實は趣味の問題になると全く零である。事に當つて多少工夫を要し、それが爲め多少勞することもあつてこそ趣味も起るものである。

田舎の家庭に來客があつたとすると、主婦は襷がけて臺所に立働く。野菜を畑から引き來るもあり、貯へて在る干魚や漬物を出したり、兎もすれば主人自から魚漁りに近邊の河に出かけるもあり、藏から膳碗などを取出したり、適當の器具を選び出したり、相當面倒があつて、そこで調理が出來、客に薦めると、客は、食物の物質的價値の外に一種云ふ可からざる趣味を感じるのは、此の料理には家人の溫情が籠つてゐるからである。大抵田舎の豪家には、長く其家に傳つてゐる、特別の料理法があつて、それが客人を喜ばせる。味噌、醬油にしても漬物にし

ても、家傳來の醸し方や漬け方があつて、おのづから特色もあるので、温情の外に手製の料理には専門料理屋の及び難い處がある。

以上は唯客來の際の應急の事を云うたに過ぎないが、田舎の家庭はなかく經營多事で、僻陬の地になると、一年の計を爲すには貯藏が必要で、いろく貯藏品を作つて置かねばならぬ。多くの家には養蠶をやる。紡績もやる。反物も織る。茶も製する。果物を乾したり漬けたりもする。茸を漬ける。菓子を作る。蕎麥を切る。葛粉を作る。兎もすると家傳の薬まで作る。なかなか多端で容易でないが、しかし家庭の趣味はそこに在るのである。

便利は人の好む所で、世上の人心が翕然それに趨るのも敢て怪むに足らないが、しかしそれには程度がある。何事も人任せで我れ關せずであつては、自己を全く没却するにも至るのである。極端の例ではあるが、昔し羅馬の全盛時代に、或る貴人は贅澤の極を盡し、行住坐臥凡べてを舉げて侍者の手に委し、自己は微塵の勞も執らずしてゐたが、終には心身共に昏濛し、侍者に對して自身が坐つてをるのか立つてをるのかを問うたと云ふ話がある。茲に至つては全く醉生夢死である。一體趣味などと云ふ事は、多少勤勞の伴ふ事に存するものだ。何等手を勞せず

して色々の慾望を満足せしめても案外に興がない。幾何かの勞を経たものでなければ眞の趣味は感ぜられぬ。然るに東京の様に、何でも便利づくめ調法づくめとなつては、一點の餘裕も餘韻もない、寧ろ殺風景と云ふべきものである。

現に東京に於ても多少こゝに氣が付いて來て、何うかして少しは劇甚なる物質的萬能の社會を脱したいと云ふ考へからして、其仕事場と家庭とを異にする事が行はれつゝある。之れは仕事の繁劇に迫はるゝ餘沫が、家庭の趣味を減損することを警戒する爲めである。其他閑地に邸宅を營み、或は少しく隔たりたる處に別莊を建てたるなどは、つまり田舎の家庭の風を都會に實現すべく試みるものだ。餘りに調法すぎ、殆んど機械的生活の無趣味に當惑して田舎風にやつて見たい氣が起つたのだ。言換へれば、餘り人任せは面白くない、少しは自からやつて見ようと氣が付いたのに外ならぬ。併し此等は極めて少數で、滔々たる大勢は寧ろ地方の風と反對の方向に趣きつゝあるので、實に惡傾向と言はなければならぬ。

東京に於ては、一步戶外へ踏出せば劇場あり寄席あり、百貨をならべた大呉服店あり、淺草の如き常住不斷の見世物などもある。處が田舎の天地には斯様なものが少ない。しかし田舎に

は又田舎相應の年中行事があつて、種々の催しが季節々々に行はる、のが田舎の特色で、之れこそ傳へるべき價值のあるものだ。凡そ此種の慣習は、古ければ古い程趣味のあるもので、西洋でもかくの如き古俗は成るべく保存に努めてゐる。今日の時勢に副はぬなどと云うて打破するは莫迦の骨頂である。

京都を一地方と見れば、茲には最も歴史的小おもしろいお祭りや年中行事があつて、如何にも盛んなものだが、假りにそれは別格のものとして、邊鄙な田舎に就て見ても、年中行事は幾んど普遍的にあつて、除夜、歳旦、重三、端午、七夕、皆それ／＼行事があつて、土地に依つていくらか趣を異にしてはゐるが、何れも興味のある慣習である。尙土地に依つては藏開き、恵比壽講、天神講などさまざまあつて、家庭を賑はすことが一にして足らない。或る季節には鎮守の祭りもあり、寺詣りもあり、一家には法事もする。此等は、小にしては家庭の歡樂であり、大にしては一町一村の社交である。此等のお祭り騒ぎが田舎生活の單調を破り、周歲營々の勞苦を慰するものでもある故に、田舎では身分相應費用惜しまずに立働く。例へば中元なれば精靈棚きりこを設ける。切子燈籠きりこを作る。それを作るには、多くの場合、家人が大工となり、きやうしや經師屋の

眞似までしてやつてのける。端午なれば武者人形を飾り、幟ふたばや吹流しを立て、凧を揚げる。もと男の兒を祝ふ爲めであるけれども、壯丁も参加して陽氣の天地を作り出す。すべて此等の事には、男は外部に婦人は内部に一家を擧げて部分々々を擔任し、共同的動作を取るのだから、自然共同的歡樂も起るのである。男女何れか一方が傍觀してゐるとき、片手落ちの事は田舎には有り得ない。そこにも田舎家庭の美が存するのである。

一家團欒といふことは家庭に於ける最大の樂事であるが、都會に於ては、生存競争の爲め已むを得ない事情もあるけれども、幾んど事實に行はれ難い。一家の男女それ／＼が、異なる業務に當つてゐるやうな境遇に於ては、家族一同が食卓を共にするやうなことは減多にない。然るに田舎の家庭に於ては、或る特別の場合を除いては、團欒が寧ろ通例で、家族的情味は甚だ豊かである。流石の都人士も、これだけは羨まらずには居られないのである。

今日の如き繁雜な移り替りの劇しい世の中で、純眞の家庭美を何處に求むべきかと云はゞ、私は都門にありとは言ひかねる。都門はあらゆる名流の淵藪であるから、無論、範とすべき家庭もあるであらうが、都會化の勢は眞に猛烈であつて、何物をも輕佻浮薄に導かずんば已まない

概があつて、立派な名門と雖も此の時疫に罹らないものは幾んど無い。何と云うても、まだ地方には純真な家庭がある。地方は都會地に較べると保守氣分が漂うて、淳朴の風氣はまだ亡びるまでに至つて居らぬ。

地方に於ける素封家は、さながら昔しの大名のやうなもので、多くの田園を領し大なる邸宅を構へ、曾ては大名が駕を枉げて金を借りに來たなどのプライドを有し、饑饉の歳には救恤をつとめ、或は家塾を開いて郷黨を教育し、一郷の公共事業には率先事に當るなど、居然たる郷曲の大黒柱で、一村の利害は専ら其の家に繋り、其の家の歴史が即ち村の歴史であり、村の興廢も亦其の家の隆替に依ると云ふ至密の關係があつて、一郷はさながら領主の如く之れを仰いだものである。斯る家にはおのづから英主も生れて、子孫の爲めに家憲を定めた例も少なくない。或は日本の代表的富豪の家憲に倣つたり、或は學者、高僧などの説に聽いて定めたものもある。家政萬般の事から、縁者の事、家僕の事、延いては一郷の事にも及び、經濟的に倫理的に定められたる家憲は、今日見ても如何にも立派なものである。長い間の奉公事蹟は石に刻まれてゐるもあり、寺宮に額として掲げられてゐるもある。一郷は其家を見ること實物の如くで、

若し其の家運が傾きでもすれば、さながら己れが家の非運を歎ずる如くに惜しみ且つ悲しむ。これが舊家の一得で、成り上りの家を賤しむとは全く反對である。斯る舊家は一郷の統治上頗る大切で、國家から見ても最も貴重な細胞である。

田舎の舊家に家庭美のあるは右の如き由來に基くもので、決して偶然でない。併しながら、滔々たる都門の誘惑は、地方の素封家を驅つて都會に移さんとしつゝあつて、頗る危険に瀕してゐる。今に於て地方の良家庭を存續する道を講じなければ、恐らく遠からず亡びるであらう。彼等素封家が東京に住居を構へる、其初めは、別荘を置く位な氣でもあらうが、これが抑々都會化する第一歩で、父祖の築き上げた良家庭を破壊するの亂階である。是れは決して素封家個個の得失の問題でなく、地方豪族の東京に移るは、地方を衰頽に導く所以であり、經濟上にも風紀上にも非常の影響を及ぼすことに想ひ到ると、何としても之れを喰ひ止めねばならぬ。畢竟地方の素封家に自尊心がないから、自から輕んじて死地に就くのである。私などは國策上目下重きを地方に置くの宣傳が非常に大切であると思ふ。田舎の家庭美を宣傳して、都人士に之れを習はしめんとする如きは、實は僅かに其の一端たるに過ぎない。

以上は専ら地方舊家の家庭美を禮讃したので、要は其の美風を都門の家庭に移し、それに倣はせたいと云ふのである。同時に禮讃に値する家庭を破壊から救うて、保存したいと主張するのである。併し、問題外ながら、昨今社會の一大問題となつてゐる失業の事が以上説いたことに絡んでゐるので、勢ひ筆をこれに著けねばならぬ。失業の原因は、大體日本の人口が一年に百萬も殖えるのに、一方産業は追々機械化し又合理化して、勞働の需要を減ずるから、勢ひ失業者が起らざるを得ないのである。加ふるに世界大戰後不景氣が続いて、百般の産業も不振であることが原因に相違ないが、私が特に田舎の家庭問題に關連して云はねばならぬことは、地方の農民が雨笠風衰で糞土に親しむのをつらしとして、都門に憧憬し、易きに就きたい一心で、耒耜を捨て、漫りに都會に趨ることが、都會に勞働過多となり、此の悲況を生ずるのである。大震災の擧句復興事業が多端であつたから、不景氣の中にも勞働者を相當遣ひこなしただけでも、追々復興が出来るに隨ひ、勞役の過剰を生ずるは當然の事で、政府が緊縮方針を取り、放漫の事業を中止するとなつては、失業は益々起らねばならぬ筈である。然らば此の失業者を如何にせんとする。絶體絶命となれば、失業者自身故郷へ歸る外はないのだが、一旦都門の空氣

に觸れ、所謂る都會化したものが、郷里へ還つたとて百姓たり得べきでない。さればとて國費を以て之れを濟ふべきでもない。又無産黨の主張する如く、富者の利益を殺いで之れに與ふべきでもない。働き得る能力者に對し斯る事をなすのは絶對に當を得ないこと緊説を要しない。どうしても彼等に産業を興へて、彼等自身をして活きるの道を立てしめねば、眞の救濟策と云ふことが出来ない。其の對策を案することは、喫緊であると同時に至難である。先づ政府として爲さねばならぬ方策から云ふと、外國の輸入品を制限して重に國産品を用ゐるしめる方略を講じ、國産の奨励をなすことが最も大切である。併し、それには相當便利な方法があらねばならぬ。大工業家が大資本を卸して業を營むのは暫く措いて、日本のやうな國では、差當り中小の工業の起ることが寧ろ國情に適してゐる。然るに此等中小の工業を營まんとする者は資本が豊かでないから、みづから工場を建てることが出来ない爲めに、折角志があり技能があつても、他の工場に雇はる、外に方法が無い。若し外國の如く共同興業所があつて、その一部分を賃借することが出来るとなれば、工場を自から建てるにも及ばず、土地を買つたり借りたりする必要もなくなり、蒸氣でも電氣でも動力は皆其の興業所に供へてあるから、それを入用だけ賃を

拂へば經濟的に用ゐることが出来る。又斯る興業所には鐵道も引入られてゐるのが通例であるから、製品の運搬にも便利がある。乃ち僅かに機械を据付ければ、あとは賃を拂へば何でも辦ずる。そして斯く大規模に設備のある所は割合に何もかも賃が安いのが例であるから、從來收支の償はない事業も始めて利益が上るに相違ない。随つて個人經營の幾多の工業は、翕然として之れに就くは必然の事で、獨立經營が始めてポシブルになつて來て、其の實驗を積んだ者の内から、追々自から大工業を起すものを生ずるに至るであらう。日本今日の小工業といふものは自宅に營まる、ものが多く、實に散漫たるものであるが、若し此等を一所に纏めて共同せしめたら、相當に事も擧るであらう。又斯くなれば、金融の道も生ずるであらう。而して此等を共同せしめるにも亦共同興業所の必要を感じるのであるから、資本家は最早躊躇なく丸ビルよりも更に幾層大なる建物を郊外適當の地に興すべきだ。恐らく其の建物の内の幾千の工場は直ちに塞がつて、資本家も大いに酬いらるゝに相違ない。

尙政府がなしつゝ、ある事業の内で適當に取捨し、ある事業を民業に委するののも一策であらう。例へば電話の架設の如き、今は政府事業となつてゐるが、豫算に制限されて需要の多い割合に

擴張が遅々としてゐる。之れを民業に移せば進歩は著しいものがあつて、同時に多數の従業員を要することにならう。

此他河川、港灣、道路等の土木事業、田野開發の事業等、大切な仕事は地方に甚だ多くある。適當の方法を以て此等の經營をなすことは、設令ひ多くの費用を要するにしても、國家永遠の利澤をひらき、併せて労働者に業を授けることにもなるので、合理的の失業救濟法はかゝるもので無ければならぬ。此他過剰の人口を調節するためには、移民が必要であると共に、雲霞の如く寄せ來る朝鮮労働者を制するの法も無ければならぬ。地方民が中央に集中する事を防ぐの法も往々くは講じなければならぬ。同時に地方開發の爲め土着人をして其の郷土に落着かしめる方策も無ければならぬ。此等の事を一々細説するのは此篇の目的でないが、農村の爲めに差向き必要と感ずるものは副業を奨励することである。大體田舎の風は年を逐うて奢侈に流れつゝあるから、到底今までの生産のみでは生計を営みかねる事情もあるから、新たに生計を助けるものが無ければならぬ。從來とても副業は様々あつて因襲的に營まれてゐるが、其の規模が甚だ狭少で、多くは一郷の用を足すに過ぎない。偶々心あるものが較々大きな計畫をな

しても、運搬、販賣の法が宜しきを得ない爲めに失敗に歸するものが多い。農家相應の副業はいくらでもあるが、之れを有利にするには、銘々個々が思ひ／＼にやるごとき今日の流儀ではゆかぬ。産業組合を組織して統一的共同的の働きを取らねばならぬ。例へば鶏卵を販ぐにも、西瓜其他の果物を賣るにも、取纏めて之れを積出すやうにしなければならぬ。それが爲めには倉庫も要る。何よりも必要なのは之れが管理の衝に當る適當の人を得ねばならぬ。現に愛知縣などでは、此の副業經營が相當に進んで、收利も莫大であるといふが、それには相當の仕掛けがあつて、從來の個々散漫の遣り口を改め、統一的に多量のものゝを湊合して市場に送り出す法があるので效を奏してゐる。各府縣共に差當り愛知縣に學ぶべきである。副業は一町若くは一村の各戸が力を注げば驚くべき巨額に達するもので、爰に大和の吉野の箸削りの好例がある。吉野は杉材の名産地で、酒樽は此の杉で作る。樽を作つた擧句自然に出る屑は莫大のもので、もとはそれを焚きものにしたものだが、廢物を利用して、吉野では割箸を削ることを始め、各家の副業となつた。小學兒童が此の簡單な工藝を教はつて、もとは丸箸まで作つたのが、何故かそれは止んだが、普通の割箸は今でも作つてゐて、小學兒童の手に成るものが全體の半分以上ある。

上も占めてゐると云ふ。そして其の産額は一年十二億、此金額百二十萬圓に達してゐる。斯る簡單な工業、殊に廢材を利用しての結果として一年百二十萬圓の收穫を得るに至つては、立派な業と謂ふことが出来る。畢竟各戸が之れを營む習慣があるからの事だ。殊に小學兒童を従業員に充てる事がよい習慣である。此の箸削りは各家庭で教へるものらしいが、實は學校に於て一科として教へてもよいと思ふのである。箸削りに限らず、兒童にふさはしい副業を小學時代に一科として學校で教へ、餘暇にその業を練習的に營ましめることは差當り殖産を助け、やがて成人となればそれが相當の業となるのだから、吉野の習慣は他の地方にも倣はせたいものである。

以上の外、種々の工藝品で從來地方の名物と云はれてゐるもの、若くはこれから新たに工夫さるべきものも、共同經營でやれば、亡びんとするものも活き、新たに工夫さる、ものも直ちに市場を得ることになる。如斯き副業の内には女子の手を待つものも少からずある。又田圃に立働くことを厭ふものに適するものもある。兎角今日の憂は農民が勞を厭うて安逸に就かんとする風が漲つてゐる事だ。此頃聞いた話に、私の郷土の或る地方では、百姓が邊鄙の地から

人を働うて耕作せしめてゐると云ふ。其の賃錢は一日二圓を拂つて、己れはと云へば一圓八十錢の賃錢で他の勞役に就いてゐると云ふ事を聞いた。懶惰の風が斯くなつては困りものである。若い男女も互ひに土臭い配偶を得ることを嫌つて一意都門に趨るの風があるのも亦困りものである。今は女子の職業がいろいろ開けて來たから、都會に來なくとも、田舎に事業さへ起れば、都會に於けると同様それに有りつき得るので、田圃の糞土と親しむ計りが唯一の仕事でない。否、耕作以外に然るべき仕事が出来ねばならぬ。私が切に副業を云々するのも此故であるが、地方人を、土地に安んじて又楽しんで土着せしめるには、結局、教育の法を改めねばなるまい。農村に於ける教育は農村相當のもので無ければ、農民が晏如として郷土に土着する事を望み得可きでない。滔々たる時勢病は農村を侵して其素朴なる風儀も慣習も都會に誇るべき家庭をも泯滅に歸せしめんとしつゝある。今日爲政者の最も意を用ゐるべきは此點にあらねばならぬ。

新らしい住宅建築と茶室造

所謂る日本趣味なるものは、其源を辿つて見ると、悉く茶道に發してゐるとも謂ひ得るが、住宅建築の發達が茶の湯に負ふ所も亦尠くなかつた。

僅か二坪許りの建坪の内に、古來幾百通りのプランが立てられたことだらう？ 數多の天才によつて精練された趣味の極點、而も此の茶の湯に於ては必らずそれが實際的の目的から發したものであつて、狹隘な範圍の内が如何に便利といふことについて工夫されてゐるかを注意して見ると、何人と雖も今更驚かすにはゐられない。今日斯道に傳へられてゐる數百年來の茶室の設計圖は、これに照らせば、如何なる新様式の建築を作成するに當つても、必らず何等かの暗示を與へずにはおかない力がある。貴い建築界の寶藏であらねばならない。

又純日本風の住宅建築には概して瀟洒たる趣味が喜ばれるが、今日に於て所謂る其數寄を凝らすに最も心血を濺ぐのは、先づ下町邊りに見る、待合と稱へる特殊建築であらねばならない。而して日本建築に於ける此種の趣味住宅の上のエッセンスも亦茶室造りに求める外はないのである。加ふるに待合にあつては、其使用目的の必要上、繁華な巷まちに限られた、一定の狹隘な域内に數多の座敷を作りながら、其各々が獨立して、苟くも室内の様子は完全に隣室、外界に漏

れない工夫を要するものである。距離を置かないで遠い趣を添へる。動機は別でも、かやうな工夫は悉く茶室の建築法に出でて、そこに又一種の發達を遂げた様である。我が民族趣味の傳統を汲むと云へば誰でも首肯するであらう茶室から、實用上の暗示を求めよとは餘りに見當違ひの僻論のやうに聞こえるかも知れないが、私としては寧ろ其點に於て茶室建築が今後の住宅改善の方面に必らず加へるものありと云ひたいのである。も少し具體的に述べて見よう。

常住、一室に籠つて、書齋とも思へば客間とも思ふ、其中に爐があり水屋がある、主人は多く遁世的の趣味悟道の人である、かう考へて來ると、日本建築の中で最も實際的方面と趣味的方面とを兼ねたものは茶室を措いて他にないわけである。

茶の湯に特殊の設備は別としても、たとへば袋戸棚の襖である。普通の座敷用のものならば大抵二枚か四枚かに極つてゐるが、茶室好みでは、よく之を三枚に作ることもある。即ち敷居も三筋の溝を用意するのである。で、いざ物の出し入れでもしようと思ふ時には、サツと二枚を明け切つて了ふ。畢竟戸棚の口の三分の二が用をなすといふわけである。これならば、軸物などでも可なりの長さの物が樂々と扱ひ得るわけで、四枚戸二條の溝では、間口の二分の一し

か用をなさないことになる。かやうな處にも實用から來た面白い工夫が存するので、萬事が此の意氣である。洋館の車庫などに用ゐて面白いだらうと思ふ。

右は長さに於ける工夫であるが、又壁間の利用などにも普通の日本間に見られない工夫がある。たとへば中床の鴨居の壁などを抜いて袋棚の大きなものを作る。内部をトタン張りにしてもしたら、鼠の襲來を防ぐことも出来るし、濕氣は遠く、軸物なんかを藏しておくに持つて來いである。かくの如く茶室の建築は、一方から言へば、規模から云つても材料から云つても極めて嚴格なる制限の内にあつて遂げられた、幾十代もの研究の結晶に外ならない。そこに見出さる、幾多の原則を適用して、來るべき洋風本位の住宅建築に試みたならば、或は發明する所大いなるものがあらうと思はる。

尙茶の湯の建築法に關聯して思ひ出したのは、彼等の傳へてゐる建繪たてまの設計圖である。今日専門家の用ゐてゐる、垂直、水平投影圖、あれは見馴れた其道の人には、それだけで出來上つた建物が如何なる價值を具有するものであるかの判断もつくであらうが、きれんくの圖面に對してそれを有機的な一個の創作として見ることは、素人としてなかく骨が折れる。まして普

通に用ゐられてゐるやうな平面の間取り圖だけ見て、出來上つた家を想像することは非常に危険であつて、圖では申し分ないと許したものが、實際の場合に意外に間を殺してゐたり採光を誤つてゐるのを發見することもよくある話である。畢竟、設計圖は音樂に於ける樂譜の如きもので、それを觀ただけで音樂を聴く事は、餘程の立人でなくては殆んど不可能であると云つてよい。そこで東西共に永久的の大建築を企てるには先づ以て精巧なる雛形ひながたを作ることになつてゐる。建築の仕上げを、家具電燈の微に至るまで宛然ありのまゝに立體的の縮圖を取るのである。所がそれに費す時間などはなかく馬鹿に出來ないのであつて、又その爲めに數千圓を投ずる例も尠くない。普通の住宅建築に一々之を留意するの煩は、到底實現さるべくもない。所でこゝに面白い工夫を用ゐてゐるのは、茶室建築法を傳へる時の建繪である。これは全部紙製であるが、最初普通の間取り平面圖を作つて、此上に壁窓襖等を畫いた各部のエレベーションを、脚部を糊附けにして立て倒しの出來る様に用意する。さて之を紹介しようと思ふ時には、壁の全部を起して行くと、屋根こそなけれ、素人にもほゞ實景の想像し得る程度の物が出來上るわけである。而も保存して置く時には、全部をバタ／＼と伏せる事が出來るので、埃にまみ

れる嫌ひもなく、簡単に幾通りでも藏しておくことが出來るので、頗る便利である。理想的なモデルとして保存したい家のあつた時、或は建築に取りかゝる前に普通人にもわかる様に之を紹介したい時、文化住宅などと呼べる、今後の新住宅に於いても、この建繪式けんえいしきの設計圖を利用して見たら面白いだらうと思ふ。

建築が洋風に變つて行けば、それを廻らす庭園も自然洋風の造園法を基調に置いて、建築との調和を計らなければならぬ。從來の日本庭園を其儘移すことにも無理があらうし、と云つてナマ淺薄な和洋折衷などは尙更御免蒙りたいものである。今後は我邦に於ても、如何にも新時代の國民性、民族趣味の根柢から閃き出でたと頷かせるもの、將來世界の造園術にも必らず何等かの影響を與へないでは措かないと云ふ様な力強いオリジナルな産物が見たいものである。眞實に美しいものであるならば、如何に懸け隔つた郷土に産み出された様式でも、何處か必らず萬人の審美感を動かさずにはゐないものがある。日本民族の間に生れた浮世繪が、一二世紀を距てた西歐で後期印象派のチャムピオン達を眼覺めしめるに大いなる力有つたといふが如き、こは藝術史上何人も否むことの出來ない事實である。日本趣味の極致は茶である。日本

の造園術も亦茶を離れては存在しない。幾十代の天才の精進によつて斯道に於ける美の玄奥までも窮められ傳へられてゐる。石などを有りの儘削らないで配置する邊、所謂ナチュラリズムが基調をなすものであるが、それでゐて、そこには門外素人に容易に見出し能はぬ合理的な、同時に意外にプラクチカルな心遣ひが、一見不用意の間に布かれてゐるのである。禪に養はれたサビの味ひ、或は眞行草の氣分の變化、國土に應じた天然風物の取入れ方、それらの中から何物かを感得して、全然新しい表現に出でたならば、必らず刮目すべき斯界の革命を齎らすことが出来よう。たゞあくまで斥けなければならぬのは、過渡期によく見る、既成の諸形式を雜然混入して成す惡趣味である。望むところは、藝術家の魂を賦へられたる、今日並に將來の天才に俟つ外はない。

文藝と金融

文藝と金融。恐らくこれほど縁因の遠いものはないと思ふものもあらう。事實その通りであ

る。文學上の作品を銀行に持つて行つても金を貸してくれない。印税などは銀行の擔保にならないことはよく分つてゐる。併し、強ち金融法が無いでもない。昔から種々の法が行はれてゐる。

昔し伊勢の宿屋では井戸を抵當にして金を借りたと云ふ。旅客の輻湊する氣節が來ると、どんな算段をしても井戸を遣はねばならぬから、尤も信用ある抵當とされたと云ふが、これは文藝の談でない。併し此れに倣つて俳諧師などが、月、花、露などいふ頻々と用ゐる字を抵當に入れて金を借りた例は事實あつた。返金しない間は其字を用ゐることが出来ないから、終には返却することになる。

詩が賣買されて金融の媒介をなした例もある。「海城寒柝月生潮」と云ふ詩は人口に膾炙する有名で、其の作者長尾秋水（越後村上の人）は此詩を名刺代りに揮り廻はして、全國を遊歴し、到る處款對を受けたと云はれてゐる。勿論秋水は人の囑に應じて到る處に此詩を書いた。北海道の旅先きで又此詩を書いた時に、金忠輔といふ人が、ひどく此詩に感じて、是非譲つて欲しいと強請したので、秋水は二分の金に換へた。斯くして所有權が他に移つたから、秋

水は其後此の得意の詩を書くことが出来なかつたが、秋水に幸ひの事は、此の金と云ふ人が亡命して所在が知れなくなつたので、又書き出したと云ふが、爰に亦秋水の詩に就て同じやうな挿話がある。頼山陽の子支峰が越後に來てゐた時、或人が秋水の一詩を示した所、支峰は其詩を激賞して、是非俺れに譲れと云うて金壹兩を出して與へた。其人は、自分の詩でもないのに譲る譯にゆかぬ、價を取るなどは勿論出来ぬと辭したが、價を取つて貰はねば自分のものにならぬと強ひて取らせて、其後は支峰は自作の如く揮毫した。其詩は、

春夜

風度松梢夢正殘、夜深池館倚欄干、一庭明月無人見、唯有梨花相對寒

詩が賣買された例は、いろいろあるであらうが、右は文藝と金融の一例として擧げたに過ぎない。

詩人と云ふものは概ね貧乏で、兎もすると金に窮するが、金融がつかない。そこで詩を作つて自から慰めるなどは平凡であるが、詩を作つて欲しいものを自家の有とする奇抜の例もある。支那で詩人として亦書畫の鑑識家として名高い高江村が、人から書卷を示されて、食指が動い

たが、價が高いので力及ばず、三首の詩を作つて、其の書卷を己が有とした。其詩の一首は次ぎの如くて、題の中にも詩中にも、己が有となすとある。金融のつかない時には、這般の負け惜しみの法もある。

客持郭河陽溪山秋霽圖卷、索値甚昂、無力購之、題三絕句、以爲我有也。

澹々秋嵐半吐吞、丹青入墨了無痕、偶然經眼爲吾有、何用縹囊付子孫

文藝ほど大切なもので、昔しからこれほど酬いられないものはない。私は福山藩の太田方の「韓非子翼義」(十一冊)出版の仕末を讀む毎に涙がこぼれる。此書は支那に誇るべき名著であることは今更云ふを待たない。太田は此書を著すに十數年心血を瀝ぎ、漸く脱稿したが、さて出版するの方便を得なかつた。偶々藩邸の附近に火災があつて、殆んど草稿が烏有に歸せんとしたので、未定稿ながら、版にしなれば或は折角の苦辛を水泡に歸するやうな事があらうと、爰に出版を心がけたが、さてこれほどの名著を出版する書肆も無かつたので、太田は吉田篁墩から活字を借り受けて、家庭で之れを印刷せんと企てた。先づ活字を調べて見ると、足ら

ない字が如何にも澤山あつて、三萬餘は工人を頼んで作らせたが、愈々印刷に取り掛らんとすると、細君が病に罹り、それが長びいて醫藥が效なく、追々衰弱に赴く。季女が乳の無いので泣き、五歳の兒が撫育の人のないのでむつがる。所謂妻は病牀に臥し兒は餓に泣くの悲境に二年を費して備さに艱難を極め、殆んど此業を廢せんとした。偶々親戚に鹽田屯といふがあつて、僅かばかりの資を投じ、總領の周が十三歳で不足の活字を補刻してゐる内、幸ひにも細君の病が癒えたので、事業を繼續し、三人の子が彫刻を擔任したり印刷を擔任したりして、朝は早く起き夜は遅く臥し、僅かに二十部を出版することが出来たが、何分にも一家公私の事が紛淆して、皆々此事を厭ふに到つたと、卷末に仕末を叙し、彫刻と印刷を擔任した三人の兒の名をも録してゐるのは、書物には珍らしい例である。斯くまでにして此書は享和元年に出版された。金融に恵まれない結果として八年を費し、僅かに二十部すら刷行し得なかつた。随つて此書は頗る希覯であるが、私はこれを「涙書」と呼んでゐる。

又柴野栗山が初學に便せんとて編輯し上板した「雜字類編」は、漢學の旺盛時代に調法がられて、廣く流布し、今も大抵の書店を捜せばたやすく得られる本だが、栗山の弟貞穀の名で出

てゐる爲めに、多くの人は栗山の著であることすら知らぬ人もある。ましてこれが栗山自から板刻の經營をした事などは夢想だもしないものだが、斯る調法のものですら、當時は自家經營でなければ上板出来なかつたのである。栗山は後に昌平大學の三儒と云はれて、押しも押されもしない大家となつたけれども、長い間貧乏暮しをやつた。その不如意の間に此の書の上木を企てたのであるから、なか／＼苦勞をしたのである。後に引く家弟に寄せた手紙に見えろごとく、金融に窮して、弟に金融の相談をしてゐる。但し成るべく經濟に出来るやうにと、偶然浪人あがりの板木屋があつたのを、自分の家來にしてそれを家に置き、衣食を給してやらせたから、他の板木屋に頼むよりも安く出来上つた譯だが、それにしても印刷、製本の仕上げまで漕ぎつけるにはポツ／＼金があつたので、其の融通を弟に託したのである。弟は醫者であつたから、兄よりも金融の便利もあつたと見える。此書に「東讚柴貞穀小輔重修」とあるが、貞穀は弟の名で小輔は弟の號である。即ち栗山が弟の名で版にしたことが窺はれるのである。昔は學者が多く金融に困つて、斯くまでせざれば其著述を公刊することが出来なかつたのである。

明治四十三年、讃岐の人川口萬之助、長尾折三兩氏が出版した「柴野栗山の書簡」中に、栗

山が家弟に寄せた書簡の中に此書の上版に關するものが二通ある。一通に云く、

一浪人の板木や有之、殊の外手間代も下直に御座候間、事によりとくと相談致し候て、雜字類編印行可申付や共存候、左様なれば、金子少々入用御座候、尤一人にて手前に指置ほらせ候事に御座候間、急に遣し候にも及び不申候へども、追々板代等遣す事に候間、二百目三百目つとも段々に入用にて有之候、何卒一割二三分之金子にて其元にて借用出来可申や、猶彌相談相極り申候はゞ、追々可申入候

其後の書簡には更に委しく陳べてゐる。

一雜字類編の事、先書得御意候通、浪人板木や有之、我等家來分に致、此方に指置すらせ申候へば、殊外下直に付、大抵二百丁にて金子十五兩程にて出来申候間、可申付と存候、尤外にて申付候より、板一枚に付、六七匁下直に付申候、尤食事等飯料は入申候へ共、是は百日百匁に御座候間、どうなり共相成可申候、何卒其元にて銀子御かり可給候、尤一度に遣候にも及不申候、追々に遣申候事に御座候、大抵一ヶ月ほど有之候へば、本仕立仕込迄出来申候、何卒五月中勘藏引越之節御上京被成候様と存候、左様なれば、是等の事とくと

御相談申度候

廣く購讀者のあつた學者には、其の著書を出版するに一種面白い金融の法もあつた。即ち平田篤胤の著書を出版するに進學會と云ふを設け、今日の豫約出版と似た様なことを行つた。今の豫約の法と異なるのは、書物屋に金を拂ふのでなく、信用ある世話方と金の預り方があつて、そこで金を管理する。そしてすべて前金で拂はせる方法である。此頃偶然此の積金仕方書の印刷物一枚を得た。それはなか／＼巧妙に工夫されたものである。先づ冒頭の趣意書を見ると、平田先生の著書は百巻にも及んでゐるが、彫刻が間に合はず、門人方よりも督促が頻りであるから、出版速進の爲めに積立法を設けるとある。如何にも平田の著書百にも満ち門人も手廣くあつたから、斯る吹聴は駄法螺とも思はれない。そこで積立金は一口一ヶ月銀壹匁である。それを三十日に割れば錢四文に當る。其の四文を毎朝家内安全、子孫繁昌、福壽増長の爲め神棚へ奉獻すれば、一ヶ月には銀壹匁は出来ると云ふあたりは平田先生自身の宣傳振りで、如何にも巧である。扱て希望者は幾口にても加入が出来るとある。殊に門人達は自から十口以上加入の義務が

あり、更に他人にも勧誘すべしとあつて、京、大阪にも世話方を置き、此の掛金を江戸に集め、其口數に應じ出版部數を定めて、彫刻を督促し、出版次第、出金者に本を配る方法であつた。右の方法を毎年繰返せば、先生の著書は残らず所持せらるゝこととなり、學業も進むべしとある。手数料の事などは規定してないけれども、預け金の内壹割だけは保留すとある。それも甚だ巧妙なる書き様にて、「壹割は御奉納之御心得にて金預り方へ御積立可被下候、右様致し候はば、積金元盡き不申候に付、絶間なく彫刻並仕立出來致し、大功速に成就可致候事」とある。幾許かを保留して積立てを持續せしめんとしたのである。此の方法はどれだけ成功したか、知りかねるが、これも金融の一案で、平田の如く多數の信者を持つた人には、此の金融法は多分功を奏したであらうと思はるゝ。前金を積立てさせての出版であるから、これほど確實な法は無い。今左に其の全文を掲げる。

進學會積金仕法

平田先生年來著述之書數百卷に相當み候に付、彫刻方段々延引に及候所、門人之衆中、右著述書物早々仕立候而世に廣くせむと被希候事頻りに付、今般進學會積金取結び之儀申談候上、

仕法規定左之通に御座候

○積金壹口分 一ヶ月銀壹匁宛也

但し、毎朝神拜之節、青銅四孔宛奉獻候而、家内安全子孫繁昌福壽增長之御禮奉申上候はゞ、壹ヶ月積りて凡銀壹匁餘にも相成可申候

○江戸にて身元慥なる町家一人集金預り方相頼置候而、最寄之世話人右金預り方へ金子相届可申候事

○京大阪は勿論、諸國村方迄も、最寄くへ世話人相定置候而、毎月掛金世話人方へ相渡し、世話人方にて員數都合之上、書狀相添江戸表金預り方へ相届可申候事

但し金預り方より請取書追て御届可申候

○金預り方へ金子追々集り申可候に付、世話方取扱候而、來春早々より彫刻に取掛り、書物仕立申可候、右出來次第、御加入之方々へは壹口分へ書物壹部宛呈上可致候、左候はゞ、先生著述之書不殘御銘々御所持有之候様相成、自然と學業相進み可申候事

但し、掛銀之高と書物代金過不足にも相成候はゞ、追々掛銀にて御勘定可致候

○御壹人にて數口御受持之方々書物御不用之儀も御座候はゞ、定期代金に而買返し可申候事
 ○呈上致し候書物定期代金之内壹割は御奉納之御心得に而、金預り方へ又々御積立可被下候、
 右様致し候はゞ、積金元盡き不申候に付、絶間なく彫刻並仕立方出来いたし、大功速に成就
 可致候事

○賣出しに相成候書物之分も、代金之内一割分は金預り方へ積立可申候事

○門人衆中は御銘々別段に御丹誠被成、他方之人々加入御進め御世話被成候て、自他とも御
 一人にて十口以上貳百口も御持可被下候事

尤も御力に及兼候御方は御自分壹口にても御加入可被成候事

右之通り取極候につき、金預り方、發願世話方、總て御加入之衆中御調印之上、學事興隆御
 助力御丹誠偏に所希に候、以上

天保四癸巳年十一月

發願世話方 江戸 和泉善平
 下總 宮負佐平
 集金預り方 江戸神田岩井町 御普調方 小林三右衛門
 御用所

世話人

寺院で經卷を刻するに、喜捨金募集を金融の手段としたことは餘りによく知れてゐる。佛教
 熱の熾烈なりし時代、斯る喜捨を爲すことが冥福を祈るに大切がられたから、此の募集には相
 當に信徒が應じたので、多くの經卷や佛典は此方法で刻されてゐる。それは其の書の卷末に寄
 附者の氏名金額が刻されてゐるのでもよくわかる。支那に於ても同様で、刻費を喜捨金で辨じ
 たものである。但し寺で經を刻する場合のみでなく、刻された佛典を購ふ時でも募金の法に據
 つて其資を得た。即ち「一切經」を購ふ爲めの募金は殆んど何れの寺にも行はれた。「一切經」
 は頗る大部のもので、それを寺に有すると否とは寺の榮辱に關した。併し其の價も高いもので
 あつたので、それを購ひ入る、事が一山の大事業で、それが寺に這入つた時には寺は之れを誇り
 としたものだ。併し末世となつては、寺の風紀が亂れて、此の佛典の購求を名として金を募つ
 ても、それを負債理めに流用したりして、物議を醸した例がないでもない。

了翁僧都が東叡山の爲めに不忍池の辨天境内に勸學館と名づけて今の圖書館の如きものを經
 營した時、此の文庫を維持するため又其内容を充實するの方便として、了翁は錦袋圓と云ふ賣

藥を工夫して全國に賣り、其の收入を文庫に注いだ。此の賣藥を營んだ店は池之端仲町に今も存在してゐる。其店は嘗て書肆琳琅閣が居た事があつて、自分も毎度訪うたが、總二階が藏で如何にも手廣のものである所から見ても、餘程繁昌したと思はるゝ。これに依つて見ると賣藥も亦文藝の金融法であつたと言ひ得よう。

昔しの文人墨客は筆を載せて各地を遊歴し、潤筆料で糊口したもので、どんな大家でも之れをやらないものはなかつた。畫家や書家は勿論だが、儒者でも之れを敢てした。これがかれ等の金融法であつたのだ。それでどれほどの收穫があつたか。偶々森林太郎氏の「山房札記」を讀んで見ると、森氏所藏の壽阿彌の書簡の内に大窪天民（詩佛）の事が出てゐる。其の文を抄すると左の如くである。

大窪天民は「客歲」と云つてあるから、文政十年に、加賀から大阪へ旅稼に出たと見える。天民の收入は、江戸に居つても、「一日に一分や二分二朱」は取れるのである。それが加賀へ往つたが、所得は「中位」であつた。それから「どつと當るつもりで」大阪へ乗り込んだ。

大阪では佐竹家藏屋敷の役人等が周旋して大賈の書を請ふものが多かつた。然るに天民は出羽國秋田郡久保田の城主佐竹右京大夫義厚よむつの抱への身分で、佐竹家藏屋敷の役人が「世話を焼いてゐる」ので、町人共が「金子の謝禮はなるまいとの聞ちがひ」をしたので、こゝも所得は少かつた。此旅行は「都合日數二百日にて百兩ばかり」にはなつた。「一日が二分ならし」である。これでは江戸にあると大差はなく、「出かけたけが損」だと云つてゐる。

括弧に圍んだ文字は書簡の原文である。當時の文人が、大阪の金の林に綱を張つても、僅かに日に二分の收穫しかなかつたとは情けない事であるが、他の文人墨客の旅稼ぎも略々之れに似たものであつたらう。

書畫會を開く事も金融の一法で、渡邊華山の門人は師の爲めに之れを企てたことがある。華山は謹慎中であつたので、斯る事が或は累を藩侯に及ぼさんことを虞れて自殺した悲惨事もある。馬琴の如き戯作者でも、小説の收入だけでは満足が出来ず、大袈裟に書畫會を催した事がある。若干の會費を出席者から取り、酒食を供し書畫を興へ、諸入費を拂つて殘餘を儲けとするのだが、儲けは少なく骨が莫迦に折れた。文人の金融は斯く迄しなければつかぬものであつた。

大いに門戸を張つて書を書いた探幽とか文晁とかいふやうな大家は、常に門前市をなし、随分収入もあつたであらうが、名を成さぬ畫家は常に窮慮に呻吟して、經ふに衣類の無かつたものすらあつた。畫家の逸事は幾んど貧乏話が十の八九を占めてゐる。茲に悲惨な一例は仙臺に名高かつた菅井梅關が債主にはたられて自殺した事である。梅關の死因は今も疑問となつてゐるが、これに就て仙臺出身の館森袖海氏よりいつぞや聞いたことがある。その顛末は次の如くである。

梅關は長崎に遊び、江稼圃に就て書を書いた。稼圃は梅關を愛して其の郷に歸るとき、多くの粉本を授けた。稼圃は家寶として之れを珍藏したが、家計が裕かでなく、或る時斗米に窮したので已むなく此の珍藏の粉本を擔保として松井榮三と云ふ者より若干の金を借り入れた。松井はもと江州商人で、算數に明かであつた爲めに、仙臺の勘定奉行の手下に用ゐられ、計算を司つてゐた。松井は江州氣質で貨殖にぬけ目がなく、藩の會計を處理する傍ら、高利で金を貸し、窃かに産を作つた。固より文藝を解するものでなかつた。一旦梅關に融通をしたが、漸く危んで、或る人に擔保品を示し幾何の價があると問うて見ると、此人も風流や文藝

には盲目であつたので、反故同様價の無いものだと一蹴したので、松井は直ちに梅關を訪うて即時返金をはたり、餘りに嚴であつたので、梅關も途方にくれ、終に短慮にも自刃するに至つた。多分此の死因説が確かだと思ふが、笹崎小竹が書いた墓誌には流石に之れを忌んで書いてない。

小説家の金融は主として原稿料にあつたのだが、今日とは事變つて原稿料を稼ぐことは容易で無かつた。馬琴の若かつた頃は京傳位が僅かに原稿料が取れたと云はれてゐる。馬琴、春水、三馬、種彦、それらが相當の原稿料に有りつくやうになつたのは盛名を博してからの事で、その原稿料も甚だ薄いものであつた。他の作者は多くは無料で書き、それが出版さるゝのをせめてもの酬いとして自から慰めた位であつた。執筆前に原稿料の前借りをすることなどは容易で無かつたから、自製の藥を賣つたり、内職をやつたりして、僅かに金融をつけた例が少なくない。

段々既往の事實を擧げて見ると、文藝と金融は幾んど相容れない觀があつた。近頃は文化のお蔭で漸く文藝金融が弛緩された趣があり、或は學士院で賞金を文藝の研究に與へたり、啓明會などで研究を援けたりすることが行はれ出したのは喜ぶべきであるが、今の處餘りに小規模で、幾んど金融機關となりかねる。どうか此等の機關がモツと擴張されて欲しいものだ。

併し近來文藝の爲めに意外の金融の開けた例は一二に止まらない。圓本と云ふチープ・エヂシヨンが一時流行して、百萬部も賣れた結果として、文學者の作品の印税は夥しい額に上り、著作者をして夢かとはかり驚殺せしめた。恐らく此の三四年ほど、文學者が恵まれたことは昔しから無いことであらう。頼山陽の「日本外史」は能く賣れた例で、山陽の遺族が版權の訴訟を川越版に起した結果、三萬圓を得たことなどは、明治初年の出來事としては珍らしいことだが、圓本流布の結果は、それを凌ぐものがあつたのである。

新聞、雜誌の大量出版を見るのも近年の事で、今は五十萬、百萬を毎回刷り出す雜誌は敢て少なくない。大阪の二大新聞は一舉して五百萬の資本に倍額増資を行つて、それが直ちに應募を得たなどは文藝上に見る金融の大進歩で、恐らく西洋にも匹儔がなからうと思ふ。

帝國大學の圖書館が大震災に焼失したのは眞に惜むべきで、國費で之れを回復することは容易の事で無かつたのだが、意外にも亞米利加のロックフェラーから四百萬圓の建築費を寄せて來たので、前の館よりも幾倍も大きな立派なものが出来たなどは俗に所謂の焼け太りで、文藝の得た金融の非常の例とすることが出来よう。

早稻田大學が大隈老侯を紀念するために大講堂を築くには、帝大圖書館の如き仕合せはなかつたが、努力の結果、募金が百數十萬に上つて、最大額五萬圓、最少額十錢、寄附者の總數五萬人餘を數へた。此の募金の勞は非常であつたが、兎に角努力すれば金融がつくまでに至つたのは進歩と謂はざるを得ぬ。しかし、こゝまでに到るまでに私學がどれほど苦勞したかに就ては、官學の經營家などが想像も出来ないことである。

要するに、文藝と金融、それがパラドックスに聞こえ、縁の無いもの、やうに思はるゝのは國の不幸である。文藝の爲めに義侠的に金融を敢てするやうにならねば、到底國は繁榮に赴かないのである。

演説思ひ出譚

私も長い間大雄辯家の大隈老侯に追隨し、其の演説を何百回も聞いた。それだけでも演説が上手になりさうなものだが、生來無器用で一向に上達しない。老侯に就ての思出を語ると、私は幾回か老侯の前座をつとめたことがある。老侯が始めて演説を蓄音機に吹込まると、流石の大雄辯家も慣れぬ事とて躊躇された。そして私に先づ始めよと云はる、ので、據なく劈頭に大隈侯を紹介する詞と演説の題を吹込んだ。レコードの冒頭にある言葉がそれである。このレコードの存する限り、大雄辯家の演説、殊に總選舉に就ての大切なる場合の演説と共に簡單ながら私の聲の傳はるのは私の光榮である。

侯は、演説の材料の持合せのない時には、必らず君先づやれと私に前座を勤めさせた。侯は傍らに聞いて居られて、さて御自分が登壇されると、私の説をコツバ微塵に駁撃して、案外に演説が面白く纏まることもあつた。侯は演説が済むと、私に、君には氣の毒であつた、お蔭で

どうにか責塞ぎが出来たと笑はれることもあつた。

私共の學生時代は概して演説が幼稚であつた。帝大在學時代でさへ、今の高等學校の學生の技倆にも及ばなかつた。其頃同學年の友人が會を結んで演説の稽古をやつたものだが、皆草稿を作つてきて、殆んど朗讀的にやつたもので、随分覺束ないものであつた。其の演説の草稿を會の幹事が纏めて置くことになつてゐたから、今日三冊ばかりが尙保存されてゐる。四十幾年も経て之を讀んで見ると、説は兎も角も演説は殆んど成つて居らぬ。それは獨り自分計りでなく、今は東京帝國大學の老教授となつてゐる、各専門大家の草稿とても感服するほどのものは一つもない。と云へば同窓を侮辱するやうであるが、それが全くの事實である。私は自家の草稿に對して忸怩たらざるを得ないが、他の博士達も多分同感で、そんなものは焚いて仕舞へといきまくであらうけれども、實は面白い記念物として早大の圖書館に保存されてゐる。

吾々の帝大時代には、同學年生でも寮舎が異つた關係から、二つの會があつた。私や田中館愛橋君、藤澤利喜太郎君、先年歿した中原貞三郎君、大屋權平君などは共話會といふに屬し、

高田早苗君、坪内雄藏君、關直彦君杯の人々は晩成會といふに屬した。今存してゐる草稿は即ち共話會に屬する人々のものである。此の演説の草稿に就て可笑しい話がある。前年上野の櫻雲臺に同窓會を催した時、晩成共話二會の連中が多く會した。皆鬢髮半白の年輩で、學界に時めく人が多かつた。此の同窓會の幹事を自分が勤めた爲めに、此の草稿に思ひつき、秘かにそれを携へて席に臨んだ。酒酣にして銘々が隠し藝をやり出す場合となり、私が起つて、「自分は無器用で隠し藝を有たないが、列席諸君の演説の假聲こわいをつかつてお聞かせする。」というて、例の草稿を取り出し、一々誰れんと吹聴して草稿の初部を五六行演説句調で讀んでゆくと、皆皆案外の事に驚き、それは自分に覺えがないと叫ぶもあり、頭を搔きながら默聽するもあり、一時場を賑はした迄はよかつたが、爰に注意の足らなかつたのは、自分の草稿二三篇を抜き去つて置かなかつた爲めに、私が席に着かんとする刹那、誰か、背後から草稿をヒツたくつて、「これから市島君の假聲を遣ひます」と吹聴して、まづい草稿を聲高らかに讀まれたのには閉口せざるを得なかつた。

學生が政談を聴くことを禁ぜられてゐた時分の事である。早稻田大學の前身東京専門學校の大講堂に演説會を催した時、私は政談をなすべく登壇すると、警官がサーベルを鳴らして臨監にやつて來たので、倉皇早變りをせざるを得なかつた。丁度其頃外國の煙草の歴史を讀んでゐたので、取り敢へずそれを話材としてお茶を濁したことがある。所謂警官を烟に捲いたとは此の事で、私は忘れてゐたが、其折り傍聴した當時の學生、今は老境に入つてゐる友人達から、此頃聴かされて一笑を禁じ得なかつた。

私が郷里新潟にゐた頃である。私は同好會といふを組織し、多くの同士を抱擁した。それが後に改進黨となり憲政黨ともなつたのであるが、遊説のため縣下の各所を巡回した時の忘れ難い思ひ出がある。刈羽郡の椎谷しひやといふ驛から、山手に入つて二里ばかりの僻村に演説會を開いた。會場は小さな山寺で、鹽入太輔といふ東京から應援に來た辯士が前座をつとめて、私の番になると、日は暮れたが、燈火の用意が無いと云ふから、已むなく暗中に演説をやつた。さて立去る時に、傍聴者の一人のいふには、山路は危険である。殊に此邊は反對黨が多いから物騒

である。自分の馬に乗られるがよからうと勸めるので、其意に任かせた。道々馬夫と話を交へて見ると、其人は村會議員であることが分り、私達が新潟縣で組織した同好會に屬する人であることが知れた。そこで私も興を催し、實は白狀するが、その同好會は私が起したのである。幸ひの折だから、會の趣意を語らうと馬上で二十分間程演説を試みた。馬上演説はあとにも先にも此外に無い。馬夫はよく諒解したらしかつたが、私は演説中に、馬夫も會員であるからには同等である。殊に村會に議席を有して居る者に粗略の言葉を使つてはよくないと氣がつき、初めにお前と云つたのを、後には君と改め、段々言葉遣ひを丁寧にし、椎谷の驛に戻つて別る時には先方は菅笠をぬぎ、私は帽子を脱して互ひに對等の挨拶をした事を、時々思ひ出す。附け加へておくが、此邊の寒村で馬を所持するものは可なりの資産家であることをあとで知つた。

大隈侯が外務大臣として條約改正の衝に當られた時である。私は「新潟新聞」の主筆をやつてゐる筆に舌に此の改正を辯護したが、地方の人にこれを理解せしめるには頗る骨が折れた。あ

る夜反對派が偽書を以て私をおびき出し、路で私を要して、乗車もろ共濠へ投り込んだ。要撃者は警察の手で捕はれたが、それは新發田に聞こえた劍客であつた。私書偽造の廉で其人が罪せられた處、門弟等は激怒して、私が再び此地に來れば無事には通さぬといきまいた。そんな物騒な時に亦此地で演説をやらねばならぬことが起つた。其時警察で私を擁護したことが如何にも仰山であつた。私は演壇で開口第一に、「私は此地で甚だ意氣地のない事蹟を残した。それは腕力の弱いといふことである。併し私は之れを恥辱と思はぬ、私の誇は腕力でない」と喝破したので、要撃事件が評判になつてゐるから聴衆は盛んに喝采した。私の弱武者を白狀したことが今一回ある。それは肥塚龍氏や名古屋で實業家として聞こえた上遠野富之助氏と富山縣に遊説に出かけた折である。越後地から富山へ入るには例の親不知を通らねばならぬ。こゝを通る時に、親不知の難所をおろす新道で、上遠野氏は得意の石投げをやつて、私達を後へに墮若たらしめた。丁度其日富山縣の入口泊町とまりまちの演説會に臨んだ。此の時分は物騒な頃で、聴衆が動もすると辯士目がけて石を投げると云ふ事を耳にした。自分は瀬踏の爲めと自ら進んで第一番に演壇にあらはれ、傍聽席を見廻すと、噂のごとく石を袖にしてゐるものがチラホラ見える。

中には石を潜めた重い袖を振り廻はして威嚇の状をなすものもあつた。そこで私は先づ途中にあつた投石競争を細かに語り、此地には石投げがはやると聞くが、自分などは其道には大の弱武者で迎もお相手に成りかねる。石投げの名人は樂屋に控へてゐるから後刻見参に入れる。お相手は其人に譲るといふと、満場は大いに笑つた。石を袖にした者も此の哄笑の爲めに氣を抜かれて、終に何事もなく一行の演説が濟んだ。私の弱武者の白状は偶々氣先を制したものであつた。所謂柔よく剛を制するものであらう。

富山の各所に於ける演説會場は如何にも騷擾を極め、傍聽席で反對派が妨害を試みると味方が怒號して對抗するから、演説者は割合に樂であつたが、到底條理の井然たる演説は出來かねた。私はそれを看取り猾計を案じ、敵を攻撃するの奇警の語を工夫し、それを一發放つと敵味方が二三分騒ぎ立つ。それを傍觀しながら、更に次ぎに放つべき奇警の語を考へ、矢つぎばやに痛罵し去つたのも一快であつた。

大隈内閣が解散を行つた時、大隈伯後援會の會長に舉げられ、不得意の演説を辭しかねたこ

とが三四回あつた。京都での演説は聽衆を甘く見たから、當座の思ひつきで掃除演説といふをやつた。御即位が京都に行はれる。それに先立ち總選舉がある譯だから、私は御即位大典の行はれる京都の地を光榮あるものとして盛んに揚げ、京都人の責任として此地を清淨にせねばならぬ。若し汚穢があらば丁寧に掃除せねばならぬ。總選舉といふも實は事前の大掃除である。京都に於ては特に腐敗の醜類を掃除して政治の廓清を圖らねばならぬと論じた。此會には多くの反對者もゐなかつたが、困つたのは石川縣の金澤であつた。横山章氏對中橋徳五郎氏の對戦は選舉史上に特筆さるべき大戰で、私の交りある中橋氏を敵に回はしての選舉演説であるから、内心甚だつらかつた。中橋側の作戦は専ら人物論で横山側を壓せんとしてゐるのを見て、私は先づ人物本位で人を舉げるのは政黨政治にあるまじい事だと論じた。中橋氏は人物が偉いといふても原敬氏麾下の人たるに過ぎぬ。横山氏が如何に有力者だと云うても大隈侯麾下の人に過ぎぬ。優劣は黨首と其の政策にある。區々たる候補の人物論は抑々末で、天下は大隈に委すべきか原に委すべきか、大切の問題であると、漸く候補を離れて、大隈、原の比較に移つたから、あとは極めて樂であつた。到頭私の演説が最高調に達し大隈侯に軍配を上げた時聽衆より喝采

が起つたから、それを機會に、諸君、大隈侯を優るとなさば、其の麾下の横山君を擧げるが當然と結論した。

此の總選舉に大隈侯の令嗣信常氏が前橋から候補に立つことになつて、始めて候補者が土地の有志に面接する時に職務柄私も随伴した。某樓を會場として三十名程の有志者は席を列ねてゐた。そこへ候補者を伴うて私から紹介する時に、フト考へると此席が嘗て大隈老侯と來た折の同じ席である事に氣がつき、其時侯の述懐談があつたことを思ひ起した。侯の云はるゝのに、前橋侯は自分には再生の恩がある。幕末に危険の手が延び、將に捕はれんとして遁るゝ處なく、飛び込んだ所は江戸の前橋侯の屋敷で、そこに救はれて辛うじて關西へ遁るゝことが出來たと云はれた。私は此の事實を會衆に告げ、若しあの際に老侯が捕はれたとしたら、維新以來の老侯の勳績は全く無かつたかも知れぬ。前橋は老侯に深い縁因がある。老侯をして國家に大勳を立てしめたのは前橋であると云うても差支へなからう。今度令嗣が此地から候補に立たんとするは偶然に似て偶然でない。老侯に厚い前橋の諸君は其の令嗣にも厚い事は言ふまでもなからうとは私の紹介演説であつたが、居並ぶ人々の内には始めて此の縁因話を聞いた人もあつたら

しかつた。令嗣は豫期のごとく當選されたのである。

私は大隈侯に随伴して足利町の招待會に臨んだ事がある。侯は支那公使をも伴はれて例の宏辯雄辭を揮はれた。私は其夜自分の宿と定められた料理屋に戻り、寢巻に着換へて寛ろいでゐると、有志が迎へに來て、一杯獻じたいから階下に来れと云ふに任せ、寢巻のまゝ導かれてゆくと、そこに重立つた數十の人々が席を正してゐるので、服裝を換へなかつたことを悔いたが、既に遅かつた。席上是非にと一場の演説を頼まれたが、別に腹案もないので、フト思ひ出して「足利で有名である孔子の釋典を、足利文庫の暗い所で少數者が行はんより、宜しく之れを町祭として、堂々で行ふべし、お祭は歴史的の古風のものがよい、其祭日には皆々一同休業して東京あたりから學者を迎へて演説でもさせるがよい」と、當座の思付きを云うて責を塞いだ所、其年の暮れんとする頃足利から態々委員がやつて來て、あなたの勧め通り町會で釋典を町祭とする事に決したから、どうか演説に來てくれと云はれて、私は驚き且つ喜び、吉田東伍氏を誘うて出かけると、果して町端れから屋並に國旗が翻つてゐた。老侯の堂々たる演説より

も、私の寢巻演説が却つて效を奏したなどは不思議のことである。

結婚叢談

結婚は人間の最も大切な事で、最も目出度いこと、なつてゐる。如何にも結婚は男女の結託であり、家と家との結合であり、戀愛もあり冀望もある。それによつて形づくられた家庭が幸ひであると否とは一に繋つて此の結婚にあるのだから、一生の大典として粗略にしないのも當然である。全體男女結託して家庭を作るのは一種の藝術と見てよろしい。一人で此の藝術品を作り上げるのではなく、夫婦の共同動作に因つて作らるゝのである。其の家庭から生ずる合成事業も夫婦の間に生るゝ、兒孫も亦藝術品である。既に藝術品であるから傑作もあれば又駄作もある譯で、夫婦の結託がシツクリ行かないで乖離があると、傑作は起り得ない。常に夫婦間に風波が起つて、互ひに信頼を缺いては、家庭は形こそあれ、實は家庭が無いのである。兒孫が生れても、平和に健全に撫育の出来る筈がない。どうして傑物秀才の出づることを期し得よう

ぞ。どうして一家の繁榮を期することが出来ようぞ。家庭の凡作傑作駄作佳作は繋つて夫婦の結託合同の疎密による。愛が夫婦の間に尤も大切である所以は、愛が兩間の楔であるからである。人は個人で何事もなし得る人がある。しかし個人で事をなし得る人は必らずしも他人と力を併せて事を就し能ふとは言はれぬ。別して異性と力を併せて事を就すは、何人に於ても始めての經驗で、結婚がそれを行はしめることであるが、案外、個人獨自に相當の能力のある男女が、合同結託となると、うまく行かぬ例がある。畢竟合成事業は高級に屬するから、青壯の男女が之れを難んずるのは一概に無理とも云へないが、他の合同事業に無い愛が、これにのみあつて、其の力が即ち神の力で、無驗者をして直ちに共同動作を意外に巧みに行はしめ、人をして驚歎せしめる傑作を生ずることも敢て珍らしくない。要するに、愛は家庭の根本で、結婚と云ふも此の愛を堅固に結びつける誓約に外ならないのである。

諺に夫婦者、獨身者を氣にすると云ふが、これは結婚生活の幸福を自から感じて、他に其れを移し、それに倣はせんとするのである。兎に角結婚生活を行つて、それに依り幸福を感じるものが多く、之れを悔いるものが絶對にないとも云へぬが、それは寧ろ除外例に屬する。實に

結婚は他人の場合でも喜ばしいものである。しかし結婚披露の席に招かれて祝辭をと頼まれて、それがうまく行く場合は甚だしく、多くは平凡に墜ちて仕舞ふのが多い。或は教訓じみた事に涉つてかたくなるしく、又しかつめらしく、陽氣の場面を沈鬱ならしめるものもあれば、滑稽諷刺を巧みに弄しても遂に急所に觸れないで畢るものもある。實は結婚席上の祝辭は達辯の人と雖も難んずる所で、儀式と云ふ重い空氣や結婚當事者の階級が高い爲めなどで、抑制を受けることが難しいことを一層難くする。いづぞや雄辯社の記者が訪ひ來ての話に、婚禮席上の演説はどなたも困るとおつしやるが、何かおもしろい演説の趣向を聞かせよと請はれたことがある。私などに勿論之れに應ずるやうな趣向も何もあつたものでないが、演説の趣向は兎もあれ、結婚の本體に風の變つたことが往々あつて、それが興味を惹くことはある。恐らく誰れの經歷にもあるに相違ない。私がある雑誌に強ひて請はれて恩卒に一二を語つたことを爰に記憶から呼び起して見ると、

今は故人となつた小山作之助氏、これは洋樂界に重きをなした人で、私とは同郷の緣因がある。此人が後妻を迎へる時、私は聊か與つた。勿論間接に口を利いた位なことで、當事者がそ

れを知つてゐると思はなかつた。其結婚の際には祝宴があつたか無かつたか、それも氣に掛けずに無心に過してゐると、二三年程後に小山氏の先妻の嫡子が妻を迎へると云ふので、高田博士がわざわざ私を訪ねて來られて、小山氏の再婚の時には君を煩はしたが、あの際は再婚であるために祝宴を略したが、小山氏は平生それを氣にしてゐて、今度息子の結婚には是非君から祝辭を陳べてもらひたい。これは氏の熱心なる冀望だと云はれたので、辭退もしかねて之れを諾したことがあるが、此の事實それ自身が面白いので、いろいろ趣向を凝らすよりも、此の事實を陳べることがよい趣向であつた。

亡友岡山兼吉氏が辯護士界に打つて出て、始めて辯護事務所を構へた處は日本橋の西河岸で、今某旅館のある處だが、氏が新婦を迎へて披露した其席は事務所の二階で、私が友人總代の格で祝辭を陳べた。當時書生擧句の自分が勝手な所感を陳べたのだから、固より體をなしてゐなかつたに相違ない。然るに岡山氏が歿してから、十數年を経て、嫡男が日本橋の魚河岸の豪商の娘と結婚する時に、自分も慶んで披露の宴に臨んだが、此時も私が祝辭を陳べること、なつた。私は此時位感慨に堪へなかつたことは無かつた。私の座席の眞向うに母堂が坐して居られ

た。西河岸に於て十數年前私が祝辭を陳べた新婦は即ち此の婦人であることを思ひ、老友既に去つて再び其の繼嗣の結婚を祝するのは如何にも奇縁であると感じて、私の祝辭は飾らざる即時の所感で、いろ／＼の縁因話をした中に、新婦が魚河岸の富豪から來られたと云ふのも奇縁であると言つた。故人岡山氏は、青年時代房州のある家に養子にやられて、手づから網を操縦して漁業に與かつたこともあるので漁業に因縁がある。そして君が發祥の地は日本橋區で、其の事務所と新婦の家は呼べば應へるほどの距離にある。返子に於ける兩家の別莊も頗る近いと聞くが、斯る家庭の結託は誠に自然で、恐らく故人も地下で微笑を浮べて喜んで居るであらうと言つたことを想ひ出すが、この場合なども事實それ自身が興味があるので、勿論私の祝辭などは言ふに足らぬ。

私の政友に富山縣の漆間民夫といふがあつた。其の長子が早大に學んで、卒業後結婚の時には、私もその披露の宴に招かれた。實際私をして何よりも興味を感じしめたのは、新郎がある同窓のために奇抜な戀の媒妁をやつた經歷であつた。近來よくある例だが、學校時代に男女が戀に落ちる。それを双方の親達が許さないので難澁をする。それを救ふのは多くの場合友人で

ある。漆間も、ある暑中休暇を利用して友人の戀人の家をはる／＼尋ねた。何縣であつたか忘れたが、東京から百里もある東北のある田舎で、其家を訪うて見ると如何にも堂々なる舊家で、其の娘が歸省してゐたので其紹介で款對を受けたが、さて本問題に入ると、物堅い老夫婦は承知しないので、已むなく其の家を去つて、村はづれに來ると、一軒の茶屋があつた。そこに四五の車夫が客待ちをしてゐる。そこで漆間は一計を案じ、其の茶屋に腰を掛けて酒肴を命じ、車夫共に酒を振舞つて、酔心地で一場の演説をやつた。それは、此村の第一の富豪の娘が東京に遊學してゐる間に、某と云ふ好男子とラヴに落ち、追々熱烈になりつゝあることは自分がよく承知の事實だが、その女の兩親が結婚を許すのは尤も賢い道だなどと、獨語のやうな宣傳をやると、狭い土地だから、バット其の噂が村内に行き渡つたので、娘の家でも分別して、遂に婚嫁を諾したと云ふがあら筋で、漆間の機略は圖に當つて效を奏したのである。此の機略を弄した其人が新郎で結婚をする席だから、私も妙に面白く感じ、新郎に對し、君は通人だから結婚後の心得などは特に言ふにも及ぶまいと云うて笑つたことを思ひ出す。

婚禮の席の祝辭は多く新郎新婦の行く末に關して前途を祝福するに過ぎぬが、多くの親族な

どが集まる場合であるから、他家から行く嫁や養子の爲めに親族に苦言を呈し、他から行くものを大切にせねばならぬと注意することが肝腎であるのに、大抵は氣が付いてもそれを云はぬやうである。私などは、養子が他家へ行く時、結婚の席に於て、自分が男子であるだけに、それを言ひたくなる。諺に小糠三合有てば養子になるなとさへ云うて、養子のつらさが告白されてゐる。畢竟養子を虐待する風があるからの事だ。上方筋では養子を重んずる風があつて、家は兒孫に相續させ、事業は然るべき養子を納れて繼がせる習慣がある。畢竟事業の經營には相當の人物を要するからで、よい習慣である。一兩年前紀州に游んだ時、多くの校友が新和歌の浦に迎へてくれたが、其席で感じたことは、その地の有力者は大抵養子で、現に養子俱樂部が設けてあると聞いた。成るほど、紀州は蜜柑の産地で、蜜柑の培養には接木が最も肝腎であるとも云ふから、養子を迎へるこの盛んであるのも無理がないと思つたが、私は其の席に、養子を迎へるのは人材を迎へるものであることを説き、他人の生んだ將來ある子弟の内から、特に粹を抜いて掣とするのであるから、血統に餘義なくされる相續人とは違つて秀俊のものが多い筈である。もらひ受けた其家には家寶として珍とせねばならぬと云うて、世上に時めく名流

に養子が多く、それが家聲を揚げてゐることなどを擧げたことがあるが、これも畢竟養子を輕蔑したり虐待したりする地方のあるのに憤慨して、養子俱樂部の會員に同情を寄せたのであつた。丁度其後自分の會社の相當の地位のものが^{こと}の名人の家に養子に望まれ、それを諾しての結婚披露の席上、私が祝辭を陳べる役目であつたので、私は紀州で見聞した事實を擧げ、持論の養子人材論を説いて大いに氣を上げたことがある。かゝる祝辭は變體のもので、養子の方に偏して、養子を粗略にしてはならぬと、養家や其の親族に訓戒したやうなもので、稍々失禮の感なきを得ないけれども、養子のためには滿幅の同情を傾けねばならぬ程の宿弊があるからの事だ。

昔の嫁さがし

婚嫁を定める前提として嫁を^{よめ}捜すには、昔しから種々の方法がある。親類同士、友人同士が、懇意づくで互ひに遣つたり貰つたりするのは至極簡單である。男女が慣れ合つて赤繩の縁を結

ぶのも亦簡單であるが、斯く簡單に行かぬ場合が甚だ多い。地方杯では大抵豪家の内情も知れてゐて、どこに幾人の娘がある位の事は略々知れて居るけれども、其の血統や年齢や性質や容色などは、實地觸れて見なければ分らぬ。それを調べる事が探偵のやうなもので、要領を得る迄には多くの月日を要し、腰米三年と云ふ言葉さへあつた位だ。即ち腰に米を帯びて偵察三年に及ぶことが珍らしくなかつたのである。大抵は豪家に入出入する吳服商、鼈甲其他の髪具を賣る小間物屋などに頼んで、偵察せしめることが通例であつた。此等の商人は平生其家に入出入するから、そこに宿泊することも許されるし、商賣柄、婦女子に接近も出来るから、之れに依頼することが最も好い方便であつた。此等商人は男女共にあつたが、女子の方が寧ろ調法であつたことは云ふまでもない。或は斯る商人に依頼する手蔓がなく、番頭、店員などが主家の爲め、吳服商、小間物商に扮して、豪家を訪ふこともあつたが、此の連中は往々假裝であることが看破され、馬脚を露はした滑稽もある。

以上の商人の外に地方の豪家に入出入を許されてゐるものは穀師である。大地主は年々米を賣却する爲めに勢ひ之れを相手にせねばならぬが、これは婦女子に近づく機会がないから、十分の偵察が届かぬ。併し諸方の豪家の大略を知ることが出来るから、之れを偵察の具に供することも少なくなかつた。或る穀師は、秘かに各豪家の系圖や戸籍を調べて、頗る委しかつたと云はれてゐる。今は戸籍の謄本を得ることは容易であるけれども、それを得るの困難な時代には斯うしたこともあつた。

今は富豪の少女も小學に通ふから、外出の機会も多いが、十二三歳を過ぎると、漫りに外出を許さない家もある。別して通學などしなかつた時代の女子は全く箱入娘で、その容貌品質を探ることは容易の業でなかつた。大抵、偵察者は、其の郷に入つて、旅宿に就て探り、或は出入商人を訪うて聴くのが普通の偵察方であるが、箱入娘時代には、旅舎や出入商人などでは分りかねたので、實直の番頭などが、主家の大事であるというて自から偵察の衝に當つたこともある。私の妻の家には九人の姉妹があつたので、諸方からねらはれたものだ。家の丁度前に不景氣な宿屋があつて、その前樓に間斷なく泊り客がゐて、兎もすると一二月の長逗留をすることがあつたと云ふが、これなどは無論娘達の外出を待つ爲め熱心に見張つたのである。或る老婦の談にコンな一例がある。或る家の女兒に付纏つた偵察者は、偶々其の女兒が途上

で躓いて倒れたのを幸ひに、それを扶け起している／＼と慰めながら、衣類などの泥や塵などを拂つてやる序に、終に肌膚の一端をも見るに至つたと云ふが、なか／＼偵察の骨の折れたところが此例によつても察せらるゝ。此の女兒は案外肌膚が黒かつたのを玉に疵として報告したので貰ひ方では見合はせたとか。當時コンな偵察業をつとめて家計の助にしたものもあつたらしい。随分國中廣い區域に亘つて詮索したものだ。愈々偵察を盡して適當と認めると、縁談の外交に移るので、くれるか、否か、大體氣を引いて見るのにも出入の商人などを利用したことは勿論あつた譯だ。昔しの縁談は當事者たる男女が殆んど無關係で、筋目のよしあし、玉のよしあし、氣質のよしあしなどで決した譯だから、偵察をあやまると、兩家不幸の基となるので、偵察に任ずるものは媒妁人よりも大任を擔つたものだ。その經まるまでの徑路には滑稽もあり、失敗もあり、裏面を探ると、頗る可笑味があつたのである。

民衆藝術

日本には久しい間藝術が十分理解されず、其の範圍がひどく局限され、當然藝術と見らるべきものでも、卑俗の社會に行はるゝものは、藝術と見做さなかつた時代がある。例へば浮世繪の如きものは、作者の名まで署してあり、それが立派な藝術であるのに、俗畫として排斥され、藝術を以て目することが僭上であるかに思はれたことがある。浮世繪の版畫の如きは、彫師と摺師の手腕を藉りて原作以上發揮するものであるから、彫師と摺師の技藝も藝術に相違ないが、それ等は職人の業として藝術とは考へられなかつた。つまり職人といふ者が一概に賤しめられて、其の作が如何によくとも藝術品とされなかつた趣がある。四民の懸隔が甚だしく、貴族のみ重んぜられて、民衆が認められなかつた結果として、民衆の爲めに作られ、それに喜ばれたものは、どんな藝術でも一併に排斥され、一向に注意を惹かなかつたのも無理はない。

近來民衆が頭を擡げた結果として、漸く民衆藝術もそろ／＼人の注意を惹くやうになつて來た。全體民衆藝術は専ら實用的に出來た物の内に存するのである。ウブで、素朴で、天真爛漫で、多くのものは作者が誰れかも分らぬ、名もない職人の手に作られて、所謂無落款ものである。此等の者は一向に衒ひ氣がない。或る人の言うた、童心で作られたものが多いのである。

が、そこに却つて尊敬するに足る藝術味が存してゐるのだ。兎角人間は作者の落款に支配される弊がある。作家も、名を顯はすとすると、心持が變つて街ふ氣が起り、童心を失うて成心に敗るゝのが常で、落款といふものは藝術をスポイルする。作者の誰れたるを問はず、よいものはよいのである。作家の名を掩うて藝術の長短を判ずることが、眞に藝術を月旦する所以で、民衆藝術には、これに庶幾いものがある。職人と云へば賤しむべき名のやうであるが、實は藝術家で、其の作品の内には名ある大家を壓倒するものも少なくないのである。

無落款藝術が如何に廣汎に行はれ、そして高い藝術味がそれに存してゐるかの一端を云へば、茶人の愛する支那の古い器物の如きは、殆んど全く作者の知れないものである。日本陶器にしても、古伊賀の花瓶が何千圓の價を以て購はれ、且つ珍重さるゝが、これなども作者の知れないものである。高麗かうらいなどにしても、茶人の尊重するものが甚だ多いが、皆作家の知れないものだ。作家の誰れ彼れに拘はらず其の器物に愛すべき藝術味があるから愛するので、茶人は流石に高い鑑識があると謂ふべきだ。無落款主義が藝術批評に大切であることを爰に繰り返しておく。

近來民衆藝術を基本として陶器を研究する人が輩出し、これまで人に顧みられなかつたものを取り立て、其の藝術味の發揚に力める事が行はれ出した。例へば昔し用られた行燈あんどんの油の受け皿の如き、極めて兪末の陶器で、それに繪のあるものが多いが、もとくゝ意を凝らしたものでないが、そんなものにも棄て難い藝術味があるとして今は取り上げられてゐる。昔し婦人が理髮用にした油壺は粗雑の器だが、矢張り其中に藝術味が存し、激賞に値するものがある。其他臺所用幾多雜器の内に、一種の鑑賞眼で穿鑿すると、容易ならぬ藝術味のあるものが發見され、較々時代を経たものなどには特別それが多く、臺所から賣庫に移さるゝやうなものもある。民衆藝術の鑑賞は、漸く此の隠れたる、動もすれば蒙昧の下婢に破壊し去らるべき運命より救ひ出すことになつたのは仕合せと云はざるを得ぬ。

江戸時代に練り上げた民衆藝術は頗る多般で、その目を擧げるのみでも容易でない。勿論世の變遷で現に過去のものとなつたものもある。又機械萬能の世の中では存在しかねるものもある。今一二を云ふと、既に過去に屬したものの、内に、鍛工の藝術がある。警手が武器とした十手じゆ、夜警がつき鳴らした金棒、此等は既に無用に歸したが、當時は様々の好みがあつて、金棒

などは、衝き鳴らすと、凜たる凄愴の聲がどこまでも響き渡るものでなければならぬとあつて、それが爲めに名工も出た。又十手も、刀に代はるほどのものだから、よく鍛へられたものを要する外に、製作にも種々の注文があつて、士分の知らない一種の鍛冶藝術が起つた。又鳶職しんくの用ゐる鳶口も同様であつたらう。昔しのキホヒ(市虎)が男女共にいれずみ文身をする習慣があつた頃には、その道に名人もあつて、名畫を彫るには肌膚が雪白で肉合が豊満で無ければならぬと、さながら絹素を選ぶが如く、適意の肌を得れば有頂天じちやうてんになつて力作したもので、名流畫家が企て及ばぬ畫を針頭で描き出した。其の名人の甲乙内の名は今も斯界に残つてゐるが、此の習慣も今は廢つた。左官が、幾十坪の藏の壁を、纖毫も狂ひのないやうに眞平らに且つ照り輝くやうに塗るのも一種の藝術と見るべきだが、家の定紋を巧妙に塗り出すことや、春畫を扉に描き出すことが防盜に必要なとの迷信から、こんな事も左官の技能に待つたもので、左官にも名人がゐるた。これも追々洋風コンクリート細工に變化して驅逐されつゝあるから、終には滅び行くであらう。

寺や宮や塔などの建築で保護建造物になつてゐるものは少なからずあるが、それは名も知れない大工の作で、今日の建築家を驚殺するほどのものがある。建築に附屬する彫刻などでも驚歎に値するものがあるが、佳作は抵ね飛驒の甚五郎に歸さるゝけれども、實は無名の大工の作で、實に侮り難い手腕を有つてゐる。然るに其職人である故を以てその藝術が閑却され、今となつて始めて非を覺るやうな仕末である。兎角落款に重きを置き過ぎるのが病で、其の病は此の方面にも少からず累をなしてゐる。

小兒相手の藝術は殊に發達した。玩具、雛人形、五月人形、此等が非常の精巧を極めた時代がある。殊に玩具は各地に無名の工人が因襲的に其の特徴あるものを産して、古雅なるものが少くない。近年セルロイド細工を土に代へたりして折角の藝術を葬るのは惜しいことだが、東京には久保田佐四郎など云ふ名工がゐる、玩具趣味家は此の工人を擁して玩具趣味を鼓吹してゐるので、僅に残喘を繋いでゐる。廉價の藝術で稱贊に値するものは子供の目前に飴や粉しんてで咄嗟に人物や鳥獸や其他さまざまの物を作る業は如何にも輕妙で、江戸名物と云はれたが、これも恐らく追々跡を絶つことであらう。羽子板を裝飾する押繪も浮世繪にからむ手藝で、此の方面にもそれ〴〵無名の巧者があるから、これも確かに一種の藝術に相違ない。

大道藝と云ふ中に種々のものがある。聲音に屬するものには軍談、落語、浪花節、種々の俗曲、舞踊もあれば曲藝もある。此等のすべてが大衆を喜ばせるまでに洗鍊され、何れも藝術の範圍に入つてゐる。此の二類は多く注意されてゐるから特に絮説を要すまい。

藝術と呼ぶのを過褒のごとく考へるいろいろの物のある中に履物や桶職や染物などがある。江戸の人には履物に道樂があつて、其の意匠や其の材料に注文があり、通客は某店の製作でなければ一切用ゐぬとまでやかましく云ふので、今でも東京は三都の中で頭角を擡げ、精作となると、市井の藝術と呼んで苦しくないものがある。手拭なども、地を選び文様や染料を吟味し、今猶頑然舊格を守つて名物とされてゐる所がある。桶などでも、格好から籬から木組から、凡流と異つて堅牢と趣味を兼ねて名物となつてゐるものがある。此等は共に市井の藝術と呼び得るものであるが、さていつまでこれが維持さるゝであらうか。木工、竹工、陶工などで市井藝術を擅にしてゐるものは、何と云つても京都に多いことは言ふまでもない。

以上の外に尙いろいろある。繪看版から流を引いてゐるポスター、ペンキ應用の看版、女の頭髮や宴會席、葬儀などに用ゐる造花もある。此等は今後も生命があるであらう。要するに、市井藝術と、やつと認められた時に、多くの藝術は既に過去のものとなりつゝ、あるは惜しむべきである。機械萬能の世の中では、藝術の成り立つことは困難である。日本の如き手工に長じてゐる國民は、其の天稟の技能を機械の壓力で麻痺させぬやう、時代に應じて發揮するが大切である。國民に藝術の理解があれば、今後とても民衆藝術は假令ひ品は代つても興るであらう。そしてそれが世界のあらゆる民衆の藝術に優るであらう。

人形の話

人形を作ることも藝術の一つで、玩具とは云へ随分精巧の域に達したものだ。勿論上方が製作の中心で、伏見、嵯峨、賀茂など、其の製産の地名で呼んでゐるものが有名なものに多い。九州の大名が參勤交替に江戸へ上下する途次、京都の公家に土産を贈ると、其の返禮に人形をやる。それを大名が家苞にする。随つておみやげ人形の稱がある。公家より定めしきまゝの注文をして特に精巧のものを作らせたであらうから、人形師も其頃は繁昌したに相違ない。自

分が田舎にゐた頃は、上方土産と云へば、人形が重なるものであつた。特別に注文して自分の愛兒愛孫の面貌に似せて作らせるやうなこともあつた。文化、文政、天保頃は製作が殊に進んで、人形の衣裳、持物、刀剣などの類を、四季其折々に取り換へ得るやうな趣向となつてゐた。私の家にあつたのは先考の小兒の時の面貌に似せたものだと言つたが、實に精巧のもので、襦袢でも下着でも羽織でも袴でも帯でも、普通人間の用ゐるものと少しも異なる所がなく、唯小形であるだけが異なるまで、帶地でも袴地でも特に人形用に織つたもので、巾着でも印籠でも紙入でも足袋でも刀剣でも人形相應の大きさに作つて如何にも整潔のものであつた。昔し男色の流行した時分には、己が愛する少年に似た人形を作らせ、之れを座右に置いて、日夕親んだものもあり、婦人がその憧憬する俳優の似顔の人形を大切に持つたこともあるので、寫實の人形は勢ひ發達せざるを得なかつた。面貌のみを寫實に作るばかりで無く、衣裳も時の流行に従ひ、さながら其の時代そつくりのものを着せた。丁度今日呉服屋のショウ・ウインドウに等身大の人形に流行の衣裳をつけると一般で、衣裳を主とする所から衣裳人形と云はれてゐるものが可なり早くからある。團子阪に菊人形が盛んであつた頃は、菊を衣裳に應用したこともあ

り、又流行の衣裳を着けさせたこともある。淺草の花屋敷にも盛んに人形を見世物としたが、皆等身大で衣裳人形の部類に屬するが、これなどは浮世繪同様風俗を徴するの材料であるけれども、保存が甚だ難い。

衣裳人形と反對のものは裸人形で、重に小兒のフックリした形を摸したもので、顔の場面が莫迦に大きく、目鼻口が如何にも小さく、丈がひどく低く、足が頗る肥えて、不釣合ひの甚しいものであるが、可愛味は却つてそこにあるのも一奇だ。大體裸體だが、中には腹掛をかけたり、頭巾を冠つたり、袖無しを着たりしたものもある。これは風俗の材料とするには足らぬが、多くの人に喜ばるゝものである。嵯峨人形に少年が鷹を手にしてゐるのが多くある。嵯峨野は狩り場であり、且つ武家が狩獵を事としたから、それに當てこんだものであらう。鷹を手にしてゐる少年は皆卑しからぬ相貌であるのは、武家の若殿に擬したものであらう。コンなものも武家の土産用に作られたものかも知れぬ。嵯峨人形には布袋ほていや恵比壽、大黒、壽老などの作が多い。佛師が片手間に作つたことがあつて、それがもとであるとの説もあるが、此の類には床飾りの置物となるものもあるけれども、餘りに眞面目に過ぎる嫌ひがないでもない。賀茂人

形の一特徴とも云ふべきは、彩色の代りに裂地きずぢを貼り付けるにある。木彫りでおよその形を作つて、裂地をきめこむといふ所から、きめこみ人形と呼ばれてゐる。随分精巧のものが多くけれども、自分は餘り之れを好まない。又人形は概して個々の者が多いが、段々に發達して組ぐみを爲すものも出來た。例へば大名行列、赤穂義士打入りといふやうな、數十數百を一組とするのであるが、最も早く組人形の工夫されたのは雛人形であらう。恐らく重三の節句に雛を飾る習慣がすべての人形製作の基礎ともなり、進展發達の鼓吹ともなつたのであらう。今日は餘り大きな雛が流行しないが、私の幼少時代に家に飾つた雛は各個尺一二寸位あつて、一組を陳列するに十幾疊の座敷が一杯になつたことを思ひ出す。雛の種類はその意匠により又地方々々の特徴により種々の名がつけられ、其種類が幾百にも及んでゐる。或る時代には盛を極め、随つて名工も多く出た。五月人形も亦同様である。随分雛には百端の意匠があるが、物を雛に見立てるものもある。如斯きは嚴格に人形とも云ひ難いもので、擬人形と云ふ方が恰當なまじいかも知れぬ。例へば先頃三越呉服店に見た臺所雛といふのがそれである、其の意匠は甚だ簡單であるが、思ひつきに妙がある。それは飯じと貝杓子を内裡様に見立て、飯じには男性の顔を描き、貝

杓子には女性の顔を描き、それに淡彩を施して、二つ並べて鍋蓋の平面に打ちつけてあるから、吊せば掛額となるやうになつてゐる。臺所道具を僅かに三器用ゐる、二種の杓子の内貝杓子を女性と見立てたなどは甚だ意味がある。又鍋蓋を額の地としたのもよい思ひつきで、無名人の作品ながらおもしろいと思つた。

又人間が人形の真似をする圖外れの例は、近來商店のプロバガンダに美貌の女子を用ゐることが行はれ出した。其の女子の前には多くの人が群がつて市をなしてゐる。私の見たのは五人程あるが、洋装したのも水泳服を着けてゐたのもあつた。商品の説明をなすものもあり、胸邊に廣告の看板を吊して無言でゐるものもある。此の新らしいプロバガンダの具をマネキンと云うてゐるので、招き猫を聯想せしめるが、マネキンは蓋し招金、金を招くの意であらう。實は佛語のマヌカンを訛つたもので、人形を意味するものだが、解語の人形を仕ふ所に活氣がある。

蒐集家七則

私は二三の物を蒐集するに十數年没頭したことはあるが、其の結果は貧弱でお話する程のことではない。但し初心の蒐集家に私の經驗した事の一部を申すと、蒐集は短兵急が禁物であるやうに思ふ。少しく氣長にやらぬと、物の精粗の取捨選擇を誤る。蒐集家の常として一舉に目的を達したいと冀ふ情に驅られるが、息卒の蒐集にはよい物が獲られない。どうしても自重が必要である。蒐集家の志は初めはさまで大きくないが、段々に大きくなる。初めは謙遜の態度で、物の數に就て云へば百位の蒐集を目的としても、それが五百となり千となり、初めは有り觸れたものまでも珍とあるが、段々進むと、希覯のもので無ければ満足が出来ないことになり、茲に獲得に困難が生じて来る。その困難と闘ふのも蒐集家の興味とする所であるが、多くの場合無理が生ずる。蒐集の爲めに百里の道を遠しとせず探討を敢てするが如きはまだしもだが、往々危険を冒すやうなことになる。虎穴に入らざれば虎兒を獲られないけれども、實は自重を

要する。他人の所有に屬するものを欲しく思つても、それが得られない時に術計を運らすのも、蒐集家には兎もするとあることだ。他人の愛器を承諾なしで撫して拓本を作るなどは罪とするに足りないやうな事だが、人格に害がないとは申されない。希覯の物を得るに無暗に巨資を散ずるなども考へものである。蒐集の慾を急に満足したいと焦せれば焦せるほど、種々の無理が生じて、躓くことが無いとは云へない。蒐集慾はなかく強烈のもので、容易に抑制出来ぬものだから、蹉跌を避けるには自重を要する。足ることを知れとは昔からの教訓であるけれども、蒐集家には此の教訓を教へかねるほど足ることを知らないのが常であつて、之れを強ひる力は、只其の人の境遇と資力の制限あるのみだ。

蒐集は多くの場合趣味が伴ふけれども、全く趣味を没却しての蒐集もある。併し私は趣味の伴はない蒐集を問題外としたい。さて趣味の問題とした所で、蒐集は百端で、其人の人格、知識、鑑賞、資力等により、物の種類や品位が定まるものだから一概に云はれんが、曾て蒐集の七則を案じたことがある。適切ではないが、試みに左に掲げて初心の蒐集家の参考に供する。

一、放漫の蒐集を不可とする。必らずしもシステムを立てるとき學術的の蒐集を主張する

ではないが、氣任せに何の類でも無差別に蒐集することは決して賢い方法でない。或る種類に偏しての蒐集は、其物柄の如何に拘らず、相當に集めて見れば、興味の外に意味も生じて來るが、散漫の集め方は唯難然たるのみで、往々盲目的蒐集の非難を受け、蒐集家の愚を表示することとなる。

二、蒐集は人それ／＼趣味性の趨く所に従ふ譯で、自由隨意とは申しながら、餘りに有り觸れたものを蒐集の目的とするは面白くない。勿論有り觸れたものにも趣味が無いとは云はないが、少しく手を下せば、いくらでも容易に寄せ集め得るものは、集めるかひが無いやうなものだ。集めるに多少困難が無くては興味も無い、随つて稍々得易からざるものを蒐集の目的としたい。

三、さればと云うて餘りに稀なもの、みを蒐集するのも、興味を満足させる所以でない。元來幾許かの數を集めるといふことに興があるのであるが、如何に努力しても、年に一つも手に入らぬやうなものを心掛けるのは、餘りに寂寞に過ぎて興がない。

四、莫大の資金を要する物の蒐集は大富豪の爲すことで、極めて少數の範圍には行はれもす

るが、普通の蒐集家に於ては前項希有の物を望むと同じやうに、困難に逢着して寧ろ苦惱を感じ、興味を失ふこととなる。元來趣味は必らずしも價の高下に關するものでないから、蒐集の範圍は或る程度まで廣くなければならぬ。

五、嵩まる物の蒐集も限られた範圍にのみ行はれ、廣く行はるゝものでない。かくの如きものを蒐集するには、先づ以て置場に窮する。大なる倉庫や廣い空地を有するものではないれば、此の蒐集は減多に企て難い。例へば多くの石燈籠や庭石などを寄せ集めたり、古社寺の木材、由緒ある建造物のごとき、歴史的記念物などになると、普通は手出しが出来かねる。これも矢張り財力に依つて制限を受けるもので、普通蒐集家の目的物とするには不適當である。

六、醜猥のものを蒐集する趣味家は可なりにあるものだが、此種のものはいくら興味があつても風紀に障り、公然人に示し難い。云はゞ、一人よがりひとよがりの物である。一人よがりでも己れの趣味に投ずればよいと云へばそれまで、あるが、此の種のもものは假令たとへひ或る研究の資料であるとジャスチファイしても、人格を傷ふ虞れもあるから、此の蒐集は勧めかね

る。

七、敢て醜猥と云ふでもないが、人受けのよからぬものを蒐集することは指である。例へば古足袋を何千足も集めてゐる人が現實あると聞いた。此等は風俗研究の資料になるかも知れんが、人受けのよい蒐集とは思はれない。尙これにも限らず蕪穢のものを集めるのは、何れかと云へば損のやり方で、其人に假令ひ趣味があつても人の共鳴を博しない。蒐集家の亡くなつた後を考へると、子孫は其仕末に困り、全く先人の苦心を水泡に歸し、屑屋に葬るの外はない。

以上の外にも尙擧ぐべき事があるかも知れんが、要するに、永久性の無いものや、何人も共鳴しない独自の趣味に限るやうなものや、近隣をいやがらせる危険性のもの（例へば爆發物）などを蒐集することは考慮を要する。殊に盲目的蒐集は趣味の問題とはなし難い。

黒部の谿谷をたづねて

近年電力會社の爲めに開けた、富山縣の黒部の谿谷に紅葉狩に招かれ、一日の清遊を試みたのは昨年の秋であつた。此の黒部は昔しは餘り名も聞こえない僻地であつたのが、今は電力經營の爲め立派な部落も出來て、追々殷賑の所となりつゝある。探勝當時書いた紀行もあるが、管々しいから、それは略すとして爰には唯二三の所感を録する。

凡そ山水を賞翫するの好時節は、新緑か紅葉の時となつてゐるが、實は新緑も紅葉も山水を輕重するに足らぬ。新緑や紅葉は山水に美を添へるに相違ないが、それ等を藉りずに賞玩に値するもので無ければ奇勝と云ふことが出來ない。此の見地より黒部を評すると、少くとも北陸第一として推奨することを躊躇しない。甲州の御嶽、豊後の新耶馬溪などは山勢の雄偉な點に於て黒部には譲らざるを得ぬ。黒部は立山たちやまの脈を曳き屹立の山勢が多く、高さは二千尺乃至二千五百尺に及んでゐる。山骨の露はれた所は割合に少ないが、其の露はれた所は最も崇高の感じがある。妙義、耶馬のやうな怪巖奇石は乏しいが、雄大の氣は全峽に溢れてゐる。釣鐘山と名くるもの、如きは形貌鐘のごとき巨然たる大塊であるが、其の高さ二千尺あつて、全山が大理石であることを思ふと、造化は此の區域に小細工を廢し特別の大趣向を凝らしてゐるかに思は

る。今は此の山下に墜道が出来て、自在に通行が出来る。尙又山嶽の逼つて、千尺の斷崖相對する處は山水中にあらねばならぬ要件であるが、黒部に於て最も雄大なるものがある。即ち今鐵橋が空に懸つてゐる所、そして一方に水路橋の高く架してある所がそれで、鐵橋を通過しながら下瞰すると、粟然毛髪を豎たしめる。想ふ、此の橋のまだ架されなかつた時、如何にして一崖より他の一崖に到つたであらうか。中間の激湍を徒渉するにしても、彼れが如き絶壁を如何にして攀ち登つたであらうか。恐らく一縷の藤蔓を便りにする外はなかつたであらうが、全く生命を賭しての業であつたに相違ない。かやうなことを思ふと、吾が邦人がアルペンの危峰を征服したと云うても不思議はない。邦人には素質が備はつてゐると言ひたくなる。百貫山といふが二千五百尺の直立した山で、飛行機を射落す練習には斯る直立の山を要するのだが、かほどのものは他に無いと云はれて、此の山がいつも練習に役立つと聞いた。黒部の部落から約七里ばかり、トラックで遊覽の出来るやうになつてゐるが、宇奈月より尙八九里行くと、猿飛と云ふ奇勝は全峽の誇とする所で、山の風致と谿谷の幽邃と相待ち、湍激し淵躍るの勝は人の魂魄を震はしめる。私はそこまでは往かなかつたが、併し凡その事は想像に難くない。最早

や遠からぬ内に猿飛までトラックが通することになるであらう。兎に角、十五六里にも渉る規模の溪峽で、長い繪卷を展べたごとくに奇勝が連つて、人をして應接に暇あらざらしめるは、實に天下の偉觀と云はざるを得ぬ。たゞ水電事業の爲め溪水が或る地點に堰き留められて水量が乏しく、瀧などは幾んど落下してゐないのは、此の谿谷の瑕瑾である。そして紅葉は少しく氣候が早く、満山紅一色の景は無かつたが、紅瘦せ縁肥えて、友禪染に喩へれば、年増の柄にふさはしい趣があつて、却つて風景の俗化を免かれてゐるやうに思はれた。

私は此の大景物を觀賞しつゝ、利用厚生が、風景美を人間に紹介するに、如何に大切であるかを今更ながら感ぜざるを得なかつた。如何に山河の好風景があつても、神機坤秘が全く鎖されて人間の眼に觸れぬとあつては、風流も何もあつたものでない。絶好の風景が、人の風流趣味を満足せしめるため、天恵で眼前に展開されるものと思ふなどは大なる間違で、利用厚生を爲め交通を開くより生ずる副産物に外ならないのだ。勿論、交通と云うても、一概に旅客の往來を便にするのみでなく、深山に埋没されてゐる材木や石炭や、いろ／＼の鑛物を採集し、それを運搬する爲めに交通が開けるのである。水力電氣も西洋で白炭の名のあるごとくに、之れを

作り之れを運ぶ爲めに交通を要するのである。斯様の事から道が開けて、自然旅客の往來に便するのであつて、風流氣があつて、あたら奇景を埋没に付し去るを惜んで開發する譯ではない。(但し多少の除外はあるけれども)日本は、風景美は實に於ても量に於ても世界に冠たりと云はれ、まだ隠れてゐる奇勝がどれほどあるかも知れぬ。併し、その風景美をあらはす爲めに道を開く事は幾んど不可能である。概して山水の美なる處は嶮岨な處で、之れを開くには莫大の資を要する。設令ひ幾百千萬幾億の巨資を投じても収益があればこそ、五十露盤そろばんづくで開發が出来るのであるから、何と云うても風景は副産物に過ぎない。

右の次第であるから、事業の性質に依つては風景は全く事業に殉し、メチャクに蹂躪しんじすることがある。兎角、文明と自然美は兩立が六かしい。大體の趨勢を云ふと、文明は時々刻々自然美を破壊しつゝあるのだ。これは我が日本にも目前に見る事實であるが、西洋の如く文明が高度に進んでゐる所では、自然美の破壊は尤も甚しく、日本人の喜ぶ様な自然の風景は、都市近く幾んど見ることが出来ない位だ。然るにそれを難ずる聲が聞こえないのは、外國は文化の烟に捲かれて、日本の如き風流論は全然ないのかと云ふと、強ちさうでもなく、詩人などは

殺風景を厭うて歎息してゐる。歴史家で有名なフルードやラスキンなどは、自然美の保存に就ては頗る熱心であつた。

エマーソンは文化と自然美に就て一種の調節論を唱へてゐる。曰く、風流と云ふも實は一種の習慣である。明媚の山水を中斷して、鐵道が蜿蜒、百足の如く走るのを見て無風流と考へるのは、畢竟、眼が慣れないからである。追々眼がそれに慣れて來ると、鐵道も亦美觀となるのだと。成るほど、日本などでも寺院の五重の塔などは、今こそ自然美を助くるものとなつてゐるが、最初此塔が印度から傳來して建つた時は随分目障りで、さながら今日の鐵道を見るが如くであつたのが、年を歴て眼に熟し、却つて美觀となつたことを思ふと、エマーソンの説も一應尤ものやうに思はるゝ。

しかし美は、實用を離れたもので、さうして理想を追ふもので無ければならんとの説も考へて見なければならぬ。樹木なども、實用を離るゝほど其美を増して來る。檜や杉は良材として珍重さるゝものであるけれども、くねり曲つた松の樹に其の美を譲らねばならぬ。くねり曲つた松は實用から遠ざかつてゐる。又すべて奥床しい景色が美感を與へるのも、畢竟理想を追

ふからである。斯様に考へると、實用本位の鐵道を美感の要素とすることは疑問である。五重の塔は鐵道とは異つて、實用のものでないことも一考を要する。

丁度此稿を筆して居る時に、新聞紙は報じて云ふのに、黒部峽谷に自然美保護論が起り、營林局では、水力電氣會社が追々二期三期の工事を進めるに於ては、世界的名勝が全く亡びて仕舞ふと云うてゐるが、其の理由として説く所を聞くに、

水電工事の必然の結果として、涼々たる原始以來の溪谷の流れが、次第に赤褐の川床を見せ
て乾上り、トンネルを穿つ結果として、土砂が各所に流れ出て、瀨を埋め崖を削り、自然の
景觀を害することが甚だしい。ことに同工事第三期計畫となつてゐる十字峽、及び第四期計
畫の平の小屋附近までは、豪宕幽邃な大黒部の眞面目を保つてゐる地帯なので、このまゝ、工
事の進捗を手を拱いて看過すれば、世界的名勝をムザ／＼見殺しにするものだとの意見で、
工事に對し制限を加へて、風景を保護する必要がある。

と云ふので至極尤もの説である。

全體、木材、石材の伐採、礦物の採掘、製煉などは、觀面に山河の風趣を害するものである

が、水電の工事は比較的風景を破壊せないと云へ、此の工事の必然の結果として、水を堰き
留める爲めに、溪流が濁水する。瀨となる水までもしほり取るから、其の落下を遏めて、風景
美を損する。尙營林局の説の如く、トンネルを多く穿つ結果として、追々土砂が流れて瀨を埋
めるであらう。又堰を設けたり、大小の鐵管を引いたり、種々の機械を据ゑつけたりするこ
とも、風致の上の障害となるに相違ない。併し鐵管や機械は到る處に人目を遮るほど多くある
譯でなく、且つ水電事業は徹頭徹尾水を操縱するものであるから、他の蕪穢のものを取扱つた
り、樹石を採り去るものとはおのづから選を異にする。そして此の事業の爲め十數里の山奥ま
で道が通じ、曾て人間の窺ひ得ざりし溪山美が世に紹介され、それと親しみ得ることになるこ
とを思ふと、水電事業の功德も決して小なりとは云はれぬ。自然美も保護を要するが、さりと
て此事業を阻止する譯にも行くまい。結局は兩全の道を講じて、自然美を害せない程度に工事
を進めしめるより外はあるまい。これが爲めに水電會社の負擔が嵩むとしても、風景保存の爲
めに、忍容せざるを得ないであらう。兎角、文明と自然美は衝突を免かれ難い。文明の爲めに
多少自然美を犠牲に供することも已むを得ないと思ふが、成るべくは、兩全の策を營林當局に

望まざるを得ぬ。

自分は近頃大量趣味の鼓吹を試みてゐるが、日電の黒部の経営を見て可なりに大量の趣味を感じ、自から快とした。此峡谷の規模もなかく大量である。殊に富山縣下新川の一郡から見ると、非常の大量を感じざるを得ない。日電の現在の資本金は一億二千萬と云ふが、兎も角、億を抜くの数は大量と云ひ得る。尙會社が他日二億の増資を行ふに於ては益々大量に感なきを得ない。水力が將來三十六萬キロに達したとしたならばこれも大量と云ふことが出来よう。此行、幸ひにおなじ會社の經營に係る庄川水电の設備を見た。庄川は飛驒より發する河で、堰堤の大設備のある所は礪波郡の景勝地で、風景が京都の嵐山あらしやまと似てゐる所から礪波嵐山と呼ばれてゐる。堰堤の高さは二百六十尺で、幅が千尺ある。二百六十尺の高さは、都下の丸ビルの高さに比して二倍半以上である。世界に一番高い堰堤は三百幾十尺といふから、それには及ばないにしても、先づ大量と云ひ得るであらう。之れを築くに砂利の築品を多量に要するが、セメントの量だけでも四十五萬樽、壹樽五圓としても二百五十萬圓を堰堤に埋めるのだから、此量も決して小なるものでない。兎に角、日本も相應に事業の幅が擴がり、私共に、かりそめの漫

遊にも多量趣味を感じしめることになつたのは、國運の爲めに慶ばねばならぬ。

頼山陽と骨董

頼山陽が多趣味の人であつたことは疑が無い。殊に文華の中心なる京都にゐて、風流界に馳聘したから、其の天稟の趣味性は益々培養され愈々進展したに相違ない。彼れが周圍には趣味の人が多かつた。詩や文や書の達人の多かつたことは言ふまでもないが、骨董關係に就て云へば、陶工には木米もくまいがあり、印人には林谷はやがあり、硯工には形山かたやまがあり、煎茶には春琴はるこがあり、畫には竹洞たけどう、介石けいせつ、半江はんかう、海僊かいせん等があり、方外の友には僧雲華そうんげがあり、商估には熊谷鳩居堂くまがやうきうどうがあつた。此等が相頼り相輔けて山陽の趣味性を助長するに相當力があつたことは否み得ない。山陽が愛瓢家であつたことは隠れも事ない事實であるし、硯の鑑定に一隻眼を有したことは、盆石ぼんせきに興味のあつたことも亦隠れもないことである。品陶の技能に至つては、「陶説」の序を見て略々窺ふことが出来るし、印に就ては、林谷の目前に臆面もなく印刀を握つた豪のもの

で、今頼家に存する遺印を見ても、其の材が精選され印癖のあつたことが窺はる。漫りに多くの骨董を蒐集しなかつたやうではあるが、なか／＼の數寄者で、文房茶器などの佳品を見て食指が動けば、執念く之れを得るに熱中したと云はれてゐる。随つて其の所藏品には誇るに足るものもある。

山陽は骨董の通人であつた。そして字をよくし文をよくし、殊に氣の利いた、銘や題識を作るの能があつたから、四方より骨董の題匣を頼まれたことは、蓋し少なくなかつたであらう。又其の題詞を得た爲めに、其器に大なる光彩を添へたであらう。山陽が茶器に詩を題して木米がそれを焼いたり、山陽の題詩を形山が刻したりしたものが當世既に人に喜ばれた。それが後世珍物となつて人に賞翫さるゝのも決して偶然でない。殊に山陽の手澤品が世に重んぜらるゝのは不思議はないが、惜むべし、山陽の遺物は蛤御門の戰爭に兵火に罹つて、今頼家に存するものは、僅かに唐代の銅餅と印と硯とある位で、幾んど皆失せた。併し方々に散じてゐるものがチラホラあつて、それが皆貴重なものとなつてゐる。實は、書畫と書簡の類は割合に多く分布してゐるけれども、骨董の類は、それに比すると如何にも少ないから珍重さるゝのも道理で

ある。自分などは山陽の墨跡を數多く見てゐるが、骨董となると、幾つも見ても居らぬ。數へて見ると、十指を屈する程もない。そしてそれが遺愛品のみでなく、僅に二三字を題した杖とか、盃とか、硯とか、印といふ様なもので、人に頼まれて銘などを作つたものが多きを占め、格別優れたものでもないのに、山陽に縁故ある骨董とし云へば、何百圓の價を以つて好事家に賣買されてゐる。私が「隨筆頼山陽」を上版する時、山陽遺愛の骨董を何か寫真版にして掲げたいと思つたが、實は逸品が得られなかつたのを遺憾とした。

然るに偶然一群の山陽の骨董に接する事を得た。それは、數を云へば三五六點もあつて、種類は茶器、文房、花器、烟具、行厨、菓子器等さまざまあつて、そのすべてに山陽の詩書があり、遺愛の品もあれば、友人の品もある。かくの如きものが一家に藏してあることは誠に珍とすべきで、藏者は遠く伊勢の偏隅に居るから、恐らく世間に餘り知れてゐないであらう。山陽の遺墨を百點以上も集めてゐる人は近頃もあるが、骨董を斯く多數に有してゐる例は私の知らない所である。

此の一群の山陽骨董を藏する人は、三重縣南牟婁郡有井村羽市本の醫家西村徳太郎氏で、私

は全然交りの無い人である。然るに拙著「隨筆頼山陽」が媒介をなして此春人を以つて其の所蔵品の寫眞を示された。私は一見其の數の餘に多いのに驚いた。寫眞では刻字などが鮮かに見えないので、最初は聊か疑を抱いたが、其の由來を聞いて見ると、皆嘗て京都の鳩居堂熊谷氏に藏したもので、それを和歌山縣新宮町の素封家西應次氏が、明治二十六年春鳩居堂より求めたもので、門外不出として珍重し、晩年事業に失敗して多く家寶を賣却した後も、此の物だけは秘藏した位である。然るに大正十三年春、西氏病歿後、今の所藏者西村氏は未亡人に就て幾回かに分けて割愛を得たものであることが分り、漸く疑が霽れた。鳩居堂は唯れも知る如く山陽が日夕往來した家で、其の家には累代風流の主人があり、書畫骨董などを多く藏した關係から、山陽竝に其の同人は、此家を今の俱樂部同様集會の場所に充てた程の關係もあるから、山陽因縁の骨董類が自然集まつた筈で、今日も猶少からず藏してゐるのである。斯る因縁のある家から此の一群の骨董が出たとすれば、無論正しいものと思つたが、何分寫眞が鮮明を缺いてゐるので、更に各品を大きく撮影する事を依頼し、且つ題詞、識語の寫しをも請うて多少研究して見ると、確かに鳩居堂の舊物である事を確かめ得た。現に私に贈られた釣瓶形の花器一雙

の函の蓋の一隅には鳩居堂の烙印があり、他の器の箱にも同じく藏記があるのみならず、一器の函書には天保丁酉三月惟鳩主人藏とある事をも知り得た。惟鳩は今の熊谷氏の先代で、山陽と同時代の人である。即ち此等の骨董は全部熊谷惟鳩の所有であつたものと思はるゝ。私は最初倉卒に判じた。鳩居堂の主人が風流氣のある所から、折に觸れ山陽竝に其の同人に詩書畫を請うて、それを刻したものであらうと。然るにこの推測の當らない事に直に氣が付いた。と云ふのは、山陽の家に備はらねばならぬ物がいくらかも交つてゐる。即ち樂翁公が山陽の家庭を詠じた和歌の竹楹や、公が山陽に贈られた蒔繪の野辨當などは、何と云うても頼家に珍藏さるべき物である。此の辨當箱に装置しある錫瓶には山陽が詩を刻し、且つ樂翁所賜と款識もあり、その拓本を見るに寸疑を容る、餘地が無い。尙此外に青木木米が山陽に贈つた自製の茶碗があり、山陽の母梅颯と室梨影が和歌を合作した手提の菓子器の如きも、頼家の家庭の物らしく思はるゝ。其他山陽が竹田に與へたもの、介石が山陽に題詩を囑したもの、竹洞の爲めに山陽が詩書を作つた扇面形の板額、又茶器、文房の内にも某某の爲めに銘を作つたものが數點ある。此等から考へると、私の最初の推測の如く鳩居堂の主人が物數寄に自ら製作したものでなく、

(中には若干あるであらうが)多くは山陽竝に其の同人の珍藏を寄せ集めたものであると思はねばならぬ。そして此等の物の斯くまで多く鳩居堂の手に歸した譯は鳩居堂主人が山陽其他の文人と交りがあつたので、店の書畫や骨董などを望まれて、交換に諸家から割愛したものであるまいか。それとも、山陽の歿後拂ひ物となつたのを鳩居堂が引取つたのもであらうか。これら諸器が好事家に珍とせらる、譯は、山陽始め諸名家の詩書があつたり、其の手澤を経たものであつたりする點にある。更に委しく云へば、樂翁公の贈品は「日本外史」を紀念するものであり、木米の作品は貴重なものとなつてゐるが、それが山陽の舊藏である處に一層光彩が加はり、山陽の書畫は珍とせらる、が、それが有名な畫伯の囑に應じたもので、一層の珍を加へる。山陽が詩畫を書いたばかりか、それを自刻したものが二三に止まらないことも好事家を惹きつけるものである。殊に「雲耶山耶」の詩を山陽自から筆筒に刻してゐるなどは、好事家の垂涎を禁じ得ないものである。要するに、此等一群の骨董は、山陽の一族春水、杏坪、梅鷗、梨影、並に友人竹田、介石、半江、海仙、雲華、景文等の合作もあるけれども、山陽の詩書がどの器に於ても中心となつてゐて、總體を山陽自作の骨董と見做すことが出来る。

今左に各器の大略を掲げ、讀者の玩賞に供する。

一、拂子(表)刻字。吾心如秋月 山陽外史□□

(裏)長方角の印を刻す。

一、扇狀額面 材槻板、山陽自刻、竹洞山人の爲めにす。

(表)横書 玉花含笑 山陽外史

(裏)月黒湘簾燭影深、當階獨酌夜沈々、暗香撲酒何花發、不是鬢華定玉簪

辛巳冬日、竹洞山人來乞余、作是 襄□□

一、短冊大柱掛 樂翁の和歌を刻す。

(表)ふくくと親子ふうふもむつましくけふよりはふ千世のことぶき 花月

(裏)白川樂翁花月大人吾家を讀める 襄□

一、二重切竹花生 竹田の海棠畫、山陽の詩あり、云く、

石竹無花小圃荒、木犀含蕊未聞香、西風猶與詩爲地、幾點秋紅到海棠

文政丁亥秋 襄□

- 一、硯屏 (表) 君子在幽谷 山陽外史
(裏) 壬午上巳、爲研愛友泉作、名友竹屏
- 一、墨臺 (表) 墨□□ (裏) 墨華石 共に山陽書刻。
- 一、筆架 (裏) 水明峯
- 一、筆筐 (表) 筆□□ (裏) 壬午上巳、爲研愛友泉作、名水竹仙 囊□□
- 一、木研 (表) 心越禪師の七絶を刻す。
(裏) 壬午上巳、野呂介石索吾書、答似研名愛友泉 囊□□
- 一、柘植杖 山陽一律詩を自刻す。
淡薄輕羅落碧流、一條虹現兩條秋、
鮫綃出水新舞杼、鐵鎖橫江不礙舟、(以下
四句略) 庚寅九月賴襄刀□
- 一、竹筆筒 山陽自刻天草洋詩。
- 一、槻製茶入 山陽竹田合作詩書。
禪榻愛聞茶鼎鳴、細如寶瑟大如笙、十年一覺揚州夢、何識人間有此聲 囊

竹田の識語云 乙酉初夏 田 憲

- 一、竹製茶入 山陽の詩を刻す。
夜宿溪亭燭影愁、閑聞簷溜瀉高秋、起推窻戶知非雨、石瀨娟々碎月流 山陽外史
- 一、茶托五客 竹製 竹田山陽合作、竹田四君子の畫刻。
(表) 春月明美 囊 (裏) 久太郎作
- 同 松石不老 囊 同上
- 同 幽香君子 囊 同上
- 同 清風綠幹 囊 同上
- 同 秋日花香 囊 同上
- 一、巾器
(表) 茶味禪味 囊 (裏) 久太郎作
- 一、茶盃 其一 酒渴思茶々未熟、愛聞琴筑遶簷來 山陽外史
同 其二 上に竹田の詩、下に山陽の山を刻す。

- 一、茶壺 楓製 竹田の畫、山陽の詩を刻す。
- 一、竹茶合 竹田の詩、山陽の畫、自刻。
- 一、角茶盆 楓製 移居築園雜詠中の「家面東山」の一詩を刻す。款に云く、
(表) 壬午上巳、於山紫水明居南窓下、賴襄 (裏) 久太郎戲作
- 一、茶碗五客 青木木米製、山陽に贈りしもの。
- 一、急須一個

茶碗の内部に白樂天の詩あり、外部に人物の刻あり。

急須の内部に白樂天の詩あり、外部木米自刻の茶味禪味の四字あり。

- 一、右茶器の匣面に海仙の畫あり、山陽の款識あり、云く、

吾友青木氏自贈處、偶海仙來西寫 戊子臘月 襄

- 一、菓子重 蓋に山陽の詩と竹田短冊秋潭を下るの圖あり。

一雙柔櫓下秋潭、呷呷聲中雨意酣、攪破高齋獨夜夢、誤聞雁語宿淮南

戊寅臘月作 山陽外史

四面に木米、春琴、文晁、蜀山等の詩畫刻。

- 一、手提黃盆 四面山陽の詩竝に介石水中梅影の圖を刻す。(山陽の詩略す)

火 入 竹雨松風蕉葉花影茶烟琴韻書聲 襄

吐月峯 竹田松林を畫す。

- 一、蒔繪野辨當 樂翁公、山陽に賜ふ所。

錫製酒瓶に山陽の詩を刻す。

滿積寒光霜絕瑕、幾條獨見印胡沙、無風無亂烽煙直、有月還隨弓影斜、

旭日注城閑虎豹、春雲蒸研動龍蛇、東風別有昌平象、杏雨初晴認杜家

文政戊子之年樂翁公來吾外史索取被之下賜

賴襄□□

- 一、手提菓子器

蓋の裏に山陽の母梅颺と室梨影の和歌あり。

- 一、香盆 山陽、春琴、竹田、竹洞、雲華合作、山陽の識語に云、

壬午上巳、於鴨漣吾山紫水明居、友人雲華上人竹田翁春琴居士竹洞山人等開酒宴、戲

走馬燈 下

一、香筒 山陽の刻詩に云、

輕氷釋處霜無暈、細浪搖時玉有皺、近岸橫枝迷倦鶴、點波芳蕊謾游鱗 山陽外史□□

一、竹製香爐 蓋銀製、紅葉に鹿の彫刻あり、頼家の定紋を刻す、

香氣清涼

春水賜西天君、余錄之、壬午上巳 襄

一、如意 裏に 當笑白雲無特操作君出岫伴 襄

一、器局 扉二枚に、山陽、詩を刻す。(詩略す)

一、柵 上部二枚の戸に春水杳坪の詩を刻し、下部二枚の戸に山陽の詩を刻す。

一、釣瓶形花生二雙

周邊に半江、介石、景文の畫、山陽每瓶に各二詩を刻す。

此の目錄中の最後の釣瓶花器一雙には、各瓶山陽の二詩が刻されてゐる、即ち左に收む。

傍牆種桂養金葩、當砌栽菊護玉芽、更記山僧許廩送、留將餘地待梅花

搬石栽花日追駟、旬來門塾廢吟唔、今朝改種茶梅樹、童子困眠不受呼

鋤荒栽樹汗沾衣、稍覺園容綠四圍、更惡南籬春冷淡、又乘疎雨插薔薇

城居雖惡且棲遲、旋理荒園旋縛籬、昨日山妻相報道、新栽苦竹出穉兒

此の詩の内初後の二首が移居築園雜詠中のものであることを思ふと、此の花器は山陽の築園の紀念物とも見ることが出来る。上箱に鳩居堂主人が山陽先生遺物と書いてゐるのを見ると、もとは山陽の家庭のものであつたことが知れる。多分、山紫水明處の床に置かれ、いろ／＼の花が山陽翁に依つて挿まれたことであらう。私はそれ等のことを想像して此の花器を珍重し、夏時は毎朝後園に咲き亂れてゐる牽牛花を投げ入れて、日々親しみ且つ頼翁を偲び、無量の愉快を感じた。筆の序に此器を恵まれた喜びを陳べて置く。

記念事業の傑作

坪内博士の古稀を記念する爲め、演劇博物館を起すに就ては、私も最初から與つて微力を致

した。幸ひに些の支障なく事が成就し、開館式に臨んでみると、欣喜と共に多少の感なきを得なかつた。

近年記念を名として起る事業は敢て少なくないが、扱て感服に値するものは甚だ少ない。多くの記念事業は直接若しくは間接に記念さるべき人の功績を表彰するものであるから、少なくとも其人の性格好尚がほのめくことで無ければならぬのであるが、其の工夫がむづかしく、結局平凡に墜ち、無意味に畢るものが多い。動もすると記念さるべき人を全く失望せしめ、その人をして窃かに苦笑せしめるものも絶無でない。實は記念事業の考案は易きに似て甚だ難いのである。出来得べくんば、記念さるべき其人をして自から選ばしめる事が、適當の案を得るに庶幾いのだが、實際に於てそれが出来かねる譯は、かゝる人々は抵ね謙遜で、苟くも自家の事に關すると、嚴に口を箝するのが常である。殊に一世を指導する文豪などになると、其の見識が高邁で、概して功績表彰を好まない。相談に及ぶと、頭から辭退され拒絶されて仕舞ふのである。此等の人の欲する所は一身の私に存せず、寧ろ世の爲め公益の爲めにせんとするに在る。されば記念事業の性質は前者でなく後者で無ければ成立ち得ないのであるが、後者であるとする

ると、功績表彰の目的と相反する如くであるけれども、實はさうではなく、これがやがて其人の功績を表彰するものとなる。世の爲め公共の爲めにするもので無ければ、記念事業の意義も弱く又其の生命も永久的でないのである。坪内博士の記念事業は最も之れに近いものであつて、文豪を表彰する好模範と云ふことが出来よう。此の記念事業は博士が半生の心血を注いだ劇に直接關係があつて、將來劇の研究がここに行はれ、それによりて此の藝術が益々陶冶され、博士の志を永久に傳へ、且つ其の達成を庶幾する上に於て最も意義あるものである。尙此の記念事業が、世間有り觸れのものとの其の趣を異にする要點を挙げれば、第一は、此の事業は博士の宿願素望であること、第二は、博士自身の考案設計に係ること、第三、物質的にも博士の寄與の大なること。此の三點は此の記念事業の特色で、幾んど他に類例の無いことである。されば博士の精神は構造の上にも内容の上にも横溢してゐることは言ふを待たぬ。博士は此の事業の完成を見て衷心満足された。勿論自家の私の爲でなく、劇の研究の爲めに満足されたのである。全體其人を満足せしめることの出来ない様な記念物は寧ろ作らざるが優しである。此の館の如くして始めて記念の二字の高調が出来るのである。前にも陳べた如く、博士が自から構造

を案じたればこそ、沙翁に因みある運命座に倣ふことにもなつたので、館それ自身が既にムジイアム的である。博士が一生の力を捧げた「沙翁全集」四十巻を精譯した記念としてもふさはしい設計で、小規模ながら舞臺もある。玄關が即ちそれで、兩翼が觀覽席である。内部の意匠も皆博士の指導により、徹頭徹尾エリザベス朝式であることも博士の趣味を發揮して遺憾がない。内容はまだ充實しないけれども、博士が多年蒐集された、劇に關する内外の圖書幾萬冊を始め多くの標本がこゝに移されたから内容も強ち貧弱でない。博士は内容に就ても斯く寄與されたが、尙此の事業の爲めでなくば敢てされない、「逍遙選集」を出版して、其の印税の全部を費用に投じ、尙其の上に住宅、土地までも寄附された。されば物質的にも此の館は記念さるべき人に負ふ所が輕少でない。此の點は幾んど記念事業に例を見ない事である。博士が斯く自家の私を棄て、文藝の宿願を果す爲め、精神物質皆惜しむ所なく集注された、其の高い清い行爲は、此の館と共に永遠に記念さるゝことであらう。

此の館が博士に最も縁故深い早稲田の學苑に建てられた事も其の處を得てゐる。此の建築物が林立せる莊重な講堂の間に立つて異彩を放つてゐるさまは恰も博士が幾百の教授群の間に異

彩を放つてゐると同様である。此の館に接するものは幾久しく博士を聯想することを禁じ得ないであらう。斯うあつてこそ博士を記念するものと云ひ得るので、やがて博士の偉勳を後世に傳へるものである。世間多くの記念事業が無意味であるのに對し、これは全く傑作であると私は言ふを憚らぬ。

熱海の逍遙書屋を觀るの記

毎年の首端に熱海に行くのが私の年中行事の一つで、行けば坪内博士の雙柿舎を訪ふのが常例となつてゐる。熱海の繁榮は何等か目新しいものを行く度ごとに吾等に見せるが、本年は雙柿舎に於て新たな建築を見た。それが少からず吾等の目を怡ばせた。其の建築こそ、博士が昨年中苦辛經營の結晶である。昨年は博士が古稀の齡を重ねた歳で、それを記念するために演劇博物館が建築され、それが早稲田大學の林立せる講堂の間に立つて、異彩を放つてゐるとは別項の通りであるが、殆んど同時に此の書堂が建築され、兩つながら博士の意匠に成つた

ことは忘れ難い事で、共に博士を長く記念すべき好個の建物である。

博士の書堂を紹介する前に、聊か博士の別荘に言及する必要がある。博士の別荘は字水口村みなくちぐらの丘陵地帯に營まれ、頗る眺望に富んでゐる。翠竹、古梅が庭園の風致をなしてゐる外に、巨大なる老柿が二樹相並んで四季さまざまの姿態を呈し、庭園中樞の風致を司つてゐるので、博士は此の別荘に雙柿舎の名を命じてゐる。庭園には水が引かれて、それが二方に分れて流れ、崖下に瀧となつて落ちる。書堂の設けられた所は、即ちその瀧のある附近だが、崖下とは云へながら、矢張り丘陵の一部で、其の幾間かの下の平地に水口園と名ける遊樂地がある。かゝる地勢に設けられた此の書堂は、坐して博士の宅から見れば、眼界に入るものは第二の屋根以上に過ぎぬ。秋は木の葉が脱してゐるからハッキリ見えるが、木の葉が茂る時には、樹間と塔が隠見することゝなるであらう。之れに反して低地の水口園から見ると、殆んどその全體を見ることが出来て、水口園の爲めには意外の風致を添へることになつたやうなものである。しかし實は博士は此の塔を立てるの地を相するに餘程苦心されたらしい。普通街氣のあるものが此の種のを建てるとあつては、必らず目前に高く見えるやうな地を選ぶであらうが、それを却

つて逆の地形を選ばれたのは流石に博士で、如何にも奥床しい趣があると、私は先づ地形の宜しきを得たのを喜んだ。

博士の案内で塔に入る前に、先づ座敷から望んで眼に入つたものは、塔の絶頂に避雷針とも見まがふものに何か装置されてあるものであつた。博士に之れを問へば、あれは風の方位を知る爲めのもので、上に装置したのは翡翠と橄欖の葉で、共に金屬製である。實はこれも沙翁の書いたものから思ひ付いたので、翡翠は子を産む時に殊に海の平穩を祈り、其の嘴の向ふ所が風の或る方位を示すとあるので、こゝは海濱だからそれを取り入れたに過ぎぬと語らる。自分は更に普通露盤のある所、即ちカザミの樹つてある臺とも見るべきものに、異様の樹形の函やうのものに丁字形のエグリのあるのは何かと問へば、普通の露盤では興がないから、あれもエリザベス時代の物見臺に倣つたと語られた。

沙翁の幼時學んだ學校の隣の寺の屋根にも此の物見臺があつたと云うて、一小冊を出して示されたのを見ると、如何にも其通りで、流石にエリザベス時代は何時も博士の胸臆を離れないと感じた。

それより博士は私を伴うて塔にと案内された。此の庭より水口園へ下る道は熟知のものであるが、此日は私のこれまで知らない一徑を下つて案内された。此の徑も塔の附帯工事として開かれたものであることは申すまでもない。此の徑を下ると瀧があり、瀧壺がある。これも熟知の處であるが、これまでは水が濁して瀧は名のみであつたが、今は水がどん／＼落下して、瀧壺の水が流れて低地に落ちる所に橋が出来てゐた。これも附帯工事の一で、橋はコンクリートで作られ、橋下半圓形を描いた所に水が流れてゐる。此の橋にも博士の工夫があり、雨露が橋上に停滞しないやうに風致を兼ねた水掃が出来てゐたのに一興を覺えた。

其の橋を渡ると、直前に塔に上る階段がある。私はそれに上る前に、先づ地盤を見、地下室を見んことを望んだが、忽ち眼に入つたのは、階段の左右に置かれた羊の塑像であつた。これは博士の戯號小羊に形どつたもので、其の腹部の両面には、圖書館にふさはしい語が刻されてゐた。それは羅句語と漢語とで、漢字は篆體に書かれてゐた。即ち一には、

Nutrimetus spiritus (精神の糧)

涵養精靈以培其基

とあり、他の一には、

Non multos sed bonos (not many but good) (多くを要さぬ、精良を要す)

進退今古表裏人物

とあつた。尙此の羊像の附近に黄銅蓮葉の水盤があつて、清水が間斷なく通つてゐるのを見た。これは圖書の檢索者に手を洗はしめる用意であらうが、書堂の經藏式であるのとよく調和して、一種の風致を添へてゐる。それから地盤を見ると、コンクリートで高く蒲鋒形に積み上げた有様は、法隆寺あたりに倣うたらしく、これならば地震にびくともせぬと思はせた。石段を十數下つて地下室も一覽した。こゝは物置となつてゐるが、博士の語る所では、天然の地盤に達するまで掘り下げたので大丈夫と思ふが、何分非常の重量を支へるのだから、こゝに意外に多くのセメントを費したと云はれた。成る程室の一半はセメントで固めてあるを見た。地盤に當るまで此の丘陵を切り下げた爲めに、三方に土の障壁が出来た。その断面が石で疊まれ、如何にも見事に出来てゐた。

それから前掲の玄關とも云ふべき石段を上ると、こゝに四方を圍むコンクリート製の勾欄が

あり、四方の縁は趣味ある瓦を以て敷きつめられ、屋根の四端には銅鐸が吊されてあつて、さながら經堂にあるの心地がした。正面の扉を開いて入ると、爰は堂中の尤も廣い所で、多くの書架が駢立し、無駄の無いやうに空間が利用され、天井には各種の假面が多く吊され、圖書も七八分通り既に書架に満ちてゐた。こゝに椅子テーブルが置かれてあるのを幸に、しばらく博士と對坐した時博士は、小さな規模の書庫に多く圖書を納めやうもないから、成るべくレフアレンス・ブックを専ら藏することにした。自分の用に供するのみならず、追々此の土地の人にも見せる積りだと語られた。更に階段を上ると、二階とも云ふべき所が屋根裏で、光線を取り入れることが出来ない爲、物置となつて、いろ／＼の調度類が整然と置かれてあるのを見た。更に階段を上ると、こゝが最上層で、書齋となつてゐる。四疊程の廣からぬ席であるが三方に窓が開き、床もあり、机案もあり、茶具もあり、博士好みの種々の骨董が置かれ、疊が敷かれてあるのと極めて陽氣であるのと、塔中にあるとは思はれなかつた。窓から瓦を敷きつめた縁に出て見ると、如何にも眺望がよく、爽然春の如き氣分がした。始めて屋根に注意して見ると、二層の屋根はすべて銅版を以て葺き、屋根裏は黒ずみたる赤色に塗り、銅瓦にもサビが工

夫されてゐるので、新營ながら滋味と古色が漲つてゐた。博士は語る、此の屋根には意外に苦心した。これほどの小建築に反のある屋根を作ることが面倒であつたのと、割合に屋根が厚いので、セメントのみをつかつては重量が増す爲めに度々やり換へて、やつとコンなものゝ爲つたと云はれた。尙博士は白壁を顧み、夜中一興を感じるのは、隣地の電燈が、塔の周邊の梅樹を照し、横斜の影を此の白壁に映じて自然の畫を爲すのが一奇であると云はるので、自分も興に入り、それこそ自然の梅花書屋だと云うて一笑した。

暫時書齋に對座して話次博士は曰く、通りかゝりの人が此の書堂を見て、あれは納骨堂だらうと評したのに對し、自分はその通りだと言つた。古諺に、

A library is but the Soul's burial ground.

とあり、又ベーコンは、

Libraries are as the shrines, where the relics of saints are preserved and reformed.

とも云うてゐる。共に書庫を藏魂の處というてゐると語り、終に筆を採つて左の二首を示さる。

骨堂にまがふを人なあやしみそさかし眞魂のおくつきは是れ

さかし人の心の廟といふなれば書庫のかゝりを阿蘭若あらんじやに似す

此の即詠に對し、私が曾て「古本屋」といふを書いた時、古本は先哲の墓であり位牌である。但しこれは精神の墓、精神の位牌で、普通石に作る墓は形骸の墓である處に相違があると云うたことなどを思ひ出して博士に同感を寄せた。

博士は如何なる場合にも人に雷同するを欲しない。そこに博士の見識がある。此の建築の如きも、博士自身の創案に出で、古今東西さまざまの建築の様式を採り入れてはあるが、それが打して一丸となつて逍遙式となつてゐる處が嬉しい。此の建物は即ち博士それ自身である。博士は熱海に於ける一大異彩であると共に、此の建築も亦熱海のあらゆる建築物中の異彩である。此の建物が熱海に一名物を加へたことは確かである。熱海に浴するものが遠く望み近く見て、珍奇の感に打たる、もの、多いの言ふまでもないが、舊臘久邇宮御夫婦が此地に台臨の折、此の書堂を是非一覽したいとの御意があつたので、博士は謹んで御案内申上げた。そのをり、こゝから名作が生る、であらうと仰せられたと承るが、此の不意の台臨と令詞こそ此の書堂の開館式にも充つべきもので、長く記念すべき事であると私は感じた。

赤 保 々

三伏の暑熱銷すに由なく、懊惱の折柄、昵近の人の訪問を受け、何か清涼の談はないかと云ふに任かせて、「赤保々」こそと、出鱈目に談話を續けた。談ずるものも聴くものも清涼を感じなかつたが、客の去つた後更に案ずると、其の範圍に屬する談柄がいろ／＼思ひ出された。其中には噴飯に値するものもある。即ち「水滸傳」の魯智深が全裸體で寢臺に横はり、新婦に擬したことや、一九が新年の賀客を丸裸にして、其の衣裳を借り受けたことなど、事實はとまれ、赤保に縁のある話だと、そんな事までも取り交ぜ、閑に乗じて筆を把つて見た。實はこんな事も忘暑の一方便で、勿論隨筆に取り入る、意も無かつたが、一世虚飾を事とし、淨裸を喜ばない時節柄、かゝるものは清涼劑と爲すに足ると、友人に唆かされて、爰に幾許の紙を費すことになつた。

□禪の赤裸々　禪宗では、其の教典に盛んに赤裸々を提唱して居る。但し禪宗の主張は流石に大袈裟で、區々たる人體などの赤裸を云々するでは無く、大千世界の赤裸々を提唱し、あらゆる附け焼刃を洗ひ落し、あらゆる不淨、あらゆる虚偽、あらゆる罪惡を擺脫し、離却せしめんことを唱道する。之れを禪では淨裸々、赤洒々と云うて居るが、即ち清淨無垢の赤裸々のことである。

□赤裸の眞實　十九世紀に於ける思想界一大産物も此の叢話に因縁がある。所謂自然主義（ナチュラリズム）は佛國のゾラに據つて唱道され、世界を風靡したが、此の自然主義は眞理を赤裸に求めるもので、ゾラ自身も「ネイクド・トルース」（赤裸の眞實）の語を遣つてゐる。昔の學者で自然主義を説いたものも無いでもないが、ゾラ程大膽に且つ具體的に唱道したものは無い。本能満足など云ふことも此の自然主義から流出するもので、應用を誤ると種々弊もあることだが、これほど深く深く人心を制した説は近世に無い。

□身體の僞りは衣服也　人は衣服を着けずして生れ、衣服を脱して地に入る。赤裸は人の自然にして、夏候は人を自然の態に導くものと云ひ得る。全體衣服は貧富により階級により又爵位により其の品を異にする。随つて世俗は衣服を見て一概に敬し又卑しむ。是に於て惡漢も泥棒も美服を着けて人を瞞過せんとする。實を云へば、衣服は假りの世の假りものである。若し身體に僞りありと云はゞ、衣服は即ちそれだ。

□炎熱を知らぬ人　人と會語するに一切城府を設けぬ人がある。斯様な人に接するのは眞に愉快なもので、恰も春風の内に坐するの趣がある。世上之れを快潤の人と云うて居る。昔し司馬溫公は「吾れ人に對つて言ふ能はざる者なし」と云うたが、胸中に凝滞の無い人は秘すべき何物も有つて居らぬ。即ち其の胸臆は常に赤裸々であつて、清風去來、暑月と雖も炎熱を感じぬのは此般の人である。

□赤裸々の告白　昔から詩人や哲人で己が心事を明らさまに告白した例は無いでもないが、

佛の碩學ルソー程臆面もなく己が經歷を赤裸々に告白し懺悔した人はあるまい。斯の人の告白状は世界の文壇に著名なもので、その青年時代に手淫を事とした事をも包まず白状して少しも蔽ふ所が無かつた。如何にも大膽なる告白と謂はざるを得ぬ。西洋の文學者が追々自から欺かざる赤裸の告白をする様になつたのは、範をルソーに取つたことは言ふまでも無い。今日我邦の文壇にも此の風が東漸し、餘りえらくも無い小説家達まで自家の貧弱なる經歷を赤裸々に書かねば濟まぬと、のろけ半分に、己が戀愛談などを臆面もなくさらけ出し、それを賣り物にして居るのも矢張りルソーのお蔭に依るのである。併し自分に都合のよい部分は赤裸々に書き、都合のよからぬ處は人に嫁したり、秘したりして甚だ陰險な所がある。ルソーを九泉に呼び起して之れを讀ましめたならば、何と評するであらう。

□裸詩 裸體の趣味を歌つた詩は強ち妙くない。併し今息卒に多くを案じ出しかねるが、差當り官職を辭して其の氣樂さ加減を歌つた古人の句がある。

平生最想無官樂、裸體驕人六月天

これなどは明かに裸體の趣味を歌つたものである。

□赤裸の講義 講義にもさまざまの體があつて、たやすく説けるのを要もない考證などに泥んで面倒に説くのと、直ちに神髓に觸れて、むづかし氣なものをやすくと説くのとがある。前者は裸體にする代りに段々衣服を重ねるやうなもので、説けば説くほど聽者は感うて要領を得ない。昔しの漢學者の講義には之れに近いものがいくらかもある。全體講義の要は物をむき出しにして其の實相をさらけ出すにある。坪内逍遙翁などは流石に手に入つたものだが、自分などの知つてゐる故人で赤裸の講義をした人は黒川真頼博士であつた。博士は帝大で「源氏物語」を講ぜられた。「源氏物語」は古語が多い爲め講義が仕悪い計りでなく、閨閣の隱微に涉ることが多く、學校のやうな場所で之れを言ひ破ることは尤もむづかしい。處が博士は何の遠慮もなく、さながら目のあたり見たまゝを語るごとく、易々と説かるゝのを聽くと、新聞紙の三面記事を讀んでゐるやうな氣がして、不知不識魅せられておつとりとしたものだ。博士の講演の特徴は遮るウエイルを外して直ちに急所を突く。それが露骨でもあり大膽でもあるが、博士の

態度は飽くまで眞面目で、如何な際どい處でも毫も回避滯せず、ドシ／＼進まれるので、聴者が却つて赤面するやうなこともあつた。併し博士は如何なる場合に於ても野卑に陥ることなく、嚴正に品位を保つた。講義は斯く赤裸でありたいと思ふ。

橘曙覽の裸歌

久しく世の知る所とならず、近世に至つて漸く發見され、歌道に於ては實朝以來の人とさへ稱されて世の劇賞を博することになつた、橘曙覽は、越前の人で、曾て春嶽公の知遇を蒙り、公は其の草庵に駕を枉げられたこともある。此人は萬葉の古體をどこまでも守つた人で、如何なる場合にも赤裸々に自家の心事を告白して、少しも偽らぬ。其の歌集の中に「獨樂吟」と云ふがあるが、悉く冒頭は「たのしみは」と云ふ五文字から起つてゐる。之れを見ると、如何にも素朴な感情を自然の儘に歌と爲してゐる事が知れる。試みに二三を左に掲げる。

たのしみはあき米櫃に米いで來今一月はよしと云ふとき

たのしみは錢かねなくなりて佗たび居るに人の來りて錢くれしとき

たのしみは木の芽沸かして大きなる饅頭を一つほ、ばりし時

たのしみはつねに好める焼豆腐旨く烹たて、食はせけるとき

たのしみは小豆の飯の冷えたるを茶漬ぢぢてふものになして食ふ時

一體取りつくらふと云ふことは人情で、殊に文筆に親しむ詩人や歌人などは裝飾に没頭するものだが、流石に曙覽は超脱して居る。曙覽が文界に珍とさるゝのは種々の長所に依るは勿論だが、其の素朴の處、赤裸々の處が、人の及び難い所である。

裸體の快味

三伏の溽暑じゆんじゆ凌ぎ難き時、何人も衣類を脱して涼を納るゝを喜ぶ。併し裸體の快味を感じる時と處とがある。今一二を舉げれば、涼簞に横臥して書を読むによし、水亭に杯を擧げるによし、柳蔭釣を垂るゝによし、浴後によし、午睡によし、夕顔棚の下に茶を煮るによし、酔後果物を喰ふ時、晚景石に灌ぐ時、日中外より歸り來りたる時など皆よし。誰れやらの句に「褌に團扇あふぎさしたる冷みかな」とあるは、赤裸の快を歌つたものである。

裸體の變遷

職業柄裸體を許されて居るものは相撲、船頭、漁夫、蠶女おぼこの如き潜水業者、井

戸堀業、水泳の練習者、湯屋の三助、劇の登場者、例へば滿身刺青ある辨天小僧などの類である。勿論此等とても條件付で許されて居るので、相撲は裸商賣であるからと云うて裸體で街を歩く事はならぬ。追々警察の取締がやかましくなり、裸體の區域は年一年と縮まつて來る某所で魚賣りが裸體で市中を賣り歩くのを巡査が見咎めた處、魚賣りは巡査の近眼であるのと己れの日を焼けて腹背共に眞黒になつて居るのちにチョット頓智を弄し、黒のシャツを着けて居りますと胡麻化して遁げたと云ふ話などは異例で、市中ではなかく裸體がやかましく、車夫でも股引を著けねば科料を取らるゝ世の中となつた。地方ではそれ程迄やかましく無いが、一般に裸體氣分が衰へつゝあることは事實だ。道中筋などでも裸體専門の雲介などは今幾んど見當らぬ。今より四十年許り前、一月二日と云ふに函嶺の舊道を踏えた時などは、嚴寒骨に徹するの意とせず、雲介が赤裸々に籃輿を擔ぎ、例の鼻唄を歌つたものであつたが、今は夏でも裸體の兒夫は居らぬ。裸體の流行した或る時代には身體に刺青をすることが流行し、俠客を始め職人、雲介皆之れを施し且つ誇りとした。裸體が刺青を呼び刺青が裸體を奨励した相互關係で當時繁榮であつた深川其他各方面の花柳の巷にまで刺青が歡迎され、終には藝妓までが身體に

刺青を施し、客の前に腕を捲り或は半身を露はし、それが一種の美として受取られた。實は戰國の餘習で、強がる氣分から來た慣習であるが、その頃は天下晴れて刺青をあらはして大道を横行闊歩し、混堂などでは此の連中が最も幅を利かしたものであつた。然るに今は刺青も裸體と共に禁ぜられた。

□寒詣り 今でも無い譯ではないが、江戸時代には、寒中壯丁が赤裸となり、群を爲して疾走し、深川八幡其他の神社へ參詣し、そして水垢離を取つたものだ。これを寒詣りと云うて、なかく盛んなものであつた。此の寒詣りをする者は職人などに多くあつた。もとより一種の迷信から起つたものに相違ないが、實は一種精神の鍛練法であつて、これが職人の藝の上に意外の効果を來したと云はれて居る。故老の話に、若い職人などで寒詣りを嫌ふ様な者は朋輩から擯斥を受けた。又親方株も盛んに之れを奨励し、貴公達、藝に上達せんと思はゞ、是非寒詣りをせよと強ひてやらした位である。親方の奨励も迷信から來て居るのであるが、其の結果は、確に志氣を鼓舞し、兼ねて精神を鍛へた。それが藝の上にも現はれた。現に故老の云ふの

に、江戸で指物師などが非常の進歩をしたのも、一つは寒詣りのお蔭であると云うて居る。

□宮崎の裸祭り 福岡縣の宮崎八幡宮は、博多に往く何人も參拜する有名な神社であつて、此の社には夫の元寇襲來の時の「敵國降伏」と云ふ宸筆の額が掲げられて居る。社殿の周圍は翠蓋目覺める如き一帶の松林を以て圍まれ、松林は白砂の上を走つて波打際まで達し、風景絶佳である。此の宮崎神宮の年中行事の一として變つた祭儀がある。それは「玉争ひ」と稱し、一個の毬たまを舟に乗せて社前の海岸へ達すると、博多のあらゆる壯丁が裸體で幾千となく群を爲して、其の毬を乗せた舟を迎へ、吾れ勝ちにと争うて大騒ぎを演じつゝ、十數丁も距つた社殿まで運び、最後に之を官司に渡し、神に獻するのであるが、其の最後に毬を取つた者が非常な光榮で、一身一家に幸福が來るのみか、延いては其の町内にまで及ぶと言傳へられて居る所から、毬が社殿に近つくと、群衆は死物狂ひの大騒ぎを遣つて争ひ、毬を握つた者は他に遣らじと、多勢の頭や肩の嫌ひなく攀ち登つて之れを高くさし上げる。それを又取らんとて、人柱を攀ちて争ふと云ふ騒ぎであるが、さて皆々丸裸であるから、別に怪我もなく濟むさうだ。

□裸百貫 裸一貫或は裸百貫など云ふ語は戰國時代から行はれて、徳川期にも通用された。裸一貫と云ふは人一疋丸裸の儘と云ふ意である。即ち門地に依らず、爵祿に拘らず、財産に拘らず、生れ落ちた其儘と云ふことで、何となく底力のある語だ。さて裸一貫が單位で、裸百貫となると、人間の價を意味する。即ち丸裸で突出しても百貫の價があると云ふのだ。如何にもその人に相當の能力さへあらば、丸裸でもそれ相應の價はあるべき筈のものである。然るに今の世、先づ其の着用の衣類を見、其の經歷を聞き、其の出身地を問うて、而る後始めて其の價を定める。甚だしきに至つては、薩だ長だとさへ云へば、土偶の如き人物でも高く價つけらるる様なこともあつた。さて昔とは世の中が變つた。

□蛙 蛙は夏時の幸運兒だ。人間が三伏の炎暑に困むのを餘所に見て、水中に住むのは蛙である。そのギャク／＼鳴くのは何を語るのか解らぬ様なもの、人が己れの心を充てがつて鳥や蟲の聲を聞くとすると、宛も意中にあることを語つたり褒めたり嘲けつたりする様に聞える。例へば成金者流の如き大得意の人がえらがつて蛙聲を聞いたなら、必然エライヨ／＼と聞える

であらう。或る百姓の話に、吾々の境遇は憐れなものです。炎天に五體をさらし、汗水流して稼いで居るのを、氣の毒とも思はず、いつもハダカ／＼と鳴いて、人を馬鹿にしやがると云うた。

□曝書 夏時、人の裸はだかになる時に書物も裸になる。それが曝書である。書物は裸にされて役立つもので、圖書館は圖書を裸にする設備である。併し多くの圖書は深く庫内に潜められて、實際裸になるものは甚だ少ない。四季日々夜々人手に渡つて翻へされるものは時好に投じた書物であつて、斯様なものは其の日々の翻閱が即ち曝書である。全體書物は赤裸になるのが其の使命で、深く珍藏されたり死藏されたりしては其の使命が没了されるのであるから、書物は赤裸の状態にあらねばならぬ。若し圖書館の書庫にある本が、時好に投じた本のやうに頻々と取出され、多くの手に翻閱さるゝとしたら、どんなに文化を裨けることであらうか。書物を愛藏する法に就ても、西洋ではどんな貴重なものでも箱や帙に入れず、剥き裸にして書架に列してをるのがよいとしてある。支那の有名な隨筆「徐氏筆精」に書物の取扱ひ法を書き、貴重な

圖書や書畫を物に包んだり箱に入れたりするのは危険状態に置くもので、眞の愛護法は剥き出しにして置くべきだと云うてゐるが、皆乾燥な風土の習俗である。日本のやうな濕氣の深い處には貴重書の愛護は特別の法に依らねばならぬが、それにしても赤裸にする機会が多いことが望ましい。書物を深窓の處女と同じ扱ひをすることは頗る間違つてゐる。

□裸樹 秋氣蕭瑟の候に際すれば、萬木大概葉を脱して赤裸々となる。多くの木は葉を脱すると甚だ見榮がせぬ。しかし其内に除外例があつて、葉の無い時の方が却つて一種の風致を爲すものもある。銀杏樹が葉を脱して亭々として晩秋の空に轟立するさまは、如何にも崇高な感を人に與へる。梅なども葉を脱すれば玉龍嘶天の趣があつて、獨特の風韻を發揮し來る。尙柿の樹。これは葉を着けた時は俗な木だが、秋風一過、一切の葉を捨て去ると、枝幹錯綜、さながらに支那文人大家の枯木の圖を見る様な趣がある。若し之れに配するに一群の寒鴉を以てしたら、立地に枯淡掬すべき畫趣をなすであらう。裸樹も亦味ふべきものである。

□裸字 有りふれた話であるが、文字も裸となつて角力を取ることがある。昔の雅談に、某所に謎のやうな字を書いた幅があつた。それは二虫と横に並べて書いたものである。二虫とばかりでは更に意味をなさぬ。趣味も何もない。然るに或る風流人が之を見て、一句贊を添へれば面白くなると云つて、直ちに筆を執つて俳句を題した。それは、

月と風裸になりて相撲とる

即ち風の外廓を取つて外せば虫となり、月の外廓を取り去れば二となる。二虫は風月を裸にしたのである。偶々此の二字が相對して居る所から相撲と見立てたのもよく利いてゐる。

□土井整牙 昔から磊落豪放な學者は鮮くない。しかし聖賢の書を講ずる時になると必らず容を改めると云ふが通則であつた。唯一人伊勢の土井整牙と云ふ學者は、暑中書を講ずる際はいつも赤裸々であつた。現に教へを受けた老人が其事を語つてゐる。一體此人は常に書物を講ずる時のみでなく、暑中は絶対に着物の要らぬ人であつたと云はれて居る。此人に就ては種々に變つた逸事の傳へられてゐる中で、最も奇抜なのは、曾て北堂が没した。それが恰も盛夏の

候であつた。親の喪に居るから此の場合だけは衣紋を正して居るであらうと思ふと大違ひ、矢張り例の如く赤裸々であつた。しかし弔問客の内には敬意を拂はねばならぬ人もあつたので、或る貴人のおとづれた時は流石に衣服を着けんと倉皇座を起つたが、位牌の前を過ぎる時一寸其前に跪き、禮拜して曰ふには、「無禮な有様であります、兒をお生みになつた時其儘の姿でありますればどうぞお許し下さい」と合掌した。先生の背後にあつた子息も矢張り赤裸々で、おとつさんのおつしやつた通りでありますと挨拶したと云ふ。此の先生、竹を畫くに得意であつた。或る時裸體のまゝ、廁より驅出し、立ちながら紙に跨り、亭々たる疎竹を畫いたが、尿汁が滴々紙上に點ずるのを平氣で書き了つて快を叫んだ。

□裸體美人の御注進 坂本龍馬が國事に奔走してゐる時分、身邊頗る危険な情態で、兎もすると刺客に遭ふ虞があつた。其頃の志士は皆血氣盛りで、宿屋の娘に慇懃を通じたものも少なくなかつた。坂本も亦其一人であつた。或る時宿屋の娘が入浴してゐると、槍を提げた捕吏の一隊がドヤ／＼と裏手から入つて來た。之れを風呂場で見た娘は、こは情人の一大事と身に一

絲を着ける暇もなく、御注進々々と走つて坂本の室へ飛び込んだので、爲めに坂本も助かつた。其後坂本の友人が井上馨に此話をするると井上は笑つて云ふには、吾々も随分危い目に遭つたが、裸體美人の御注進は羨ましいなと云つた。

□青崖の豪放

櫻間青崖、蟲を渡邊華山に學び、椿山と友とし善し。一日椿山、青崖を訪うて、戶外より居るかと思ふと聲をかけると、不在と云ふ。此の聲正に青崖なり。椿山密かに戸内を覗へば、青崖赤裸々にて坐せり。椿山早くも不在の故を覺り、臺所口に廻つて見れば、一枚の單衣、洗濯して竿頭にあり。椿山之れを外して内に投入れやり、兄尙不在なりと云ふやといふ。青崖倉皇投げ入れられた單衣を着し、「居ります〜」と連呼したとは、文苑に著名の逸話である。

□愛川と紅葉

亡友山田一郎（愛川）は、夏時如何なる處へ行つても、抵ね裸になつてゐる男であつた。或る時尾崎紅葉に會つて見たいと云ふから、日本橋の某酒樓に兩人を招き引合はした。時恰も盛暑の折柄で、愛川例に依つて眞裸となつてゐる。酒酣にして、席に侍つた妓が

紅葉に何か書いてくれと求めた。處が筆硯は直ちに辦じたが、色紙や短冊はなか〜テキバキ辦ぜぬ。紅葉もどかしがり、筆を執つて起つたと思ふと山田の背後へ廻り、墨くろ〜と一句を背面に題した。山田もさる者、妓に對つて曰ふやう、「此の色紙を宅へ持つて行け。そして大事にして置け。しかし此の色紙は朝も晩も酒を飲むぞ」と云うた。

□賀客を裸にす

追々愚談が交つて來るが、き眞面目の事ばかりでは肩が凝つて涼味がないからで、猶一二の莫迦話を挿入する。十返舎一九が例の「膝栗毛」を書いた頃は、遊戯的空氣が日本の社會一般を掩つた時代であつて、臨終にも洒落を云ふことなどは珍しくなかつた。そんな時分のことであるから、随分妙な話が多い。一月元旦の身顛ひする様な寒い時に、一九が年頭の賀客を丸裸にしたと云ふ話がある。一九は、除夜に近家から風呂釜を借りて來て、元旦に風呂を焚きつけた。ところで自分は廻禮に出掛けようにも、着のみ着の儘で、何とせんすべもない。折柄賀客が遣つて來たので、一九は打領きつ、先づ客に酒を侷め、其の辭退するのを強ひて風呂に入れた。一九は逸早く其の脱ぎ棄てた禮服を着用に及んで廻禮に出掛けたが、

弱つたのは客で、新年早々美ン事裸にされてしまつた。

□裸體の新婦 赤裸々で誰も思ひつきさうな話が「水滸傳」にある。「水滸傳」には裸體の豪傑が幾人も居る。中にも魯智深は愛嬌者である。桃花山と云ふ山奥に住む強盜の親分が桃花村の豪家の處女に懸想して、押しかけ掣とならんとする其夜、恰も魯が一夜の宿を借りて其家に泊り合はせたが、魯は内々事情を偵察して大に憤慨し、吾れ新婦の身代りとなりて其閨房に臥し、渠に一ト泡吹かしくれんづと窃に主人と謀し合せ、時刻を見計らひ銷金帳裏に入りて待つに、新郎、祝杯を舉げたる後、酣醉して房に入り来る。見れば室内暗黒で咫尺を辨せず、漸く寢所を探り當て、吾妹子はなぜ迎へないのだ、羞づかしいのであらうなどと獨語しつゝ、手を蚊帳内に差入れて探つて見ると、こは如何に、七尺に餘る巨漢の臥し居ることとて、寢臺一杯にはびこり、添へ臥すの餘地などある可きでない。試みに肚の邊を探ると、さながら金鐵の如く堅く、毛むくしやの胸の邊り、熊の皮に觸るゝが如くであるに、流石の新郎も一驚を喫し、倉皇避けんとする刹那、此の巨漢の金剛力に取り押へられ、先づ面部に一拳を喰ひ、散々の打

擲を受けたる騒ぎに、隨從の者共物音に驚き、追々馳せつけ、中に入らんとするを、魯智深、入れまじと戸外に出で來たるを見れば、身には寸布もつけぬ大坊主、傲然突つ立つて夜叉の如し。

□裸體の顔世御前 裸體と云ふと誰でも思ひ起すのは顔世御前の話である。顔世御前は「太平記」中の艶麗女性で、鹽谷高貞の妻である。浴室にある此の美人を高師直が垣間見て煩惱を起した一場の物語は、古來唄にうたはれ、歌舞伎に演ぜられ、繪に書かれて居る。曾て此筋を課題として名家が集つて歌を詠んだことがある。左に掲げる一篇はき眞面目な學者齋藤彦磨が妙に急所を書いてゐるので可笑味がある。

高師直鹽谷高貞の妻を浴室に見ると云ふことをよめる長歌並短歌 彦磨

三日月の、眉根ゆかしみ、咲く花の、ゑまひ戀しみ、赤根さす、晝にしなれば、目のまへに、佛たてり、墨染の、ゆふべになれば、ぬば玉の、夢に見ゆらく、我ながら、うたてくもあるか、人妻を、かく戀んやと、心にて、こゝろをいたく、諫むれど、心し我に、隨はず、いよ、戀しみ、堪へかねて、身もとに近く、仕ふてふ、まかたち(從婢)をしも、中立

に、頼みかたらひ、道引きて、教ふるまにま(儘に)、園ぬち(内)に、入りてかくりて(隠れ
て)、芦垣(ゆより)、垣間見すれば、はしきやし(美し)、我が思ふ人は、湯浴すと、衣脱ぎ
すて、淡雪の、白き膚に、くれなるの、濃染(こゑら)の下裳、紐ときて、湯けたまたける、姿を
し、見つ、しをれば、むらぎも(肺肝心底)の、心たましひ、失せ果て、身にし添はね
ば、生けりともなし

わぎいのち(我命)、をし(惜)けくもなし、はしきやし、

人妻ゆゑに、戀しぬ(死ぬ)らくも

□裸兵の敬禮

熱海にある衛戍病院に、坪内逍遙氏が懇意の軍醫がゐるので、それを訪問す
ると軍醫は、折角來られたから病院内を一覽あれと案内さるゝに任かせて各所を巡覽すると、
遂に浴場へ案内された。突如戸を開くと、十人許りの兵士が入浴中であつたので、彼等は敬禮
の爲め倉皇並んで直立して擧手の禮を施した。直立不動もよいが、恥部を前面にさらけ出す敬
禮には恐縮したと語つたことがある。私も先年大連に往つた時、豆粕の製造所へ案内されて一

覽した。豆を煮てそれを器械に壓搾する場所へ這入つた時は、場内に湯氣が濛々として咫尺も
辨じない位であつたが、目が少しく慣れて四方を見遣ると、そこに四五の人が立働いてゐた。
何れも支那人で、體格逞しく、皮膚の色は鐵の如くで、犢鼻褌も着けず全裸體でゐたのには、
焦熱地獄にでも行つたやうな氣がした。

□露佛

佛像も、奈良の大佛の如く、世界無比の者になると、之れを納めて置く佛殿を作る
に莫大の資を要し、實に容易ならぬものである。日本では崇敬の念から佛像を必らず堂宇の内
に置かねばならぬ様に思つて居るが、西洋諸國で銅像を野ざらしにして居る所から考へると、
銅で造つた佛像殊に大規模の者は堂宇の外に置き、露佛とするのがよい様である。奈良の大佛の
如き、ナマ中木造の殿堂の中に置いてあるから、火災に罹るのである。往昔兵燹に罹つた時は
胸部以上は熔けて失せ、今のは其後修補した者である。今後と雖も斯る災厄を繰り返さぬとも
言へぬ。若し赤裸に野天にさらし、露佛として置けば、永劫かゝる災禍に罹る氣遣ひが無い。
それのみならず、露佛として置けば、年経るに従ひ銅特有の老蒼の風味を發し、雅趣を生ずる

利もあり、又天を衝く大佛像が屹然として立ち、遠方からも仰ぎ見られる様になれば、崇高の感を一層大ならしめる益もある譯だ。豊太閣の作つた京都の方廣寺の大佛像なども、堂宇が無かつたら回祿の災ひを免かれたかも知れぬ。吾輩は大なる銅製の佛像に對し露佛説を主張せざるを得ぬ。

□裸體畫　今は裸體を賣り物にする職業婦人がある。畫家のアトリエには必らずモデルとなる婦人があつて、身體には一絲もつけてゐぬ。街頭の繪端書屋に於ても賣れ口のよいのは裸體婦人の繪である。従前浮世繪の内であブナ繪と唱へる如何はしい繪は、賣ることを許されなかつたが、今は警視廳も黙過してゐる。西洋畫の全裸體を許してゐる今日だから、アブナ繪を答める道理もない。實に裸體畫全盛の世の中である。全體裸體畫の本来本元は希臘である。希臘の風俗は半裸體であつて、有名な哲人アリストテレスも裸體で講義をやつたと云はれてゐる。斯る風俗であるから、彫刻にも繪畫にも裸人を材とするは敢て異むに足らぬ。殊に希臘美術は人間の理想美を發揮するに力めたので、筋肉曲線あらゆる人體の美を表現するに裸體を最もよ

しとしたのは無理はない。然るに裸體を習俗としない、國土に於ても、裸體畫を喜ぶのは何故であらうか。人間美の基礎は裸體にあると云ふは一應尤もであるが、美は兩性にあるのに、多く女性に偏するのは何故であらうか。西洋の禮法では、婦人の前に下向きの事を云ふを無禮としてゐる。それを犯せば婦人は赤面して坐を立つ程であるのに、歐米の文明國で婦人の裸體畫を麗々とパブリックの場所に掲げてゐるのは、婦人に對して無禮でないものであらうか。口で説けば無禮であり、圖にすれば無禮でないと云ふのは不可解である。兎角西洋には妙な撞着がある。そして一の遁辭は、藝術は除外だと云うてゐる。

□不本意の裸體　或る己むを得ざる事から裸體を餘儀なくさるゝことがいくらかもある。徴兵の検査や學校などで身體検査を行ふ場合に、裸體とならねばならぬことは手近く誰も知つて居る通りだ。安政の大地震が深夜に起つたので、睡眠中の男女が裸體で飛び出し、夜明けて婦人連がひどく困つたことなどは今の老人が時々談る所である。長州征伐の折、石州の濱田が長州勢に襲はれ、危急の場合に、濱田の松平侯の奥方は恰も入浴中であつたので、素破とばかり、

身體に一丝を纏ふ違もなく逃出されたと其の藩醫が語つてゐる。此等は皆數奇より餘儀なくされた裸體であるが、まだ他に人の氣のつかぬ強制的の裸體がある。それは監獄で監房より囚人を驅役場に出す場合に、監獄によりては一々衣體検査をなす煩ひを省かんため、凡べての囚人を全裸體にして出入せしめる。幾百千と云ふ裸人がぞろぞろ行列する有様は餘り體裁のよいもので無い。全體人間の身體には稀に種々の秘密が伏して居る。例へば乳は男女とも二つ左右に並列するものと極つて居るが、兎もすると犬や猫のその如く四個並列してゐるものもあり、男女兩性の生殖器を一人で兼ね具へて居るものもあり、又獸類の尻尾となつて居る所の脊髓の最下端は人間に於て突出せざるが例であるのに、此の部分がいくらか突出したりして居るなどは、男女に限らず往々にしてある。此等は皆身體の秘密で、人の見るを許さぬ所であるが、之れを見るの特權を有して居る者は獨り醫師である。

□交際の秘訣 地位高く權勢ある人に接すると、大概の人は先づ其の威風に吞まれるのが常である。人には天稟の品位威風の人を壓するものがあるに相違ないが、多くの場合に於て品位

威風よりも其の人の服裝や、居室や、身邊の裝飾や、其の倨傲の見幕や、奴僕の服從の態度などが手傳つて其の主人をエラクし、吾れ知らず吞まれて隠することになるものだ。若し其の人を赤裸々として考へて見たならばどうであらうか。即ち假りて以て富貴を粧ふあらゆる設備を取り去つて見たならばどうであらうか。吾れも人なり、彼れも人なりだ、さまで怯れ臆するにも及ぶまいではないか。世故に通じた或る人が、初對面の人に吞まれぬ秘訣として教へた數々の箇條の内に、人に面會を求めるに方り、先づ其の邸宅に入つたなら、ソート臺所の方を覗いて見よ。或は奥方が物質と魚や野菜の價を論じ争ふ聲が聞えたり、或は主人夫婦の禰が洗濯されて掛けてあつたり、子ある家には襦袢などが干されたりしてある。夫等を見ると、玄關は如何に厳しくとも、ナアーニと高をくゝる氣が起るものだと云うてゐる。これは約めて云ふと、其の人を赤裸々にして考へよと云ふ事に過ぎぬ。昔し志道軒と云ふ辻講談師が云うた様に、如何にエライ見幕の人でも、其の裏に廻つて見れば、内々妾宅へ通ふ者もあり、平生の嚴肅に似ず、閨房ではダランなく婦人に戯るゝもあり、裏から見れば、表のエラサは半減すると云うたが、人に吞まれぬ秘訣をよく道破してゐる。

□餘録 赤裸に關する逸話はまだいろいろとある。足利時代に相當身分のある家の娘が尼となつて、寺入りをすると、其の美貌に戀した僧があつて、それを五月蠅く感じた尼は、或る晴れの席に全裸體となつて場に現はれ出で、己れに戀慕してゐる僧の名を呼んで辱しめた慧春の事や、巖谷龍一が、つむじ曲りの富永冬樹をわざと浴場に延いて、裸體のまま、で應接して富永の向うを張つた逸話や、いづぞや坪内逍遙翁から聞いた、芝居の舞臺に風呂桶を上げて俳優の浴する實景を見せた事があると云ふ話なども、既刊の拙著隨筆中「意外録」に書いてある。皆赤裸に關する挿話であるから爰に參照に略記しておく。尙此他に風呂の研究に没頭してゐる、早稻田大學教授中桐確太郎氏からいづぞや示された古圖には、浴客が風呂の流し場に杯を舉げてゐる所が描かれてゐた。湯女が浴客の興を幫けた事實は誰れも知つてゐるが、流し場での酒宴は珍らしく思はれた。又山口縣令關口隆吉が萩の亂に身を以て僅かに脱した時には裸體で人夫に假裝したが、金時計を捨て去るに忍びず、それを憤鼻禪中に潜めたので、逃走の時に邪魔になつて困つた話など、書き漏らした挿話もいろいろとある。顧みれば近頃は赤裸大流行の時である。到る處の溫泉場が繁昌してゐるし、海水浴が盛つてゐるし、プールが設けられ、水泳が奨

勵されて、此のスポーツは國際競技ともなつて來たし、男女共に夏期と云はず全裸體若しくは部分裸體になる機會が甚だ多くなつて來た。其の間には種々珍なる挿話もあるであらうが、自分は何故か裸體になる事が性來嫌ひで、水泳を解せず海水浴も好まないで、近頃の裸體の消息には一向通じてゐない。随つて新らしい挿話を掲げることの出來ないのを甚だ遺憾とする。

訪書餘談

馬琴と北越雪譜

昭和二年八月に発行した拙著「隨筆春城六種」の内に、山東京山が鈴木牧之に與へた多くの書簡を寄せあつめて、京山が「北越雪譜」を二篇まで世に出した経歴を可なり長く書いたが、實は牧之は最初京傳に頼み、京傳が死んだので馬琴に頼み、馬琴は折角諾しながら幾年経つても手を下さないので、牧之も少しく焼け氣味になつて、山東京山に託すること、なつたのである。京山は京傳の弟で、兄が頼まれて果さなかつた仕事を引受けるのは因縁はあるやうなもの、馬琴に頼んであるものを横取りするやうな嫌ひがないでもない躊躇した。馬琴と京山とは、間柄が圓滿でもなかつた上に、馬琴は例のやかましやだから、どんな難題を持出さないと云へぬと、京山が思案したのも無理はなかつた。しかし幾年を経ても馬琴が手を下さないので

は約を食んだやうなものだから、京山も終に牧之の懇請を断りかねて擔當したのである。牧之は馬琴に對しては親類も管ならぬ交りもあつたので、京山に託することゝなつたに付て、馬琴がつむじを枉げぬやうにと懇勸に諒解を求めた。馬琴は内心快よく無かつたであらうが、否む譯にも行かなかつた。馬琴とても折角編纂を請合つた譯だから、材料等に就ては長い間牧之と交渉を遂げ、書物の標題から、材料の組合はせなどにも工夫を凝らしたことは事實で、馬琴の案がわるかつた譯では無かつた。書名の「北越雪譜」も馬琴の案を取つたのであるし、雪一點張りでは人を飽かせる虞れがあるから、越後の趣味ある挿話を取合はすべしと云うたのも、京山に大體採用されてゐる。されば「北越雪譜」は馬琴の手に成らなかつたとは云へ、馬琴は勿論門外漢でなかつた。

雪譜に就て馬琴が牧之に寄せた手紙も幾十通の多きに及び、どの手紙にも雪譜の事に言ひ及んでゐる。私は先年鈴木家から其の手紙を借り受け、特に雪譜に關する所を抄録したことがある。此頃偶々それを讀んで見ると、一昨年の私の隨筆に收めた「北越雪譜の出版さるゝまで」と題する記事の前記とするか、若くは補遺とするか、何れにしても参照に收めて置くべきもの

と氣が付いた。此等手紙の或る部分は寫されて雜誌などに載つたこともあつたと思ふが、鈴木家では近年原書を何れへか賣却したと聞いてもゐるので、今後必要を感じても寫しを求めることは不可能となつたから、旁々私の手に幾許か寫しのあるのを幸ひ、散逸しない内に印刷に附し置くべしとも考へた。馬琴の書簡は、事改めて云ふまでもなく、何事に就ても詳悉せざれば已まぬ概があつて、如何にも筆まめで、一讀興味を覺えるものが少なくない。さればこゝに収録して、私の隨筆に載せた北越雪譜の項を讀まれた人、又は讀まんとする人の爲めに參考に資せんとするは強ち無益の業でないと思ふ。尙馬琴は、牧之の紹介で小泉其明と交りを結び、此人とも往復してゐるが、此人は「越後全圖」「越後全圖並佐州圖」等を出版した名家で、其家に馬琴から寄せた幾通かの書簡が今も存してゐる。そして其の書簡の内容は皆雪譜の事に關してゐるから、それをも併せて收めることゝした。

尙馬琴の書簡を爰に引くに先だち、鈴木家から借り受けた書簡集に就て略記を要するものがある。此の書簡集一冊は、烏絲欄紙に認めた約二百枚をつゞつた厚いもので、卷首に牧之の序があつて、「子孫に示す」と題を置き、仔細に馬琴との交情を陳べてゐる。卷中の書簡は文政

元年中のもので、特に野紙に認めた者のみを冊子となせることが序の「はしがき」に載せてある。他の半切れなどに認めたものは多く反故となつて散佚したとあるが惜しいことだ。さるにても一年間の書状で此の冊子にある者だけでもなか／＼浩漣驚くべきもので、大概一回の書状は十二三枚、長きは二十枚にも及んでゐる。机上著作に寸暇をも惜しむ馬翁が牧之に對してはつとめたりと云ふべしだ。

此の書簡一冊の内容は、劈頭「北越雪譜」擔當承諾の事より始まり、毎信雪譜の事に言及せざるはなきも、他事に關するもの尤も多い。馬翁此頃五十二歳とあり、例の「玄同放言」著述に没頭せる前後にて、放言中の事を云々するもの多く、牧之より越後の奇聞を種々報じたるを放言中に入れんとして、これに關して往復したるもの少くない。京山の書簡を讀むとは趣を異にし、考證に關する者が甚だ多い。冊子の終りには馬琴が小禽飼養に腐心した名残りを留め、カナリヤの飼養法を十數枚に涉つて説き、お梅袖助年紀考や楠公書家訓の考證など、何れも數枚に涉つてゐる。馬翁の筆まめなること眞に驚き入る。併し流石に叙事がうまく、面白く、感ずる所も少からずある。例へば校合の面倒な事を細説する所や一九の爲人を評する所の如き、

又馬琴の盛名を聞き弟子入りを爲さんとする者に對し、いつも拒絶した事など、馬琴の傳を書くに必要な材料が少からずあれども、爰には主として雪譜に關した事のみを探ることにした。さて文政元年二月三十日發の書状の内に始めて牧之の依頼を諾したことが見えてゐる。

是より雪話の御こたえ

むかし雪中の事思召立せされ、京傳子へ御かけ合の後、彼人とかく埒明不申、既に出來もいたしかね候様子に付、野生方へ被仰下、著述可致様御たのみ候へども、京傳子とは懇意の事故、横合より引取候様に被存候もきのどくに存、及御斷候きざりき、然るにとかく京傳子にては出來不申に付、京都玉山遊歴の節是へ御かけ合、既に玉山著述いたさるべきつもり之處、彼人死去いたし候に付、是又晝餅に相成り、其後芙蓉子遊歴の節、亦復御かけ合被成候へば、是又御同意之處、歸府後芙蓉子も遠行に付、終に年來御苦心かひもなく、今に埒明不申よし、去年玄鶴様御物語逐一承知仕る、尙又此度もし野生著述もいたすべく哉と被仰下、右雪話の圖説あらまし御かき立の分、その外雪舟、橋、下駄等雛形共、一箱に被成被遣、委細御書中之趣承知、御風流御熱心のしからしむる事とは存ながら、さて／＼多年の御苦心萬事のほる

なき、落涙いたし候までに感佩仕候、つらく、事の因縁を按ずるに、最初京傳子埒明かね候に付、野生方へ被及御掛合候は、はや十六七年の昔なるべし、それより玉山、芙蓉と、だん／＼人はかはれども竟に成就する事なく、亦復野生方へその圖説、雛形等の、まわり／＼て來つる事、是天のしからしむるもの歟、京傳子既に黄泉の客となられ候へば、誰に遠慮いたすべきよしもなし、かくまで因縁ある事なれば、今は辭退すべきにあらず、いかにも御たのみに任せ、ともかくも可仕と存候也、乍去こ、に一つの愚存あり、只今此著述において三つの難儀あり、その一つは

圖會もの近年はすたり候て、都名所其外とも古板のみ少々づ、すり出し候へども、新物は出來不申、これ時節のおくれたる一つの難義也

その二つは

此書、大本十卷にもせずば、全部整ひ申まじく候、尤圖物多く候故、板元以外の外高金をかけ不申候ては出來ぬ事也、拙著著述に候は、ほり候板元は可有之候へ共、萬一出版の上捌さばおもしろからず、板元に損かけ候ては、大きに陰徳を傷り可申候、これ二つの難義也

その三つは

此書、あけてもくれても雪ばかりにてはめさきかはり不申候、觀るもの自然と倦可申候、殊に雪の畫はさみしきものにて、人氣を引起し候物にあらず、いつれ差略せねばならぬ事歟、これ三つの難義也

この三つの難義は板元の爲に量る所也、第一に作者の難義は、まづしらぬ國の事なれば虚實わからず、作者は盲人同様にて、手引まかせ也、かくては魂入らず、これ一つの難義也、又御しるし被遣候ま、に文章にとり直し認候は、さのみむつかしき事にはあらねど、かくてはよのつねの俗書なれば、末代まで世にのこらん事ある可らず、さてこれを和漢の書に引當て、故事、故實、古詩、古歌等を考あはせんには、容易なる著述にあらず、依之又愚按雪の事を專文にして、その間へさまざまなる奇談をまじへて人氣を引起すべき事、尤越後の湊々の遊女の圖説等、海邊竝に城下宿々も加入すべし、これいろ／＼と畫のかはらん爲也又近年、山海名産圖會、二十餘拜名所圖、閑田次筆、東遊記、北越奇談等に、雪舟の圖その外雪中の話くはしくは無之候へども、追々おあらはし出版いたし候事なれば、これらに

出たる分は説を存して圖を省き、或は圖を出して説を略すべし、かくせざれば二ノ町になる也

この他よく／＼考候はゞ、賣れる手段あるべし、板本の作者は書をつゞるのみにあらず、かく申せば自負に似てはづかしく候へ共、作者の用心は、第一に賣れる事を考、又板元の元入何程かゝる、何百部うねねば板代がかへらぬと申事、前廣まへひろより智勘定して、その年の紙の相場をよく／＼こゝろ得ねば、板元の爲にも身の爲にもなり不申候、これをばしらず、只作るものは素人の作者也、とかくその時々の人氣をはかり、雅俗の氣に入候様に軍配いたし候事也、餘人は知らず、野生は年來如此に心得罷在候

さて全部十卷にならば、五卷づゝ兩度に出版すべし、又五六卷にて全部におさまり候はゞ、尤大本にて一卷四十丁あまりの積一度に出版すべし、作者一卷づゝ藁本をわたし、追々に畫か、せ筆畹をか、せ候ても、ほり上りまでには五六年はかゝるべし、とても當年は此書の著述にとりかゝりがたかるべし、もし冬に到り、はやく手を明け候はゞ、筆をとり始むる歟、よしやそこまでに至らずとも、引書等追々考、下拵いたすべし、まづは來年よりと可被思召候、野生當年五十二

齡、さのみ老衰と申にはあらねど、年來の勞れにて氣力大におとろえ候へば、いつ比までに出來申すと申事は、只今は不被下候、しかれどもとりかゝり候様になり候へば、自然と出來る勢ひになり候へば、それは左のみ苦勞にならぬ事也

去年神田鍋町柏やと申書林より、何歟後々までも賣れ候品認め候様にとたのまれ居申候、これへかけ合候ても相談可仕候へども、この仁どはあまり手あつからぬ身上ゆゑ、おなじくはきつとしたる大書林へかけ合、思ふまゝに著述いたし度候、大阪書林河内屋大介は廿年來の懇意にて、これまで拙著夥ほり立也、右河太には、都名所圖會をはじめ、すべて圖會物は、皆河太の板に御座候、左候はゞこの河太にほらせ候へば、本がらも十分に出來可申、ゆくのく本の捌も宜敷候はんと存候、それは只今よりかけ合に及不申、まづ下書一冊出來の上、右之下書を以かけ合可申候

右之趣とくと御勘考、萬事天道に御まかせ竝に野生に御まかせ、四五ヶ年もかゝり可申事、いよ／＼御承知に候はゞ、引請著述可仕候、老子も輕諾寡信といへり、はじめよりかろ／＼しくうけあふものは、末の約遂ぬものに御座候、野生御うけ合申候においては、命だ

に候はゞ、いつか一度は本に可仕候、但し右の難澁は實に繕ひなき本面目にて、失禮をかへり見ず吐肝膽候事に御座候、よくく御勘考可被下候

かくまでに申事は何故ぞといふに、先日二見屋忠兵衛殿より御うはさ承り、貴君は仁慈を第一に被成候事、既に官廳の御沙汰に及び、前歳御褒美頂戴被成候よし及承候處、尙又今般の御狀に忍の一字を御守り可被成御志願のよし被仰下、前後符合いたし候、張公藝は九世同居とて、九代まで身代をわけず、みな同居せしと也、その源は子に教ゆるに忍の一字を第一とせしと申傳ふ、堪忍を守る事甚ながたき事にて、和漢賢良の人もなほこれを病り、況野生など生得痴性にて、なか／＼一日も忍を守り候事出来かね申候、實に一善をば賞すべし、失禮ながら貴むべき御人體と存候故、かくまで紙墨をつくし心事申述候事に御座候、誰々にもかくするとなおほしめし候ひそ

右雪話の御答をはんぬ

馬琴が牧之に與へた書簡は幾十通の多きものがあるけれども、「北越雪譜」の事に就て最も委曲の筆を揮つてゐるのは此の書狀である。著書出版に全く無經驗である牧之に、自家の經驗を

叙して、嚙んで含めるやうに細筆を揮つてゐるのは流石に馬琴である。殊に雪譜のごとき風土記に就て、當時江戸で出版されてゐるもの、諸書の狀況を細かに陳べてゐるあたりは、馬琴で無ければと思はる、節がある。文政五年戊寅五月十七日の書狀には、挿畫の事竝に書名のことかに付、左の如く牧之に申送つてゐる。

古人玉山は自然と板下の畫に妙を得たる人也、さして學問はなけれど才子なるべし、著述の事はいさ知らず、此人世にありて繪をたのみ野生著述いたし候はゞ、尤よろしかるべし、江戸にては、北齋の外、この畫をか、すべきものなし、乍去彼人はチトむつかしき仁故、久しく敬して遠ざけ、其後は何もたのみ不申、殊に畫料なども格別の高料故、板元もよろこび申まじく候、しからは誰と一人に定めず、東海道名所圖會のごとく、唐畫、浮世畫、そのムキ／＼にて、より合畫にいたさせ可申哉、これも畫師一人ならねば諸方のかげ合格別わづらはしく候へども、山水などは、江戸の浮世畫師の手際にゆく事にあらず、又婦人その外市人の形は、うき世繪によらねば損也、兩様をかねたるもの北齋のみなれども、右の意味合あれば、より合畫にて可致哉と存候事

右の一著述あらまし御認被遣候趣、直に綴り候へばさしてむつかしき事にはあらぬを、愚意の趣にすれば甚手おもし、所詮御地を一見せずには筆を起しがたかるべき歟と存候、乍去旅行之事は、前にも申候通り、三四五里の歩行も自由ならず、且諸費をいとはずといふ程の餘力も無之故、中々急には思ひ企がたきわざなれども、何とぞ明年、明々春までに、御す、めの湯治をかね、せめて御地を踏候て、その上にて著述いたし候はゞ、後悔もすくなく、筆も取りやすかるべく存候、この義はかく存候までを申也、わが身ながらわが自在にもなりかね候故申までにて、おぼつかなき事に御座候、今十年も昔に候へば、いか様にもなり候を、何事も時節おくれ、心のまゝに得ならず、これのみ残念之至に御座候、外題の事、いろく考見候處、北越雪中圖會などいたし候ては、只今圖會ものすたり候故、おかしからず、又北越雪話などいたし候ては外題かろく、わづか二三冊の半紙本めきて損也、又先年、北越奇談と申書世にあらはれ候へども、當地にては評判どつともいたし不申、北越の二字先を越され、今更人まねするやうにて残念也、依て

越後國雪中奇觀

と可致哉と存候へ共、雪中の二字いまだ落着不致様に存候、いづれ尙又近々の内とくと考、玄同放言奥目錄中へ右の外題をあらはし、その外追々拙著へ右之外題を書載せ、世の人々に知らせおき可申候、左候へばうり出しの節大につよみになり申候、尤越後鹽澤鈴木牧之考訂といたし申候、随分御骨折せられ、出版成就之節、御亡父様への御孝養にもと事存候に御座候、奇觀の二字は動くまじく存候、いかゞ、六出、玉屑、みな雪の事なれども、さでは俗へ遠くて損也、雪中の二字とくと考可申事

此の書簡で見ると、馬琴は實地を踏まざれば書き難しというて、例の自重の性質がほの見えてゐる。馬琴が折角請け合つて幾年を経ても筆を下さず、遂に出來ずに畢つたのは、自家の著作に忙がしかつた爲めもあらうが、自重性も相當に手傳つた事と想像せざるを得ぬ。尙馬琴が「北越雪譜」の書名を案出したのは、此の書簡を發してから後の事と思はる。其の子細は、同じ年の數月隔て、の書簡中に、雪譜の名を呼んで前便申せし通りとあるので分るが、其の雪譜の名を命じた時の書簡は散佚したと見えて、私の借覽した書簡集には漏れてゐた。

馬琴が校合に嚴密であつたことは隠れもないことだが、文政元年十二月十八日發の書狀の内

に、まだ編纂に取りかゝらないのに、校合の困難の事を委しく云うてゐる。

さて新板物の校合と申ものは甚うるさきものにて、工手寫人のしらぬ日を費し申候、素人作はこの校合別して等閑なれども、幸にしてよめぬといふ本はなし、不佞が作は、いかゞの事にや、とかくにほり崩され候様に存候、そのカケ、〇ケツ等、ひとつつゝに朱を入れ、わくの上へ書拔遣し候ても、十の物は三つ四つほか直り不申、又二番校合にて右のごとくいたし候へば、七つの物やうやく五つ斗になり申候、三番、四ばんと、だんくゝ直し候内、板を板ずり方へもち歩行、又板木屋方へ遣し、往來たびかさなり候内、新規のカケ出来、或はさし木にて直し候所はもろく候故、少しさはりてもかけ候故、三ばん、四ばんと直し候内、最初十の物が七つは直り候へども、又新規のカケ二つ三つ出来、或は二ばんにて直り候處も、三番直しの節見ればさし木をおしつぶし、元のごとくカケてある所もあり、わが作を毎日二三べんづ、よみかへし候故、果はあきくゝといたし、その本うり出し候比は、ふり向て見るもいやになり申候、此校合のくるしみは、新たに作り候よりほね折れ候へども、見物は一向しらぬこと也、著述は自己一人の手にていたし候故、しやすし、はや板下か、せ候ても、他の手にか

け候故、誤字、落字多く、氣に入らぬ事のみ也、それゝ又板木屋の手にかゝり、又彫刻後の直しは、一つの點にても、ひとつつゝに入木、さし木をする事故、直りかぬるも尤也、それを直させふくゝとするうち、根くらべにてつかれ果、且わが作はよめ過候故、誤字も落字も見はづして、わが書たるごとくによむ事多し、人の作は、ちよつと見てもあやまりを見つけ候へども、わが作は見つからぬものに御座候、これらの意味は、尙御存あるまじく哉と存候、雪譜は別して丁數もの故、只今よりこの校合が頭痛に候、さればとて校合しつけぬ未熟の仁には決してたのまれず、近來倅に校合のいたし方を見ならはせ、貳番三番末は倅に手傳はせ候得ども、それ將わが手づからいたし候様には無之、カケはよく直し候へども、或は句讀をほりおとせしには心つかず、或は誤字を見おとし候事往々有之、又不佞が見おとせしを、倅が見出し候も有之候、とにもかくにも校合はうるさくくるしきものに御座候、かく申候ても尙全くは御合點被成がたく哉と存、折から坐右に有之候校合本一冊進上仕候、これははつかに三冊の小本なれども、校合はいづれもおなじ事に御座候、抑この小冊は、當六月中急に出版いたし候、これは校合ずりなれども、全部揃ひ居候故、合巻にいたし、表紙をかけ置申候、

大夷評判記とは、拙作朝夷巡島記、里見八犬傳の評判をせしものに候、評者三枝園と申仁は伊勢松阪の豪家にて、殿村佐五平也、江戸大傳馬町にも兩替のかけ店あり、二三をあらそふ兩替屋也、主人は松坂屋住居にて、紀州様御金御用達を被爲命、松坂の宿老のよし、この人本居門人にて、和學者也、歌をよくよみ和書も多くよみて、一見識ある仁なるが、和漢の小説を好み、就中不佞がよみ本を珍重せられ、二十年來江戸出府のをりく來訪、その後しばし筆談にて無二の朋友になり候へども、風流文章のうへのみの交り也、この仁富家なれば、最初はふかくも交り不申候處、飽までしたはれ候故、段々とその志を見候處、富家ながら一見識ありて、米錢の事など口外せず、随分咄せる仁に候へば、年來他事なく交り候、此三枝園、たはぶれに拙作を評判せられしを、不佞は返答せしまで也、又樸亭金魚と申仁は右三枝園異母の弟にて、京四條の吳服店へ養子になり、俗名日野屋八郎兵衛と申候、この仁は和漢共に學力はたえてなけれど、戯作執心にて、先年不佞が弟子にしてくれと申され候へども、拙は弟子などとり候事大嫌ひ故、かたくことわり候へば、せめて琴の字でもゆるしてくれとて、舎兄もろとも懇望度かさなりし故、已むことを得ず表徳を琴魚と名つけ遣し候、不佞が

作の評判を不佞が手づから出版せんもをこがましく恥かしく候故、この琴魚の作にして出版、右評は三枝園、評の答述は不佞なるに、何分拙號を第一にせねば板元不承知ゆゑ、御らんのごとく書著申候、琴魚は先年窓螢餘譚といふ五冊もの、よみ本をあらはし、又來春も新作出版のよし告來り候、學問はなけれど、頗戯作の才ある仁に御座候、右朱だらけによし候校合本を進上仕候事、失敬至極に候へども、只校合の趣を入御覽候迄に御座候、本者をかしからぬもの、御熟讀迄もなく、引はなし火けし壺でも御張らせ候は、せめてもの事と奉存候

但右呈し候校合本は三番直しに御座候。壹番、貳番と直させ候ての後、あの位の物に御座候、いつまでも直りかぬるところ、これを御覽被成候て御合點可被下候、これらは戯たる冊子ゆゑ、よしや少しの直し落ありてもよし、隨筆などはこの格にあらず、校合入念候事此十倍也

校正難を説くこと斯くも精しいのは、それ等のことに無經驗である牧之に出版の容易でないことを教へたのであらうが、それに藉りて自家の自慢話も交つてゐるのは、此翁の特色とも

云ふべき歟。

尙馬琴の書簡中往々興味を感じる個所がいろいろある。「北越雪譜」に無關係のこともあるが、左に要點を掲げると、

- 一 牧之が馬琴に與へた書狀の内に燕商人とありたるを、馬琴、春秋去來の意と解して面白がり、其事を牧之へ申送ると、燕は地名であるとの答を得て興をさましたことが見えてゐる。
- 一 越後で誇る信濃川の鮭の鹽引を牧之より贈つた所、馬琴は水につけて鹽出しをせば生鮭を食ふの趣あらんと申遣したなどは一笑すべきである。
- 一 渡邊華山に美人を書かせ、それに馬琴が贊をして牧之に贈ると約した書狀もある。馬琴は華山に就て曰く、華山と申唐繪かき、倅同門にて、ことの外熱心の仁也、立同放言にも右の仁の繪二丁加入仕候、雪譜にも此仁にうつさせ候つもり、頼み置候とあり。
- 一 黒田玄鶴と云ふ越後の醫家は「火浣布攷」を著した人で、學殖があつた。牧之、此人の

「天命辨」を馬琴に贈りたるに、馬琴は其の學識を稱讃してゐる。

一 馬琴は雪譜の材料に頸城の雪を測る雪竿の事を取入れんとして、委しく調べて知らせよと牧之に乞うた所、——牧之は頸城方面の事は知らぬよし答へたので、馬琴は調査に冷淡だとツムジを曲げたが、實は雪竿というても特別のものがあるのではない。又馬琴は「越後名寄」を見ても一向雪の事がないと不足を云つてゐるが、越後に珍しからぬ雪の事を特に書かぬと云ふに氣が付かないのだ。

一 馬琴が京山に付て云々する一節がある。云く、京山子とも年來懇意に候へども、兄貴(京傳の事)とは少々氣質もちがひ候故、さのみ入懇にはいたし不申候、彼仁は世才にたけ候て、當坐をよくして人を喜ばせ候仁に御座候、當時の勢ひにて雪譜の著述などおもひもよらぬ事也と存候へども、まづちよととり合はせて、貴兄へ愛相にいたされ候事と被存候、これも極秘の事ながら、無腹藏申候、御他言は御無用可被下候と。此れ牧之が京山に雪譜著述の事を申入れた初期の馬琴の京山觀で、書中に閃々たる針が見えてゐる。

越後で曲亭馬琴と往復した家が鈴木家の外に他に一軒ある。それは小泉其明といふ人で、名は文恕、白水と號し、本姓は本間氏である。此人は越後地圖を出版したので知られてゐる。此の其明が牧之と交りがあつて、牧之が馬琴に此人を推奨して紹介したのが機縁となり、しばしば文通の往復をする端を開いた。其明の子蒼軒の孫に當る本間氏弘と云ふ人は自分の熟知の人で、其の家に傳はる馬琴の書簡四五通の寫しを獲たことがある。其の書簡の中に「北越雪譜」の事、牧之に就ての評、蒼軒が馬琴の門人たらんことを欲して馬琴の辭したことなどが委しく書いてある。書簡には年號を缺いてゐるが、文政の末年であることが略々分つてゐる。偕て牧之との關係並に雪譜の件に付其明に材料の供給を頼んだ條に、

一牧之子とは數年文通いたし候處、彼仁無據たのまれ、殊に先年より、いろくわけ合も無據事に付、越後雪譜と申書著し候つもりに相成候義はかねて御承知之段、文略いたし候、右に付貴家御父子様は年來越後地圖御あみたて被成候に付、御穿鑿拔群のよし、牧之子噂にて粗承知之上、先達而御惠被成候地圖拜閱、且此度委曲被仰下候に付、いよく甘心不少候、右に付雪譜に入用之品々、御心付被成候分は、御資被下候様奉願候處、今般越後

碑銘集一冊并新潟地圖御惠み被下、千萬忝仕合奉存候、云々

牧之よりも其明に重きを置いてゐる様子がありく、と見える。入門の事に就ては、

一唐柳が辭に做ふとはあらねど、拙者事弟子とりいたし不申趣、牧之子御承知には候へども、御懇望之由にて入門被成度趣御示之條、御厚篤之義承知、何とも迷惑仕候、弟子とりを致さぬと申事、一わたり御聞被成候ては、いな事の様にも可被思召候、依之不省失敬

愚衷を述候、御他言御無用可被下候

と前文があつて、例のごとく縷々陳べてゐるけれども、他の馬琴の手紙にあるのと大同小異であるから、それは省略して、牧之の疎漏であることに慊焉である情を漏らして左の如く云うてゐる。

一放言へ田代七ツがま加入いたし候様、牧之子噂にて御承知被成候處、七ツ釜彼仁圖し候は不宜候に付、御尊父様より御寫し可被下哉之旨忝奉存候、七ツ釜は雪譜へ加入いたし候事にて、放言へは加入いたし不申候、雪譜著述にとりかゝり候節は、何分眞景に御圖可被下候様奉願候、彼仁とかく兪忽之辭有之様に存られ候へば、安心不致候、放言へは上州の兩

山の不二を加入いたし候、右兩山はリヤウヤマと唱候よし、これも牧之子假名つけずに認被差越候故、リヤウヤマをフタヤマとかなつけ、出版之上、右之非を被申越、迷惑いたし候事に御座候、右兩山之圖并銅堂及神前の掛鏡佛像等、あらく牧之より圖して被差越候へども、牧之子が彼山へ登り候には無之、人の口々聞候を寫し候へども、書中には牧之が登山せし趣にしてくれと内々被申越候、乍去地理は間違有之候ては傍難遁れがたく候故、甚不安心に候、もし其御父子様、右兩山へ御登り被成候事も有之候歟、或は眞景の寫し御所持に候はゞ、御惠み被下度奉願候、御尊父様御筆にて見わたし一頁の右之眞圖を御認被下、又一頁の銅堂の眞圖と神前掛鏡の眞圖を御寫し被下候はゞ、そのま、板下にいたさせ、御名を後につたへ申度候、尤來早春までにて宜敷候、其外北越の海獸一つは海坊主の類として、一つは海類之類、牧之子より圖して被指越、何分放言の加入いたし候様被申候に付、まづ取あへず總目錄に出しおき候へ共、再考いたし候へば、彼魚之圖どもは牧之子のあたり見てその時寫しおかれしにもあらず、後に人のいふがまに筆に任せ被圖候物故、定めて間違可有之候、しかればその圖を著候ては傍難脱がたく可有之哉、さばれ總目錄に出しおき候故、今

更除去り候事もいたしがたく候間、唯その魚の噂をかく書あらはし候て、圖は出し不申方可然哉と存候、もし右之魚之寫眞御所持に候はゞ、御見せ被下候様奉願候、よしや御所持に無之とも、御懇意中に所持之仁有之候はゞ、御寫とり可被下候、外に寫眞の圖なきににおいては、右之魚の圖は出板いたすまじく存候、六尺雷獸之圖など、誠に牧之子の爲めにあらはし候へども、圖説とも追々に間違多く、三度認被指越候へば、三度まちがひ有之候、尤右雷獸は虚談を承知にてあらはし候へば、いづれにても宜敷候へども、さすがに地圖など間違有之候ては、尤遺憾之事に候

但、此一條、鈴木氏はさら也、御懇意中へも御噂御無用、御秘し可被下候、尤他聞を憚り申候、あなかしこ

此の書狀に放言とあるは馬琴の隨筆「立同放言」をさしたのである。馬琴の性格、杜撰つづを忌むことが如何にも甚だしく、牧之に對し常にあきたらなかつたかの裏面が、こゝに明かに表白されてある。

其明の著した地圖が絶版の厄に遇つたことに就て、馬琴は次ぎの手紙で頗る同情を寄せてゐ

るが、僅かの訛謬の爲めに絶版を命ぜられた譯ではなく、寧ろ其明の圖が餘りに精細であつた爲めに却つて忌まれたのである。當時、地圖や地理書で、精細である爲めに絶版された例はいくらもある。馬琴はそれに氣がつかかなかつたのである。

一先達而御投惠被下候御著書越後名寄初篇并略圖之内、少々訛謬有之よしにて御示し被下、委細致承知候、著述はとかく誤りあるものにて、ゆめく御不穿鑿故とは不奉存候、拙者など、いつもせはしく著述致候故、尤誤多く、後悔のみに候、既に放言初編にも、誤字或は點のつけちがひなど、清書之節にあやまれ候も不少、追々見出し、後悔いたし候、いさ、かのあやまりを、とやかく難じ候は著述をせぬ人のさかしらにて、作者の苦心をしらぬ故也、書の巧拙はその作者の事業にある事にて、少々あやまりはありとも、ふかく咎むべき事にあらずと存候、但此度は教諭にて發明いたした候、地理は他郷の人のしらぬ事なれども、その他の人は小兒もあやまりを難じ申候半歟、其よし後編に補正被成候は、子細も無之事ながら、右圖并書とも、御地頭絶板被仰付候よし、尤遺憾の事に候、御苦心あだになり候事、いかゞのわけ合に候哉、うち驚る、までに候、しかる上は當夏御めぐ

み被下候圖并に道しるべ、ますく秘藏可致候

文政七年五月の書中には、宗伯、老妻、二人の娘まで病氣の事を巨細に報じ、女に養子を迎へたる事をも報じてゐる。

拙者方長女に聲養子新六と申ものを取り合せ、三月中婚姻致させ、四月中家督を譲わたし、名前も新六に瀧澤清右衛門と名のらせ、拙者事は笠翁と改名いたし、剃髪いたし候て、四月下旬より神田明神下憚瀧澤宗伯方へ隠居いたし罷在候、尤飯田町宅よりも日々便り有之候間、いづれへ成とも御書狀被遣候へば、早速届申候、くれ竹のよを捨るにはあらねども、年來のつかれにやよりけん、髪の毛ちぎれ、たぶさ細りて、もとゆひのとゞきかぬるを、あぶらこちたく物するがいといぶせくもわづらはしさに、この五月のはじめつかたにかうべをなんそりまらめて、さてよめりける

五十八齡

瀧澤笠翁

雪に乗る越路もおのがしらかみも

訪書餘談

とり捨てこそ夏はすみよき

御地の雪車を剃りにかけてよみいだし候ま、待御一笑候、又

くれ竹のよをわたしたり鶯の

老をやしなふ藪にかくれん

悴は醫師なるに同居し候へば、藪にかくるゝとはよみて候、御一笑ノ、

馬琴は、一家の内事を知らせるまでに其明に許してゐたことが、此の手紙で知れる。

以上の書簡は「北越雪譜」編纂の経緯にも聊か關係があるから爰に收めたのであるが、馬琴の傳を書く人にも多少の材料となるであらうと思ふ。

早稻田大學の二大奇書

早稻田大學圖書館の誇とする二大奇書は、古鈔本禮記子本疏義と、古鈔本玉篇とである。此の二書は共に田中光顯伯の寄贈に係り、頗る貴重希覯のものである。

さて第一の禮記子本疏義は、もと法隆寺の舊藏で、卷尾の上頭に「内家私印」の印が捺してある。此の印は光明皇后の印と傳へられてゐるから、恐らくは皇后の手澤本で寺へ寄進されたものであらう。往年此書が下谷池之端の琳琅閣に現はれた時、支那公使黎庶昌はしきりに古書漁りをしてゐたので、琳琅閣に此書を一覽して食指動いた。それも其筈、此書は早く支那に亡びて僅かに「隋書」に目錄だけ存するものであるから、之れを見て驚いたに相違ない。そして翌日更に書肆を訪うて、購ふ積りであつたと云ふが、其頃或る有識の學僧が毎日此の書肆を訪ふを例としたが、此書を見て、若しこれが外國に持去らるゝことがあつては甚だ遺憾だと、直ちに田中伯へ驅けつけて買はせたので、幸に日本に留め得たのである。黎公使は果して翌日購求の爲め書肆を訪うたが遅かつたので、ひどく失望したと聞いている。偕て此書が田中伯の手に歸してから、コロタイプ版に複製されて同好に頒たれたことがある。私は其頃早稻田の圖書館にゐたので、田中伯に書を寄せて複製本の寄贈を請うた處、伯は一通の書狀を添へて無難作に本書を贈られたので、私は一驚を喫した。伯の書狀には、これほどの希覯書は圖書館に於てこそ長く保存も出来る、自分の手に在つては散佚せぬに限らぬから寄贈するとあつた。私は此

時ほど喜んだことは無かつた。驚喜と云ふ語は、コンな場合に用ゐる言葉であらうとしみじく感じた。本書の解題は嘗て圖書雜誌の爲めに「六朝寫本禮記子本疏義」と題して記したことがある。乃ちそれを左に掲げる。

本書は首部を缺き、書名撰者共に不明なれども、卷尾に「喪服小記子本疏義第五十九」とあるが故に、書名はおのづから明かなり。撰者に就ては、此の書中「灼案」の字數個所にあり、依つて「陳書」を案するに、鄭灼の傳を收む。それに據れば、灼少にして業を皇侃に受け、尤も三禮に明かなり、家貧にして義疏を鈔し、日を以て夜に繼ぐとあり。これに據つて知る、灼は其の師皇侃の義疏を鈔するに當り、増益する所ありたることを。

皇侃は六朝の人にて、其の著述は早く支那に亡び、僅かに諸書に其の書名を存するのみ。而して日本に於て却つて其の著書存在す。此書の如きは即ち其一なり。「日本國見在書目」には、禮記子本義疏、百卷、梁國子助教皇侃撰とあり。「信西藏書目錄」には、禮記子本疏兩帙、一帙欠第八卷、二帙欠第四卷と記せり。疏義を義疏となす異同はあれども同一になるべく、一時日本に全部傳はりたること、以て知るべし。卷數に就ては、支那の書目にも甚だ區々に

て何れに據つて可なるを知らず。然れども此書其中の一なること、疑を容るゝの餘地なし。而して筆者を鄭灼それ自身となすは羅振玉其人とす。氏は先づ用紙を検して、唐代の麻紙の滑澤堅厚にして褐色又は深黄なるに似ず、これは紙質鬆にして薄色竊黄、西陲出土の六朝人書卷の紙と同じと斷じ、書體に就ても六朝の特徴ありとして、陳隋唐諸帝の諱を避けざるを六朝人手書の證とし、終に此卷或は灼の手書かと云へり。此の推定の不當にあらずと思はる所以は、本卷に少からず塗沫あり、皆普通寫字生輩の爲し得ざる所にして、明かに撰者原稿の面目を存するが故也。

「玉篇」は梁の顧野王が大同年間に撰んだもので、支那本國では早く散佚してゐるが、此の田中伯寄贈の早大本は唐代の筆寫に係り、支那の好書家が垂涎措かざる所のものである。「玉篇」はもと三十卷あり、早稻田に藏するものは其の一部分である。則ち第九の殘卷で、言部に起り幸部に訖つてゐる。惜しいかな、中間冊より欠に至る五部を缺いてゐるけれども、其の含む所、二十三部に亘り、高さ七寸二分、廣さ八分七厘、九分等の鳥絲欄に寫したもので、總長さ五丈四尺二寸五分に及び、或る四五の好書家に藏さるゝ殘卷に比すれば、最も字數豊富で字も大き

く且つ適勁である。

今此の巻の解題と由来を記すに先だち、便宜上各所に蔵する姉妹巻の一表を左に掲げる。

現在古鈔原本玉篇一覽表

卷	部	字	數量	背記	所藏者	參攷
第九	言至幸。廿三	論至執	六百十九行三十紙	治安元年寫金剛界私記	早大圖書館	丙辰雪堂影印
第十八之後分	右中開册至欠。五	嗣至款	六十八行		福井崇蘭館	丁巳雪堂影印
第十九	水	冷至涼	廿六行		柏木探古	明治壬午探古影印
同	水	灌至洗	百廿七行		東大寺尊勝院	此院佛書以外ノ圖書ハ近年其庫ト與ニ正倉院ノ域内ニ移サル

同	水	殘卷	大阪藤田氏		
第廿二	山至岳。十四	山至參	完	皇太神宮禰宜譜圖帳 神宮文庫○荒木田神主舊藏	明治丙申神宮司廳摹刻
第廿四	魚	殘字十三行尺許	丹波大福光寺?		丁巳雪堂影印
第廿七	糸	卷首至續三百九十八行	高山寺	明惠上人ノ書畫	國寶丙種○明治癸未印刷局影印○丁巳雪堂影印
同	糸至索。七	經至卷尾	石山寺	延長四年寫如意輪陀羅尼	國寶丙種○丁巳雪堂影印○近藤正齋嘗テ展卷影鈔ス

此書の殘卷が散じて各家の秘笈に屬して居る狀は、凡そ右表に依つて見らるゝであらう。今特に早大本に就て案ずるに、本巻が世の注意を惹いたのは極めて近い事で、曾て京都の書賣の手に在つた時、或る少數の好書家の注意を惹いたけれども、研究は十分ならず、唯紙背の寫經の年紀より推して古寫なる可きを云ひ、或は漠然千年以上の物と云うたに過ぎなかつた。然るに大正四年雪堂羅振玉が早稻田より此巻を借りて、必然初唐人の筆と審定し、之れを影印に附

してから、斯界の注意を惹くこと、なつた。

本書の傳來に就ては紙背の經文に就て案ずるの外に方便がない。紙背には「金剛界私記」が書寫されてゐて、其の識語に治安元年八月廿八日以石泉御本寫之已了とあるが、石泉は台密九流の一である。更に此の識語を二寸二分許隔て、下部に康平六年七月於平等院奉受此訖……佛子快算と細書せる一跋がある。是れは快算なる者が治安元年を距ること四十三年後に右私記を傳へたことを謂ふのであつて、平等院とは蓋し宇治の平等院を指すのであらう。此等に就て案ずるに、本卷は、他の此種の圖籍の傳來に見るが如くに、入唐留學の僧徒に由りて將來され、平城若くは平安の寺院に藏せられしが、以上の二跋に據つて中昔の比京洛台門の寺院に在りしことを確め得るのである。偶々紙背に佛典があつた故に、相應に寺に護持されたのが、江戸の末世には流轉して洛中の一書肆の手に落ちた。文化三年六月、伊澤蘭軒が京都の書肆錢屋惣四郎方に、古物數種と共に此卷を見た事を「長崎紀行」の内に記し、紙背の寫經のことにも及んでゐる。中間の喪失した事情は分明しないが、別表崇蘭館本なるものは正しく其の中間の一部に屬すると思はる。

俗て此の卷が其後如何になりしやの經路については分明しないが、明治維新前後、秋月藩の文學礖信藏と云ふ人の方へ一僧が此卷を携帶して來たのを信藏が見て、其の希世の書なるに驚き、購うて之れを珍藏し、明治六年秋月暴動の時に礖は事に坐して自裁したるが、其際も遺命して此書を護持すべきを以てしたと云はれてゐる。礖は藤森天山の門人で川田壘江と同窓の好みもある所から、子孫は遺命を重んじて川田に保管を託して置いたのが、明治三十九年、田中青山伯の手に歸し、大正三年十一月、遂に早稻田の圖書館に寄贈されたのである。

書畫圖書の複製に就て

摸倣も藝術の一科で、物を摸倣することは何れの國にも行はれてゐる。天下一品と云はる、寶器は、事實惟一無二で、それが賣り物とならない限りは、いくら望をかけても手には入らぬ。どうあつてもその慾望の幾分を充たしたいとあれば、その物を摸して、せめての心遣りに満足するの外はない。そこで摸倣が必要となる。その摸倣に就ては種々の名がある。普通は寫しと

云うてゐるが、物柄によりいろ／＼の名がある。副本、摸本、影本、臨摸、勾勒、覆刻などさまざまあるが、多くは書畫、金石、圖書に就て用ゐる語である。近頃は複製といふ言葉が用ゐられ、西洋のコピーと云ふ字に充て、あるが、副本の方が寧ろコピーの譯語としてふさはしいであらう。摸作の物柄は書畫、マニスクリプト(文書)、書籍、器具にも及び、更に建築並に其の附屬物にも及ぶから、其の範圍は甚だ廣い。茶の流行時代には古器物が重んぜられたので、唐物からもの寫しの技術は殆んど極致に達した。建築の摸造は茶室などに多く行はれ、附屬物の内には石燈籠の類を例に擧げ得よう。保護建造物なども、年を経ると追々腐朽に赴くから、一部若くは全部摸築することが現に行はれてゐる。又此等建造物に附屬する壁畫のやうなものも、剥落するとなると、それを原畫通りに修補することも今行はれてゐる。

あらゆる方面の摸作に就て云ふことは餘りに廣汎に過ぎるから、主として書畫圖書の類に就て聊か陳べて見たい。

副本を作ることとは昔しから行はれてゐて、其目的は原物を保護するにあつたやうだ。天下の寶器を頻繁に出し入れすることは汚損破壊喪失等の虞れがあるから、副本を作つて、それで間に合はせるのも原物保護の一方便である。或は又萬一の罹災を慮り、原物の亡失を豫想して副本を作つた場合もある。大切な記録、系圖などの類に副本のあるのは、抵ねこの用意から發してゐる。勿論、或る趣味慾を満たす爲めに、希觀のものを摸して愛玩した例も少からずある。又畫家や工藝家が、研究資料にと名畫の粉本を作つたり、古刹の壁畫や繪卷などを摸したことも珍らしくない。そして此等が案外後世に役立つ例もかす／＼ある。不幸、原物が亡びて、其摸本のみが僅かに天地間に止まつた場合には、何人も其摸本の貴さを認めるであらう。法隆寺の壁畫は、今こそ嚴重に保護されてゐるけれども、久しい間放擲されてあつた爲めに剝落が甚しい。いつぞや幕末頃に或る畫家が寫した摸本を見たことがあるが、それと今日の壁畫を照合して見ると、百年も経たない内に餘程剥落して、摸本には今朦朧としてゐる所が鮮明であつたり、今痕跡を留めない所が摸本に存してゐたりして、少からず相違のあることを發見したが、斯る變化のあることを思ふと、如何に副本が大切であるかを感じない譯にはゆかぬ。保護建造物の裝飾畫などで雨風にさらされてゐる所は、剥落が別して早く且つ甚しい。それを修理復舊する爲めの用意としても、摸本を最初から作り置くの必要がある。

摸作は右のごとき必要から古く行はれたけれども、摸倣藝術がどんなものであつたか、恐らく今日ほど進んでるなかつたであらう。勿論、後段に説くごとく、或る不正の目的で古筆其他の書畫を作つた中には巧みな摸倣があつたに相違ないが、それすら今日の進歩した複製とは較べものにならない程の逕庭があつたと思ふ。茶に關する器具などは摸倣に丹精を凝した結果、原作の眞を亂り、或は原作を駕するやうなものも出來たのは事實である。併し物に依つては到底十分の摸作が出來なかつた。例へば漢鏡の如きものは、皮相の摸倣は出來たにしても、金の質までも同一ならしめることは企て及ばなかつた。而るに今は其の質までも摸し得ることになつたから、化學の力に依る摸倣は昔人の夢想せざる所である。比較的近世になつて多くの好事家が出て、文書類や法帖などに力を籠めて、幾分の發達を見た例は一々列擧も出來ないが、伊勢の韓天壽が佳刻の法帖を得たい餘りに、家産を傾ける迄に自から法帖を刻したなどは、如何に精佳の摸本に重きを置いたか、窺はゞる。狩谷棧齋が道風の筆蹟の斷片を木彫に附し、其の筆意の纖微までも失ふまいと苦心し、其の拓本に題して、これ原物の次で法帖の上だと誇つたが、なか／＼摸本に苦心した人が少なくない。随つて日本法帖、日本古印譜、集古圖譜、(集

古十種の如き)古筆鑑の如きもので、精巧の摸本の出來たのは一にして足らない。終には西村兼文の如きものが生れて、多くの古文書を摸作し、良辨の紺紙金泥の心經などを摸作して人を釣るに至つたが、要するに、此等は皆比較的近頃の發達である。

摸本を作ることが往々邪徑に入り、人を欺くの具に供せらるゝ。何れも摸本は摸本だが、それが詐欺の目的で作られ、又詐欺の用に供せらるゝとなると、茲に贋物の名がつく。贋物は偽物で、不純のものとなるので、人に厭氣を感じしめる。贋物を玩ぶことは人格や體面にも關し、人は之れを恥ぢるから、人に依つては身邊に置くことすら快としない。是に於て、百圓千圓に買つたものでも二束三文のものと成り了るのである。随分贋物の中には眞を亂るほどのものもある。いつぞや大雅堂の人物を畫した雙幅を賣りに來たものがある。如何にもよい幅であつたが、贋作だから買はなかつたけれども、これが若し副本であつて、摸者の名でもあつたら慈しいものだ、窃かに歎息したことがある。落款までチャンと偽造してあるから、之れをコピーとして珍重する譯にゆかないのである。若し我國に古くから外國のやうにコピーを重んずる風があつたならば、恐らく贋作は餘り威力を揮はなかつたであらう。如何せん、鑑識のない

ものが矢鱈名品を欲しがるから、それに乗じて贋物が盛んに行はれ、所謂る仕込物しこものと云ふが大袈裟に造られて、美術界は詐欺品を以て溢れてゐる。摸本が正物と同じ價で賣れるとあつては贋物を作る技術も進む筈で、我國の既往に相當摸倣藝術に發達があつたとすれば、お恥かしい話だが、それは人を欺く爲めの發達と謂はざるを得ないのである。

圖書の覆刻も古くから行はれてゐる。足利時代に、五山の寺々では支那の宋元の版本を覆刻して多く流布した。寺での覆刻だが、佛書ばかりでなく、儒書、詩文、字書の類に至るまで夥しく覆刻された。徳川期に入つては、勿論官私に覆刻されたものが頗る多く、中に和本も少からずある。併し私共が今いふ複製とはおのづから異つた趣があつた。其頃の覆刻には、内容に多少の抜きさしがあつたり、或は書名を替へたり、舊序跋を削つて新序跋を附したり、刊年や出版者の名を變改したり、刻も原刻を必らず踏襲するでなく、紙や表紙なども原書と違つても頓着しないと云ふやうな譯で、多くは新版を標榜し、舊板の覆刻を寧ろ隠さんとして種々の小細工をやつたものもある。即ち當時の覆刻は流布本を作るの簡便法に過ぎなかつたと云ふが本當であらう。古版本を尊ぶ風は、當時或る少數の好事家の間にこそあつたが、一般には其の好

尚もなく、又副本を副本として珍重することなどは勿論なかつた。それに書畫の類とは違つて貴重價が附されるでも無かつたから、割合に圖書の複製術は進まなかつたのである。併し此方面に餘り贋物の無いのは仕合である。

既往の圖書の複製は大略上陳の如くであるが、嚴格にコピーと云へば、徹底的に原物と同一で無ければならぬ。古書の如きは、飽くまで古書の面目が存してゐねばならず、内容は一行一字たりとも抜き差しは許されぬ。原書に若し誤があつても、それすらも直してはならぬ。蠹食のある場合は、可成別本に據りそれを補ふべきではあるが、別本が得難い場合には蠹食を其儘に刻さねばならぬ。刻法も、古書には時代の特徴がある。素人は辨じかねるが、其職のものには分ることだから、原書の通りの刻法に據らねばならぬ。出來得ることなら、時代のさびもあつて欲しい。挿繪の繪の具が褪色してゐれば、褪色其儘に摸さねばならぬ。表紙は勿論、とが絲の微に至るまで原書そつくりでなければ、精なるコピーと云ふことが出來ないのである。要するに、嚴正の複製には變改省略は絶対に許されないのである。

以上は板本に就て云うたのだが、寫本でも同様である。今日は寫本の複製にコロタイプ版や

オフセット版を應用してゐるが、毛筆の味がそれよりもよく出るならば、彫刻であつても妨げはない。寫本の複製が原書の眞を亂るまでに進んだのは近年の誇りである。田中親美氏が、幾多の歳月を費しての複製「三十六人家集」の如き大作は眞に驚異と云ふべきで、あれほどの古筆、又其の用紙に多様の意匠や文様のあるものを、纖毫も違はず複製するに至つては、複製の極致に達したと云ふも謬言であるまい。複製本を輕んじてはならないことは此の「三十六人家集」を手によれば恐らく何人も首肯するであらう。近年寫眞術が版刻や臨摸にも應用さるゝことになつて、技術は一層進んできた。光筆版と唱へる、書畫の摸本の如きは、眞蹟と殆んど見分けがつかない位に出來てゐて、どんな巧妙な贋物でも之れに及ぶものはない。此頃或る處で貫之の歌切の複製されたものと、原本とを併せて示されたが、どうしても檢別が出來かねて兜を脱いだ。副本も爰に到れば幾んど原本と選ぶ所がない。設令ひ金錢上の價に大なる差があらうとも、藝術上の距離は殆んど無くなつてゐる。精なる副本は原本に次いで貴ばねばならぬ筈のものであるのに、其の新らしく出來たと云ふので輕んずるのは甚だ不合理である。但し複製はどこまでも複製であるから、明らさまに複製であることを云うて、贋物偽物と區別せねばならぬ。

實は原物と争うて其學を摩する處にコピーの誇りがあるのである。

兎角日本に於ては今猶贋作の多いのに苦しみつゝあるのに、何故かコピーを貴ぶ風が起らない。副本だと云へば、どんなによいものでも、直ちにさけすむ風がある。實は間違つた話である。副本とても原本の眞を亂るまでに作られてゐるとすれば、原物を喜ぶの心を以て之れを喜ぶべきではあるまいか。昔しは新板を喜び今は時代味のあるのを喜ぶ。昔しの覆刻なれば珍重するのも實は時代味を重んずるのであつて、多少の理はあるのだが、一概に時代味に重きを置き、今日のに較べると頗る粗笨で、原物を髣髴しないやうな覆刻本を珍重するなどは不合理と謂はざるを得ぬ。全體、精なる複製は無難作に出來るものでない。西洋でミケラアンジェロの傑作を摸するには畫界の第一人者が大努力をする。畢竟、コピーを重んずる習慣があるから、精なるコピーを得るためには決して散財を辭せないのである。勿論彼等はコピーとして之れを喜び之れを珍とするのである。實は藝術賞鑑の本義から云ふと、西洋の習俗が合理的であるのだ。強ひて得可からざる物に望をかけ、贋作で欺かれて己が無識を明るみへさらけ出すなどは恥づべきである。日本の鑑賞は藝術の鑑賞ではなく、希觀物の慾求が元となつて鑑賞など

はないのだ。其物の來歴や作者の落款に重きを置く事は一概に排すべきでもないが、餘りに重きを置き過ぎてゐるのも一つの弊であつて、コピーの重んぜられない原因も亦爰に存してゐる。

三十六人家集

西本願寺の寶物として有名な「三十六人家集」の内、伊勢集、貫之集の二部が六十二萬圓の金に換はつて、數月前本願寺の手を離れて、三十數人の富豪の手に歸した。無論、手鑑同様、離ればなれに分割されたのである。これに對し識者から非難が起り、阻止運動もあつたが、遂に其功を奏しなかつた。

此の歌集の來歴は世に知れてゐるから委しく言ふ迄もないが、もとは帝室の御物で、天文十八年に御奈良院天皇より本願寺法主證如上人に賜つたものである。それより前の傳來に就ては、紫式部が仕へた女御に御惱のあつた折、女御の御實家藤原家からお見舞に獻じたものだと傳へられ、筆寫は言ふに及ばず、紙や裝飾に、善を盡し美を盡したもので、藤原時代藝術の極致を

一部に集めたものである。此の貴重なる圖書が久しく西本願寺の藏に埋もれてゐたのを、發見して世に出した人は故大口鯛二氏で、下賜の時添へられた女房奉書を同寺の文書の内から調べ出したのも亦大口氏である。

此の貴重書の一部が散つたのは如何にも惜しいことであるが、私は之れを是非することをせぬ。唯聊か此の書に觸れた感想を述べて見たいと思ふ。そして特に此の圖書の紙に丹精を凝らした意匠に就て一二を言うて見たいと思ふ。私が最初此の書を見たのは十數年前博物館に陳列された時であつた。勿論、全部が陳例された譯でなく、或る部分を硝子越しに見たに過ぎなかつた。二度まで足を運んで見たが、硝子越しでは微細の處が知れかねて、甚だ遺憾に思つた。併し三十六人の歌集を一冊乃至二冊に書き別けた分量の程も略々想像され、其の用紙の鳥の子紙に施された文様の意匠が皆異つてゐて、あらん限りの工夫を凝らしたものであることも看取され、驚くべき藝術品であることが分つた。

書は當時の能筆に分課して書かせたものであるが、卒然、時代を辨せずして見れば、行成もあり公任もある。心なき古筆家は直ちにそれと折紙をつけるであらうが、實は其の流れを汲む名人

の筆で、大口氏の研究でおよそ筆者も分つてゐる。唯紫式部が、あれだけの女流であるから、其筆になつたものがありさうに想像されるが、それと判すべきもの、ないのは吾等の好奇心に聊か不満を感じしめるけれども、藤原氏盛時の名家の書譜として珍重すべき價值があるは言ふまでもない。

三千頁といふ多量の紙が毎紙文様を異にしてゐることは眞に驚異だ。大體金銀泥と五色の彩色が相和して人目を眩するが、文様の意匠は多岐複雑で、實に形容に困しむほどである。先づ紙に就て云へば、大たい用紙は鳥の子であるけれども、重ね継ぎ、破れ継ぎ、截ち継ぎなどの意匠があつて、それがため種々の紙が用ゐられてゐる。薄い薄葉もあれば厚手の薄葉もあり、唐紙、蠟箋などもあれば、紙屋川紙、陸奥紙、其他名義の知れぬ紙もある。意匠技巧に就ては、金銀泥で各紙異なる文様が描かれ、山水花卉雲水禽蟲などの、普通色紙、短冊などにある文様は勿論だが、葦手書や墨流しが多く交つてゐる上に、紙の継ぎ剥ぎにさまざまの意匠が凝らされ、種々な色の紙が縦に横にハスカヒに継がれてあつたり、或は破れ継ぎと唱へて、襤褸のごとくに亂れて継がれた意匠もあり、或は紙の一端五七枚が折り曲がつて其の断面に五色の色を

見せたり、或は牒帖綴の綴ち目の處が縦に深く不秩序に穿たれて五色の断層が見えたり、眞に千態萬様の技巧を弄し、到底萬が一をも髣髴させかねる。

私は最初硝子越しに文様の意匠の或る部分を見た時に、墨流しの法は莫迦に人の錯覺を惹き起すものだと思つた。即ち前述の屈折も縦穿も墨流しの業で、其實、屈折したのでなく又穿つたのではないと思つて、墨流しの技術の妙を感じたが、それが裏切られたことを知つたのはつい近頃の事である。田中親美氏が十幾年の苦辛を徑て、此の集の全部を七通複製し果せたことはかねて聞いてもゐた。亦其一部分は目睹したこともある。しかし全部を翻閱するの機會を得たのは、數月前、安田善次郎氏に招かれた折であつた。複製が幾んど眞を亂る程によく出来てゐることは世おのづから定評があるから茲に改めて絮説を要しないが、全く原物に觸るゝの感があつた。私は時間を惜まず堆積の此集を靜かに一枚々翻閱して、備さに百端の意匠を味つて興に入つたが、驚いたことは、墨流しが惹起した錯覺と速断してゐた、屈曲も縦断も、手に取つて見ると、事實のものであつた。即ち五六枚重ねて紙の一端がハスカヒに折れてゐる所は、事實折れてゐるのである。断面の五色の紙はと調べると、事實五色の紙が層をなして紙の後ろに貼ら

れてゐるのであつた。又綴ぢ目の縦断も事實穿たれてゐて、其の断面の種々な色は矢張りそれぞれの色の紙を重ねて潜めてあることを發見し、一方に於ては墨流しの業でない事に失望したが、一方に於ては如何にも手数のかゝる工程を経てゐる事に驚いた。墨流しの法で斯ほどの事が出来ない譯でもあるまいに、當時はそれ迄に技が進まなかつたのであらうか。莫迦正直の手数をかけたことは單にこれだけには止まらず、いろ／＼あるけれども、今一々細叙の違がない。但だ漏らし難い希有の意匠は、紙の七八分を純白透明のセルロイドのやうなもので張りつけてあることで、それは何物であるか、まだ考へないが、その透明質のものに字が書いてある。

要するに、此の集は其の來歴其の筆蹟で天下の珍とすべきものであるばかりでなく、文様裝飾の美に於ても天下の珍とすべきものである。

尙此の書の綴ぢ方を、最初は絲で綴ぢた所謂の牒帖綴（びょうていづい）であらうと思つてゐたが、よく見ると、絲は絶對に用ゐてなく、各紙の折り目は糊も巧みに貼附してあるので、案外であることを感じた。もう一つ附け加へて置くことは、標紙の左端が、表裏共に細く堅い心が装置されて凸起してゐる。めくるに便利の爲めの意匠であらう。併しこれは昔しの表紙にも往々見る所の意匠

で、必らずしも珍らしくない。

以上は安田氏宅で此の集を翻閱した際に録した大略であるが、其後早稻田の演劇博物館に複製本の展覽會を催した折、安田氏の本を借受けたのを機とし、更に點檢して氣の付いたことを附記すると此の集は三千頁の浩瀚のもので、各紙の文様の異なる事は前叙の如くであるが、何故だか、或る集には意匠が豊富で、或る集にはさまでの意匠がなく、甚だ片よつてゐることを感じた。三十六家の内でも二位にある様な作家の集は、枚數も少ないが、それらを見ると何れも意匠に恵まれた紙が少ない。貫之や伊勢などになると、枚數も多く、そして意匠に富んだ紙が集注してゐる。そこで私は、富豪家が特に購はんとして此の二集を選んだことも、藏者の本願寺が多くの價を得ん爲め此の二集を取り出したことも偶然でないと感じた。元來此の「三十六人家集」は古くから缺本で、人麿、業平、小町、兼輔の四家集は失はれてゐる。兼輔集は寂蓮法師の筆と傳へるもので補はれ、人麿、業平の二集は散じて切々（きりぎり）となつて方々に珍藏されてゐるが、小町集に至つては斷片と雖も備はらないと云はれてゐる。此等の四集が早く逸した譯は、三十六家の粹であるために人の嗜慾が禍ひをなしたのでもあらうが、貫之、伊勢の二集が華美の

意匠に富んでることから推して、其の意匠美も散佚の厄を手傳うたのではあるまいかと思はない譯にゆかぬ。兎角嬋妍の美が厄を買ふことは特り女性のみでないとか歎を禁じ得ない。

尙他に氣の付いたことは、何の集であつたか、寫字の場合に二三首の歌を脱したので、補寫してそれを繼ぎ足したところが一ヶ所あつた。これは、あれほどの立派な集には一點の疵とも見るべきであるが、寫本には免かれ難いものと云ふの外はない。尙最後に云ふべきは、およそ複製本と云へば、抵ね玻璃版、金屬版、オフセット版などと、版式は異つても版の範圍を脱するものは無いが、田中氏の此の大部の複製は、文字だけは正しく版でなく、毛筆で摸してある。これが此の複製の特色で、頗る難い事であるがよく出来てある。實は嚴正に複製術を評すれば、毛筆の處は毛筆で摸製することが本當の複製であらうと思ふ。

異國叢書

近年出版界に於ける美舉として稱へ得るものは、「異國叢書」の出版であらう。此の書は、

足利末から逐次日本に來た外國人が日本の事情を書き記して本國で出版したもの、内、最も著名な物を選んで精譯し、「異國叢書」の總稱の下に追々出版しつゝあるもので、既に出版されたものが十冊に垂んとしてゐる。此等外國人の書いたもので、書名だけは誰れも聞き知つてゐながら、原本を得ることが容易でない爲め、又原本があつても讀みかねて、其の内容が日本に紹介されず、今日に迫んだものが少なくない。我が元祿年間に來た蘭醫ケンプエルの江戸參府紀行の如きは頗る有名なものであるが、或る少數者の外は殆んど其の内容を知り得無かつたものである。シーボルトの江戸參府紀行、日本交通貿易史などは割合に近世のもので、シーボルトの事は斷片的に知れてゐるが、其の著の全譯はこれまで無く、多くは其の書名を知るのみであつた。ゾーフの字書は或る時代に珍とせられ、其書名を知るものは少なくないが、その日本回想録に至つては、書名すら少數者の外には知られなかつた。ツンベルグやドン・ロドリゴなどの著に至つては尙更であつた。

實は以上の圖書の内で翻譯されたものもあつたのだが、それが全譯されなかつたり、精譯を闕いたりしたばかりでなく、出版まで運ばなかつた爲めに、此種の圖書は讀書界とは全く無交

渉で長く経過した。近年モンタヌースの日本見聞録が和田萬吉博士に全譯されて始めて世に出で、外に耶蘇教殉難の記などが漸く發行される、氣運となつたが、「異國叢書」の續刊こそ、斯界圖書の幽光を始めて發揚するものである。

日本の外交事情、貿易事情、將た社會事情を、當時日本に渡來した其人の記に就て讀むことは甚だ興味のある事で、設令ひそれらの時代に就て日本にも記録が存するにしても、外人の觀察には外人相應の特徴があり、又外人の筆に依つて始めて知り得ることも少なくない。世間には外人の觀察は信ずるに足らぬなどと一概にケチを附ける人もあるけれども、ケンプエルにせよ、ゾーフにせよ、シーボルトにせよ、皆相當學問のある士で、中には久しく日本に駐在し、特に研究的態度で多方面の觀察をしたのであるから、決して皮相の觀察でなく、正鵠を得て居る點は到底日本人の及び難いものがある。

併しながら之れを誤りなく精譯することは決して容易の業でない。原文は日本の學者の習熟しない外國語で書かれてゐる外に、日本の地名、人名、官名などを聞き違ひて書いてゐる所が少なからずあつて、譯者はその誤りを一々正すことをせねばならず、當時の日本の事情を讀者

に會得せしめるには往々補注を書く必要もあり、人物の肖像、其他參考となるべき繪畫類を挿入する必要もあつて、普通の反譯とは頗る趣を異にし、筆路には暗礁が到る處に横はり、折角運ぶ筆を一地名の爲めに溢らされて、地圖に就て檢し、人に詢うて決する如き面倒は一にして足らないから、一冊を譯する勞は容易でない。到底凡庸の譯者の爲し難い所で、此翻譯事業の中樞は、譯者其人を得ることである。此點に就ては私共も感服する所で、各擔當者は皆當世第一流の大家で、各家は皆趣味を以て譯筆を把つて居るから、反譯に於て遺憾がない。私が此叢書を以て近代隨一の好著とする所以である。

私は此の叢書の出版を常に待遠に感じ、一冊出る毎に必らず全卷を通讀するのが例であつて、外人が日本をよく理解してゐることに愉快を感じる。各卷を讀む毎に多少のノートを取り、所感を録したのものもある。それ等の中には興味のあるものもあるけれども、それ等を録するには數多き紙を要するから、爰には唯二三を録するに過ぎぬ。日本の英傑を外人が見て如何に感じたか。邦人が歴史を讀んで臆げに感ずる家康、政宗などを、目のあたりに見た人から聞くのも一興であるのみならず、亦我が史界に有力なる資料を供するものである。

家康の事はドン・ロドリゴの日本見聞録にある。此書は村上直次郎博士の譯に係る。ロドリゴは西班牙政府の役人で、フィリピン諸島長官の任満ちメキシコに歸る途中、數次暴風に會して船は大破し、續航に堪へざるに至つたので、日本に避難せんとして總州沿岸の岩礁に觸れ、僅かに身を以て免かれた、その經歷と、江戸並に駿府に徳川將軍を拜した記録で、譯者は外國に遊びたる折其の材料を蒐集したのである。駿府に家康に謁した際の記事は左の如くである。

皇帝^家は甚だ大ならざる室に在り。其精巧なること言語に盡されず。其中央より向に階段あり。之を上り終れば、黄金の網あり。室の兩側に添ひて、其端即ち皇帝の居りし場所より約四歩の所に達せり。其高さニバラ一メートルにして、多數の小さき戸あり。家臣等、時々皇帝に招かれ、此戸により出入せり。彼等は皆跪きて、手は床上に置き、全く沈黙して尊敬を表せり。此等貴族の兩側に在る者は約二十人なり。彼等一同並に皇帝の側に接近せる書記官等は、カルソン^{輕衫即股引の一種}の甚だ長く、ニバルモ^{四十一}餘、床上に引摺るもの^長袴を穿きたり。之に依り決して足を露はすことなし。又外套の形は、貴地に於て武術試合の際用ふる物に類し、甚だ廣き^{ひだ}髪あるものを着せり。衣^肩皇帝は青色の天鷲絨の椅子に坐し、其左方約六歩の處

に、余が爲め之と少しも異なる所なき椅子を備へあり。皇帝の衣服は青色の光澤ある織物に銀を以て多數の星及び半月を繡ひ出したるものにして、腰に劍を帶し、頭には帽子又は他の冠物なく、髪を組みて色紐を以て結びあり。彼は六十歳、中背の老人にして、尊敬すべく愉快なる容貌を有し、太子^{二代}將^皇の如く色黒からず、又彼より肥滿せり。余は案内の書記官等と共に進み、通常王宮に於て我等の君なる王に對して行ふ敬禮をなし、豫め余に對し、握手を求め又手に接吻すべからずと注意ありたれば、余が爲めに置かれたる椅子に接して起立せり。余は椅子に達すると共に最敬禮をなせしが、彼は之まで容貌を變ぜざりしが、少しく頭を下げ、余に對し大いに好意を示して微笑し、手を舉げて着坐の合圖をなせり。余は復甚だ低き敬禮をなし起立したるに、彼は再び勧めたれば坐に着けり。彼は次に帽子を被ることを余に命じ、而してクレド^{祈禱}三唱の時間沈黙したる後、彼は其側に在りし書記官二人を招き、余が來着を喜べる旨を傳へ、又勞苦及び不幸の爲め痛心するは止むを得ずと雖、其國に來りしが故に樂しみ又心を勵すべし我が君ドン・フェリペ王の余が爲になすべき事は悉く之をなし、更に大なることをなすべしと傳へしめたり。云々

之れに對しロドリゴは謝辭を陳べ、辭し去らんとするに引き留められ、さて入り來りたる諸侯ありて、家康に謁見の模様を叙して云く、

余を再び着坐せしめ、彼に拜謁せんと欲する者に進入することを命ぜしが、直に日本の最大なる諸侯の一人進入せり。其の強大なることは進物に依りて明にして、金銀の棒、絹の服、其他價二萬ドカドを超過すべき物なりき。此進物は數個の机の上に置きしが、皇帝は殆ど之を見ず。此トノは、殿下の居りし所より百歩以上の床上に跪き、頭を甚しく下げ、殆ど地に接吻する如くに見えたり。而して何人も之に話すことなく、又出入の際皇帝を仰ぎ見ることなくして退出せしが、後に余の僕等の語りし所に依れば、彼れは三千人の多勢の供を連れるたる由なり。

伊達政宗に就ての記事はビスカイノの金銀島探檢報告の内に出てる。此書は慶長三十四年西班牙人の日本觀察記で、村上博士の譯に係る。ビスカイノは、千六百十年、ドン・ロドリゴ等が遭難から救はれたのを謝する爲め、答禮使として千六百十一年六月に日本に來り、沿岸の測量を遂げて、千六百十二年九月金銀島の探檢に向ひ、同年十一月難風に遇うて再び日本に來り、

幕府に窮狀を訴へたけれど顧みられなかつたが、政宗の知遇を得て、終に千六百十三年十月、伊達政宗が支倉六右衛門を派するの使船に同乗してメキシコに歸還したのである。

政宗が此人を破格に款對したのは信教の誠意からであつたか、渡歐の志があつた故であつたか、それは疑問であるが、政宗のビスカイノに對する款對は念の入つたものであつた。その會見は千六百十二年一月二日即ち慶長十六年十一月三十日の事で、ビスカイノの記は左の如くである。

政宗は、司令官の面會せずして通行することを欲せず、午餐の爲め其家に待ち受くべく、彼を見ざれば、一時間は一年の思ありと言へり。午後三時頃其家に行きしが、同所に於て司令官並にバードレ、フライ、ルイス、ソテロを大に款對し、バードレに尊敬を表せしことは言辭に現はす能はず、手づから食物を供し、又自から配人を勤むるに至り、司令官に對しても同様なりき。而して我等は友人にして當に友人たるべきが故に、武器に於ても然らんことを欲すと言ひ、己の刀を司令官に與へ、其劍を與へんことを請ひたり。之をなしたるに、彼は大いに禮儀を盡して之を受け、十字架に接吻し、劍を刀上に置き、又其國風に從ひ他の儀式

を行ひしは觀物にして、家臣等も彼の此の如くイスパニヤ人を愛するを見て驚きたり。彼は又極端の事を行ひたり。即ち殆んど彼の前にも出づること能はざる一人の家臣を招き、之に言へるは、汝は我が家臣にして頭を床に附くるにあらざれば我が前に出づること能はざることとは汝の知る所なり。然れども汝はキリシタンにして、司令官の友人なるが故に、今日は我が食卓に於て共に食すべし。而して汝にトノ（殿）たる徽章三つを與ふべしと。諸人は此事を驚歎し、バードレの法衣に接吻し、我が教の事に付聞かんが爲め僧庵に赴くべしと述べたり。食事並に談話の際政宗に對ひ、我が基督教の事を語りしが、彼は網に近寄りたり。（案、漁網に入らんとする、即ち歸依すること近きの意）神、彼の智を輝し給へ。此人洗禮を受くる時はキリシタンの保護者となり、多數の人歸依するの因をなすべし。云々

尙こ、にドン・ロドリゴの記事から抄録すべき一事は、西班牙人が京都の大佛を見ての感想である。方廣寺の大佛は、豊太閤の冥福を祈る爲め秀頼の建てたものである。南都の大佛には譲るが外人の目を驚かすには十分であつたに相違ない。ロドリゴの來た頃は、まだ大阪落城の前で、豊公の餘烈が存してゐる時で、見聞録に據れば、佛を納める建築がまだ完成に至らず、

盛んに人を勞してゐるやうに書かれてゐる。此の大佛は後に回祿の災に罹り、今は首のみ存してゐるが、ロドリゴは其の全像を見たのである。

大佛と稱する金屬の偶像是世界の七大奇觀の一たるを得べく、最も大なる奇觀と並ぶことを得んも知れず。此像は悉く青銅より成り、甚だ大にして、之に關する話は甚だ誇大にして、余に對しても誇大なる話をなせしが、余が想像は後に觀たるものには及ばざりき。如何にして其地に於て之を描き出すべきか、考へたる後、余と同行せる當國の長身なる一人に命じ、偶像に上り、右手の母指の太さを量らしめたり。彼は余並に同伴者三十餘人の面前に於て之に上り、兩腕を以て指を抱かんとし、十分に伸ばせしが、之を圍むにニバルモニバルモは二十一サンチに當るの不足ありき。右を以て其の大なることに付ては少しく述ぶるを得たれども、其恰好につき述ぶべき所之に劣らず。余が見たる有名なる物の中、最も完全なる物なりと言ふことを得べし。何となれば足、手、口、目、額、其他顔の容貌は、有名なる畫家が最も完全に描かんとするも余が此處に於て見たる物に及ばざるべし。余が通過せし時、堂を建築するたるが、其後の通信に依れば未だ完成せず。大工其他各種の職工十萬人以上工事に従事せしが、

悪魔は之に依り皇帝の富を消費せしめんとするならん。云々

他の頁に大佛の記事あり。大同小異なれども、佛像及び之れを容る、寺院の經費、二千四百萬ドガドとあり。

西班牙人の佛像に關する觀察中、手法を褒め居るは實際に適つてゐる。今日存するものは首のみだが、其作は南都のものよりも優れてゐる。失はれた部分の優秀である事も想像せらるゝ。偕て彼は記事中に「悪魔」の二字を使つて居るが、此の寺の鐘が遂に豊臣氏の爲めに悪魔となり、豊臣家は亡びた。

佛人の日本觀

安政條約締結の爲め日本に差遣された佛國の使節はグロ男爵で、此人は日本に來る前先づ支那に立寄り、所謂天津條約を締結した。日支兩國を見た此の使節の隨員が書いた紀行の中で特に日本に關する部分を翻譯した稿本が家藏にあるが、之れを翻閱すると、いろ／＼の點に日支

の比較があり、日本に滞在が僅かである割合によく日本の事情を理解してゐて、おもしろく感ずる點が少なくない。此の使節の來たのは安政五年で、家定將軍が薨じ、虎列刺病が流行の際で、大老は井伊掃部頭、米國總領事はタウンSEND・ハリスであつた。

日本に來る外人のいつも理解に困しむのは主權の所在で、天子將軍何れが主權者であるかにある。此の紀行の記者は流石によく理解があつて、將軍も大老任せだから、其の始め天子が將軍に政務を任されたと同じであると云うてゐる。封建制度もよく理解し、人質に取られてゐる大名の婦人の江戸住居に一滴の涙を灑いでゐる。

どの外人も日本に來て氣のつくのは目付めづひの嚴なことで、外人の一舉一動に注意するばかりでなく、役人同士が相互に探索する、そしてそれでも足らず、別に探索専門の役人が置かれてゐることを驚愕の眼で見えてゐる。さながら今の伊太利のムツソリニ一派の爲す所を思はせる。條約に就ての談判の席に水野筑後守、永井玄蕃頭、外四名が列した中に、袖井左京といふが、黙して一語も發しなかつたことに言及し、あれは啞にあらずんば愚と思ひの外、兩方の言説を默聽して將軍に報告するのだから、最も大切な職に居るものと知られたとある。

其頃西洋研究に興味のあつた薩摩公につき一話を載せてゐる。公は一日不思議にも和蘭士官の返答の出来ない疑問を云ひかけて、士官等を困しめた事を記してゐる。即ち公は氣壓の觀測に寫眞術を適用するには如何なる法を用ゐるかと問はれたのに對し、士官達はグリニチの天文臺にて氣壓、溫度、濕度の變化を精査する爲めに寫眞機を使用し居ることを打忘れて、返答することが出来なかつた。さるにても此頃發明されたばかりの學問上の事實を、テムズ河を去ること七千哩の遠きに居る薩摩公が、如何にして知り得たかと不審を抱いてゐる。おぼろげに大日本に天文學の開けをすることを擧げて云ふには、記者が江戸に逗留せしは丁度千八百五十八年十月の初で、大彗星の現はれたときである。然るに驚愕若くは不安心の色あるものは一人も見及ばずと云うて、支那と比較し、上海に月蝕のありたる時は、何れも落ちつかず、月蝕は怪物の所爲であるとして、或は弓箭を擬するものあり、銅鑼を打鳴らすものあり、日本とは甚だ趣を異にしたと云うてゐる。記者は日本の歴史を評して、世界中最も面白からざるものと云うて、唯日を追うて大君の舉動を記するまで、某の日は外出したとか病んだとか花を觀たとか云ふに過ぎずといつてゐる。

如何にも或る時代には斯く評されても一言なかつた國典もあつたに相違ない。武士道に切腹が名譽を保つ所になることを云ひ、古き時代の一話を掲げてゐる。或る日、二人の紳士、皇帝の食事に給仕せしとき、二人階段にて出あへり。一人は空腕を手にして段を下り、一人は盛りたる椀を皇帝に進むる爲めに段を上りしが、如何しけん、二人の刀は相觸れたり。然るに降りたる紳士は、己れ辱しめられたるものとして刀を抜て切腹せり。一方の紳士は、急ぎ段を上りて其椀を皇帝の膳に供へ、相手の氣息ある内に遇はんとて遽たゞしく段を下り、給仕の爲めに後れぬとて其相手に深く謝し、共に同じく切腹せりと、こんな事實はありとも覺えないが、外人はこれを以て切腹の性質を現はすの好適例となしてゐる。記者は日支の文明を比較し、其結論に、日本の文明は歴史的に支那に負ふ所があつたが、日本には日本固有の文明もあると説き、支那は尊大なるが故に進歩を妨げ、日本はどこまでも進まんとする氣象があると説くなど、なか／＼に日本をよく理解してゐる。「異國叢書」を紹介した序に、佛人の日本觀を大略抄出する。

臺灣志と日本紀行

昔しから誠にやかに僞書を作つて人を欺いた例は決して少なくない。サルマナツツアルの「臺灣志」の如きも其一例で、それが相當の學識ある人の手で出版されたから、一時は人を欺き、臺灣を知るの唯一の書として迎へられたが、後には馬脚を露はした。此の書の著者は佛國生れで、ジエスイツ學院で日本支那の事を知り覺えた、僅かばかりの知識を利用して、自から日本人と僭稱し、妙な日本語を工夫し、口から出任せに、有ること無いことを云うて人を驚かし、後には臺灣人だと云うて臺灣の風土をよい加減に書いたのが此の「臺灣志」である。當時臺灣の事情が世界に知れなかつたので、這般の山師が出で、世を欺いたのである。此書の刊行は千七百四年即ち吾が寶永元年で、一時いろ／＼の國語に譯されたことがある。をかしい事には、こんな山師の出鱈目が、妙に識しをなして、後日事實となつたことである。即ち此書の標題を全部掲げると左の如くであつて、日本皇帝に屬する臺灣島とあるのだ。

An historical and geographical description of Formosa, an Island subject to the
Emperor of Japan. 1704 Psalmanazar (George)

尙他に吾々をして奇異の感に打たしめる一事は、斯る杜撰の書物を出版した人が、ケンプエルの「日本紀行」出版した其人と同一である事だ。即ち兩書の出版者は英京龍動ロンドンの醫師でハンス・スローン(Sir Hans Sloan)と呼び、英國學士院の院長であると云ふから學殖のあつた人に相違ない。それが曩には杜撰の書を發行し、後には立派な「日本紀行」を出版するに至つたのは何故であらうかと釋ねて見ると、そも／＼故あるのである。即ち先きの僞書出版が此人の名譽をいたく傷けたので、名譽回復の爲めに「日本紀行」を出版したのだと知れた。全體此のスローンといふ人は蒐集癖があつて、多くの珍器を藏した外に、未刊圖書の原稿の收藏に富んだので名高かつた。其頃ケンプエルの日本訪問は頻りに喧傳したが、幾何もなくケンプエルの計が傳はると、スローンの好事癖が先づ動き、苦心して其の遺物と共に「日本紀行」の原稿を購ひ入れた。勿論初めから之れを刊行するに意があつたが、之れを英譯するに頗る骨が折れ、瑞西生スウェーデンれの醫師で學士會院の會員であつたヨハン・カスバル・シヨイヒツェルに頼んで譯が出来上り、之

前年、鎌田使節がワシントンに赴いた時、亡友田中一貞氏が随伴した。其折、新見使節の紀念物が當時の旅館に残つてゐるまいかと、捜して見ると、幸ひに新見使節一行の行列其他が圖されてゐるのが、まだ保存されてゐるので、それを寫眞に取つて持歸つた。それは當時亞米利加の新聞に出た圖と同様のものと思ふが、其新聞は今容易に手に入らないから、其の寫眞一通を申受けたことがある。それには大統領謁見の圖もあり、其道中の圖もあり、米兵堵列の間を大使が往く途中、供勢が土下座をして敬禮してゐる圖もあり、又供勢が旅館の一室に坐して碁将棋を闘はしてゐる圖などもあつて、當時のさまがあり／＼と分る。此の寫眞に田中一貞氏が説明を添へた中に、副使村垣淡路守の日誌の幾分かが抄録してあつて、大統領謁見の途上、群がる見物人を物ともせず、日本古風の禮装をして意氣頗る揚り、夷狄等よ、禮儀の厚い國土の風俗を見よと誇り顔に通過した事や、初めて議會を見物した時、議長の服裝がさながら日本の仕事師の股引半纏と同じであると冷笑した事などがあつて、興を感ずると共に村垣の日記の存し居ることを知り、どうかしてそれを一讀したいと思つた。

其後小栗貞雄氏に會した折、談は其の義父小栗豊後守忠順の事に及び、自然小栗が監察とし

て新見使節と共に渡米した時のことにも涉つたが、貞雄氏の云ふには、自分は義父の顔を見たことが無いので、寫眞を得たいと思つて、ワシントンに赴いた時、寫眞屋といふ寫眞屋を一軒毎に訪ねて捜し、可なり骨を折つた。幸ひに尋ね當てた寫眞屋は頗る貧弱な古ぼけた店で、そこに見出された義父の寫眞には當時伴うた僕も寫されてあつたので、其の複寫を請うて持ち返り、まだ存命であつた僕に示し、確かであるとの裏書を得た。自分が義父の相貌に接したのはこれが始めて、義父の肖像はこれに因つて世に傳はることになつたと語られたことがある。

近年、尾佐竹猛氏に「夷狄の國へ」と云ふ著があつて、明治に至るまでの各使節の遣外談が委しく書かれてある。殊に第一回使節の遣米に村垣副使の日誌が多く引かれてあるので、當時使節の思はくが歴然として知れ、かねて一覽を欲してゐた、日誌の幾分を此書に依つて見るとを得たのを、私は仕合せに思ふ。以下尾佐竹氏の著に據り、當時のさまを概括的に書いて見よう。

正使、副使、將た監察も皆大名であるから、外國旅行というても、銘々相當の供勢が要る。先づ用人が一人、給人が一人、外に七八名が銘々に附屬してゐる。外國奉行職、勘定方にもそ

が、それに異論があつたと云はれてゐる。併し甲冑や駕籠や挾箱の類の携帯を見合はしたのを英斷と云うてゐる所から見ると、随分無用の者が第一回には多く積まれたらしく想像さるゝ。

日本が外國に交はつたのは前にポルトガルや和蘭陀などがあるけれども、修交の爲め日本官吏が海外へ踏み出すことはこれが始めてあり、且つ列國と交々條約を結ぶのでなく、特に亞米利加一國と締約の爲めの派遣であつたから、亞米利加は列國に先んじた誇りで、特に使節を優遇したに相違ない。又使節も非常の決心をして出かけ、頗る光榮あることゝした心事は、村垣の日記によく悉されてゐる。村垣としては昔しの遣唐使のことなどを想ひ浮べたのである。支那は近いけれども、それですら當時は生還を期し得なかつた。まして遼遠なる海路を経て夷狄の國へ初度の使をするのであるから、使節の心事は感慨無量であつたやう。

西洋の風俗が和蘭陀其他により日本に傳はつてゐたにしても、それに趣味を有つて心得のあつたものは或る少数者に限られ、幾んど外國の風習を知らない人が、初めて外國の地を踏むのであるから、随分困つたに相違なく、随つて滑稽を演ずるやうな事も頻繁にあつたであらう。旅館に入つては椅子の設けがあるけれども、それに坐することすら出來ず、絨毯の上に携帯の

座蒲團を敷いて坐するといふ仕末である。米國流に大衆が使節を迎へて歡呼したり、旅館を圍んで喝采したり、歡迎會や夜會が催されたり、奏樂につれて男女が相擁してダンスをやつたり、米國は其國風の極度の禮を盡したにしても、それ等に就て餘り理解のない使節等には趣味を感じ得べくもない。如何なる場合にも使節は使節たる體面を嚴守し、大衆の歡呼に對しても、さながら偶像のごとく、微笑だも湛へぬと云ふ仕末である。米人の記にこれを評して、蟻羣に臨む昆蟲研究家の態度だと云うてゐるが、よく穿つてゐる。

宴會に於ては女尊の風習が殊にいやらしく思はれ、男女抱擁のダンスが卑猥に感ぜられ、殊に接吻には戰慄する程いやであつたのも無理はない。大統領は國の元首であるからとて、特に儀容を正して白晝館に臨んで見ると、村垣が其日記に評してゐるごとく、職人風の股引姿で、何等飾りのない平服其儘で、おまけに斯る重大な晴れの席に、婦人が背後に立つて參觀してゐるなどは、如何にも奇異に感じたであらう。觀劇の時に、大統領が一僕も伴はずに這入つて來たのも意外に思つたであらうし、日本人珍らしで、多くの者が握手を求めたり、名刺を求めたりするものも、いかに好意からと知りつゝも、なか／＼に五月蠅がつたに相違ない。日本では名札は

すべて書くのが例となつてゐるのに、毎日二百枚も要るとなつては、勢ひ印刷する外はないので、その現存してゐるのを見ると、新見の名刺には和洋の字がある外に定紋がついてゐるのは一奇だ。恐らく印刷名刺が國際上に用ゐられたのは、これが始めてであらう。使節は到る處に飲食の馳走を受けたが、牛肉を始めとして、バターや脂肪を嫌ふ其頃の日本人には、これほど閉口のものはなく、どの宴會でも一品も口にすることが出來ず、饑を忍んで一意宴會の果てるのを待つたと云ふが、如何にも情ない次第である。村垣の日記には飲食に就ての困り話がしきりに書かれてゐるが、使節の海外旅行で何よりも難儀といふは飲食であつたのだ。

日本人側から米人を可笑しく思つたよりも、ヨリ以上米人は日本人を妙に思つたことは蓋し想像に餘りある。ワシントン其他使節の赴いた所は、すべて大祭典で、もあるかの如く賑はつて、大衆が見物に出かけた騒ぎは米國に於て空前と云はれてゐる。此際使節は純日本風、殊に封建の武士そのまゝの行装であつたから、一層目を驚かしたに相違ない。今時の若い邦人に見せても、必らず相當驚異を感じしめるであらうから、外人に於ては無理はない。殊に上下の階級なく、平民風一色である米人が、其の結髪を見、其の佩刀を見、其の陣笠を見、更に其の禮裝、

烏帽子、狩衣、素袍などの行装を見、其の従者の土下座をして敬禮をなす状を見ては、どんなに奇異に感じたことであらうか。米人のあるものは使節に隨伴のジョンストンに、低聲で、同乗の人は男女何れかと問うたとあるが、髪様や服装が女性らしく思はれたので、斯る問を發したのもあらうが、始めて見る東洋人だから、實際一寸辨じかねたのも無理はない。

日本の風俗の内、殊に外人に異様に見えたのは土下座であつたであらう。米人のやうに、如何なる賓客に對しても脱帽と握手とのみを禮とし、幾んど膝を屈する習慣のない國民の前に、土下座は恐らく奴隸の態度と認められても仕方がない。吾々は之れを思ふと、冷汗の腋に湧くのを禁じ得ないのである。併し米國の新聞紙は此等の事に就て餘り惡評を書いてをらぬやうだ。動もすれば、皮肉の筆を弄して、國賓は餘り女に愛さるゝ相貌でないなどと云うてゐるものもあるが、日本人は理智に富んでゐると褒めてゐるものもある。實は案外だと云ふのかも知れんが、表向き國賓に對し流石に無禮な事を言つて居らぬ。街衢の口善惡公衆でも、只一遍日本人を目して猿と叫んだ例があつて、亞米利加の官吏は氣を揉んだらしいが、此位な事はどこにも有り勝の事として恕さねばなるまい。

一行の内に後日の西洋通福澤翁もるたのだが、これも當時は赤毛布で、馬車を見てすら驚いてゐるやうな仕末であつた。數多き隨員の中には、早く西洋の飲食に慣れ、ダンスなどに興を感じたものもあつたらしい。就中、通辭見習の立石斧次郎といふが、十七歳の若者で、ヒョウキんな性質から、到る處愛嬌を振り時き、或る時は交際場裏に婦人と立交つて踊つたり、或る時は汽車の汽關車に乗せてもらつたりして、頗る異彩を放つたが、此の旅行に最も多く得る所があつたのは、此の青年であつたであらう。

咸臨丸は使節に先んじて歸朝の途に就いたが、往航には雨天が続いて、船員一同大いに困しみ、病を得たり死んだりしたのも少からずあつた。雨中草履や鞋を穿いて立働いたのだから、日々びしょぬれになり、寢具なども濡^{うるは}うたので健康を害したのも無理はない。勝船將が氣を利かして、毛布を買つてやつて濡^{うるは}うた寢具に替へさせたり、或る外人が靴を寄附して船員に穿かせたりして、歸航には健康に注意されたらしいが、往航には見ジメであつた。全體、いくら維新前でも既に蒸氣船を用ゐてゐるとすれば、船員に靴位は穿かせさうなものであるのに、文久度に竹内使節が歐羅巴に派遣された時でも、其の隨員中に靴を用ゐたものがあつたのを、國風

に背くというて使節はそれを吐責したとある。案外なことだ。

不慣れな外國旅行に一行皆々閉口して、歸心矢の如くで、ワシントンで使命を果したから、直ぐに歸國と考へた處、米國から、ヒラデルヒヤ、紐育などの重なる都府を回覽あるべしと勧められ、流石に使節も民主國の事態を考へ、大統領は國民の代表者に過ぎないから、國民に接するの必要があるとして、それに應じて巡回したのは大出来であつた。勿論到る處に盛んな歓迎を受けたに相違ないが、飲食に就ての不快はどうしても除きかねた。或る都府では日本人を相當に理解し、それ相應の接待をした所もあつたが、矢張り満足を得ずる譯には行かなかつた。殊に使節一行の困つたのは歸航の船中であつた。紐育から必需品を多く積込むべきであつたが、それが十分届かなかつた爲めに、船中の飲食はすべて脂臭いものばかりで、往航の時とは異り日本食が幾んどなく、僅かに少量の日本酒と醬油、それは往航の時の殘品であるが、之れを發見した時などは非常の喜びであつたと云はれてゐる。右の如くであるから、船中の雜談と云へば、味噌汁戀しやの話で持ち切つたやうな仕末、ある時は餘りに食物に窮して少しばかりあつた米を海水で煮て粥を作り、僅かに饑を醫したとあるが、船中の雜儀は實に想像の外にあつた。

此行、費す所八萬圓と云はれてゐる。大體米國が賄つた筈であるのに、八萬圓を要したのは、當時としては少額でない。

使節の外國派遣は新見使節が第一回で、それから維新までに尙四回ある。即ち文久二年には竹内下野守が歐羅巴へ、文久三年には池田筑後守が佛蘭西へ、慶應二年には小出大和守が露西亞へ、慶應三年には徳川民部大輔が佛蘭西へ派遣されてゐる。斯く外國への往來が頻繁であつたから、追々外國の事情にも通じ、其の風俗にも慣れて來た譯であるが、文久二年の竹内派遣の時などは、新見の場合と略々同じく、その際は英國の軍艦で出かけたのだが、飲食に就ては不相變苦情だらゝであつた。

以上は専ら尾佐竹氏の著から事實を採つたのだが、以下少しく私の知り得た事を書きつける。それは岩倉大使一行の外遊に就てである。維新前に幾多使節が苦い經驗を重ねての後ではあるが、岩倉大使の時も珍談が無いでもない。岩倉大使の使命は重大で、條約改正と外情視察とを兼ね、廣く智識を世界に求めて新政に資せんとする目的もあつたので、内閣の有力者である木戸、大久保も一行に加はつたやうな次第だ。扱て歐羅巴に着して條約改正の談になると、外國政府

は受附けないので、爰に岩倉等は外交形式の不備を覺つた。岩倉は日本の外務大臣以上の地位に居る人だが、外務當局でなく、又信任狀も携帯しなかつたので、問題にされなかつたのも無理はない。そこで急に本國へ其事を申越し、遽かに形式を備へることに付、伊藤公より大隈侯に相談に及んだ書簡が大隈家に存してゐる。亦左の事實も大隈家の書簡を通して知り得たのであるが、岩倉大使の派遣さるゝ前に、政府は長崎に於ける耶蘇教徒を處分して、諸藩に預けたりなどした。其の事がひどくあしざまに外國に聞こえてゐて、大使の行く先々に日本の評判があしく、宗教に對し日本の如く無理解では條約改正などは思ひも寄らぬと云ふ調子であるので、大使一行も覺る所があつて、耶蘇教徒に對しての強壓を控へるやうにと申越した書狀もある。兎角いろ／＼の事情で條約改正の目的は達し得なかつたが、一行は外情を視察して大いに得る所があつたことは言ふまでもない。前にも述べたごとく、此行、外國の制度文物を見て我國に資せんとする目的もあつたので、隨員中には各省の人がゐた。この事につき、岩倉大使出發の際、大隈侯から、神祇省からも誰れかを伴うてはと云ふのに對し、岩倉はそれに及ばぬといふ意見であつた處、フルベッキが岩倉に、今度のやうに内閣員が半分も出かけて、國礎を定める大

切の場合に、神祇省のみ一員も伴はざるは闕典だと云うたので、岩倉も如何にもと、さきに大隈の意見に従はなかつたことを悔い、前言を取消し貴意に従ふと云ふ書簡を大隈へ寄せてゐる。其書狀の寫が偶々手許にあるから左に掲げる。

今日は段々御厚き御取扱、畏感戴仕候、扱皇學者一人之處、何卒今日至急被仰付度候様偏に御願申入候

一右皇學者儀、神祇省官員に被仰付、隨行被命候様致度、右は神祇省よりも隨行條理之所令然と足下御議論之處、余強て異存申立御罷に相成候次第に候得共、昨夜フルベツキ懇話之節、今度政府半ば御出行之勢、實に國家の基礎、是より目的被爲立候御義と、各國人深く感佩之事に候、然るに神祇省一のみ隨員無之儀は欠典、實に遺憾の事に候、仍之余甚後悔、更に御斷申入候間、前時申入候通、更正院にて御評議御許容偏に願候

一佐賀縣久米某被仰付候は、早速當家へ入來候様、本御同縣之儀、何卒宜敷御頼申入候

一福羽門脇之内へも、前條之次第御傳頼入候

右申入度、勿々如此御座候

十一月十四日

大隈殿

具 視

久米邦武翁が一行に加はつたのは皇學者としてであつたらう。當時神祇省は外國の事情に疎なる人達の淵藪で、守舊固陋の説が行はれたので、大隈侯などは神祇省の官吏に最も外國を見せたいと思はれ、さてこそ右の主張があつたのだらう。

此の一行には田中光顯伯も加はつた。伯は、先頃青山會館の歡迎會席上、生れて八十餘年間の喜び三つを擧げて、其内の一に此の洋行を數へられたが、いづぞや伯は洋行中の逸事を語られた中に、米國に、あるクロンボが大使一行を招待したいと申込んで來た一事があつた。之れに對し、人を莫迦にしやがると怒つたものもあつたが、結局斷る譯にも行くまいと、其の招待に應ずる事になつたが、岩倉大使は隨員の福地源一郎に、卓上挨拶演説をなす様にと命ぜられた。福地は旨を承つて食卓のクロンボを睥睨して、日本語で勝手の熱を吐いたのには一行を抱腹せしめた。全體なら謝辭を陳ぶべきであるのに、さながら奴隸に訓示でもする様に、汝クロンボ共よく聞け、吾等日本人は偉いものだぞと云ふ調子で威張りくさるのだから、饗應を受け

た挨拶には頗る不似合のものであつたと語られた。岩倉大使の行かれた時も、矢張り日本人を物珍らしく思つて、黒人までが邦人を見世物扱ひをしたと見える。

此の岩倉大使派遣の折の一紀念物とも見るべきものが私の手許にある。それは木戸公が佛國のマルセーユより當時英京にゐた青木周藏に寄せた書簡で、用箋には旅館の記章がある。即ち楕圓形のスタンプの周圍にグランド・ホテル・マルセーユとあつて、青色の肉で印刷されてゐる。其内容は旅程を報じ、且つ途中に得た長篇の詩が録されてゐる。其詩は木戸の心事を言ひ現はしたものであるから、此篇の筆を闇くに當り、其の全文を左に録しておく。

過る八日マルセルより一書相呈し申候、定而御落手被下候事と想察仕候、同日十字揚碇、同日十字又々アールへ着泊、同日十字揚碇、(十一日より十二日朝まで激浪にて此困却、只今十一字半過、三四字ともならば) エジプトのポルトサイドへ着泊可致と東望相待居申候

過る五日夜發巴里、六日曉達梨音、此夜十字過又發梨音、七日朝到于摩留勢威留、於梨音出たらめあり、備一笑

汽車暮發巴城烟、單衣曉達梨水邊、千里行程一夢裏、足跡已既三洲偏、憶曾日出東武都、風雲屈指又三年、天子詔命尙在耳、恥我深情有誰憐、百慮煎盡國無益、千思空勞民難安、輕步落日心自懶、鐵石橋頭夏尙寒、碧流碎月々影亂、瀾波纒收月依然、此中感慨人知少、獨指東天立風前

于時六月十四日也

青木兄

品川へも可然御致聲、且つ無事にこゝまで参り候事も御傳へ被下度候

頼山陽朱批の江馬細香詩集

私は嘗て江馬細香女史の「湘夢遺稿」を読み、山陽と女史の間に只ならぬ情緒あるを感じ、「隨筆頼山陽」に、両者は單に子弟の關係あるのみでないと説いた。之れに對し或は女史の爲めに辯疏する人もあつたが、私は服しなかつた。近頃山陽朱批の細香の詩集が出版されたので、

それを讀んで見ると、一層自分の説を肯定するものがあるやうに覺える。

「三月念三遊風山有憶舊遊」の詩の「即今鬢上無多綠、却憶溪亭閑夢時」の結句に、山陽朱批して「閑夢二字恐來外人之疑」とあるが如き、暗に秘事を語るものではあるまいか。山陽と琵琶湖上に別る、時の詩の結句を、原作では「別恨極時幾度誦、途上賦詩送別篇」とあるを、山陽朱批して「結末雖是實事、微覺不振、以其無清語、爾當言廿年來相逢相別、未有如此別之難別之意」とあつて、細香は「二十年中七度別、未有如此別恨纏」と改めたのは山陽の示教に基いたもので、離情を一層切にしたのは詩家の手段であるけれども、亦實情を寓するものと思はない譯にゆかぬ。此詩は細香の集中傑作の一で、風味は最も末の二句に在る。そしてそれが山陽の改竄に係ることを知るは朱批の草稿の賜と云ふべきである。山陽、朱批を了つて一稿の餘白に朱書して云く、七月廿二日批了、方池荷花淡、紅色者開三三朵矣、丹酒送二兩尊到矣、恨不同飲此酒、同看此花也、山陽外史とあり。此種の文、山陽の常套に屬するけれども、此の場合には眞情の流露が見える。細香が、詩稿の餘白に和歌を録し、それに山陽の唱和したものがあつたが、これなどは兩者の間柄の尤もお安くないことを想像せしめる。

わかれてもまたあふみ路をかくる身は

あは津てふ地をよけてこそ行

御わらひ遊し可被下候

朱書

わかれても、ぢにみたぬも、くきね

襄

みのあるかぎりあはんとぞおもふ

細香の詩、山陽の加筆を得て玉成するもの少なからず、然れども全く雌黃を加へず、好評を與へたものもあり、恨らくは茶山翁に見せざりしことをなどと評した詩も二首ある。兎角うぶな草稿を見ざれば、其の人の眞の技能は分りかねる。私は山陽朱批の此稿を讀んで甚だ興を覺えた。此の詩稿の原本は頭陀囊に入れてあつて、其の表には、山陽の筆で細香詩囊の四字があるさうだ。細香が美濃から京都に遊ぶ時には必らず携へたものと見える。

此の朱批詩稿に木崎好尙氏のものされた附録が添へてある。好尙氏は山陽の日譜まで作つた山陽通であることは言ふまでもない。氏は附録に於て山陽と細香との往來を詳かに考證されてゐるが、それに據ると、兩詩人の情事を一層明かにするものがある。細香初度の入京は文化十

一年、山陽三十五歳、細香二十八歳、梨影（山陽妻）十八歳の時である。細香は知るや知らずや、此の年は梨影が山陽に輿入をした歳で、細香が山陽の家に招かれたのは、新婦と家庭を形作つて間もない頃であつた。その折は新婦の義親小石元瑞を觀櫻にと家に招いた處へ、細香も招かれたのであるから、情熱を藏する女詩人としては内心つらかつたであらう。その折につき好尚氏は左の如く録してゐる。

細香は喜んで當日出掛けて來た。こゝに吾々は一場の劇的光景を想像せざるを得ない。それは新婦梨影と細香女史との初對面の一齣である。細香は、昨冬恩師山陽との初對面には、必然に、事實として山陽の獨身生活といふことを聞かされてはゐなかつたか。聞かされないまでも、それを承知してはゐなかつたか。然るに事は意外であつた。歴とした若妻が席上を周旋するのである。一方梨影の身としても、主人の門人に、このやうな御婦人があらうことを承知してゐたとして、さて直接に顔を合せた時の感じは何うであつたか。この兩人の立女形を舞臺一ぱいに働かすことは、第一流の劇作家にあらぬ限り、先づ手を控へるの外はあるまい。細香の詩に、

雨歇春園滴未乾、翠爐烟冷夜香殘、暫雪礙月花猶暗、倩燭簷頭自在看

ぼんぼりをさしのべて、庭の夜さくらを見せたのが、梨影その人であつたとしたら、その場面はいよゝゝ訝ゆることになる。

新婦の假親夫婦を招いた席に細香を新婦に紹介するなどは、山陽も罪作りである。山陽もそれが氣になつたか、招く書狀の内には、「御氣つまりに候はゞ、先き〱御歸被成候歟、又登々庵方へ御出候ても可然候」とある。細香は新婦より十歳長ずる先輩で、容姿も優れ技能もある。かゝる席として辟易する筈はなく、暗に妹あしらひをしたであらう。細香は當時の新らしい女である。いつも山陽其他同人の間に伍すると、細香は山陽の細君氣取りでゐたとの説もある位で、内實眞妻を以て任じてゐたのかも知れない。

細香の二度目の上京は文化十四年、山陽三十八歳、細香三十一歳である。四年間、頻々たる書簡の往復はあつても會見を絶つてゐたのである。文化十二年の山陽の年賀狀には、去々冬（十年）去春（十一年）の合離共存出、闇然銷魂候……多病羸弱、伐性之事は謝絶仕候、唯閑談之伴侶無之を歎候也

と、ひたすら細香に對して、異性の好伴侶たるべく思相の情を寄せてゐる。

好尙氏は右のごとく淡々と録してゐるが、伐性謝絶に言及しないのは何故であらうか。前に伐性の事が無ければ特に言ふに及ばないやうに思ふが、どんなものであらうか。嵐山同宿の際の閑夢がどうやら氣にかゝる。溪停閑夢の句を、山陽は、他人をして見せしめば、或は疑を發せんと云うたのを、細香は氣にかけてか、「湘夢遺稿」にはあの詩が收めてないと云ふ。今手許に此の書がないから調べるに由ないが、好尙氏の云ふ所は如斯である。かゝる佳詩を割愛した處に何かあるのではあるまいかと、却つて人に疑惑を起させる。

文政七年五度目の上京には山陽四十五歳、細香三十八歳。此秋には山陽の母も入浴してゐた。伊豫の素封家木村力山に招かれ、山陽母子、梨影、細香は砂河に游んだ。其際に山陽と細香は相傘で賀茂の長堤を歩いたなどはお安くない。其時の細香の詩は、

好在東郊賣酒亭、秋殘疎雨兩撲簾旌、市燈未點長堤暗、同傘歸來此際情

夕まぐれのしぐれ空に、賀茂の堤を、提灯の火影で相々傘の道行は、とかく後人の邪推を招きやすいが、母と妻との同行してゐることを思ひ合はさねばならぬ。

と好尙氏は附記してゐる。

前に詩稿を見て録した山陽細香唱和の國風は、天保元年、山陽五十一歳、細香四十四歳の作であることが好尙氏の考證で知らるゝ。氏は此の唱和に左の如く附記してゐる。

この戀歌二首は漢詩人の作として、たゞにめづらしきばかりでなく、師弟相愛の至情として、無限の趣味を加ふるものである。併し、かの鄙陋邪推の俗眼者流にして、さらぬだに兩者の詩魂に一點の汚濁を投ずるあらば、それは藝術の園に逍遙することを許されざる、おぞのしれものといふ外はあるまい。

と云つてゐるが、何と粉飾しても戀は即ち戀である。「湘夢詩稿」全部が、實は戀史と見るべきものだ。師弟の兩性に切なる戀があつたとして、藝術に累するでも無からう。實は肉體を超越した戀愛ほど切なものは無く、亦永續するものは無い。山陽が老境に入つても脊々の情懷を往復毎に漏らしてゐるのも、四十四歳の老婆が戀歌を詠んでゐるのも、まゝならぬ戀にあこがれて、其の情を一層切にするからの事だ。

細香は七回まで上京してゐる。美濃は近いと云つても昔しは可なりの旅であつた。一生外へ

嫁せないオールド・ミスは江馬家にあつてもなくてもよかつたであらうに、それが京都に移らなかつたのも寧ろ妙に思へる。山陽が細香に與へた書牘の内に「何卒年のよらぬ内に、御上京之計御決被成度候」とあり、又一通には「春(文政三年)は何卒御一遊奉待候、如仰歲月如流、青春幾何、早自爲計を勝と奉存候」とあるを以て見れば、細香に京住居の意ありしがごとくなれども、終に果さなかつた仔細は知り難い。

細香入京の場合、多く平等寺といふに宿した。どんな縁因があつたのか、この寺に雲華や山陽も訪ねてゐる。随分不景氣な寺院と見え、山陽は其の荒涼の狀を叙し、狐に魅せられんと云うてゐる。細香の平等寺僑居の詩に「人過盛年情緒灰」とあるが、文政七年三十八歳の時の作と思へば餘りアテにならぬ。山陽が「信能如此、可嘉可敬」と云うてゐるのも何となく皮肉の感じがする。

細香女史の貞操に就ては紛々の論がある。女史が設令ひ一時たりとも師と肉體的關係ありと云ふに對し、女史の爲め清操を辯護するものは、曰く、斯る虚構の説を爲すものは、強ひて小説となさんとするのだと云ふ。知らず、相思うて清操を保持することは悲愴の極で、尤も小説的であることを。然らば清操を強ひて肯定するものこそ、却つて好事家の業ではあるまいか。

世の細香の詩を読む者、多く刻本「湘夢遺稿」に據り、山陽の評語も亦同じくこれに據る。而るに公刊の集に評語を取捨するのは恒例で、著者若くは遺族の刊行に係る者には特にこれがある。刻本の山陽の評語に往々隔靴の感ある者あり、或は評語あるべくして缺くが如きは此故であらう。朱批詩稿を見て吾れは殊に此感を深うする。原稿の重んずべきは是に由つても分る。

細香の詩の佳なる所以は、恐らく真情を吐露して僞らざる處にあらう。漢詩人の病は文飾に在つて、虚偽に墮せざるものは少なくない。師の山陽と雖も、全くこれを免るゝ事が出来ぬ。細香の遺編を取つて、後世之れを議するものあるは、其眞事を告白してゐるからだが、實は細香の詩の取るべきはこゝに在るのである。

細香を以て、貞淑清婉、紫式部に比するものがあるけれども、恐らく當らない。彼の女が酒を好んで、家に在つても同伴なきに困しみ、其の妹の他に嫁したのが歸り來れるを、酒の同伴を得たとて喜んだことが「湘夢遺稿」に見えてゐる。彼の女は京都文人と角逐してピクともせず、同人の席にあつても臆面なく山陽の家内を以て任じたといふが恐らく實事であらう。彼の

女の多くの詩は戀愛に關するが故に、一概に女性的に見えるけれども、往々丈夫的の詩がある。晩年國事に慨し、女丈夫と云はれたと云ふも、山陽の感化を受けた女流として、又當時の事情、校書の輩と雖も往々氣節ありしに考へ、國事を憂へたりとて不思議はないが、細香の素質は、柔婉、紫式部の如くでなかつたと思はる。此の點は山陽の室梨影などとは素より同日の談でない。星巖の室紅蘭なども、往々溫良の婦人と考へらる、が、事實、人の想像するとは異なつてゐる。兎角今の考を以て當時の讀書婦人を判ずるのは正鵠を得ない。細香は山陽を惹きつけるだけの勝氣な婦人であつたやうに思はる。

福地櫻癡父子

私の藏書の内に「茂園殘話」と「茂園剩話」といふ寫本がある。各四冊本で、日本の歴史に關する挿話を集めたもので、取り立て、云ふほどの面白い本ではないが、これが一代の才人福地櫻癡居士の舊藏本で、居士の父福地石橋が居士の爲めに特に編輯もし自寫もしたと云ふ來歴に

多少の趣がある。「茂園殘話」の首端に竹院長川照の自筆の序が收めてある。此人は長崎の人で、山陽の「日本外史」を精讀したと云ふを以て知られてゐる、東洲其人で、此序で以て此書が櫻癡居士の爲めに編纂されたことが分つた。東洲は其序の中に石橋の著書を擧げてゐる。曰く「糶糠錄」十卷、曰く「閩記」「續閩記」各四卷、曰く「省記」四卷、曰く「西清輿地誌略」一卷と。尙石橋が頗る多藝であつたことも言うてある。私が嘗て聞いてゐるのにも、石橋が彼崎小竹の門にゐた際、小竹は其才を賞して山陽に紹介したのが縁となつて、山陽と詠諱を戦はし、山陽ほどの才人も石橋には一籌を譲らねばならなかつたほどの才人であつたことは、拙著「隨筆賴山陽」に共に叙して置いた。山陽が得意の「雲耶山耶」の詩も、實は、石橋の友人の詩を剽竊したのだと、石橋から遣りこめられたなどの逸事もあつて、其の縦横の機才は人の許す所であつたと見える。東洲が其の多藝多才を擧げてゐるのも事實に相違ない。石橋は此序を見て、流石に乃父の多藝を兒孫に倣はしめるを欲しなかつた親心から、跋文を書いた、春帆と云ふ人に多藝云々を否定せよと頼んだのを、春帆は肯んじなかつたことが跋文に見えてゐる。これによつて見ると、櫻癡居士の多藝多才は傳統的のものであることがわかる。所謂の子を見る親に若

かずで、學問以外の事は己れに學ばしめたく無かつたのであらう。石橋が此書を息子に贈つた譯も序文に見えてゐるが、當時源一郎は阿蘭陀通詞を仰付かつて銚浦なる製鐵所に勤務してゐるので金品を遣はす必要がないと云ふので、自纂の書物を寄せたとある。居士の年譜を案するに、通詞となつたのは安政四年八月とあるから極めて若い時である。慈親は切に己が雜藝に倣はせたくなかつたらしいが、血脈已むなく、櫻癡も親同様の人となつたのである。居士が歿して其十三回忌に遺族の手で發行された紀念録「還魂紙料」に石橋が兒に寄せた詩が收めてある。

贈兒萬世

憐汝青年輕別離、東遊萬里在天涯、夜深燈下空馳夢、何識蘇錐刺股時

子を思ふ切々の情は詩中に溢れてゐる。石橋は荀庵と號し、名を源輔、諱を載世と云うた。

福地源一郎は早く阿蘭陀通詞をつとめた關係もあるので、文久二年、竹内下野守を歐洲へ派遣した時は、定役通辨御用と云ふ職名で一行に加へられた。其の時は二十二歳であつた。氏が日報社に聘せられたのは洋行の後で、なか／＼羽振りがよかつたと見える。當時畫家として新

聞に關係のあつた落合芳幾の語つた記事が明治三十七年頃の新聞に載せられてゐるが、其の切抜に福地の事が出てゐる。岸田吟香が兎角自製の目樂精錡水を紙上に吹聴するので評判がわるいと云ふ所へ、福地源一郎氏が外國から歸つて來た。其處で福地氏に筆を執つてくれと頼みに行くと、「報知」からは一篇三四十行ぐらゐるを三圓でといふ談があるが、「日々」の方は前々の關係があるから、二圓で承知をして毎日寄書をして居る。續いて正社員になつてくれと申込むと、自分は昨今大藏省の御雇で百五十圓の收入があるから片手間に寄書をするくらゐなら大した金は欲しくないが、愈々入社するとなつては考へ物だが、一體月給は幾ら出してくれる事かと、其處は福地氏で、如才なく切込んで來た。二百圓で入つて貰ひたいといふと、實は「報知」でも三百圓で入つて呉れといふが、汝おまへの方なら二百圓で我慢してやらうと、漸く正社員といふ事になつた。賣れ高は、岸田氏が主筆の頃に八千まで上つて六七人の株主で一ヶ月百七十圓つづの配當があつたが、福地氏が入社と共に紙面を改良してから代價を今までの倍にしたので讀者が急に減じた。然し其れは一時の事で、又々増加して元の八千までになつた時、福地氏は相談したい事があるからと株主を集めて、さて他ではないが、自分の月給は是れから百圓で苦しう

ない。其の代りに三株だけを買へまいかとの事で株主一同大きに困つた。株をやつては銘々の損になるが、さりとて今の場合で福地を手放しては困るから、結局二株だけをやる代り、萬一當人退社の砌は其の一株だけを取上げるとの約束で談は纏つたが、此の爲めに利益の配當は少なくなつた。ある筋への贈物などムダな入費が澤山に出て、社運日に非なる有様であつた所へ、例の政府の買収が福地氏の手から交渉されたと云ふのが茂幾の談である。

福地が日報社に入つた際の経緯は右のごとくで、報知と引ばり風であつたと見える。福地が強ひて株主を要求した程に利益があつた事も此の記事で知り得たのである。福地の力でも新聞はさまで殖えなかつたのが、遂に政府の機關新聞とまで漕ぎつけたのは、福地の力であつたに相違ない。

福地は政府に珍重がられ、岩倉大使の歐米に派遣の時も隨行を仰せ付けられた。其頃福地も漸く地歩を占め、政府の命でも容易く動かし得なかつたが、大隈家に存してゐる、伊藤公から大隈侯へ寄せた手紙に據ると、福地が命に應じない節には強制の外はないと云ふことが書いてある。福地は大切な外交には當時無くてならぬ程政府に珍重がられたと見える。併し彼れの晩

年は悲惨であつた。あれ程の才人も小説や脚本を書いて生計を立てねばならぬ程淪落した。父の石橋が氣を揉んだ通り、藝が身を助けるほどの不合せとなつたのである。大隈家に在する書簡の内に其晩年助力を請うた一通がある。又福地が歿した後、高田愼藏が福地から差入れた一千圓の借用證文を香奠と共に返してやつたのを、侯のお蔭であると云うて嗣子から侯に謝した書狀も存してゐる。福地は何れかと云へば薩長方で、大隈侯には善くなかつたのであるが、晩年は終に哀を請はねばならなかつたのだ。

櫻癡居士が多藝であつた一證として、既刊の私の隨筆に居士が角田竹冷に寄せて俳諧を論評した長簡全文を掲げたが、こゝに又居士が晩年梨園に身を寄せた紀念物がある。これは近く手に入れたものだが、居士自身の稿本で、並木五瓶原作の「時平公七笑」の内天満宮榮種御供の一齣に改訂を加へたものである。事かりそめにも皇室の事に關するから、萬一不敬があつてはとの用意から注意深く筆を加へ、尙且つ心が落着かなかつたと見えて、宮内省の高崎正風翁に、改訂の如くにて可なるや否やを問ひ、高崎翁が多少の附箋を施したものが即ち此の稿本である。稿本の首端に高崎翁に寄せた一文がある、左の如くである。

拜 啓

別冊、時平公七笑ト題スル脚本ハ、源一郎ガ改訂スル所ニ係ル、之ヲ劇場ニ演ゼシムルニ當リ、朱書ノ如ク改竄スルニ非ザレバ、帝室ノ御尊嚴ヲ冒シ奉ルノ恐アリヤ、朝廷ノ御稜威ヲ損シ奉ルノ嫌アリヤ、源一郎淺學寡聞ニシテ莊重ノ令語ニ通ゼズ、謹テ尊壽ヲ乞ヒ奉ル

明治三十年十月十四日

福地源一郎 匣

之れに對し、高崎翁の返翰が添はつてゐて、數ヶ所に附箋が施してある。其の返翰はさしたるものでないけれども、短文なれば爰に收め置く。

拜啓、昨日者態々御來訪之處、生憎不在中にて不得拜晤、遺憾之至に不堪候、御示之御脚本、早速拜讀を遂げ候、御改竄之廉々、成程御朱書之方穩當に可有之哉、小生かゝる筋には甚不案内に候へども、一覽之序心付候點二三申試候、餘計之事にもあり、嗚呼がましき事にもあれど、御笑閱被下度、御取捨は素より任賢慮候、又尊著一部御惠贈、忝拜受、厚く御禮申上候、

草略不備

十月廿三日

高崎正風

福地源一郎 殿

並木五瓶の作が明治の時代に至り、二名家の改訂を得たこと、珍となすに足る。櫻癡の原作脚本も少くないが、自筆本で殊に高崎翁の筆も加はつて居るから、爰に吹聴しておく。

吾郷の大數學家

前年、元帥海軍大將伊東祐亨伯が、越後小千谷オチヤに有名な算法家佐藤虎三郎なるもの、あることを石黒子爵に語られたのが動機で、佐藤の夥多おほまたある算學の著述の内から、特に「算法圖理三台」が引き抜かれて、其の内容の價値を専門家の審査に待つこととなり、三上義夫氏は學士院に於て審査の結果、此書は本邦諸算書中代表的のものであつて、同時代の外國人に之れに匹敵する程の研究をなせるものなしと判じ、頗る學界を驚かしたことがある。此の算法書は小千谷

の富豪西脇濟三郎氏に因つて覆刻され、當時學界に頌たれたが、私は數學に暗いから等閑に附し去つた所、此頃吾が郷里越後の水原（すゐはら）に石川坎山といふ大算學者があつて、門下生は四千人を數へたと云ふ事實を、或る記録に讀み、石川と此の圓理三台の著者佐藤の間に何か脈絡がありはしまいかと、急に思ひ立ち、先頃歸省した際に、新潟の圖書館から圓理三台と、それに附屬する、著書の傳を借り受けて調べて見ると、果して大なる脈絡があり、佐藤は石川の門人で其の高足で其の後繼者であることが知れ、石川坎山の偉さが益々明かになつた。

石川坎山の事は算學史に一應の經歷は書いてあるが、委しいことは今郷里に知る人がない。唯私の外戚で叔父に當る熊倉美雅といふが、矢張り坎山の門人で、算學に精しかつた。此人が先師の門人を扁額に録して郷祠八幡宮に獻じた時の題識の稿が存してあるので、それに聊か坎山の事がある。乃ちそれに據ると、坎山は諱は和、小字倉八、後七右衛門と稱した。江都に遊び、西橋長谷川氏の門に入り、留學十七年、備さに算學の蘊奥を極め、其晩年業を受けるもの四千人に上り、千葉胤秀、佐藤解記（即ち圓理三台の著者）は實に天下の達算と稱せられたとある。更に圓理三台の著者の傳の内に坎山の事歴が收めてある。それに據ると、坎山は初め業を日下誠

の門人望月藤右衛門（初の名鐵太郎）に受け、後初代長谷川善右衛門に學ぶとある。此初代が即ち西橋であつて、二代長谷川は初め坎山に師事し後に長谷川を繼ぐに至つた。長谷川氏の學統譜には坎山は別傳の筆頭に置かれてゐる。坎山が當時算學界の牛耳を取つた長谷川派社中に如何に重きをなしたか窺はる。坎山は文化十三年より六年間四方を周遊して各所の算學家と學術を闘はしたと云ふ事、竝に嘉永三年に歿した事、共に佐藤の傳によつて知る所である。

扱て佐藤虎三郎は、初め諱を忠助と稱し後に解記と改め、字は子精、雪山と號し、數齋、通機堂等の別號もある。文化十一年正月に生る。家は代々金澤屋菊右衛門と稱し、縮布商（ちぢふりやう）であつた。雪山は次男であつたので、分家して藥種商を營み、傍ら家塾を開いて學徒を教授した。雪山は不幸なる人で屢々妻を失ひ自身も僅かに四十六歳で安政六年六月に歿した。併し非常の精力家で其著書は幾十種の多きに及んでゐる。坎山の門に入つたのは天保五年で、師より早く其の學力の非凡を認められ、坎山の師の歿した折は伴はれて墓參の爲め江戸に出で、坎山より諸大家に紹介し、後に自家の後繼者と定めた。此の兩人は共に吾が縣の誇りとする人物である。

朝倉雜話と心學のポスター

心學者の巨擘鳩翁や堵庵の心學の本を讀む毎に、いつも其の説き方の平易であるのと、講釋に興味のあるのに惹きつけられ、振り返つて今の講義録を思ふと、何故に斯くも懸隔があるのであらうかと一歎を禁じ得ない。此頃堵庵の隨筆「朝倉雜話」(二卷、文化三年京都發行)を讀んで見ると、其の説く所は人情の至微を穿ち、平淡の話に至理を寓し、説き方が如何にも輕妙で垢ぬけがしてゐる。今左に其の數節を抄出する。但し文章を簡單にする爲め、吾が文に書き直したが、文意に聊か相違はない。

一 眞劍の勝負の項に云く、むかし或る城下に擊劍の名人あり。同じ城下に又網打あみうちの名人あり。此網打豪語して、如何に擊劍の名手を以て誇るとも、吾が網にかゝらざらんやと。擊劍の名手、窃かに之れを聞き、立會はんと需むるに、網打は諾し、且つ強ひて眞劍を以て立會はれたしと請へり。立會の結果、網打の網はくるくると劍を巻き、擊劍家の敗となりた

り。或る人、何故眞劍を望みしやと問ひ詰るに、網打答へて、枯魚に對して網はのびるものでないと云うた。

一 碁師の格言の項に云く、豊太閤西國征伐の時、向ふ所敵なく、攻めて抜き難い城はなかつた。唯一城如何にしても抜きかねて、諸將も謀略盡きたり。豊公、碁伯を召し、汝も勝負を業とすれば、斯る場合に處すべき法を知らん。遠慮なく語れと需められたり。碁伯は云く、軍旅の事は知る所にあらずれども、碁の上に就ての了簡を申すべし。取れぬ石は目ある石にて、如何に致すとも取れ申さず。それを強ひて取らんとすれば却つてあしし。取れぬ石は捨置き、取れる處を取れば、此石一つ取れずとも、碁は勝となるなりと。豊公之れを聞いて大いに覺る所ありたり。

一 今郭巨の項に云く、貧なる夫婦あり。一人の母に仕へてよく孝を盡せり。母病んで飲食する能はず。婦の乳を供して養ふ。一夜、夫婦窃かに議して云く、乳兒ありては乳を十分母に供する能はず。氣の毒なれども何れにか乳兒を埋めんと。隣人、壁越しに之れを聞き、夫婦の兒を抱へて行くあとを追蹠し、いさ土を掘らんとする時、不意に現はれ出で、金壹

兩を出し與へて兒を棄つるの不可を説き、此金を添へて他人に預くべしと云ふに、夫婦は喜び、厚く禮をいうて鍬を肩にして立去らんとするに方り、その鍬を吾等に預けられよと其人云ふ。鍬を預らねば、何方へ埋めんも知れずと、誠にやかに云ふに任かせたり。夫婦立去る後、隣人、夫婦がほりかけたる穴をしきりに堀りたり。蓋し壹兩の金を與へて金の釜を掘り當てんと試みたる也。

一 ある撃劍の達人、一日、高足に柱を切れと命じたり。高足は刀を抜き柱に向ひたれど、幾度か刀を揮つては躊躇らひ、遂に刀を納めて立去りたり。師は之れを見て感激して、その日、印可を與へたり。蓋し劍術は敵をこそ斷るべき術なり。柱は敵にあらざるが故に斷らずして已みたるは、劍術の奥意を覺るとして印可を與へたるなり。

一 或る少年、美妓を携へて、花の頃嵯峨野の邊花見あるきけるに、天龍寺のあたりに一つの庵あり。いと靜かなる體也。さしよりに窺ひけるに、若き男の清けなるが机によりて書見しるたり。少年これを見て大いに感じ、我れ花柳に沈姪して、あたら月日を費すは恥づべき事也。此人の如きは眞に樂土を得たりといふべしと、花見の興もさめてみえけ

り。扱て庵中の男は門外の人聲に氣つき、縁先へ立ち出でけるが、美妓を見て此男歎息し、あ、金がほしいと云ひけるを、少年聞いて、やれく。

一 五體の貧富の項に云く、人の貧富あるは天命にて、人力を以て變ぜらるゝものにあらずることは、己が一身五體のうちにも貧富貴賤あるにてあきらむべし。腹は常に衣服にて包み居れども、手足は常に使役せられ、首は此上もなく尊たふとげれども、常に裸はだか暮しなり。然りとて首が別に寒きにもあらず、腹が温かに樂にて、手足が別に辛勞なるにもあらず。只其天命を安んじだにすれば、何に成りても同じ事也。只己が職分を大切につとめ、強ひて富貴を願ふことなかれ。

心學者が公衆に倫理道德の教を布くに如何に苦心したかは、卑俗に解し易く書いた種々の著述を見ても、其の一端は知れるが、爰に布教の手段として講中は勿論、講社外の町内にまで、座右の銘とも云ふべきものを配布し、それを柱などに貼したことを思ふと、其の熱心さが益々知れるのである。私は此等の印刷物を五十種ほど寄せ集めた張込みを所持してゐるが、其文句も意匠もさまざまで、多くは短冊形の箋であるが、中には紙一枚或は半枚に長い文句のあるの

もあり、彩色はないけれども大抵は繪が刻されてあつて、發行者の名のあるものもあるが、無いものが多い。そしてどれにも「施印」の二字が刻されてゐて、施本であることを標榜してゐる。恐らく講中の篤志家が、資を投じて布教の爲めに配布したものであらう。長文句のある箋には「堵庵曰」などともあるので、推測するに手島堵庵の門下の業であるらしい。大抵どの箋にも道歌が一首若くは數首刻されて、往々剽切なものがある。今左に其の二三を掲げる。

○流れの中に壯丁が芋を洗ふ圖あり。其上頭に、

文を以て友を會し、友を以て仁をたすくるといふことを。

芋籠へ入てもまれよ磨かるゝいもにて

知れよ友のたすけを

○いがのある栗を描き、其餘白に。

外からは手もさへられぬ要害を

内から破る栗のいがかな

尙、傍に二首の道歌あり。

兄弟が田をわけどりのあらそひは

田わけものともいふべかりけり

兄弟の間もたがひに敵となる

欲ははけしき劍なりけり

○人形箱を胸邊にかけたる傀儡師の圖を畫して、其餘白に。」

くわいらいしむねにかけたる人形箱

佛だそつと鬼をだそつと

世の中の人の心のくわいらいし

鬼を出せばほとけかくるゝ

○十二月晦日と一行に大字を刻して、

訪書餘談

其傍らに。

大年常有

大としはつねにこそあれつとむれば

いつも正月住よしの松

○箋の上頭に寶珠を描き、其下に。

物ほしい心はあたら玉にきず

もとめなきこそ本のしら玉

○不倒翁の圖を畫して。

まけてのく人をよわしと思ふなよ

ちるの力はつよきゆるなり

○親子十體と題して。

「孝」の字を十體に書きわけ、法帖に擬したるものがある。これ張込み中の壓卷である。

十體の内、孝の字の満足に書かれたるもあれど、多くは筆劃正しからず。或は曲り、或は冠りの少と下の子顛倒したるあり、冠りの少甚だ小にして子の字のみ大きく釣合を失するものあり、子字のみで冠りは影ばかりなるもあり。十體の書を以て孝の等級をあらはすの諷刺は尤も妙を覺ゆ。

これらの例を以て此の印刷物の大要を推し得るであらうが、これは正しく一種のポスターで、千社札せんじやふだに比すれば、頗る意義があつて一段進んでゐる。

隨筆家細川十洲

明治以來隨筆を著した人は少なくない。新聞、雜誌などが盛んになつて、それに載せたものが纏められて、自然隨筆となつて現はれたものは別して多いが、新聞、雜誌に筆も執らず、唯

自分の興で書き、それを随時自家の蔵版として、自分好みの版式や製本で、出版毎に知人に頒つに止め、敢て賣る事を求めない随筆家は決して多くない。私の知る所では故十洲細川潤次郎男が此の代表であらうと思ふ。私は此の著者に交りはないが、此人の著書を坊間に見る毎に購ふことを例としてゐる。男は和漢の文をよくし、觀察が周匝で、着眼が奇警で、そして趣味は頗る多方面に涉つてゐる。男の刊行された随筆は全部幾種あるのか、知ることを得ないが、私が随時手に入れたものだけでも二十數冊に迫んでゐる。多分私の知らないものがまだあるのであらう。自分が集めたものに就て云ふと、日本の雅文で書いたものに「な、しぐさ」が二冊あり、「梧園隨筆」といふが一篇三冊で三篇まで出てゐる。紀行には、米國へ官命で勸業視察に行つた時の「新國游記」が二冊あり、奥州に遊んだ時の「奥游日記」があり、甲州漫遊には「峽程記」があり、他に「南游雜錄」、「毛遊紀程」、「探訪餘錄」、「近游日録」等がある。畫に就ては「梧園畫話」が二冊あり、盆栽に就ては「養蘭須知」があり、割烹に就ては「梧園食單」がある。尙此外に史傳として「三僧入宋傳」があり、「隱逸全傳」があり、「山内一豊夫人若宮氏傳」もある。ザツと此の列擧に就て見ても、男の趣味の廣いことが知れる。男はすべて自家の實驗に出たこ

とでなければ筆に載せぬといふ信條があるらしく、「養蘭須知」にしても、「梧園食單」にしても、類書より轉載などの跡がない。入宋の三僧なども、特に面白い人物三人を選び、韜晦の事蹟をよく考證してゐる。畫話には君の畫に對する識見が現はれ、九冊の隨筆には該博の學識が溢れてゐる。私が讀んで最も敬服したのは「新國游記」である。兎角漢文に書いた紀行などには一種の形式があつて、誰れのを讀んでも似た様なものであるが、これは全く其の撰を異にしてゐる。勸業視察が使命である結果として、毎日見る所ものは機械工場の類であるが、漢文で其の委曲を悉すことは尤も難しとする所であるのに、筆の行き届いて居るのに敬服の外はない。「な、しぐさ」も亦男の隨筆中の傑作で、如何にもやはらかな雅文で人生觀や誠めとなることが幾百條となく書かれてゐるが、それが皆自家の經驗から出てゐることで、少しも銜氣がない處に先づ讀者を喜ばせる。そして觀察の奇警である處に讀者を惹きつける。男は多方面に興味があつて、それを筆にして娛樂としてゐたと見える。自から隨筆家を任ずる人とは思はれないが、實は大なる隨筆家として斯人を推したい。

田中智學氏の日蓮傳

數月前、早稻田の大隈講堂で私が司會者となつて坪内逍遙博士の朗讀會を催した時に、田中智學氏が聽聞に来て、私に近著「大國聖日蓮上人」を贈られた。私は丁度其翌日外房州一周を企て、ゐたから、取り敢へず此の日蓮傳を携へて出發し、二日間の旅次、車中間斷なく此書を讀んだが、洵によい案内書を得たと喜んだ。房州は言ふまでもなく日蓮上人の生誕地で、誕生寺、清澄山、小松原を始め、到る處に上人に因縁のある處が、此の書に依つて委しく説明された。若し此書が無かつたら軽々に過ぎ去つたであらう地を、此書の説明で深い印象を受けたのである。

其境に臨んでそれに關係ある書物を讀むほど興味のあるものはないが、私は先づ日蓮傳を書くに其人を得たことを感じた。田中氏の日蓮研究も久しいもので、此人ほど此宗に信念が厚く、其の宗義に徹底してゐる人は多くあるまい。どのページを讀んで見ても、さながら日蓮其人の

風貌に接することく、如何にも活躍してゐる。どんな複雑深遠の義理も、手に取るごとく鮮かに説かれてゐて、毫も滯滞がない。日蓮傳はいくらも出來てをり、自分の讀んだのも一二に止まらないが、此書のやうに、燃ゆる如き信念を以て書かれたものはない。斯様な祖師傳に尤も必要とするのは精神である。田中氏は文藻に富んでゐる上に精神が溢れてゐて、長い間の蘊蓄を晩年に迨び一舉に傾けたのであるから、人を感動せしめるのも偶然でない。讀過中、恍惚として、田中氏から聞くのだから、上人自身から聞いてゐるのか、分らぬ程の妙があるのには敬服の外無かつた。

これに就て私の前日の坪内博士の朗讀の事を思ひ浮べた。博士は朗讀に先だち朗讀の根本義を講じて云はるゝには、朗讀は徒らに讀むのではなく、脚本ならば其れに現はるゝ老若男女さまさまの人物の肚の中まで讀み現はさねばならぬ。それをするには自作を選んで臺本とするのが最も便利であると云はれた。博士が各種の人物を活躍させたのは最も精神を心得てゐる自作であるからでもあつたらうが、三時間餘にも涉つて淀みなく朗讀をつゞけて、幾千の聽衆を酔はせた技能は、實に驚き入つたものである。これに就て田中氏の日蓮傳を思ひ合はせると、氏

の日蓮上人に於けるは、宛も坪内博士と其の自作の如きもので、上人に就ては徹底的に其の精神を知り抜いてゐるから、それが筆端に迸ると、日蓮其人が躍然現はれ來り、坪内博士の朗讀と其の妙を争ふのは偶然でないと感じた。

此の房州行は、往年汽車のない頃小野梓氏と漫遊してから始めて、今は鐵路が蛛網の如く敷設され、三十年間の發展は驚くべきであるが、私はこゝに其の紀行を書くことをせぬ。唯田中氏の著に依り促されて探討した、日蓮上人法難の地小松原に就て少しく語ることを、する。實は此地は始めて訪うて多少の感懷もあつたからである。

小松原は房州の鐵道が開けて繁殷の地となつた。鴨河から十分間自動車を驅れば到り得るの附近である。こゝは上人初度の法難の地で、上人が天津の豪族工藤吉隆の招請に應じ、法弟鏡忍外數人を率ゐて行く途中、かねて上人を念佛の敵として嫉視した、東條景信の襲撃を受け、剛勇なる鏡忍も闘つて終に斃れ、上人も傷を受けて殆んど危かつたのを、工藤が救援の爲めに來たので上人は救はれたが、工藤は終に打死を遂げた、悲惨の地が此の小松原で、東條村と云ふがそれである。こゝに大なる寺があり、鏡忍寺と云うてゐるが、難に斃れた鏡忍の爲めに建

てたもので、其の結構も宏壯であり、境内も清淨で、他の日蓮の故蹟は多く俗化してゐるが爰は全く俗化を免かれてゐて、甚だ氣持がよかつた。殊に意に適つたものは境内にある摩天の老樹で、中にも當時を物語り得るほどの老いたる榎が繁茂して、傍若無人の態度で、枝を張つて四方に垂下し、地に達せんとする光景は人をして崇高の感に堪へざらしめた。此邊は法難當時とは地形も變つてゐるであらうが、小松原の地名のあるごとく幽雅の趣があつて、法難當時の殺伐の事を思ひ遣り、日蓮並に法弟が難に遇つても毅然屈しなかつたことなどをそれからそれへと追憶して深く感懷に打たれ、低回去るに忍びなかつた。

讀書の鼓吹（ラヂオ放送）

今は燈火に親しむべきよい氣候であります。私は此の場合讀書の趣味を説いて見たいと思ふ。實は日本圖書館協會は、讀書を鼓吹する爲めに、四五年前から、丁度此の季節に一週間を圖書館デーと定め、全國圖書館所在の地と相呼應して、一齊に讀書鼓吹をやることになつてゐる。

す。其の方法として、讀むべき圖書を選定したり、圖書を書店や、呉服店のシヨウ・ウキンドウに陳列したり、或は讀書の勧めを講演したりしてゐる。併しなか／＼宣傳が届きかねてゐるが、けふ放送によつて聊かお勧めが出来るのは至極仕合せであります。

西洋では讀書の習慣が如何なる階級にも深く根ざしてゐて、行往坐臥聊かの時間も無駄に費さず、毎に書物を携へて歩き、如何なる場合でも書物に親しんでゐる。汽車、電車の内は勿論、浴場に於てすら讀書をするから、バス・ブツクと名のついた書物がある位だ。既にかゝる習慣が申し分なく行はれてゐるのに、尙且つ讀書の鼓吹を大いにつとめてゐる。米國あたりでは、電車の切符や、活動寫眞の切符にまで讀書鼓吹の文が印刷されてゐる。實に盛んなものだ。尙讀書を鼓吹すると共に書物を見るの便利は十分開けてゐる。一枚のはがきに書名を書いてポストに投げ込めば、間もなく圖書館から其本が届くといふ有様である。圖書館は勿論澤山ありますが、それよりも閱覽所が市内の商店などと軒を並べて澤山にあつて、通行の人が直ちにそれに入つて極輕便に見ることが出来るから、非常に調法である。巡回文庫と唱へて方々に回つて歩く移動圖書館も盛んに行はれてゐます。全體西洋人は幼少から圖書館に親しみがあから、

老人になつても圖書館通ひを決してオッコフに思はない。日本でもさうならなければならぬと思ひます。

實は讀書ほど健全な趣味は無いのである。恐らくは趣味の最も高潔なものであらう。日本では書物を重んずる習慣は無いでもないが、儒教の爲めに誤られて、此の趣味の普及が妨げられてゐる。即ち書物の濫讀を不可したり、書物は益を得るためのものとしたり、聖賢の書は机上に於てのみ讀むべきものとしたりするなどが、儒教から生じた謬りである。書物は益を得る爲めにのみ讀むものでない。濫讀も讀まざるにははるかに優るのだ。私は濫讀を寧ろ勧めたい位である。聖賢の書でも讀む暇が無ければ、雪隠で讀んでも決して苦しくない。いろ／＼窮屈な事をいふから讀書の嗜みが妨げられ、懶惰の人が口實に藉りるやうになるのである。

昔し讀書萬能を説いた詩人がゐます。その言ふ所を聞くに、家が貧しくとも書物には糧がある。立派な家を羨むに及ばない、書物には金屋玉堂がある。外出に伴れがなくともよろしい、書物の中には同伴がある。妻を娶るに媒妁が無くともよい、書物には花のごとき美人があると云うてゐるが如何にも其通りで、書物さへあれば何も要らないやうなものだ。之れを料理に喩

へれば、どんな味も書物の内にある。人のすきぐんで求めれば、どんな適意のものもある。然るに兎角口腹を肥す糧食は熱心に求めるが、頭腦を肥す糧食を求めるに冷淡であるのは何故であらうか。美食を得ないからというて人後に落ちることはないが、腦を肥すことを惜れば、必ず社會の落伍者になることを思はねばならぬ。

私は如何なる場合でも讀書を廢してはならぬと主張するものであります。實は讀書は其境に依りおのづから其の味を異にするもので、平生読んで格別何も感じないものも、時と場合によりしみぐんと感ずることがある。又ふだん興味を覺えないものが、時と處により妙に面白く感ずることがある。常に讀書の習慣ある人の得分はこゝに在るのだ。讀書の習慣があれば、どんな處にいても獨居が出来、退屈と寂寞を感ずることがない。私は曾て讀書の八境を數へたことがある。即ち第一は旅中汽車や船中や旅宿などの讀書。第二は酔後の讀書。第三は喪中或は幽鬱な時の讀書。第四は獄中の讀書。第五は行軍或は兵營中の讀書。第六は病中の讀書。第七は寺院に在つての讀書。第八は風景地の別荘などに於ける讀書である。此等の八境に就ては既刊の隨筆に説明してあるから茲には略するが、私は以上の如何なる場合でも讀書を勧める。そして

「此等の境地に在つて味つたり感じたりしたことは、一生涯忘れかねるもの、あることをつけ加へておきます。

兎角吾が邦人はいろくくの口實を設けて讀書を避ける。或は繁劇でひまがないといふ。しかし繁劇の人には尤も讀書を勧めたい。讀書は疲れた頭を和らげ氣を轉換する妙がある。貧乏だからといふ人もある。しかしこれも遁辭で、志さへあれば、昔の人のやうに月の光りや雪の明りで讀めもする。牛馬をひきぐも白をひきぐも苦學をして成功したものもある。多くの場合、衣食足つての人よりも、窮乏の間に苦學をした人が後に成功するのは、書物を眞味に楽しんで讀むから、ヒシ／＼と頭にしみ込んで義理によく通ずるからである。

ある人は、電車を己が書齋だと云うた。郊外地から三十分位を費して毎日市街へ往復する人は、讀書の習慣さへあれば、往復一時間に相當讀書が出来る。電車は或る意味に於て全く書齋である。尙爰に附け加へたいことは、讀書は目でのみするものでなく、耳でも今は出来るのである。即ちラヂオが廣く社會教育することは、目で見ると遙かに手廣いことを思はねばならぬ。兎角何事も習慣である。習慣となれば、遂にそれが第二の性となつて、其の習慣を廢す

れば却つて苦痛を感じるやうになる。私はあたら時間を毎日／＼ボンヤリ無意味に空しく費すのを、讀書に向けたと思ひます。

講義録文學

講義録が校外教育に大切な機關であることは絮説を要しない。然るに此の大切な機關が案外世人からジスレガードされてゐる實狀は寧ろ不思議な位である。世間の教育家で講義録を論じ數多き講義録の良否を鑑別する者も一向に無ければ、文學者として講義録文學を語る者も無く、所謂批評家なども講義録だけは全く別物として、それに目も觸れず筆も着けず、黙殺してゐる。一口に言へば、講義録に對して社會は一般に頗る冷淡である。これは一體何故であらう。始めて講義録の名を冠して、定期のパンフレットの世に現はれてから、既に餘程の年所を経て居る。此間に進歩發達が無いのではない。さまざまに意匠が凝らされ、講義の内容やら其の説き方にも追々工夫されてゐることは事實であるが、他の文學方面に驚くべき進歩發展を見つ

つある大勢に照すと、講義録は、其の文章に於ても、其の材料に於ても、講義の方法に於ても、他の文學の進歩と雁行するだけの進歩はなく、落伍してゐることは明かである。

日本の講義は、西洋のレクチュアとは趣を異にして、今尙書物の形式を備へてゐる。西洋のレクチュアは必らずしも章節に拘泥しない、そこにレクチュアの體があるのだが、日本の書物の如く章節を追うて行く。講義といつても、書物を割いて毎號に分載してゐるやうな觀がある。兎角講義をする人が書物を著す心持になつてゐるから、講義の體をなさない。講義文學の進まない原因の一はこゝに在ると思ふ。講義の目的は、自家の學識を宣傳するのではなく、學徒に會得せしめるのが主であるから、碎けた説き方で無ければならぬ。會得に難い處は百方そこに力を入れて、繰返し／＼説かねばならぬ。西洋のレクチュアは自由に行けるが、日本のは章節に拘泥するから其の自由を缺く。そして書物を著す様に備はることを求めるから、さまで必要でない事までも取り込む趣がある。今日の講義録を有體に云ふと、翻譯の少し碎けた位のものである。兎もすると、生ま噛みの直譯に過ぎないものもある。何程平易に書かれてゐても、翻譯と講義とは別物でなければならぬ。講義は翻譯以上のもの、翻譯プラス、プラス

何物かでなければならぬ。言ひ換へれば、翻譯を換骨奪胎して、翻譯の痕蹟を全然離れたもので無ければならぬ。少しも消化されず自分のものになつてゐない翻譯であるとする、引例なども、原書にある其儘を取つたりするために、日本の學徒に分らぬのも道理である。よく消化し、よく腹に入つた人の講義は、自在に眼前卑近の例を引き、趣味も深く面白くもあつて、誰れにも得心のゆくやうに説いてある。併しこれは老練の大家の爲す業で、今日の講義には殆んど稀れである。

いづぞや早稻田大學で昔しの講義録を展覧したことがある。其際に心附いたことのみならず、ある中に、足利頃の高僧達が講義に上手であつたことや、文祿の役に朝鮮から諺解の類が渡つて来て、それに啓發されて林羅山などが之れに倣つた事や、此諺解から端を發して示蒙、俗解、國字解、餘師などいふやうなもの、續出した事、平田篤胤、山崎闇齋などが一體の講義文學を創めた事、堵庵や鳩翁や道二などの心學者が平易な講義を創めた事などで、一概に皆々が今の優つてゐるとは云へないが、五山の僧の詩集や史記などを講じたものは鈔せうというて、其の筆記が残つてゐるが、皆口語體で、頗る寛ろいで面白く説いてゐる。講義の半ばに、今頃は番僧が

般若湯を持つて来る時刻だなどと談話を弄して、聽衆を笑はせてゐる所などもある。心學者になると、譬喩が如何にも巧みで、話上手であるので、儒者から幾度聽かされても身にしまない經書けいしよの或る所を、殆んど名人の落語でも聞くやうに易々やすくと面白く説き、終生忘れ難い印象を與へる手腕は眞に見上げたものである。新井白石の「讀史餘論」は史壇にいつまでも尊敬を受けてゐるものだが、あれも講義録であることを思はねばならぬ。平田篤胤が多くの著書を悉く講義體に平明に説いてゐるなども珍とすべきである。

流石に古い講義の内には今日の範とすべきものがいくらかもある。どうしても講義は其人の精神から湧き出たものでなければならぬ。學殖があつても講義の下手な人はいくらかもある。實を云へば、講義も一種のアートである。それに就て私の理想を陳べて見ると、講義録を書くには將來どうしても一種の専門家が起つて来る必要があると思ふ。換言すると、講者と筆者とは別でなければならぬと思ふ。講義をする學者と、其講義を講義録誌上に書く人、即ち多數の學徒に得心させる様に拵へ上げる人とは別でなければなるまいと思ふ。創作者は必らずしも説明上手で無いから、此二つが別れるのは據らない結果である。勿論、此兩方を兼ねた學者、篤胤、

鳩翁などを二十世紀化したやうな學者がどん／＼出来れば結構かも知れぬが、そんな事は望めないし、又分科専門といふことの段々さかんになる今日、それは寧ろ望むべき事でないかと考へる。學者は説明が上手で無くても、學者の本分は別にある。説明と敷衍とは他人に任せておいて敢て差支ない。

要するに、將來は、他人の學説を説明し敷衍することを専門とする人が出来ねば、講義録を理想に近いものとするとは六かしくはあるまいか。勿論、斯くの如き敷衍家には力量と才能とが必要であつて、大見識や創始の才は缺けてゐるにしても、學者からあら筋さへ示さるれば、直ちに痒い處に手の届くやうに之を説明し敷衍するだけの技能が無ければならぬ。斯ういふ注文通りの敷衍家さへ出来れば、原著者、原講者の思はくが却つて一層よく表はるゝ譯になる。この専門の敷衍家が出来る所までゆかねば、講義録は決して十分に發達しなからう。

若し果して斯ういふ専門の敷衍家が出来れば、社會がこれを尊敬し好遇してよいと信ずるのだが、それにしても從來の習慣上、單に敷衍家といふと、或は輕視されぬとも限らぬから、割の悪いのを構はず、公益のために犠牲になる積りの篤志家でなければ、所謂敷衍家たること

に甘んじないかも知れぬ。併しながら、大きく言へば、佛教でも、基督教でも、儒教でも、總べて教祖の説いた所は簡單なもので、弟子達の敷衍と説明とによつて偉大な發達を遂げたものであることを思ふと、敷衍家の仕事は名譽ある仕事で、決して侮蔑を受くべきものではない。

大隈家の反故しらべ

大隈老侯の薨後、略々跡仕舞がついてから、或る日未亡人に呼ばれて奥へ通ると、未亡人の云はるゝには、屋敷には諸方から來た手紙が保有してあるが、追々散佚して書畫屋の手などに移らないにも限らんから、此の際皆焼却したいと云はるゝので、私は押し止め、これから老侯の傳記の編纂に取掛らうとする場合、何よりも大切な材料であるから、さ様なことは見合せて下さいと云ふと、未亡人は、手紙が編輯に役立つものなら、あなたにお任せすると云はれたので、私も整理して見たいと思ひ出したが、さて保存されてゐる書簡其他の書類がどれほどあるか、殆んど想像もつかなかつた。老侯は手紙などに保存慾の無かつたことは我等の熟知の事で、ど

んな處から寄せた手紙でも一讀後は座邊に抛り出して置かるゝが、いつもの事で、それ等は皆家職の手で處分さるゝであらう。又緊要でない手紙は、家職の室で開封して仕末をするであらうと想像してゐた。曾て一たびも大隈家に書簡類が保存されてゐるなどは耳にしたこともなかつた。扱て愈々日を約して奥まりたる室へ行つて見ると、先づ其の分量の餘りに多いのに一驚を喫した。

二十餘りもある大風呂敷の中には、種々の反故が雜然と包まれてゐたが、無論書簡が多きを占めてゐた。凡そ半年分位が未整理の儘に入れてあるので、最初之れに手を觸れた時には、整理の容易でないことを感じた。さて幾十とあるトランクや支那鞆にはどんなものが入つてあるかと試みに一つ二つ明けて見ると、意外にもそれがよく整理されてゐて、發信人別に袋が造られ、三條公幾十通、岩倉公幾十通と云ふごとくに表書があつて、目錄まで副はつてゐたのは第二の驚きであつた。目錄の記載でおよそが分つたのだが、明治十三四年の頃、大隈家に相當な執事がゐて、夫人の命により整理を始め、三ヶ月を費したとある。即ち十三四年頃までの分が整理されてゐて、それより後の分が風呂敷に包まれてゐたのであつた。此の明治十三四年迄の分

が、故侯が要路に立たれて、最も活躍された時代だから、此の期間には大切な手紙が多い筈であるのに、それが整理されてあるのを見ては非常に愉快を感じた。とに角斯る大規模の文書、書簡類が廣い二室に置かれてあるのを始めて望んだ時は、手紙の海に漂つてゐるやうな氣がして、茫茫際涯を知らざる概があつた。併し自分の如く書簡趣味のある者には誠に嬉しく思はれて、自分の書簡趣味の經歷ではこれが掉尾の快であるとも感ぜられた。

全體老侯は豪放の人で物に執着がなく、他から寄せた書簡などを一紙でも保存するやうな意のある人で無かつた。自邸の藏に斯く山なす書簡があらうとは、老侯は恐らく夢にも思はれなかつたであらう。夫人が細心であられたればこそ、斯くも保存されたのである。

私は書簡を調べてゐる間にいろ／＼の感想が湧いた。第一、感じたことは、此の數多き書簡が悉く侯の手に觸れ亦心に觸れ亦目に觸れたものであると云ふことであつた。侯は一通／＼自から開封されたのである。その證據はどの書簡にもあり／＼と見えてゐる。侯には一種の癖があつて、普通は手紙の封筒の一端を横に裂くが、侯は必ず縦に裂くのが例で、どれも皆縦に裂かれてゐる。老侯は書畫や骨董に興味の無かつた人だから、手澤品などと云ふものは餘り無

いのである。眞に手澤を経たものと云うたら、此の書簡であらう。侯の指紋のどれにも印してあるものは即ち是れだ。

侯の手澤を経た書簡を毎日幾百通と展観することが既に快感を覚えしめたが、此の手澤品は骨董の如き死物でなく、其の内容は皆侯に觸れ、侯をして一喜一憂一顰一笑せしめた活物であるのだから、私にも自然精神的の感興が湧かざるを得ない。

書簡は與へる人と受ける人の間に諒解があるもので、他人が見ても分りかねることが多い。それを幾許でも理解しようと勉めると、次第々々に其の時代に釣り込まれ、この時分、如何なる事柄が朝廷或は社會にあつたかに想ひ到らねばならず、又引きこまれて、さながら書簡を受けた侯の立場に居つて見ないと、理解のつかぬことにもなる。随つて又書簡を與へた人の情思も、侯の立場で酌んで見なければならぬこと、もなる。さうなつて見ると、何となく維新の天地に立つてゐるやうな氣もする。コンな工合に聊かでも理解が付き判断を得た時は勿論快感を覺える。

多くの書簡は侯の祕史とも云ふべきものである。讀みもて行く内に、侯の経歴も分る。侯の性格も思想の推移も分る。いろ／＼の事件の消息、門外漢の窺察を許さない祕密も解り、書簡を投じた人の身の上なども分つて来る。これ等の書簡が侯の傳記を編纂するに大なる資料となることは勿論で、これまで曾て外間に知れないことも、多少知れてゐる事でも朦朧たる影の如きものが手紙で始めて鮮明となるものも少くない。或は世間で疑問としてゐることも、手紙でハッキリ判決され、寸毫疑の餘地を存しないことになるのも手紙の效能で、この意味から云ふと、手紙は證文である。何人も争ふことの出来ない證文である。事實の研究はなか／＼骨が折れるが、又興味は最もそこに在ることを感じた。

維新の風雲に際會した俊豪の手紙が海の如く山の如く集まつてゐる所に居ると、恰も幾百の俊傑が老侯を圍んでそこに談論してゐるかにも思はる。岩倉、木戸、大久保諸公の聲が聞こえるやうな感じもする。自分は侯の祕書役でも務めて侯の側らに在つて、それを傍聴してゐるかの如き感のあるのは亦一快である。

自分自身一時多くの書簡漁りをして維新前後の著名な人の筆蹟には大抵觸れてゐる積りであるが、大隈家の書簡が如何にも多方面であつて、私が一回も見ることのない筆蹟が續々現はれ

て來るので、私の書簡經歷が如何にも貧弱であつたことを恥ぢると共に、初めて目睹する書簡には一種の興を感じた。段々調べて見ると、薩には薩の一脈の流があり、長には長の特徴があり、土佐にも佐賀にもおのづから一脈の通ずるものがあるのも面白い。大切な材料は俊豪の手紙にありとのみ限らず、地位の高からぬ意外の人の手紙にあることも會得した。誰れが手紙を書く名人で誰れが悪筆であることや、それ等のことを知るのも亦一興であつた。

尙逸し難い所感の一は、大隈侯が自から筆を絶対に取らぬ事が知れ切つてゐるのに、よくも諸方から多くの手紙を寄せたものだ。侯より地位の卑いものや屬僚などから如何に多く寄せても不思議はないが、侯の先輩から寄せたもの、數の多いばかりでなく、委曲を悉した長簡が甚だ多いのに驚いた。それ等の人々は決して侯自筆の返簡を期してゐないのであることを思ふと何となく不思議に思はるゝ。當時は電話もなく秘書官もなかつた時代で、電話で済む位なことが皆自筆で書かれてゐる。三條公や岩倉公などの書簡の幾百通もあるのも此故であるが、岩倉公の、には頗る込み入つたものが多い。大久保公は用意周到の人で、大隈は代筆で返事を寄越すから機密の事は面談に譲る意で、あまりコミ入つた手紙はないが、木戸公の、になると、ど

の手紙も國家の機務に就て頗る議論が多く、随つて長文に涉つてゐる。此等の人々は皆侯の先輩であるのに、些しも筆勞を厭つた形蹟のなかつたことを思ふと、如何にも眞面目に國事を思つて、苟くもしなかつたことが窺はれ、元勳諸公の貴さが知れる。

*

*

*

*

*

*

*

これから進んで少しく内容に觸れて書いて見たいと思ふが、豫じめ斷つて置くことは、到底原文を其儘に引き、それに相當の考證を加へることは私の爲し難い事である。又斯様にすることは、此の隨筆に之れを収める目的でない。有體に云へば、大隈家の文書調べの折、聊か私がノートを取つたものを隨筆的に書くに過ぎないのである。随つて甚だ散漫たるを免かれない。手簡ばかりでなく、往々反故の内から或るものを捉へて、それをも収録するのは、どこまでも此一篇は隨筆であるからだ。

順序として維新前の文書を挙げたいのだが、それが極めて少ない。當時侯は志士として死活の間に各地に奔走し、例の豪放磊落の流義から身の廻りの物などは到る先々に投り離しにしたに相違なく、後の夫人の様な用意周到の人もなかつたので、多くの書簡や文書は皆散佚した

と見える。小野梓氏が侯の傳を編せんとして、大隈家から借り受けた大行李一杯の書簡類には、或は維新前の者もあつたかも知れぬ。今日大隈家に存してゐるのは主に明治七八年以後のものである事を考へ合はせると、明治初年のものも其内に在つたかにも想像さるゝが、それが全部小野氏の死去と共に所在知れずになつたことは惜しみて尚餘りあることだが、何分維新憧憬の際は自家の居所すら定まらなかつた時であるから、文書など保存されやうもないのである。大隈侯の辭令書箱の中には井上侯の辭令書が一通交つてゐた。これは所謂築地の梁山泊時代、井上侯が寄寓してゐた際に、投り出して置いたのが偶然大隈家に存して居るものであらうが、これなどを考へると、文書類が如何に散つたか、想像さるゝ。従つて維新前の文書が壹通でも發見されると、實に金玉の價があるやうな心地がした。

* * * * *

維新前の文書で先づ注意を惹いたのは大隈家の系譜であつた。大隈家の祖先は菅公から發して居るとはかねて聞いてもゐるが、此の系譜は元和から始まつてゐて、菅原家泰通稱彦次郎と稱せられた人が其祖になつてゐる。だん／＼と徑路を辿つて行くと、老侯の嚴君言保の名が發見された。嚴君の俗稱は初めは熊之允と呼び、後與一左衛門と改められ、配遇は即ち侯の母音羽の護國寺内に葬られてゐる三井子刀自で、この信保さんには僧雲端と云ふ兄弟なんぞもあつた。この信保さんの長男八太郎が即ち故老侯であつて、侯の上に二人の姉があり、更に一人の弟があつた。その弟は名を克敏と呼び、通稱は恒一郎、後に欽次郎と改め、岡本家の養子となつたが、明治十年に病歿された。この系圖は自分が今度始めて拜見することを許されたものである。

この外に佐賀藩に居られた時の辭令が二三通ある。一通には手明謹頭申付候とあり、他の一通には准國老被仰付とある。(武富時敏氏は明治二年佐賀の藩制改革の時だと云はれた)當時佐賀藩で准國老と云うてはなか／＼重い地位で、座席は江藤新平の次席、三十石加増のことがこの辭令のうちに記されてゐる。大隈家は元來百二十石取りの家であつたから、それに三十石加増されたとすれば都合百五十石となるわけで、石高から云へば江藤、副島よりも上に居る。唯維新過渡の時代で、藩政の事情もあつて、座席を江藤の次位に定めたのであらう。

鍋島家の文書を調べて貰つた中に、安政七年の記録のうちに極めて緊要なもの一を發見した

が、それには蘭學寮の指南役に大隈八太郎外三人ばかりの者が任命されたことが書いてある。それから慶應年間のものになると更に重要なものがある。その当時の長崎は外人が多く来り住つてゐたもので、外人に對する折衝が尠くない。その長崎が鍋島家の所領であつた所から、長崎の警備即ち國防事務は鍋島家の任務中でも頗る重大のものとされてゐた。

確か慶應四年の頃と思ふが、當時は國家の政體に變革があり、外人相手の事件が多く、従つて長崎が大切な場所となつてゐた、その時のことで、長い文書が鍋島家に保存されてある。その全文はこゝに掲げることは出来ないが、その意味は、大隈八太郎はこれまで長らく長崎のことについて専ら任じて遣つて來てゐる、即ち押取取計ひとあつて、追々はこの者をして鎮臺の參謀を勤めさせるが相當であると云ふやうなことが書いてある。その頃鎮臺の參謀と云うては非常の大役とされてゐたものだ。これは故老侯起身の事情を語るものであつて、當時既に侯は藩に於てかくの如く重要な事に當り且つ要路に立たしめられんとしてゐたのである。果してその後故老侯は擢でられて外國事務局の判事に任せられ、耶蘇教處分の事等に當つて非凡の手腕を揮つた。侯のこの立身は外務大臣の第一歩を踏出したにも等しいもので、その辭令は今も猶

大隈家に残つて居る。

今一通の書類は故老侯が明治政府に出仕してから後のことで、偶々政府の役人として佐賀へ歸られた時のものである。政府の役人であるのに藩から旅費を給するは變な話ではあるが、こゝに角藩から旅費を與へたものと見えて、その計算が書いてある。當時侯は四位で參議格であつたので、佐賀藩に於ても幕府の老中と同一の待遇をしたものだ。従つてその旅費も老中格で計上してゐる。その頃はまだ過渡時代のことであつたから一切が徳川時代の割出し法で計算されてゐるが、老中と云へば大勢の供が附せられ、行列を作つて東海道を往復したもので、供勢の旅費も無論加算されてある。佐賀から東京迄は道程三百里に十里不足してゐて、この旅費總額七百八十四兩二朱永九十文、その内譯は、

四百四十兩

仕度御手當

二百二十八兩

日當御手當旅籠料二十九日分

八十六兩三分二朱永九十文

繼人足十八人分二百九十里分

二十八兩三分二朱

川越貨錢繼人足十八人分

訪書餘談

これはなかく大金である。然るにその頃は既に汽船があつた上に侯は秘書官一人位を携へたに過ぎなかつたので、實際はそれほど金はかゝらず、殆んど全部只取りにしたやうなものであつた。このことは生前侯の口からしばしば話されたことで、金の無い時は旅行をするに限ると云はれた。

更に一二通の維新前のものがある。一通は僧離蓋の書面である。この僧は佐賀の願正寺の住職で、此寺には老侯歸省の節演説會が開かれて、郷黨も其堂に滿ちた。この寺と侯との間には深い縁故があつて、維新前に副島、大木や大隈侯が、國事を密議した處だ。離蓋は氣慨に富み勤王の志が厚く、傑僧であつた。寺も裕福であつたので、肥前の志士が國事に奔走する旅費は多く此寺で融通したもので、副島伯なども百五兩借用して、其儘に打棄て、あつたのを、大隈侯が代つて返金したのに對し、寺から出した受領書が大隈家に存してゐる。離蓋は一紙を附して、利子まで添へて返金されたことを謝し、尙餘分は自分に賜はる厚意を喜ぶ旨を書いてゐる。大隈家の家職の話に、この僧は侯の築地時代には侯の邸に寄食してゐたが、なかくやまましい男で、一同から畏敬を受けたと云ふことである。

今一通は大隈八太郎殿、片山傳七からの書狀である。この人は鍋島家の側用人で、手紙には牛肉の調理の事が書いてある。大隈侯は大の牛肉好きで、閑叟侯にも其の美味を語り、其の試食を勧めたと見えて、此の手紙には、御前には貴君の勧めにより牛肉を召し上るとの仰せである。ついではその牛肉と調理する人を至急寄越して欲しいと云ふのであつて、多少の愛嬌がある。

これから維新後に入るに當つて、先づ三條公の書簡に就て語る。三條公は當時太政大臣の地位に在つた。即ち内閣の首班である。公の手簡を百通程入れた二袋を見出して、既に其の多きに驚いたが、更に又百貳通入りの一袋を發見した。實に盛んなものである。中には頗る簡單な書面も少からず交つてあつた。何日何時内閣へ出頭ありたしなど云ふ、執事に書かせてもよい位のものまでも皆自筆に書いてある。これは筆まめの人でなければ出来ない業で、今日ならば電話で済むことが悉く筆に託されてゐる。

三條公の書簡の内には國家の機務に關するものが勿論多くある。當時木戸も大久保も洋行中で、大隈侯が留守役を勤めて居られたのだから、重大の政務は三條公を経て皆侯に集中した。

此頃重大事件が頻々として起つて、公を煩はしたものは少なくない。それが皆大隈侯の頭上に落ち來るのであるから、公の書簡の多いのも怪しむに足らぬ。公の手紙の内には云々の難件に就て考慮を頼むといふやうなものが最も多い。或は井上が厄介な事を言ひ出したの、西郷は困りものだと云つてゐるものもある。

三條公の書簡の特徴とも云ふべきは、すべて相談體で、自説の主張がないことである。公は濫藉の人で、人と争ふことを欲しない。幾んどこの手紙にも困難を訴へて、困つたから君一つ考へてくれと云ふに歸結してゐる。これが明かに公の性格を語るものである。そして木戸、大久保の不在中、侯が如何に公の信賴を受け、機務萬端を獨りで負つて立つてゐたかゞ分る。

それから木戸の書簡は頗る出色のもので、殆んど一通として平凡のものがない。必らず政治の機務にふれての意見がある。かつ言々句々の間豪宕奔放の氣があふれてゐて、遠慮會釋なく自説を披瀝してゐる。中には往々露骨に他を非難してゐるものもあるが、それはこの人の癖ともみるべく、その幾十通かのうちで洋行前に與へたのがある。これは頗る長文のものであるが、

その中に、とかく板垣は空論に馳せたがつて困る、あの解らずやがと云はぬばかりに罵倒してゐる所があり、又西郷に至つては、これを難物と云うて居り、頗る手古摺つた様子で、その處置に苦み、侯に相談に及んでゐるものもある。

同じく木戸の書簡中で關八州募兵論と云ふ事を繰返して、洵に君の説に滿腹の憤意を表すると云うてゐるのがある。此れは一寸分りかねた。武富時敏氏に問うた所、明治十年西南役に別働旅團即ち所謂の抜刀隊募集の事であらうと云はれた。あの當時九州邊の舊士族を用ゐれば或は戈を倒にするの慮もあるのので、重に關東に於て募兵すべしと主張されたのは道理ある事だ。

又他の一通には會津や慶喜等を名義だけでも洋行させなければならぬと云ふのがある。維新の亂後、西洋の新文明を日本に輸入して來て、その力でもつて國家を改造してゆかんとする時に當り、まだ徳川家累年の餘炎が幾等か残つてゐて、この革新の機運を阻碍する氣味があつたので、木戸は慶喜や會津を擁する者のあるのを憂ひて、どうしても少くとも此の二人を洋行させたい、そして西歐革新の機運を味はせたい。本人が行かなくとも名義だけでも可なりとしたのが木戸の議論であつて、當時の状態があり／＼と見える。

又同一書簡のうちに頻に對州の宗氏のことを心配して書いて居る。對州の宗氏、これが誠に不安固の地位に居る。地理の上から見ても歴史上から云うても、對州は日本朝鮮兩屬の關係があるもので、やゝともすると、どつちのものだか解らぬ曖昧のものとなる。それをこの儘に置く時は國際上不利の種を蒔く、何とか速かに處理する所がなければならぬというて居る。

木戸の書簡は抵ね改造の根本にふれて居る。如何にも慷慨の氣紙背に徹するの概があつて、悲憤の語をどの手紙にも發見する。一には木戸の天分にもよる事であらうが、木戸は元來非常に神經質の人であつて、晩年の病の如きも憤慨の餘りに發したもので、燕趙悲歌の士の様な悲憤の語は、彼れの書簡には必らず見る一種の特徴となつてゐる。そこで木戸は何時も故老侯に對して皆さんに議論を吹きかけ、非常に難きを侯に求める事が多いので、或る時の書簡には、木戸自らの名を「鐵面」と署し、大隈様を「大苦滿様」、「鬼怒より」と署したのものもある。これ等は一場の諧謔に過ぎないのだが、その時分の意味を想像してこゝに云ふならば、故老侯の地位は頗る難局に立たれてゐて、大に苦みに満ちた時であつた。そして木戸はヤキモキして起つても坐つても居られず、面倒な事や不平を大隈侯にあびせかける、自から鐵面と云ふ所以である。

木戸の書簡のうちに非常に長文がある。それは洋行中留守居をしてゐた侯に對して發せられたもので、宛名は參議一同とか參議御中とされてゐる。その時分海外へ出るには郵書の目方を多くせぬ爲に薄葉を日本から持つて行くのが洋行者の常で、木戸からの書簡も矢張り薄葉の半切れに書かれ、七八枚もかさねられてゐるほどの長文である。それが悉く留守中の政治に關したことで、一言も自家の私、西洋觀光の贅談に互つて居らぬ。

これ等の書簡を讀んでみると、木戸は侯より先輩であるは勿論、地位ばかりでなく年齢から云うても大分相違があつたのに、それが何事も侯に信賴して居る有様がどの手紙にも現はれてゐる。君ならではこの事は解決しかねる。處理しかねると云うて傾倒して居る所を考へてみると、木戸と侯との間は互に相許し互に相信じてゐたことが分る。

* * * * *

岩倉公のは三百餘通と云ふ多數のものがある。そしてその大多數は無論自筆だ。公は餘り書の上手の人ではなく、如何にも骨つぽいゴツ／＼した一種特色のある字で書かれてゐる。多く

は野の引いてある一定の半切れを用ゐて居るが、何にしる三百通にも餘つてゐるのだから、其の内には代筆が可なりにある。代筆は令息で、公よりは書き馴れた一段上の書である。代筆と云うても恰も本人自らが書かれたもの、如く、頗る重大なる事件に關して居り、中には具視と書かずして、對岳と云ふ雅號を用ゐるものもある。公のその頃の住宅からは富岳を望み得たので此の號があるのだ。

中に大隈三木殿としたのがある。斯様に書くことは公卿社會によく行はれた例で、一寸見ると滑稽の如く思はるゝが、實は公卿の習慣である。

又こんなものもある。それは西南事變のとき、公より老侯に與へられた書簡で、それには、貴公を殺害せんとして刺客が二十人、一説には四十人つけ狙つて居ると云ふことだ。如才もあるまいが、この場合御用心が大切である。大久保も今は必死の地に陥つてゐる。時局は頗る困難だ。どうか自愛して貰ひたいとある。

朝鮮事件に觸れた一通がある。あの事件には公は絶對絶命の地位に立たれたので、朝鮮一件如何にも苦慮、ならぬまでも人事の限りをつくしたい。是非御相談したいことがあるから、伊

藤と一緒に來てくれ。相談をしてその上行はれざる時は天也命也、致方無之、何分不一方御勘辨有之度候とある。實に簡單ながら大切な場合を言ひ現はして居る。かくのごとく公の書簡は、幾百通と云ふもの、ことごとく政治の樞機に關し、條公とは違つて、どの事件にも主張がある。

岩倉公洋行の時、久米邦武博士を伴はれたことは隠れもない事實である。しかし何の爲めであつたか、その間の消息を知ることが出来なかつたのを、今度公の書簡によつてそれを知ることが得た。即ち今度西洋へ行くについて皇學者を一人伴ふ必要がある、誰か相當の者はあるまいかと、公より侯にあてた相談の書簡がある。尙他に一通、岩倉公自から久米博士を同行したいが、どうかと云うて來てゐるものもある。これが久米博士を同行するに至つた消息を語るもので、同伴の趣意は略々想像が出来る。博士は閑叟公の家臣で、侯とは竹馬の友である。それが侯の推薦によらず、岩倉自身見立てられたのである。全體公は閑叟公に傾倒した人で、閑叟公の人格、殊に同公が夙に外國に着眼して西洋文明の思想を國內に導き、西洋文明についての新教育を施した事績には平素感服されてゐたものだ。爲めに岩公は自分の子弟を悉く佐賀へ送つ

て閑叟公に薰陶を託されたほどで、博士を簡拔された所以も、恐らくはその邊に原因するのであらう。

大久保公の書簡も可なりにあるが、その数は三條公、岩倉公の如く多くはない。そして我等の失望したのは、國務の大事に觸れてゐるものが割合に少なかつたことだ。勿論行政の細目に觸れたものは可なりあるが、大體當面に屬する事が多きを占めてゐる。前にも云うた如く大隈侯は自筆で返書を認める人でないから、用心深い大久保公は、わざと機務に屬することを認めなかつたのであらう。只こゝに記憶に残つてゐる、重大なことに關した手紙は土佐に關した一通である。それには土佐が謀反するかも知れぬ。よつて萬一の警戒に、土州藩に交附する金を當分留保する方が可ならんと云ふやうなことを相談して來てゐるのがそれだ。當時は各藩とも形勢頗る不穩で、一揆叛亂四方に起りさうな危険があり、又既に起つた所もあつて、土佐に於てもその氣味のあつたことがこの書簡によつて知れた。

老西郷の書簡、これも四五通ばかりある。されどその何れも餘り國家の重大事に觸れて居らぬ。何でも大隈家に傳はつてゐる、西郷の書簡のうち、南洲が薩摩へ歸るときに、侯に寄せたといふのがあつたと云はれてゐる。それはいろいろ自分の郷國には不穩のことがあるが、自分が歸ればそれを治めると云ふ意味のことが書かれてあつたとのこと、自分はそれを見たく、百方搜したが出て來ぬ。老西郷は大豪傑であつたと聞いたが、その人の書簡を見ると、意外の感に打たる、ものがないでもない。如何にも懇篤に、些細のことまで周到丁寧に書かれてあり、書體の如きも決して豪傑風でなく、俗にくだけた書き方をしてゐる。併し何となく渾厚の味はある。

井上侯の書翰も一袋あるが、多くは海運橋の邸にゐた頃のものである。侯はそ、かしい人であつたと見えて、封筒の表面に大隈大藏とあるべきを「大藏大藏」と書いてゐるものもある。案外ハイカラで、書中に西洋語が往々用ゐられてゐる。一時侯と非常に親密であつたことが、いろいろの書簡に窺ふことが出来る。

併し其の數多き書簡の中で最も興味を覺えるのは尾去澤の鑛山一件に關するものである。此の事件は當時やかましい問題で、井上侯を中心として表沙汰となりかけた。その時の司法卿は江藤新平であつた。所謂司法權擁護で、權勢ある井上だからと云うて假藉は出來ぬといきまいた。流石の井上もこれには閉口して、泣きを大隈侯に入れてゐる。一通の書狀には露骨に窮を訴へ、救護を叫んでゐる。又他の一通には、詮議の成行きはどんなであるか、窃かに漏して貰ひたいと云うてゐる。又物議騒然たる此の場合、貴君（大隈侯をさして）のやうな權門に自身出入することを憚ると書いてもゐる。如何に此の事件の爲め井上侯が困つたかは、多くの手紙があり／＼と語つてゐるが、私は故人の爲めに餘り委しく語るを欲しない。恐らく大隈侯の本意でもあるまい。井上侯は此の事件に付ては恰も猫のごとく如何にも物やさしいものであるけれども、元來疝癪持で、時々それが破裂するので、三條公その他も時々困しめられた。大隈侯とても持て餘したに相違ない。併し一日怒つても後に其非を覺ると率直に謝罪するのが侯の一長で、大隈家にも詫狀がいくらかもある。こゝが井上侯の美なる性格で、面白い所である。井上侯が疝癪を起すと留め役はいつも大隈侯であつたことが、種々の手紙によつて知らるゝ。

井上侯も本音は正直であるのだ。だから謝罪をするに決して吝かでなかつた。

伊藤公の書簡も數百通の多きものがある。公は書が見事で亦達者であつた。侯の書簡は大抵奉書紙に書かれてある。その多くは機務に觸れてゐるので、政治史には最も大切な資料である。到底その一端すら書き現はしかねるから、爰には僅かに一事を語る。岩倉公が條約改正の重任を負うて外國に派遣された時、公は外務大臣以上の地位にゐたのであるから、條約改正の談判は無論出来るものと思つてゐた所が、さて外國に行つて見ると勝手が違つて、外交一切の責任は外務大臣にあつて、他の者には其の權能が無いと刎ねられ、岩倉公も閉口して、其の意味を日本の留守内閣へ打電して來たのに、伊藤公が意見を添へて大隈侯に寄せた手紙がある。その頃の外務大臣は森有禮であつた。岩倉公は信任狀すら携へて行かなかつた。今考へると、随分迂濶のものであつた。

伊藤公の手紙の内に愛嬌のあるのが一通ある。それは公が熱海に遊んで、大隈、井上兩侯の爲めに旅館の肝煎をやり、大隈侯は富士屋、井上侯は相模屋と極めたとある。そして兩君の爲

疊がへまでして待つてゐるから、是非共来い。若し来なければ千圓の罰金を取ると諧謔交りに書いてある。又いつどんな必要があつたのか知りかねるが、監興借用を申込んだ書狀が一通ある。あの頃は馬車に乗つた時代であるのに、大隈侯の夫人は馬車嫌ひで監興があつたのを借りに來たのである。

* * * * *

明治の初期に外相であつた、寺島宗則は陶介と名乗つた時代もあつたか、大隈侯に寄せた書簡には陶介と署名したものが幾通がある。寺島が外相たりし時には英國公使パークスが非常のやかまし屋で、寺島の多くの手紙には此の公使に觸れたことが多い。當時實金の始末に政府も困しんだのだが、パークスは日本の貨幣制度を改めよと説き、それには先づ以て金貨の見本を造れと勧めたが、見本の鑄造に手間取れて容易に出来なかつた爲め、パークスはもどかしがり、激烈に寺島に談判をして、全體日本政府の役人は煙草を吹かし無駄話をして日を暮らす懶惰もの計りだから見本の鑄造が埒明かぬと、ブリーク怒つたと云ふことが報ぜられてゐる。外務省でも毎日パークスの御機嫌を窺つてゐたらしく、或る書狀には、パークスの怒が漸く解け

たことを報じてゐる。

* * * * *

福澤翁の手紙も可なり澤山にある。翁の手紙の特徴は議論的である。文體は言文一致とも云ふべく、幾んど談話を速記した様なものが多い。翁が十四年政變の斷末に密書を侯の出先へ特使を以て寄せた。それは極めて重大なものであるが、如何に搜しても見當らなかつた。出先に受取られた手紙であるから、侯の構はぬ流儀で保存されなかつたか、累の翁に及ばんことを慮り、わざと焼き棄て、しまはれたものか、兎に角見當らぬのは残念に感じた。今存してゐる二三の書狀に付て語れば、長崎にある高島炭坑を買取る時のことに關する書中には、高島は六千萬圓で賣ることになつた。精算を試みたならば、その上にも出づるであらう。ところが岩崎が異議を言ひ出した。それに對して翁は福澤一流の筆鋒でケチ／＼云ふな。そればかりのことを買ふことを見合はせるなどは以ての外だ。どうか買はしてくれろとザツクバランに云うてゐる。今一通には當時に於ける經濟思想の幼稚を難じたもので、外人との取引に正貨を與へるは已むを得ないが、内地人の取引は紙幣で済む筈だ。それを外人同様正貨を與へるは

不利である。御承知でもあらうが念のため御注意申すと云うて、内外人の別なく正貨を用ゐてゐるた不経済を指摘してゐる。又正金銀行創立に際し資本金を三百萬圓に定めたのを不満足として侯に折簡して、一體日本の経済界としては無理はないが、併しながら三百萬圓位の金で何事が出来るか。思ひ切つて千五百萬圓位にすべし。若しその必要があるならば、これ位の金は難儀なく募集してお目にかけてと微細に互つて案を委しく陳べてゐる。その見識と云ひ方法と云ひ、流石に経済手腕を持つてゐたことがわかる。又他の一通には、翁の門下生のうちで茶の輸出を目的として、資本金五萬圓で明治四五年頃融智會社と云ふのを創立したものがあつた。然るに餘りに小資本であつたのでうまくゆかぬ。そこで翁から侯に對して政府より廿五萬圓ばかり出資して貰ひたいものだと思願してゐる。更に他の一通には、慶應義塾の爲めに政府から廿五萬の金を出せと要求してゐる。なか／＼翁のことであるから議論が鋭い。政府は三菱に多くの金を與へ、政府保護のもとに商船學校を經營させて居るが、商船學校の教師は多くは私の塾から出でゐる。船乗りを作る爲めに保護を辭せざる政府は、何故國士を作る塾に保護を與へざるかと云つたやうに、鋭鋒當るべからざるものがある。尙西村勝三が靴を拵へると云ふに對し

て政府は五萬圓の金を與へてゐる。人間と靴と孰れか重いなども云うてゐる。例の獨立自尊を聲明しながら、或は會社の爲め、或は學校の爲め、論じ去り論じ來る處に矛盾もあるが亦興味もある。

* * * * *

爰に逸することの出来ないのは五代友厚の書簡である。此人の書簡は百五十通程を袋に入れたものが二つもある。どれも長文で、皆國事に關したものだ。五代といへば大なる山師とばかり考へて居る人もあるが、各通の書狀は彼れが意外な大人物である事を語つてゐる。なか／＼どの手紙もウツカリ讀過を許さぬ内容がある。それも其筈、維新の際には嘗て參與として臺閣に立つた人物である。伊藤や井上などの兄貴分でもあるから、此の連中を掌の裡に弄してゐる趣きがある。此人は文人風の竹を書くに相應の手腕があつて、大阪邊にはチラホラ見える。號を松陰と云ひ、手紙の署名にも十の八九は松陰とある。書も餘り能いとも云へないが、達者なものである。さて其の手紙に付て一二を云うて見ると、多くの手紙の中に清盛といふ綽名で呼んでゐる人がある。誰の事かと段々調べて行くと、或る手紙の中に此の清盛が洋行して歸朝後

密かに新聞記者を嚮應したりなどして之と結託してゐる事實を大隈侯に内報し、彼奴油断がならぬなど云うて居る。そこで誰かと考へたが、どうも判じかねた。然るに追々多くの書状を調べてみると、ヤツトのことに其人が知れた。清盛は即ち井上の事であつた。五代の云ふには、井上といふ奴は我儘で剛腹で傲慢で、厄介至極の男だ。それで彼には清盛といふ綽名がついてゐると云ふことが書かれてあつた。成る程と思つたが、洋行から歸り早々新聞記者を操縦したのは何の爲であつたらう。あの人の柄に不相應である様な氣がした。扱て又此人の書狀の冒頭には必らず例の五ヶ條御忘れ無之様願上候とある。此の五ヶ條がどうもわからぬ。そこで追々と幾十通も展覧して行くと、その五ヶ條なるものが見當つたので、さながら鑛脈にでも觸れたかの如く喜んだ。それは大隈侯の短所を五つ數へたもので、五代の言ふには、君の様な偉い人にも缺點がある。その缺點を知るものはいくらもあるであらうが、それを摘發するものは天下に自分の外に無い。虚心平氣に聽いて貰ひたいとあつて、さて第一の短所と云うて居るのは、君は自分が偉いから人の説に耳を傾けぬ嫌ひがある。假令ひ人の言ふことがツマライにもせよ、常に傾聽されたい。少くとも傾聽して居るらしく人の説の終るまでは沈黙して貰ひたい。

第二は、自家の説と他人の言ふ所とさまでの相違の無い時は、成るべく他の説を取り上げて其人の功に歸されたい。第三に、激語を發することを慎んで貰ひたい。第四は、事を處するに短兵急なる可からず。事の窮するを待ちて徐ろに處する様にされたい。第五に、君の氣に食はぬ人物でも可なりよく遇されたい。と云ふが五ヶ條の大要で、各條にそれ〴〵説明が附されてあるが、平たく云ふとコンなものである。是を見ると各條共に侯の急所を衝いて居るやうに思はる。老侯は晩年に及んで頗る圓滿の人となられ、如何なる人に對しても寛宏の大度量があり、敵人に對してすら激語を發せらるゝことが無かつた。人の話を遮つて自ら談説さるゝことは晩年も已まなかつたが、併し文明協會の茶話會などでは數時間に渉る他人の談論を默聽さるゝ様にもなられた。侯の晩年のみを知るものは、五代の擧げた五ヶ條を外れた評の如く思ふであらうが、侯の血氣壯んな頃はなかく覇氣があつて、エラ〴〵して居られた。苟くも自ら信ずる所は驀進敢行するに少しも躊躇されなかつた。それが兎もすると侯の累をなしたので、五代はかゝる友誼的忠告をなすに至つたのである。その幾十通の書狀に五ヶ條、五ヶ條と、常に繰返して侯に注意してゐるのを見ると、五代は侯の眞の知己と謂ふべきで、侯家に藏する書狀は海

の如くあるけれども、これ程友誼の淋漓たる書狀は餘り無い。

大隈邸に存する多くの書簡は皆眞面目に國事を論じたもので、戯れを言うてゐる者は幾んど無いと云うてもよい位だ。然るにこゝに一つ例外があるのは、中井弘から寄せた幾十通かの書狀である。中井は弘藏と稱し櫻洲と號した薩摩の男で、この男の手紙は一種の異彩を放つてゐる。かのパークス公使殺害事件の時、中井が勇を鼓して襲撃者を追ひ拂つたその時に關係ある書簡もあるが、他の多くの書狀は皆天真流露とも云ふべき味があつて、露骨に種々のことを告白してゐる所に興味がある。モネー百圓拜借と云ふのがあり、妻子を郷里薩摩へ歸さんとするに金に差支へたと云うて、二百圓の無心を云うてゐるものもある。又自分の病氣は多淫が原因であると云うて、これから郷里へ歸り静養して、生れ變つて面會すると云うてゐるものもある。いろ／＼のものを大隈家へ贈つた書狀もあるが、多くの場合、無遠慮に何々を頂戴したいなどと云うてゐる所から考へると、中井は大隈家と餘程懇意であつたと見える。但し大隈家では厄介な磊落家として遇してゐたらしい。

後藤象次郎伯の書簡は十通餘りもある。その頃の政治家中一番手紙を能くし且つ頗る書に得意であつたのだ。國事に關したものは少く、先づ大體は平凡のものが多く、只こゝに一寸興味のある一通は、その頃日本へ來てゐた外國人にヂブスケと云ふがあつた。この外人が日本政府は宜しく帝室の爲に徽章即ち紋所を定めよと云ふ建議をしたことを認めてゐる。ヂブスケの云ふには、西洋の王室にはそれ／＼徽章があつたのだが、それがだん／＼に國民化して行つて、王室の徽章は國家の徽章と混同さるゝやうに變化して了つた。然るに日本は萬世一系の皇室を戴いて居る。この點世界に倫を絶つ。よろしく速かに徽章を定め、この世界に冠絶する皇室の尊嚴を永く將來に保つことが大切である。徽章の意匠は日の丸に三種の神器をあしらつたらどうかと云うてゐる所に多少の興味がある。

明治十四年の政變で故老侯は桂冠され、爾來長らく在野の人となられた。あのやかましい政變に際し、侯の態度がどんなであつたかと云ふことを知るに最も大切な意味の書簡がある。そ

これは佐野常民から侯に寄せた長文の書簡で、これが甚だ面白い。どうもあなたはこのたびの進退には、自分も頗る心を痛めてゐるが、如何にもあなたの態度の立派なものには敬服した。あれほどの場合、神色自若として平時と少しも變らず、平然として悠々迫らない態度は驚歎に値する。これからは早稻田に閑居さるゝがよからう。自分の望む所では、なるべく人を避けて、多く語らないやうにして貰ひたい。と懇切を極めた書簡で、友情は字句の間に溢れ、一讀何となく涙を催さしめるものがある。佐野は侯とは同郷の士で、従つてあの際に於ける侯に對しては思ひやりが深く、その温情は一通の書簡に充ち満ちてゐる。早稻田に閑居して多く語るなど忠告した譯は、その當時頗る危険の良が四方に張られてゐるので、侯が憤慨の餘りウカと縦横の辯でも揮はうものなら、魔の手は直ちに侯の身邊に及ぶと云ふことを、諷刺したものであるは云ふ迄もない。

これに附け加ふべき一通は、自分どもの兄事した小野梓氏の手紙で、侯の進退に關して委曲をつくして書いてゐる。そのなかに梓の如きは無論侯に殉ずることを光榮とすると云うて、小野一流の慷慨悲憤の情を發揮してゐるが、一讀喩へやうのない悲痛を感じしめた。

* * * * *

明治十四五年頃の書簡の中に山縣公の書簡が十通ばかりある。皆餘り政治の機務にふれてゐない。不審に感じたことは、山公の書體の晩年と大に異つて居ることである。山公は能書の人であるが、明治の初年の書は極めてやはらかであるのに、晩年は好んで骨立した一種の文字を書かれ、以前の書とは幾んど別人の如く思はしめるものがある。恐らく若い時の書簡を卒然と見たならば、山公の書にあらずと判ずるであらう。この頃の山公の書簡はどれもこれも長文のものではなく、極めてざつとしたものであるが中に、熊本神風連の亂の將に起らんとした頃、熊本に於ける事情を故老侯へ報告して來たのがある。これには、自分は前年肥後藩に巡查をしてゐたことがあるが、今度行つてみると、滿城の風物毫も變つてゐない。依然として王化に浴せず、不相變固陋頑愚で困るといふことが書かれてゐる。巡查と云ふ字が耳障りだが、巡查の意であらうと思はる。

山公はあれほど長く存命されてゐたのに、その後には於ける同公の書簡と云ふものが甚だ少い。晩年の書體で書かれたものが四五通あるばかりだ。其内一通が重要なものである。それは、大

隈内閣總辭職の際、後繼内閣組織者は加藤高明子たるべしと云ふ世論のあつた時分、侯へ寄せたものだ。これは矢張り山公流の唐紙に書いてあつて、例の謹嚴な筆で一も塗沫した跡がない。草稿でも起して書き取つた如くに思はる。一見した所では手紙としか思はれない形式であるが能く讀んでみると堂々たる論文で、憲法政治の運用から、臺閣の首班たるものは、立憲治下に於ては、單に一院に於て多數を占めてをると云ふことだけでは、その地位に据わるることの出来るものでない。必らず他の一院に於ても相當の勢力を有してをることが必要條件とさる。即ち一般國民には勿論のこと、中外に信望を繋ぐ者でなければ首班とするに足らぬと云ふ意味が極論されてある。尤も誰れそれと個人の名は一つも指してはないが、恐らくこれがあの際の手紙でないかと思はる。

* * * * *

故侯の條約改正の蹉跎に就ての手紙は少くないが、そのなかでも代表的のものが二通ある。そのうちの一通は、其時の首相で條約改正に對して共同責任のある、黒田伯が、侯に對して急使を派し、事の急轉を報じた手紙で、封筒の上書には九月廿三日午後七時廿五分と、日付時刻

までが記入されてある。而してその内容は、陛下から改正案中に憲法第十九條に抵觸する所なきやとの勅問を發せられたことが報ぜられてあるので、これはこの條約改正に對して紛議が起り、而もそれが絶頂に達してゐることを意味するものだ。

外に榎本武揚子の書簡が一通ある。子は舊幕臣で、藩閥に關係のない公平の地位にあつた。それが條約改正の蹉跎をどう見たかと云ふに、文は極めて簡單だが意は極めて深く事は頗る重大である。この手紙によると、藩閥の嫉妬から、同じ閣内にあつて國家重大の大事業を共同して成功を勉めようとはせず、却つて隱險の手段を以て之れを妨げ、世間無識の暴論を暗に助けると云ふが如きは、言語に絶する不忠不義の所爲だと云うて憤慨してゐる。

* * * * *

以上擧げたのは眞に九牛の一毛である。維新の俊豪の内では、まだ江藤新平、大木喬任、廣澤眞臣、西園寺公望、板垣退助、陸奥宗光など澤山にあるが、それ等に就て一々擧げれば、一書冊をなすほどのものがあつて、隨筆などに到底收め切れないから、すべて省略する。但だ大隈家にあれほど澤山の手紙があつて、割合に少ないのは板垣、西園寺、桂公などの書簡である。

ことを爰に云うて置く。板垣伯は大隈公同様手紙を書かない人だと傳へられてゐる。大隈家は二通程もあつたと思ふが、氣拔な書き様で決して惡筆ではないが、代筆であるか否かは判然しない。老侯の門下生格の人の手紙は勿論多いが、侯の經歷に大切な資料となるものも敢て少なくない。加藤高明伯の多くの手紙などはそれである。その英國から發した加藤伯の一簡には條約改正の事にも及び、あの際に改正の成就しなかつたことは千歳の遺憾であると、既往を追懷し、且つ其際獨乙に公使として駐紮してゐた、西園寺公と會見の折、公も頻りに遺憾の意を漏らしてゐると報じてゐるが、大隈老侯の生前、曾て西園寺公が獨乙で努力されたことを聞いたことがある。なか／＼獨乙の外務省も手ごわく、初めは公も頗る手古摺つたが、時の外相ビスマーク(老ビスマークは隱退して二代目の時代であつた)に直接折衝して見ると、案外早く埒が明き、終に調印にまで漕ぎつけたが、一時は餘程困つて、已むなくば老ビスマークに訴へると言うて來たと語られたことを想ひ出す。當時公の努力が非常であつたことは想像に餘りある。加藤伯に公が遺憾の意を漏されたのも當然と云ふの外はないが、公はそれを手柄とさるべきであるのに、幾んど關知せざるもの、如く、傳記などにも其の苦心談が除かれてゐるのは

何故であらうか。まさかそれを云へば大隈侯の惡を助けたことになるかと云ふ譯でもあるまい。事實は事實で、それが不名譽どころか、寧ろ後の條約改正の前提として公の努力が與つてゐるのは勿論であるのに、事非なれば知らざる眞似をするとは、さても／＼の感なきを得ない。此他侯と一向交りのない人からもいろ／＼手紙が寄せられてゐる。自由黨の杉田定一から寄せた手紙を特に讀んで見ると、河野廣中を延いて閣員としたことを激賞して、流石に侯は立憲大臣だと稱賛してゐる。随分意外の人から意外の事を申越した手紙もある中に、相當聞こえてゐる人が金の無心などを云うてゐるのに少からず驚かざるゝ。兎角手紙はいつまでも残るものである。一旦發郵すれば、悔いても馴も亦及ばない。絶対に手紙に筆を把らない故侯は賢なる哉と言ひたくなる。

* * * * *

大隈家に存してゐる文書の内筆の序に觸れて置きたいものが二三ある。その一は雉子橋邸賣渡しの證書である。これは侯が藩閥の大なる壓迫を受け、糧道を絶たれた結果、早稻田の邸に引移らなければならぬやうになつた悲劇を紀念するものである。雉子橋の邸は大震災前まで

佛國の公使が住つてゐられたが、あれを賣る時は外人に土地家屋を譲ることが國法で禁じてあつたので、澁澤榮一子を買人となつて、内實佛國に賣つてゐる。其證書面を見ると、地坪が五千六百五十八坪、此の價五萬五千五百圓、それに對し二千圓の手付が打たれ、明治廿年二月十日から二週間内に全部の代金を濟ます約束となつてゐる。此の證書こそ藩閥者流が連衡して候を苦めた悲痛の狀を語る左券とも見られるのである。

まう一つ證書がある。それは明治三年に貳千圓の金を岩倉公に融通した證書で、その返濟法は、給米を賣却した上に辨償するの約束で、岩倉家の用人二名が署名してゐる。この外に前田正名が洋行費として洋銀二千枚を借用に及んだ證書がある。此等は皆返濟されなかつたらしい。尙侯の光榮を傳へる、一文書がある。それは勅命に依り三百圓恩賜の書付で、書體に功勞が悉されてゐる。多分岩倉、大久保、木戸が洋行不在中の功勞を特に賞されたものであらう。

又一通は、明治二年二月、洋銀二千枚を薩摩辭書二千部買受け代として著者に假拂ひをした時、一等書記官何禮之助（禮之）、薩摩學生前田弘安兩人からさし入れた書付だ。この辭書は云ふまでもなく日本文化の上に非常に貢獻せる、而して日本人の力にて始めて出來た幾んど最初

の辭典であつて、二千部洋銀二千枚であるから一部洋銀一枚、當時の値としては必らずしも廉でない。その書を二千部兎も角買上げたことを見ると、政府は文化に汲々としてゐた意氣も知らるゝ。他の書簡に徴するに、これは開成學校に交付されたものである。この書付の内容について一寸注目すべきは、何れこの書の値はフルベッキと相談の上に改めて精算可致候とあることだ。當時かやうなことを相談するにはフルベッキより他にはその人がなかつたのである。この一片の書付は日本文化史の一端を語るものとして一種の興味を感じる。

爰に又重要な反故がある。それは侯が樞密院の顧問官を辭退する辭表の正書である。之れに就て多少言ふべきことがある。侯は條約改正に失脚して、外務大臣を退いたので、勅命で樞密顧問官を拜したのであるが、侯は思ふ所あつてそれを辭された。然る處聖上は御聽許あらせられず、特に土方宮内大臣を侯の邸へ遣はされ、優渥なる聖旨を傳へ、辭表を返却に及んだ。侯の家に辭表の正書の存してゐるのは此の故である。かゝる優渥なる御詔のあつたことは、大隈侯に對し陛下の御信任の厚かつたことを語るものであるが、此事が一向傳はらない譯は、或は藩閥の嫉妬から故らに抹殺に附したのであるかも知れぬ。尙此事に附帶して云ふべきは、丁

度其頃陛下よりお手づから功臣に下賜金があつた。即ち大隈侯に賜つたのは五千圓で、副島伯三千圓、伊藤公千圓と云ふ格であることが隠れもない事實である。大隈侯への賜金が破格に多いのも、陛下が特に侯の功勞の多大を思召されての恩賜であつたのではあるまいか。條約改正で負傷の場合は三千圓の恩賜があつた。それはお見舞金であつたとすると、後の御下賜は全く功勞を思召されての事と解するの外はない。世間往々大隈侯は君寵が薄かつたと云ふものがあるが、それは實際を知らない人の推測であることを證する一端ともなる事實であるから爰に掲げておく。

まう一つ捨て難い反故があつた。それは侯の邸への來客が一年どの位あつたかを語る統計で、執事が作つた表に因ると、明治四十四年一個年の來客數は一萬九千二百十八人、内外人二百五十六人とある。そして侯の外出された數が九十回と數へられてある。明治四十四年頃は侯の得意の時でもなかつたのに、尙これだけ多數の客があつた。勿論平生の常連は此中には加はつて居らぬ。扱て大正元年になると、その數を増し、一月より十二月卅一日までにて二萬三千九百六十三人、内外人二百四十五人、外出回数百廿七回。この年の十二月一個月だけの分八百十六

人、内外人廿一人、外出九回。又同元年の來客に對して食事を饗した數は上二千五百廿三人前、並一千六百四十一人前、西洋料理五百五十人前と云ふことである。

今閣筆に臨んで、云うて置きたい事は、大隈家の書簡が何故に貴いかと云ふことである。それは、(第一) 侯へ手紙を寄せた人々が概して天下の第一人者であり、(第二) 内容が抵ね大政の機務に關してをり、(第三) 維新匂々のころは國家改造の重大時機で、手紙は専ら此の時機に觸れてをり、(第四) 侯は政務の最も大切な外交と財政に與られた故に、此の方面に關する手紙が多くあり、(第五) 侯は強大なる藩閥に挿まれて其の立場が複雑であり、隨つて誤解を受けたり宥罪を得てをることもあるが、多くの手紙はそれを闡明するものであり、(第六) 又早く歿した俊豪の文書は既に世に散布してゐるが、侯のは絶対に世に出でず、秘密の扉が始めて開けた事などが、珍重されねばならぬこと、思ふ。

私が大隈家の反故しらべをした其の紀念に十五六通の書簡を贈與された。私はそれを表装して風雲書簡と題して珍藏してゐる。今筆の序に聊かこゝに其の大略を叙して見よう。岩倉公の

書簡には署名が岩倉左兵衛督とあつて、維新匂々の面かけを存してゐる處に面白味がある。伊藤博文公の書狀に八太郎様俊介とあるのも維新匂々の味が籠つてゐる。書中に「過日大村於京師不幸手紙を負候處、追々快氣之よし、右暴客は已に就縛申候、案外に長州人あり、汗顔の至に候」とあつて、大村遭難の事に迫んでゐるのも珍だ。陸奥宗光は大隈侯の雉子橋に住居時代には其の隣家に住してゐたのだが、其前には何れに住したか、其の手紙に依れば、洪水にて永代橋斷落、大橋も人力車通行相止まり、賤羔も亦全快に至らず、色々御相談すべきことあれども參堂難相叶云々とあるが、書簡箋には電線の上を郵便配達夫が驅けてゐる圖があつて、此のハイカラ趣味の用箋は當時頼りに喜ばれたものである。上野景範の書簡は、大隈侯より盆梅の無心を云はれ、それを送る時のもので、「小官の如き無意氣者には解語の花却つて意に適し、如此き不興の草木は放却いたし候とも聊遺憾無之」とあるのがをかしい。それを見ると、侯は早くから盆栽に興味があつたことが窺はる。寺島宗則の書簡は、洋食の器が漸く全備したから午餐を供すると云ふ文意で、外務卿の宅に洋食器がやつと揃つた消息が分つてをかしい。島義勇の手紙には雪髯の號を署してゐる。書中に「頃日横須賀供奉仕候處、船中にて突然ガラス障子頭上

に落かり、少々疵を受け候につき、三五日無餘義養生仕候」と一椿事を報じてゐる。

福羽美靜の書簡は坪内博士の事に涉つてゐる。「博士の「通俗倫理談」を一談し、是非面晤致度も、衰老足腰自在ならず、賢臺御懇意ならば、御紹介にて拙廬へ尋ねられ候事相叶申間敷やとある。中井弘藏の手紙には「五代方へ御招き致度に付、必らず御新婦御同道被下度、御違約無之様」など、例の中井流を發揮してゐる。大谷光演の手紙には、老侯の厚意を懇ろに謝し、何か差上度も格別のもの無之、大根を獻ずるとあつて、「風呂吹きや伯爵の膽斗の如し」と俳句を添へてあるのがおもしろい。五代友厚の書狀は頗る長文にて、公私さまざまの事のある中に、京師よりも歸阪の節、石清水八幡宮の黄金の櫛を見たことを記し、此鑄物厚さ一寸二分幅三尺長さ十三間あり、此金を以て新貨幣を鑄造すれば二三百萬圓を得べしなどあつて、更に京都の美人の相場に及び、今既に三割を下たる、來春には五割引との事、是非御遊來あれと勧誘し、自家の心事を陳べて、自分は向後一意蓄財、先生方の疲弊を補ふべしなどあつてなかなか情味がある。

福澤諭吉の書狀は三河額田郡の天主教葬が裁判沙汰になつてゐることに關してゐるが、文面

筒で委しく知りかねる。大谷光勝の書簡は勅額下賜の配慮を乞ふの文意であつて、何れも多少の趣がある。

竹頭木屑録

神武天皇の御銅像

四五の藝術家と同席した時、偶々神武天皇の御事歴に關する話が出て、自然同帝の銅像の事にも亘つた。美術學校に藏してある御銅像は前年竹内久一氏の謹製したもので、氏が此作に取りかゝつた時、御相貌に就て種々の説が出た。氏は頗る胸中成竹あるもの、如く、御相貌なら心配に及ばぬ。俺れはチャンとした考據を握つてゐる。其他の事に就ては研究してもらひたいと云うた。さて愈々出來上つた時、田中智學氏が竹内氏と懇親である處から、先づ内々に覆面の巾を外して拜せしめた。それを拜すると、御相貌は全く明治大帝の龍顔そっくりであるので、田中氏も成るほど感じたといふ。その際竹内氏の云ふには、萬世一系の皇室であらせらるゝから、お顔の御似遊ばすのは當然であると平氣で説いたとある。到底想像が出來ない以上は、

英邁の天子の御相貌を型とするより外に方法はない、そして神武帝の御行蹟は、明治大帝の御行蹟とよく似寄せらるゝから、竹内氏の工夫にも一見識があると感じた。

北野の菅廟を拜して

昨年の秋京都に遊んだ折、久方振りに北野の菅廟を拜した。青年の頃拜した時には、社殿の結構其他に理解がなく、さしたる感じも無かつたが、今度は境内の神々しさと、社殿の結構の壯麗なると、種々の建造物の按排の宜しきを得て居ること、に氣がつき、云ふ可からざる莊嚴の感に打たれた。近年は寶物殿も建設され、そこに多くの寶什が陳列されて、従前、容易に見ることの出来なかつたものが、今はたやすく拜觀の出来る便利も開けてゐた。私はかねてから見たいと思つてゐたものが二つある。一つは樂翁公が納められた文晁筆の北野縁起と、他の一つは松浦武四郎の獻じた鏡であつた。そして幸ひにして兩つながら見ることを得た。樂翁公の納卷は往年大隈老侯が一覽して感慨を寄せられたもので、侯は樂翁の此の納卷に潜在の意義が

あると云はれた。樂翁の政治境遇は菅公のそれと甚だ似たる所がある、同情ある樂翁が此卷を納められたのは偶然でない。侯は斯く云はれて自家の事には及ばれなかつたが、何ぞ知らん、侯の政治境遇も亦菅公樂翁に甚だよく似てゐることを。これが侯の此の繪卷に一層感を深くした所以であるまいか。私はコンなことを考へつゝ、陳列されてゐた此卷をガラス越しに見、特に末尾の題識を見て感慨無量であつた。

松浦武四郎が屢々蝦夷、樺太を探検調査し、北海道拓植の基を開いた、其の紀念に北邊の地圖を刻した大鏡を奉納したのはよい思ひつきで、其事は久しく聞きながら、見る機會の無かつたのを遺憾としたが、今度はそれを見たのを仕合せとしたと共に、みづから迂濶であることを恥ぢた事は、松浦の獻鏡已前に、加藤清正の納鏡先例のあることを知らなかつたことである。清正が朝鮮の役に豊公より我が身代り、とあつて授けられたと云ふ此の大鏡は、名人天下第一木瀬淨阿彌の作で、裏面に日本の古圖と豊公の紋が刻されてある。松浦の獻鏡もこれに倣つたものであることを今度始めて知ることを得た。此の二鏡の外に、大阪毎日の社長本山彦一氏が明治大正時代の帝國領土擴大の圖を刻した納鏡も今度始めて一覽した。これも二先輩の蹤を踏んだ

に過ぎないけれども、其の思ひつきは頗るよいと感じた。今後も日本の隆盛につれて此の三鏡に倣ふことは尤も望ましいことである。

泉岳寺の義士碑

高輪の泉岳寺に、もと赤穂義士の碑があつた。それは龜田鵬齋が自から文を撰み、自から貲を投じて建てたのである。其碑が何故か維新前に所在が知れなくなつた。現在建つてゐるのは政教社が再建したものである。扱て何故一旦建てた碑が無くなつたかと云ふに、いろ／＼の説がある。或は幕府の命で取拂つたと云ふ説もあれど、實はさうではなく、泉岳寺の主僧の或る交替期に、前任のやつた事を破壊したり改造したりする僧があつたから、多分その僧の仕業であらうと云はれてゐる。勿論官私兩學の軋轢時代、鵬齋が私學の巨擘であつたので、寺僧が官學に媚びる思はなくとも手傳つて斯る所業に及んだのかも知れんが、幕命でない事は確かである。國分青厓氏の談である。さてもとの碑はどこに運ばれたかと追々穿鑿して見ると、石質

が佳良であつたので、刻字を磨して、他の供養の碑に變じ、今も境内に在ると云ふが、その碑面を検するに、もとの刻字がスツカリ磨ききれず、模糊の間に舊刻字が見えると、これも青厓氏の談である。

天平時代の紙の品目

昨年發行した拙著隨筆に紙の事を録したのが機縁となつて、田中青山伯から、天平時代寫經用紙の品目を寄せられた。伯の附記に據ると、醍醐の三寶院の僧玉園快應といふが好事の癖あつて、特に調べて伯に寄せたとある。品目は六十五種の多般で、千年前にそんなに多種の紙があつたかと驚歎せしめる。實物を見ざれば判断のつきかねるものもあるが、寫經用紙とあるからには、多くは鳥の子などの上製のものであらう。品名から考へても相當に意匠が施してあるやうに思はれ、表紙用もあり、染紙そめがみも数々あつて、色もさまざまであるかに思はる。千年前に斯くまで意外の發達を見たのは、奉佛の努力が然らしめたものであらうが、遺憾なことは、今

一々に就て考證を加へることが出来ない。但だ品名を爰に收めて紙の研究家の參攷に供する。
品名は勿論正倉院にある書付に基いたものであらうと思ふ。

正倉院古文書中寫經用紙品種目錄

六十五種

金薄敷青褐紙	金薄敷減紫紙	金薄敷白紙
金薄敷紫紙	金薄敷紅紙	金塵綠紙
敷金綠紙	銀薄敷紅紙	銀薄敷青褐紙
銀塵紅紙	淺綠敷銀薄紙	胡桃紙
深胡桃紙	中胡桃紙	淺胡桃紙
淺波自紙	深波自紙	淺紅紙
深紅紙	中紅紙	深橡紙
敷白橡紙	深綠紙	綠橡紙
深縹紙	淺縹紙	蘇芳紙

朱芳紙	深苺安紙	淺苺安紙
藍色紙	青紙	紫紙
白紙	雜色紙	白布紙
黃褐紙	波和良紙	杜中紙
楸紙	白麻紙	長麻紙
唐長麻紙	穀麻紙	檀麻紙
梶紙	幡磨薄紙	幡磨經紙
尾張紙	出雲經紙	美作經紙
越經紙	金塵色紙 <small>縹紙料</small>	金塵紫紙
金塵白紙	金塵深紅紙	金塵白橡紙
金塵減紫紙	金塵青褐紙	銀塵青綠紙
銀塵淺綠紙	銀塵紅紙	銀塵淺蘇芳紙
凡紙 <small>端縹料</small>		

北海道の地名

北海道の地名の多くは、アイヌ語であるから、假名で書く方がよろしいのである。なまなか漢字に引き直すと、漢字の持前として、一種の意味が生じ、アイヌ語と撞着するやうなことも起るので感心せぬ。しかし今日のやうに没趣味の漢字の箝め方は、餘りに幼稚の沙汰である。前年北海道旅行の折、モセウシを過ぎると、饅頭を賣りに來たものがあつた。それを買つて包み紙を見ると、牛に婦人が騎つてゐる圖が印刷されてゐた。妹背牛が地名と音が近いので工夫した圖だと思つて一笑を禁じ得無かつた。どうせ漢字を箝めるなら、詩的に雅馴の字を撰んだらと思つた。全體北海道の地名は誰れがいつ撰んだものであるか、調べて見たこともないが、安政三年丙辰初夏、官命に應じて刻すとある、春谷鈴木彰の刀に成つた圓形の五十許りの印を見ると、印文の地名が今のと多く異つてゐて、寧ろそれが雅である。官印である所から考へると、印刻家が氣儘に名を撰んだとも思へない。何故に此の印文を取つて名とはしなかつたので

あらうか。今左に此の官印にある地名を掲げる。中には今日と同じいものもあるが、圈點を附した地名は殊に雅馴を覺える。

射、	游、	毛、	勢、	射、	降、	網、	嶋、	宗、	沙、	熊、
魔、	雲、	魯、	多、	姑、		場、	小、	谷、	利、	石、
兒、	浮、	蘭、	河、	丹、	雨、	尻、	牧、	文、	古、	邨、
										九、
沙、	志、	野、	濱、	遠、	滿、	普、	餅、	文、	古、	騰、
	津、	露、	増、	當、	士、	德、	指、	別、	平、	雲、
流、	乃、	空、	氣、	守、	氣、	露、	指、	別、	平、	雲、
		時、	部、	部、	部、	露、	指、	別、	平、	雲、
		難、	氣、	部、	部、	露、	指、	別、	平、	雲、
		移、	氣、	部、	部、	露、	指、	別、	平、	雲、
年、	白、	母、	縷、	遠、	蓬、	熱、	叢、	石、	引、	與、
茂、	衣、	々、	物、	渚、						
露、	老、	家、	部、	路、	前、	田、	河、	狩、	兒、	市、
安、	母、	風、	薩、	遠、	手、	高、	白、	靜、	磯、	酒、
津、	衣、	冷、	吧、	多、	手、	高、	白、	浪、		
計、	別、	河、	連、	流、	那、					
新、				那、	回、	鹽、	嶋、	主、	港、	筒、
				回、	回、	嶋、	主、	港、	港、	筒、

惠、徳、路、普、久、那、至、理、刀、勝、久、壽、里、

二箇の官印

私の手許に、維新當時の紀念物として希覯とするに足るものが二つある。二つ共に官印で、一つは私の郷里越後の水原すゐはらに、新潟に先立ち早く縣が置かれたことを語るもので、佐渡の名工琢齋が作った印材に「水原縣符信」と刻した銅印である。此印の刻者は私の家に長く寄宿した星岳と云ふもので、江戸の星ヶ岡邊に居つたので此名があると聞いたが、私の幼少の頃は日々お守りをして貰つたこともあるので、此人の手で刻されたことが懐かしくも感ぜらるゝ。水原縣も、置かれると間もなく廢されたので、這般の官印は混雜の際散つたものと見える。用にも立たぬものであるが、私には棄て難い感じがあつて、今も珍藏してゐる。

まう一つは「薩摩政府」の印である。これも銅印であつて、鈕ちゆうは裝飾のない鼻鈕である。此の印は曾て郷友原宏平氏が銀座の夜肆よみせで見出したのが私の有に歸したのである。當時其の眞贋

を判じかねて、ある薩摩出身の友人に相談した處、太政官が明治二年告諭大意を發布し、各藩をしてそれ〴〵印行流布せしめた。それには薩摩政府の印が捺してある。多分その印であらうと云ふから、鹿兒島の圖書館の友人に、其告諭大意を一冊申受けて、それを見ると、果して薩摩政府の朱印が捺してあつた。しかし自分のと較べて見ると、聊か大きさが異なるけれども、刻法もよく似てゐる。そこで印影を鹿兒島へ送り、更に取調べを頼んだ所、此印の事を承知してゐる故老がまだ存命で、それは誰れの作である、二つ刻つた内、一個は佛國博覽會用に作つた筈と云ふことが知れ、刻者の名まで知らせて貰へた。其氏名は何かに録して置いたが、今捜しかねてこゝに現はすことの出来ないのを遺憾とする。兎に角此印が贋物でなく、佛國博覽會へ出品の爲めの用とまで分つて見ると、私は思ひを佛國博覽會當時に馳せざるを得ないのである。當時幕府からも出品したが、それに先だち、薩摩は幕府を出し抜いて、勝手に琉球の物産とを合はせて出品した。その際薩摩から佛國へ出張した人は岩下佐次右衛門即ち後の子爵岩下方平氏である。此人は長く東京に住したから、其の手から紛れて賣り物となつて出たものであらまいかとは、私の推測であるが、恐らく外れない推測であらうと思ふ。それは兎も角もとし

て、薩摩が幕府に断りもなく、出し抜いて出品したに就ては、幕府でも棄て置き難いと考へたけれども、當時幕府の威信は地に墮ち、それを責める程の威力も無かつたので、佛國の出先で争ふことになつたのである。全體、國に一つ以上の政府がある筈はない。薩摩が政府と名乗つたのは、藩の意味で、西洋の所謂ガバメントの意でなかつたかも知れない。現に肥前藩でも、當時肥前政府と云うた例がある。併し薩摩の當時の遣り口は、全く獨立した政府の態度で、尾佐竹博士から聞けば、薩摩、琉球の文字と、島津家の定紋を鑄た勳章まで作つて、佛人に與へたと云うてゐる。して見ると、薩摩政府と云ふのは藩と云ふ意とも思はれない。それよりも餘程超越して、ガバメントの態度であつたかに見える。當時幕府の状態はと云ふと、殆んど亡滅に瀕してゐて、其頃薩摩に左袒してゐた英國人サトウなどは、既に公然印刷物を以て幕府の亡滅を言うてゐる位であるから、薩摩の眼中には幕府は無かつたと見る方が實際であらう。否々それどころか、薩摩は幕府に對して異志があつたときへ云はれた。それに就ては後に薩摩では種々辯疏をつとめ、大久保利通公の傳にはコンナ事が書いてある。

當時幕府が萬事佛國にのみ依頼してゐたので、薩摩は、之が爲めに、或は日本が佛國に併吞

されるやうな事があつてはと、心竊かに國家の爲めに之を憂ひた。そこで我國の組織が恰も米國の如き聯邦式の國で、其領土内に於て各州の自治政府を認めてゐて、必らずしも中央大政府と雖も、此の諸藩即ち各小政府を左右し能はぬといふことを、豫め佛國に知らせて置いて、彼れをして容易に日本を窺はしめない用心から出たものである。

と云うてゐるけれども、是れもどうであらうかと思はる。

兎に角幕府は佛の歡心を得ることを大切に考へて、博覽會へは將軍の親戚徳川民部大輔を特に派したのである。扱て佛國で薩摩の代人と落合つて、色々争つたが、幕府方の主張が案外に通らなかつた。其の仔細は、薩摩方の宣傳が旨かつたのにも由るであらうが、談判の衝に當つた幕府方の向山隼人正一履（はいとのかみ）（向山黄村）が、ガバメントの用例を誤り、大君の政府のみがガバメントで、他は、薩摩でも肥前でも政府と稱しても、それは藩の事で、ガバメントでないと言ひ張るべきを、薩摩政府も矢張りガバメントであるかのごとく云うたのが悪かつたので幕府の失敗に歸したと云はれてゐる。向山は此の不首尾のために終に本國へ召還さるゝに至つた。當時日本の状態も頗る混沌を極めてゐたから、外人に見別けの付かなかつたのも一概に

無理では無い。まして幕府の外交官は薩摩のそれよりも手腕が下つてゐたとすると、勝つべき筋が勝てなかつたのも無理はない。此の銅印は微物ながら、此の葛藤を記念するもので、岩下が薩摩の権力を背景にして、如何に此の印を振り回したかを思ふと、私は此の銅印に無限の趣味を感じざるを得ないのである。

雨の詩趣

ことしのやうに雨天の續いた夏は無い。十數年前にも雨が續いて洪水が起り、私は亡兒の看護をしながら、百水一滴と題して、水の趣を百則書いたが、ことしも亦それに倣うて水の趣を書き氣になつたが、大概前年書き盡したから、僅に詩趣に就て思ふ所をみだりに書きつける。

俳人一茶の句に「一升でいくらが物ぞ露の玉」とある。露は水の尤も小さなもので、其の玲瓏たる團々は淨珠の如く如何にも麗はしい。吾等も其價幾何と問ひたい氣がする。雨は草木百花を培ふものであるが、詩人が百花に生氣をもたせ光澤あらせるのも亦雨である。雨を藉り來

らねば、詩味も索然たらざるを得ぬ。曰く一簾疎雨杏花寒、曰く著雨杏花肥、曰く豆花雨後輕烟、曰く一研梨花雨、曰く冷露無聲濕桂花と、雨露を藉り杏仁豆桂の風趣をあらはす處に妙がある。春漲一江花雨と云ひ、雨過落花紅半溪と云ふも、亦雨を藉りて花の風情をあらはすもので、風韻の横溢を覺える。樓臺橋梁なども雨を藉りて始めて風情をあらはす。曰く暮烟秋雨夜橋寒、曰く半雨半烟橋畔、曰く小橋流水人家、曰く殘夜水明樓。此等の句は宛として畫を見るごとくであるが、若し水の一字を除き去らば句は全く平凡に墜ちる。平凡の家屋、村落、墳墓などに趣あらしめるのも亦水である。曰く水抱孤村遠、曰く江抱屋如浮、曰く清溪拱水荒涼宅、曰く野水齧荒墳と、水を配してこそ此等の風景を美化するなれ。夜水も亦甚だ趣あるものである。曰く近聽始知雙櫓響、一燈浮水夜船歸と、何たる清涼の情緒ぞ。水と云へば魚之れに隨ふ。魚に配して水は亦一種の風味を發する。曰く南山雨歇春流急、多少遊魚上淺沙、曰く一夜東風吹雨過、滿江新水長魚蝦と、魚に活氣を與へるは水の働きである、否、水字の働きである。或は雨を藉り感慨を抒ぶるものあり、曰く江雨夜聞多、曰く最難忘吟邊舊雨、曰く那堪疎雨滴黃昏、曰く夢魂猶在水雲鄉と、雨ほど人の感慨を惹くものなく、水郷ほど情味のあるもの

は無い。雨聲を聴くの快は寧ろ雨を見るの快に優る、曰く倚樹聽流泉、曰く西窓一榻芭蕉雨、曰く涼雨竹窓夜雨と。雨は殊に芭蕉に觸れ叢竹に觸れて風趣を生ずる。併し水聲の趣は、これだけでは盡きぬ。曰く谿聲勝管絃、曰く泉聲咽危石、曰く喚船々不應、水應兩三聲、曰く水不忘情去有聲と、水聲の情味を説き得て甚だ妙を覺える。水は比喻に用ゐてすら一種の趣を發する。曰く碧天如水夜雲輕、曰く桃花亂落如紅雨と。水は景物の半ばを占むるといふも誣言にあらず。水の崇高なるものには飛瀑がある。曰く瀑勢雷虛壑、曰く飛泉數點雨非雨、曰く瀑布杉松常帶雨、夕陽彩翠忽成嵐と。皆飛泉を形容するものである。若しそれ更に水勢の雄を語るの句を求むれば、曰く月湧大江流、曰く萬丈水聲落、曰く無邊落木蕭々下、不盡長江滾々來、曰く亂雲埋樹黑、驟雨壓峰低、曰く江流搖岸動、曰く潮到疑吞岸など、皆水を説いて甚だ力がある。更に海洋の景物に到つては、積水天に連り、濤勢山を崩し、澎湃奔放、其聲雷の如く、人をして坐ろに魂を消さしめる。水景の最も崇高なるは是れ。

家園雜興

新緑 初夏の新緑ほど心地のよいものはない。雨天に若葉が露にひたりながら、黙々として幾ばくづつか葉の太りゆくさまを詠めるのも一興である。自分の庭は百坪にも足らぬ猫額大のものに過ぎないが、楓樹や古木や八つ手や葛などが多いので、滿目若葉で清新の氣が漲つてゐる。花などよりも新緑の眺めはいくら見ても飽き足らぬ趣がある。樹の葉にはそれ／＼持前があつて、生長すれば色もさまざまになり大きさも區々で、それが季節に依つて種々に變化するけれども、芽を發して僅かに葉の形をなした時は、どれもこれも略々同じで、遠くから見ると、積翠萬重で緑が滴らんとしてえも云はぬ風致がある。一つ／＼の葉は清く新らしく、軟かで風にも堪へぬ弱々しさで、人間に譬へると生れて間もない嬰兒と一般、純潔うぶで、風霜勁雪の苦を全く知らないものであるが、活機は横溢して日に／＼展びつゝあるを見ると、痛快の感に打たれざるを得ぬ。吾等は此の若葉の前途に多くの期待をもつと共に之れを祝福せざるを

得ぬ。そしてそれが發育して天を翳すの大葉となることを思ふと、肅然として容を改めて敬意を拂ふことにもなる。所謂後世恐るべきものは、此の繊弱なる若葉である。われ等はいつも新緑を見る毎に此の感に打たる。併し、若葉が段々發育するにつれて古い葉が黄ばんで終には落ちる。その落ちるまで清新の葉に交つてゐるのが目立つて醜いので、毎朝例として黄葉を摘んで取る。丁度黒い髪や鬚の白毛をぬきとるやうなものだ。ある時はコンな事を考へたこともある。若い血氣のもの、中に老人が交つてゐたら、さながらこのやうに醜く見えるであらうかと、心窺かに羞ぢるの念なきを得ない。

野趣 庭園の樹木は杉其の他常盤木を喜ぶ。花樹の交るのは風趣を俗化して面白くない。成る可く野趣の漲るのが望ましい。私の庭園の池畔には葎が叢生してゐる。それを私が殊に愛するのも此の故である。しかし、あつて敢て妨げない花卉は、萩、茶、蓼、野菊などである。此等はすべて銜氣を帯びないもので、野趣と抵觸することは無い。

朝顔 後園に植ゑた朝顔が蔓を延ばし、毎朝二三十の花がひらき、朝起きると紅紫さまざまの花が目目を怡ばせる。夏時はおのづから早起で、兎もすると五時に起きることもあるが、いつ

も朝顔の方が早く目をさましてゐる。新聞も朝のものだが、六時を過ぎれば配達して來ない。此物も、ある點に於て朝顔に似てゐる。朝顔が時たま思ひがけもない花を發するやうに、新聞にも往々意外の記事がある。朝顔はいくら眺めがよくても晝頃になると凋んで仕舞ふ。新聞で得る印象も亦似たやうなもので、毎朝讀過すれば、それ切りで何等の印象を残さないことが多い。雨つながら果敢ない運命のものである。想ひ起せば、往年自分が讀賣新聞社在社の折、創立何十年紀念にと、紅葉山人の工夫で得意先へ扇子を配つたことがある。それには武内桂舟が朝顔を畫し、上頭の縁に紅を抹して朝顔に擬へた趣向で、紅葉には新聞を朝顔に比した句もあつたが、それを書かずに、晝で其の意を寓したことがある。流石に紅葉であると感じたことなど想ひ起す。

夾竹桃 夾竹桃は家園にもあつて、ひどく枝が繁るから時には刈りこんで、花時を楽しんでゐる。此の花木の本國はどこであるかをよく考へたことも無かつた。實は支那が本國と極めこんでゐるから、深くも穿鑿もしなかつたが、吉江喬松氏の「南歐の空」を讀んで、始めて其の故郷が意外の處であることを知つた。即ち亞弗利加の沙漠のオーシスこそ、其の故郷で、これ

には無數に群がつて花を發してゐると喬松氏の目撃談が書いてある。さる熱帯地のものが、よくも日本に育つものよと今更に妙と感じた。寒中別に霜よけをしたこともないのに、餘程強い樹と見える。

蕘 連日の雨がやうやく晴れて、始めて庭に逍遙すると、まだ土が乾かず、じめ／＼してゐる。名も知らない茸が茶室の苔上に叢生してゐるのを認めた。帚を把つて散つてゐる枯葉を無難作に掃ふと、薄闇い樹陰こかげからノソ／＼と動き出して來るものがある。これは熟知の蕘公であつた。人に依り蕘や蛙をひどくいやがるものもあるが、自分は敢て愛するでもなく嫌ふでもなく、庭に時々出會つても一向構はず、嘗て逐拂ふことをせぬ。主人の寛大に慣れてゐると思へないが、いつも悠然として人が近いてもビクともしない。些しも遁けようとはしない。一體このものは鈍性に生れてゐるのか、無神経であるのか知れないが、人を恐れない圖太さは確かにある。人種に譬へたらスラーヴの性格があるとも云へるであらう。よく／＼其の態度を見ると昂然たる處がある。人に對して憶面なく何か語らんとする趣もある。一條の句に「雲を吐く口つきしたり蕘もみぢ」といふがあるが、如何にも其の趣がある。小説家が之れを目して妖術あるも

のとして兒來也の寵を得たとするは偶然でない。彼れは大勇あるもの、如くである。大悟徹底してゐるもの、如くである。自分が稀れに塵埃や枯葉と併せて帚で掃ふことがあつても、素直に掃はれてゐる。或は支體が覆されて腹をあらはすことがあつても、苦悶狼狽の様もない。死容を粧ふのかと思つたこともあるが、強ちさうでもない。此の神經過敏の世の中に、彼れはさながらそれを嘲るかのごとく、沈靜の態度で傲然としてゐるのは見上げたものだ。

蝶 蝶には色彩の美もあり、其の飛舞の姿も優しく、花に配すると風趣もあるが、私の家族は之れを好まないで、呉服などに蝶の文様のあるものは一切用ゐることをしない。私は其の何故たるを知らず、亦其譯を問つたことも無かつたが、私も遂に嫌ひになつた。其の動機はと云ふと、毎年數竿の修竹が書窓の前に生え出ると、其の若い枝の張るのと其の嫩葉の出るのとを樂みにしてゐるが、漸く嫩葉が發すると、忽ちに縁なす色が白くなるので何故であらうと不審に思つてゐると、それが蝶の爲す業であることが知れた。蝶は若葉に子をひりつけて餌に供するから、漸く發した葉が枯死するのである。農家があつた奇麗な蟲を敵とするのも私の家族が之れを厭ふ意味も分り、それから此の蟲をひどく嫌ひになつた。

蛛網 私のまう一つ嫌ひなものは蛛網である。どうもこれがあると掃除が届かないやうな気がしてならない。朝起きて見ると屋角に張つてゐる。庭の細徑を行くと頭が此の網に引つかゝる。清淨を欲する茶人などは氣にして之れを掃ふやうだが、どんなに庭をよく掃除して一塵も留めないやうになつてゐても、蛛網があるとぶちこはしである。私は茶人の輩に倣ふのではないが、之れを氣にして毎朝拂はずには居れぬ。蜘蛛が營々辛苦して折角張るものを、容赦なく破壊するのは罪なやうでもある。考へやうに依つては、害蟲を拿捕するものであるから、斟酌を要するかにも思ふが、人間の感情は妙なものだ。蟲類が人間の感情の犠牲になるのは獨り蜘蛛のみに止まらない。

蟬蛙 夏時の盛暑に蟬の聲やびぐらしの聲を聞くのも一興である。あの小さな蟲が放つ聲は庭一杯に響き渡つて、高い調子の奏樂を聴くやうな感じがする。閑寂な處に之れを聴くと、音響が一層振つて氣を引立てるやうでもある。俳人が「閑けさや岩にしみ入る蟬の聲」と詠じてゐるが、如何にも巖にしみ入るかと思はる、ほどである。しかしよく其聲を味つて見ると、疎はあるが涼はない。實は暑熱の作用で發する聲に清涼を要求するのは無理かも知れぬ。夏の

蟲では蛙の聲が寧ろ優つてゐる。それは夜分水の中で發する聲であるから、涼し味が境遇からも起るべきで、靜夜に之れを聞くと清涼の氣は人の心を醒ますものがある。蔭なす樹下の水に蛙聲の満ちる時、水を汲むと蛙聲を汲むやうな氣がする。「村娘挈瓶去、柳外汲蛙聲」と云ふ詩があるが實況である。但し蛙にも聲の澄んで清らかなのと濁つたのがあり、人耳に可なる者は澄んだ聲で無ければならぬ。自分の舊宅には小池があつて、汚穢の水の中に若干の蛙がゐた。その聲が如何にも清らかで、夜中家前を過ぎるものは立ちどまつて之れに聴きほれたものである。今の家の池は數倍大きく水も清潔であるが、よい蛙がゐないので常に欲しいと思つてゐる。今の池に前のごとき蛙がゐたら、どんなに清涼の聲を發するであらうと、夏になる毎にそれを思ひ出すが、未だに獲ることが出来ない。さびた池には蛙はつきもので、池の趣を發揮するものは、魚よりも此の蟲であらう。蛙鳴は雨を呼ぶと云はれてゐる。暑時雨を呼ぶのは人に同感のある業とも云ひ得よう。蛙鳴蟬噪を惡しざまに用ゐるのは、蛙の爲めには冤である。蛙は可憐の蟲である。俳人が其の水を泳ぐさまを「およく時よるべなきさまの蛙かな」と云うた如く實によるべなき可憐のものである。

廢瓦

私は晴日庭園に出て徜徉するのが毎日の事で、筆研に倦んで時の如何に拘らず庭へ出る。出れば必らず帚を携へて、落葉や塵埃を掃ふ。掃庭は敢て自分を待つ譯でもないが、手ぶらでは時が費えないからである。庭を歩いて目に障るものは瓦片の土に交つてゐるもので、私の嫌ひのものである。大震災の際多く碎けた壁瓦が散らばつたが、それは一時に收めた。既に收め盡したと思ひの外、一雨を経る毎にあらちから出て来て幾んど際限が無い。私は何故か目の敵として見當る毎に抽き取つて棄てるのが毎日である。私はそれを取りながら或る時フト考へた。自分は金石癖があつて、印を玩んだり古瓦を喜んだりしてゐる癖に、各故瓦を目の敵とするのであらうか、癩瓦と雖も亦金石の部に屬するものと。コンなことを考へると、端なく曲亭馬琴の日誌中の記事に思を馳せざるを得なかつた。馬琴の日誌中に、隣家の犬が塙根を破つて這入つて來たのを、馬琴は容赦なく、棒を揮つてサン／＼に犬を打ちすゑて追出したと

ある。或る人は之れを評して、馬琴は「八大傳」を著し、失明に迫んでも筆を廢さなかつた程此の著述に忠實であつたのに、何故犬に對して一片同情が無いのだらうかと。瓦片は犬と違つて活物ではないが、自分も同じ譏りを招くであらうと一笑したこともある。

酒數則

酒を好む私としてお恥かしいことだが、いろ／＼の本を読んで酒の事が書いてあると妙に私の注意を惹き、抄録の勞をも厭はんのが私の癖である。酒には忠實であると云つてよからう。隨筆「壺蘆園雜記」の内に紅毛人オランダ人のことがいろ／＼記してある。其中に、日本の酒を懷妊の婦人に用ゐれば平産するとある。即ち原文を抄出すれば左の如くだ。

日本酒を、蘭人、昔しは十分に用ひ、尤堪酒也殊の外酔候由、近年十分に給べ候事を恥て、銘々少く用ひ候由

日本酒を本國へ持歸る事夥し、紅毛の懷妊の婦人用ゆれば、速に平産するとぞ、故に臨月に

は必らず用るよし

馬に下戸なく、藥餌に酒を和して用れば效あること、始めて養馬書を読んで知つた。

馬に下戸なし、藥を用ゆるには多く酒を和して可なり、常にも折節は飲して益あり、野ざらしには酒を口に含んで吹かけてよし、肥すべしと思へば體あまごひを五六升も飲すべし。

などあつて、いろ／＼の藥劑を擧げてゐるが、皆酒に和する趣向なり、此書は寶曆版で、越前の小川英長の著に係つてゐる。

昔しから詩人の酒に對する禮讚は少くないが、アナクレオンに匹敵する吾が上代詩人を求めるならば、萬葉に其の什を残してゐる大伴旅人たぐを推さずばなるまい。随分徹底した大膽な禮讚をしてゐる。

價なき寶といふとも一杯の濁れる酒にあにまさらめや

夜光る玉といふとも酒のみて心をやるにあにしかめやも

古への七の賢き人ども、欲りするものは酒にしあるらし

此世にし楽しくあらば來む世には蟲にも鳥にもわれはなりなむ

中々に人とあらずば酒帝になりてしかも酒に浸みなむ

あな醜くさかしらをすと酒のまぬ人をよく見れば猿にかも似る

アナクレオンは曰く、誰か我が往く道を知るものぞ、世路は暗し、只酒のみは能く之を照さん、然らば我れ泡立つ酒を飲み、以て人生の道をねり行かんと。彼れは又曰く、今日我れ生きて杯を傾けん、恰も明日のあらざるが如くに、明日とならば何かあらん、我又再び飲まんのみと。東西古詩人の歌、共に痛快を覺えるではないか。

私は酒舗で枡酒をひつかけのを痛快と感じ、既刊の隨筆に聊か其事を録したが、高村光雲翁が松江の名工如泥の藝術を紹介された記事を見るに、如泥も時々枡で酒を買つたとあるが、これは又驚き入つたことで、いつも五枚の板を懷ろにして酒屋へ出かけ、咄嗟に五枚の板を組み合はせ、釘一本打つでもなく、それに酒をなみ／＼と受けて、手に提げ家に還るに、其の板が外れたことは無かつたと。チョット信じかねるやうな話であるが、いつも不思議な技巧を弄して人を驚かした名人如泥であるから、一概に荒誕の説として排することも出来ない。

こゝに今一つ枡酒に關する小話がある。それは相撲協會で祝杯に用ゐるのが例となつてゐる。

枅である。此の枅は由緒のあるもので、江戸時代の相撲會所から傳へたものと云はれてゐる。江戸時代には相撲會所の筆頭、筆脇二人が全權を握つてゐて、其他の年寄などは會所の會計を十分承知しなかつた。勿論力士連は一切損益勘定を知らず、又金銭の事などは面倒がつて聞く事を欲しなかつた程淡泊のものであつた。しかし興行の利益勘定は毎年會所でやつて、其の配當金は小さな枅に盛つて預配した。其の枅が目出度いと云うて相撲協會に引續がれ、之れを杯に充て、祝酒に用ゐると聞いた事があるが、今尙此の枅は協會に保存されて居るかどうか。足利尊氏に濁酒を振舞つたものは夢窓國師である。尊氏は濁酒に就て國師と和歌の應酬をした、其歌が存してゐる。尊氏は心を澄ます爲隠栖してゐる人が何故に濁酒を飲むかと難じ、隠居して心をすますものならば濁り酒をば如何飲むらんと詠じたのに對し、

隠居して飲むべきものは濁り酒とても此世にすむ身ではなし
と云うて返した。あの濁世にすむ身でないものはひとり夢窓國師のみでなかつた。濁酒を尊氏にすゝめたのには寓意がないであらうか。

本年の夏郷里に歸省した際、ある友人が旅舎へ訪ねて來た。此人頗る酒量があるので、近來の飲況を問うた處、輕症ながら中風に罹つて酒を廢してゐる。併し全然杯と絶交する譯にも行かぬと云ふから、晚酌にどの位飲むと聞いたら、多量に飲むことが出來ないので、晚酌は全然廢して午酒を飲むと云ふので妙なことを云ふと、怪しんで其故を問うて見ると、晚酌では、酔ふと直ちに睡るから如何にも勿體ない。僅かに飲む酒は晝に於てこそと答へた。成る程これは一説である。酒氣を味ふは寧ろ午酒にあらん。晚酌に酔うて直に倒る、は快は快だが酒氣を翫味するの時間がない。酒は本來酔うて睡るのみが能でない。酒心地尤も味ふべしとすれば、此の友人は眞に三昧に入り酒を知り酒を愛するものと云うてよからう。

枕に就て

花朝の簾、月下の笛、霜夜の砧、爾に依つて能く聞く幾多の音とは成島柳北が枕に題した詩である。春の短い夜、秋の長い夕べ、シト／＼と降る春雨を聴くのも、庭にすだく蟲の音、夜

半の鐘を聴くのも、皆枕が媒介で、四季さまざまの聲が枕を傳はつて来る。枕は人間の最重要部の頭脳を安置する具で、人の魂魄が何かに宿るとすれば、枕が尤もそれに庶幾いものである。寢具は人に安息を與へるものであるが、中にも枕が尤も大切のものである。されば枕を高くして眠るのを泰平の象としてゐる。人を安らかに眠らせる爲めに、古來いかばかり枕に工夫を凝らした乎、悪夢を避けるには猿に夢を喰はせるとあつて、枕に猿を圖したりもした。ピールの睡眠材とされてゐるホップといふ蔓草は、古く枕に装置されたこともある。伽羅枕などいふものは、枕函に香爐を装して香を燻らし、婦人の緑りなす長髪に芳香を移したものだ、これも人を愉快に眠らせる用意であつたに相違ない。意匠は百端で、長崎の圓山の妓樓には楊貴妃傳來の鶴の羽毛枕があり、夏時三伏の候には、陶枕たうしんや籐枕が工夫され、讃岐の高松藩の家老が曲亭馬琴に送つた枕も陶製で、今も存してゐる。物徂徠の遺枕は尙存してゐるが、それには戒房の説が録してある。支那の旅行者の枕は革製のカバンの如きもので、重器や貨幣が收めらるゝやうになつてをり、日本の旅行用の枕にも、折り疊むで懐中し得るものがあつたが、今はゴム製の空氣枕が出来て、一層簡便となつてゐる。

若しそれ枕の得難い時には、假寐に手を枕にし、肱を枕にし、旅行く人の野宿には草を枕にし、樹石を枕にし、舟人は浪を枕にし、讀書人は書籍を枕とする。書籍の内で細長い一形式を具した「枕本」と名くるものがあるのは、枕に代用するものである。軍人は戦場で戈を枕とし、獄中の囚人は木屑を枕とする。多数の雲水僧を宿すには、どこでも坊主枕の不足を感じ、長い材木を蒲團の下に忍ばして枕に代用することもある。

更に枕に就ての瑣事を擧げれば、自然、ヒギユアに枕の用ゐらるゝことや卑猥の事にも及ぶ。即ち忠節の士は城を枕にして國に殉し、橋は江に枕すと形容するが、墨江には現に枕橋といふのがあつた。枕詞は日本特有の掛け詞で、これに因つて和文が美装されてゐる。枕を名とする名高い本には清少納言の「枕の草子」があり、平賀源内の戯著に「長枕しんね褥合戦」がある。遊戯には腕力を角する枕引があり、盗の一種に枕捜しがある。種々の營業のある中に枕商賣もあつて、旅舎と娼樓の枕には常主が無い。結婚當夜の枕が新枕と呼ばれ、閨房の喧嘩に枕が動もすると武器となる。都々逸子笑つて曰く、投げた枕に咎はないと。曾ては屋根船の棚に双枕を備へたこともある。之れを目して直ちに風紀に害ありとするは日本特有の神經性であつて、國に依つ

ては一向平氣である。支那の畫舫には必らず二つの床が敷かれ、双枕が並んでゐる。畫舫ばかりでなく、支那の政廳の應接所には同じい設けがあつて、主客枕を並べ、俛めば臥して語る習慣がある。コンナ莫迦げたことを舉げれば數限りもない。

枕は安息を與へる具であるが、往々安息に導き得ない場合もある。閨房の孤枕が如何に寂寞を感じしめることか。紅涙は滴々枕を濕ほし嫉妬の志は焰の如く燃えあがる。閨怨は常に睡魔を逐うて煩悶の極に達せしめるものである。萬感の枕に集まるは旅中に多く經驗すること、罪ある人、憂ある人は、旅中にあらずとも枕で安息を得ない。しかし煩悶もさまざまで、詩人は枕頭に詩を得、藝術家は往々不眠の境に妙案を得る。英雄の大業も枕頭に案を得たことが決して少なくはあるまい。頼朝の羈業、豊公の雄圖、豈亦不眠煩悶の境より拈出されたものにあらずとせんや。常人は枕頭多く空想に驅られ勞して效がなく、英雄は酔後美人の膝に枕して容易に濟民の策を立つ。暗き牢屋に水の如き枕と親しむ憂國の士が回天の業を策することのあるのも、世界決して其例は乏しくない。

西洋の詩人は睡眠を溫柔の褌母オムツというたが、枕にも應用が出来る。病者に對する枕は、看護婦よりも、或る意味に於て醫師よりも大切な役目を司る。長病人の晝夜間斷ない褌母はこれであつて、熱を解くには水枕があり氷枕もある。病人が枕に別を告げる時は、病の癒えた時と絶命の時であることを思ふと、枕は人間の壽命に關することが至大である。吾々は更に枕が人類の繁殖に關係あることを思ひ、更に枕があらゆる階級、貧富と云はず幼若と云はず、平等に溫柔なる褌母の職務を司ることを思へば、吾等は枕を禮讚するの念を禁じ得ない。

五山詩佛の好謔

菊池五山と大窪詩佛しやうぶつは一時盛名を馳せた漢詩人であるが、爰に兩人地口ぢぐちを鬪はした滑稽の逸話がある。元來五山は讚岐出身で、詩佛は常陸の人である。五山は俗才があつて、酒席などでは機鋒當る可からざるものがあつて、往々人を洒落のめした。詩佛はき眞面目な人で、五山の敵ではなかつた。ある時詩佛は醉中破格に地口を弄し「狸爺たぬきやい一杯やらう」と杯を指すと、五山は一氣にそれを飲みほして「鼬爺いとなぢに返杯する」というたので、詩佛はギャフンと參つた。タヌ

キは音「讃岐」に近く、イタチは音「常陸」に近い、地口掛合の佳對である。

無舌

一時有名であつた落語家三遊亭圓朝に無舌と云ふ號があることを始めて知つた。そして山岡鐵舟が命じたものと云ふ。無我と云へば己れがなく天地と全く混融して一となる禪の極致である。然らば無舌といふも同じく舌を難れての妙を云ふのであらう。舌、無舌の境に到らなければ、落語も妙境に入らぬといふ譯であらう。靴の適したるは靴を忘れ、衣の適したるは衣を忘れ、帽の適したるは帽を忘るといふ、忘るは無いも同じことである。詩などでも妙境に入れば韻を覺えない。舌あるを覺える間は名人とは云へ難い。

俗語の長所

私は俳句を解しないけれども、をりに觸れて古人の句集を讀み、點頭することがある。殊に一茶の句を好み、旅中には其の句集を携帶するが例となつてゐる。一茶の句は眞摯にして飾らず、率直に目前の事を詠じて、奇を弄せざる處に妙がある。斯様な句は平板に落ち、淺膚に流れ勝であるのに、なかく、含蓄があつて、平凡の裏に至理を寓するものがある。事新らしく云ふまでもないが、俗語ほど、強く且つ適切に感懐を言ひ現はすものはない。雅語はどうも孱弱に流れ漢語は鈍重に失する。國語の長は殊に俳句に見られる。就中、一茶は俗語を操縱するに最も妙を得てゐる。左の數句は即ち俗語の働きが漢語雅語よりも幾等上であることを思はせる。

明月や江戸の奴らが何知つて

おらが世や牆根の草が餅になる

冷しさを我宿にしてねまる(坐)なり

親分と見えて上座の蛙かな

枯れす、き昔し鬼婆々あつたとさ

おんひら、蝶の金毘羅参り哉

今のめ、まで花さく老木かな

世の中よ、かい露から先づ落る

此やうな末世をさくらだらけ哉 以上一茶

麥の秋聲どのことし初めてじやの

あれくと櫓まら(櫓臍)外れてほと、ぎす 其角

此等の句の中で、おらが(我が)、ねまる(坐)、親分、やつら(汝等)、ジャノ、櫓まら(櫓臍)など皆俗語であるが、コンな言葉が遣はれても些しも卑賤の感がしないのみならず、却つて力強き跌宕氣分を漲らせる處に藝術的手腕もあるのだが、亦純眞の國語の長にも依るのである。

尙俳句に含蓄があり諷刺があつて、おのづから至理を寓するものを少しく擧げて見ると、

汚れ雪世間並には解けぬなり

朝顔も錢だけ開く浮世かな

露の世を押しあひへし合萩の花

苦の娑婆(しほは)や花が開けばひらく迎

蟲のあとそれも若きは美しき

人をとる茸はたして美しき

かしましや江戸見た雁の歸りやう

以上は一茶の句であるが、他にも感吟に値するものはいくらもある。

雪搔や我門きりの人ごころ 紀逸

白露や無分別なる置どころ

枯れてまで戦(そま)ぎ忘れぬ薄(うす)かな

大晦日定めなき世の定めなり 西鶴

冬はまた夏がましじやと云ひにけり 鬼貫

絶景に金つかふべき所なし

薦枯れて我宿恥る柳かな 鬼貫

一抱へあれど柳は柳かな

中わるの隣から咲く蓼の花

啄木鳥や枯木をさがす花の中

箔ぬりの佛も人の案山子かな

昔し英國の詩人バアンズは、自分の生れた田舎にゐて、故ら田舎言葉で詩を作り、それを都の檜舞臺に上せて、大喝采を博し、世界を驚かしたことがある。眞に痛快な事だ。日本では田舎言葉を一概に卑下するが、漢語は假り物で、純眞の國語は多く田舎言葉に残つてゐる。眞に肺肝を抉ぐる言葉はこれである。既に死んで枯骨となつてゐる萬葉言葉を呼び起してそれで新體詩を作るなどは、ゴムの靴を穿いて冠を戴くやうなものだ。なぜバアンズに倣はないのであらうか。

新潟の朝市

新潟の朝市は古くから續いてゐる繁昌の市場で、今も相變らず無くてはならぬものとなつてゐる。田舎から青物其他のものを持出して各戸の臺所に供給するのだが、丁度今日東京にある

公設市場のやうなもので、各家庭の主婦が自から其場に臨んで任意に買ひ物をやるのが慣例となつてゐる。自分の青年時代、新潟學校に寄宿してゐた頃には、朝早く此市を訪うて鶏卵や生薑などを買つたものである。市場は喧嘩を極め、鼎沸の狀を呈するが、そこに一種の郷土味があつて、追懐すれば多少の興味を感じる。一兩年前新潟に宿した折、朝早く人を訪ふ序に此の朝市を過ぎたから、態と立寄り、何買ふでもなく出陳のものを見、又之れを賣る田舎の男女が客と應答する言葉を聴いたりして、しみじみ郷土趣味を感じた。既に郷土の言葉を忘れてゐる自分として、その百分の一を言ひ現はすことが出来ない事を遺憾としてゐると、此頃明治三十五年頃の雑誌から田中小稻（オシネと訓む）の記のあるのを發見した。その記事はさながらラヂオで聞くかの如く、朝市の光景をよく描寫してゐて、新潟附近の物産の名から、郷土言葉で互ひに言ひ争ふさままで目のあたり見るが如くであるので、郷土言葉には注を加へて、に收める事とした。此記の著者田中小稻は本名を重平と云ひ、越後松ヶ崎に生れた人で、學殖があつたので、明治初年、新潟縣廳の役人となり、楠本正隆氏の縣令時代には今の知事官房主事と云ふが如き地位にあつて、常に縣令の和歌を添削したと傳へられてゐる。相當長壽を保つ

て新潟で歿したが、新潟では屈指の歌人である。

稻の目の、早や明なんとする頃ひより、朝毎にたつ市は、新津屋小路を中に置いて、其上下の衢々に、野山のもの海河のものを、市人の、おのがじ、肩に荷ひ背におひもて来て、道もせきまで、こてくと押並べ、皆聲々に、おほやす、まけてやる、まけた、まけた、たゞやる、ただやると呼び立つるは、賑はしくも亦喧し。野山の物に名だ、るは、寄居地名の新潟の蕪、津島屋中蒲原郡大形村の内、青山葱、大郷茄子村の内名目所郡内、ずんばい、果かうじ中蒲原郡内、西瓜、三條柿、新飯田郡内、桃、あるは瀬戸の鴨賣り、くねひの鉈豆、土手端の元なり南瓜も、我は顔に並び居たり。海河のものには、鯛、鯉、こつぺら、すけと、皆魚の名、鱈、きみ魚、かながしら、し、むぼ、を始め、たら場蟹は、養の子狭まげに廣がり居り、此外が、つなき、な、きさみ、焼島湯の雑魚には、お玉杓子も交るめり。是を商ふ人、金頭をか、げて片肌ぬぎ、肩を怒らせ、金切聲を立て、モシ〜おとうと〜、お客さ馬鹿うまうていしい、ひどくお馬鹿フツで、頗る馬鹿やすい格廉と、枕詞に馬鹿を冠せて、冠り振り〜呼かくるは、此群の癖なるにや。呼び懸られし人は、少し振り返り、おらあ、己こないだ頃、し、むぼも、金頭も魚名よつばら飽くたと、足早

に過行くは、懐ろの寒きを見すまじとの、負惜みならん。夕顔籠を重げに荷ひ、ハイごめん〜、ごめ〜と、群立つ人を押分け通る、氣早の男あれば、おつこのや此ふと人此ふんと本當につつかへて觸れたまげさせられたと、驚かさ打叩つ乙女もあり。周章たる様して、汝等又、もつと又、こつち又、寄つて又、居れとことえやれと出しゃばつて罵るは、其乙女の母にやあらん。女同志の行逢ひながら、おわら足だい町新潟の下駄足のあばそんだけだおばおれてんが私ととんとときで粗忽も、直ぐ見忘れるてんが、お前そんでんが、かたねは一向來なんねてんが來ら、先方あんによそんも良人、先方あねそんも細君、達者だかねと、言懸られ、お、、だいきやいだわ外の所に遺ふ、坂内小路地名のおか、だねい。先頃は大きに謝禮とちつきあがろと思ふて、つい、此頃迄ころ〜と御無沙汰しました。おつこのやでんがいて、躓い轉ぼうとしわと、何か、言譯がてらころ〜云ふもをかし。鹽辛聲を振絞らして、鮮の昆布巻要りませんかいねと、賣り歩く媼の聲、いと哀れ氣に聞ゆ。とうが、ん、南瓜の列並たるを、あちこち見較べ、先のがんのにせうか、後のがんにせうか、いつち番旨そげなが、んはおいしげ、どんがんだらふらう、そつちのがん見せやえんしの見せ給へ、おや、賣れたが、ん

だけと既に賣却された面無げに佇む女房もあり。洗芋あらいもをいさぶりがたげ、こつばかすのながんね是ばかりし無いのにこつばか負けたつて引いてそればかりどつばかの違ひがあるばえんとどれほどの相價をこぎれば、こんがい此の様にこつたま有るが澤山あるのにあんがい事いふてあんなことそれがいつばい負けたらその様に多く値引をしたらたらどんがいとつさに叱られるやら知れぬどんなに良人に叱え、わんし宜し負ける事えんしと負けまあんがい、こんがいを數多附添つけそへて商ふも愛嬌あり。其傍らに商人同志にやあらん、腹立たし氣に濁にご聲こゑ上あげ、勘太、干瓢の勘定、今のこまにおくして呉れと即時敦圍い促まれば、此方は、負けじと、口先を失らかし、こんつけたの人中此様の多人で數の中で、そんつけたの催促をしやるそのやうの催促をするあんつけたの品押つ附けやがつてとあんなわるい品いさかひすまへば、此すべ、ずべこべと、まつたくるかと立懸をる不明此言葉 おんさ弟こじやくあいな小癩なんしるがんだと押おふる人もあれば、其やろつたま野こすこつつべたい目まに遇あせれといはせい目めに遇あけし懸かるもありて、打つやら、蹴るやら、追ふやら、走るやら、競ひよどみて、其日の市はさんがいた榮えた

斷髮令の悲喜劇

徳川時代には、元服をすると、前の髪を剃り落して頂點を綺麗に剃り、チョン髷を結ぶが例であつた。中に毛を存し置くことが士分では法度で、幕府では咎め立てをしたものである。それを維新忽々先づ風俗より改めよと斷髮令が布かれた。斷髮實行には到る處に滑稽談があつたやうだ。自分などはその頃幼少で、毎度結髮するのがうるさくて苦惱でもあつたから、斷髮を喜んで、模範的に一番早く實行した。その頃新潟の縣令は楠本正隆で、此の實行難にいろいろの奇談が傳へられてゐるが、多くは附會の説で、當時縣友であつた八木朋直は近頃まで存命で、其人の語る所が事實と思はる、楠本は模範を示すには先づ新潟の重立ちたる者に斷髮をさせねばならぬと、鮭網を引くといふに言寄せて甲乙内の人々を舟に乗せ遊樂中、突然銘々の髷を斷り放つたのには皆々一驚を喫したが、果ては一同笑ひ崩れたといふ。此件につき一悲劇の起つたことは、租税課長をしてゐた舊幕人山田嘉重といふが、斷髮に乗じ一と儲けせんと少から

ざる官金を持出して、横濱に在る親戚に帽子、襟巻の類を澤山に買占めさせた。然る處利に敏なる商人の方が敏活に品物を取寄せて賣出した爲めに（山田の荷物が手間取つて到着しなかつた）山田の儲け仕事は全く失敗に歸し、官金私消の廉で遂に自殺を遂げた。これも八木の語る所であるが、八木は當時自家のチョン髻を切り落し、記念にとてそれを今も保存してゐる。

吾等（リンドバーク自傳の書名）

先頃自分共が經營してゐる文明協會で米國著名の飛行家リンドバークの半自叙傳を譯刊した。其の書名が *My* といふのである。日本語に「吾等」と譯する外はないが、珍なる書名である。此の飛行家が大飛行に成功した時大衆に迎へられ、祝辭を受けた答辭に、吾れとか私とかの一人稱を用ゐるす、すべて吾等というたので、一人しか乗つてゐないのに吾等の複數を用ゐるは何故かと思ふものもあつたが、直ちに其意味が理解された。云ふまでもなく飛行機を人格化してそれと共にといふ意味であるのだ。リンドバークは流石に功を獨占せず、機の功を忘れな

い處に偉さがあると激賞され、爾來それが警語となつてゐる。自叙傳の書名に此の *My* を用ゐたのも此の故である。

如何に操縦が巧でも長途の飛行を果すことの出来るのは機の功多きにある。死生を共にせる機の功を閑却せず、これを共同者とした心根は優しくも亦麗しくもある。人情、死生を共にせる、人は勿論、犬馬の如き動物でも功を分つは寧ろ當然で、其例は敢て少なくない。機械とても亦同じことであるが、生物ならざる故を以て閑却することのあるのは誤りである。戰場に於ける軍器のごとき、それが勝敗の決を司るものとすれば、大將は士官兵卒の外にこれをも含めて吾等と云ふが當然であらう。誰れか身を護る刀を以て無刀の従僕よりも輕しと考へるものがあるらうぞ。文人に於ても、種々の藝術に於ても、其の功をなさしめるものは、筆研其他の器械に俟つは勿論で、筆の爲めに筆塚を作り、針の爲めに針供養をするが如き、皆其の功を忘れないからの仕向けである。兎角人は己れのみ功に歸したが。大衆擡頭の世の中、殊に共同を要する社會に於て、單稱を用ゐて功を獨占するは禁物である。リンドバークの複稱は眞に頂門の一針である。

外人と勳章

外國人は案外勳章をほしがらる。佛蘭西のやうな共和國でも、内々勳章をほしがり、暗に手を廻して外國から勳章をもらひ受け、ボタンの穴に有勳記章を挿んで喜んでゐるものが多いが、稀には勳章を拒む高人格の人もある。佛のブリアン氏の如きは頗る内外に功勳ある人だが、斷じて勳章を受けぬことが其人の信條となつてゐる。日本からも此人に勳章を贈りたいと考へたことがあり、先方の内意を探つた時に果して辭退したが、其の辭退の言葉が簡にして甚だ愛嬌がある。彼れは有勳記章を挿むべきボタンの穴を指して、願はくは此の穴をヴァージン（處女）たらしめよと云うた。

映畫の爲めの猛獸狩り

猛獸狩はスポーツマンが危険を冒して往々試みる事で、猛獸を捕獲するのが目的であるが、さにあらずして猛獸の生活状態を撮影するのを目的として猛獸に接近することが近頃行はれ出した。目的は異なつても危険は同じことである。活動寫眞に獅子や象や河馬やクロコダイルの類が場面に現はると、観客は冷然之れを見てゐるけれども、之れが裏面を考へると悚然たらざるを得ない。マーチン・ジョンソン夫妻が、阿弗利加で巨象の群を映寫した、其の實歴談を讀んで見ると、なか／＼の冒険であることを感ずる。目的が猛獸を殺すのでなく、その澤山の群と其の種々の姿態をそのまま、寫すのであるから、頗る冷靜を要する。象も憤怒すると頗る猛烈のもので、あの面貌の温に似ない。其の體軀は彼れがごとく重いけれども、走るときはなかなか早い。ある時、百頭程の群にジョンソン夫妻が出會つた時などは、餘りに接近して彼等の襲撃を避け得ない難儀に迫つた。幸ひに夫人が発砲した、銃丸が前頭の象の眼を穿つた爲めに、全部の群が總退却を始めたので危害を免かれたとあるが、いつも良人が撮影役で、婦人が銃を取つての保護役、猛獸の種々の姿態を寫す爲めに、わざと象を驚かしたり脅かしたりする必要もあるので、それがなか／＼危険である。或る時は夫人が空に向つて發砲して象を驚かし

て見たともある。此のエキスペジションに偶然三十呎のクロコダイルを撮影し得たのを非常に喜んでゐる。兎角虎穴に入らざれば虎子を得ない。此の撮影は勇氣を要するのみならず、多くの費用を要するから、日本ではまだ試みられないやうだが、追々ジョンソン夫婦に倣ふものも出て来るであらう。

三白と赤化

讃岐は富饒の地で、物産が少からずある中にも、讃人の誇りとする産物は三種あつて、その色が皆純白である所から、三白と呼んでゐる。所謂三白とは鹽と米と砂糖で、何れも品質が精良である。海濱であるから製鹽業の發達するも自然である。砂糖は三盆の上製が古來各地の菓子製造家に喜ばれてゐる。米も讃岐産は評判がよい。斯く三白を始め、海産に富み工藝品も種々あつて、生活に苦しむものは少ないやうに聞いてゐるが、時勢は妙なもので、過般の總選舉には無産黨の首領が高松に踏み込んで鹿を逐うた。結局失敗はしたが、かなりの投票を得た

と聞いた。三白を誇りとする此境土に、赤化運動に心を寄せたものがいくらかあつたと云ふも奇である。同地の人に就て聞けば、讃岐には生活難があるでもないが、兎角流行を追ふ風があると共に、頗る物に飽き易い缺點があるので、無分別に赤化運動を助けたのだと云うた。先頃新奈須に遊んだ折、偶然高松の選舉に赤化排斥の遊説をした、知る人に出遇つたので、種々當時の事を聞いた。其際私は、讃岐は三白を誇りながら、何故に赤化などに左袒するものがあつたであらうか。多分、君の演説にも、三白が擔ぎ出されたことであらうと云ふと、其人は率直に、それは知らなかつた。知つて居れば無論責道具せめだいぐとするのであつた。措せましいことをしたと、共に一笑した。

砂時計に感あり

電話機が鳴る。汽笛がひびく。呼鈴が鳴る。時計の齒がカチ／＼きざむ。家に在つても幾んど間斷なく雑音が耳に入る。外に出ると電車が軋る。自動車かうなる。飛行機が上空を飛び、

商家の店頭にはラヂオが種々の聲を發する。如何にも騒々しい世の中である。自分は前年北京（今の北平）に遊んで、其の巷の雜然たる人語を聴き、じみ／＼市聲は國の文野を表象するものだと感じ、文化の進んだ國の市聲は、人語や雜音が絶え、鐵の軋る音のみであらねばならぬと云うたことがある。しかし昨今のやうに、ラヂオに依つて種々雜多の肉音が市中に漲ると、私の市聲の説が裏切られたやうにも思ふ。かゝる騒然たる市中に住してゐる、私の書齋の案頭に唯一つ静かなものがある。それは英國製の砂時計だ。英國は流石に保守の國で、今でもコンナ物を製造してゐると思ふと購ふ氣も起るのである。此の静寂の時器、深夜人定まる時ですら、耳を澄まさないでは、砂の落下が聞こえない程の静けさ、今の文化的機械に對しては實に皮肉のものである。私の珍重する譯もそこにある。今の文化はすべて機械的で神經を刺激するもののみである。そして神經を刺激することが、往々人を殺すに到る。此頃ある少年がラヂオが耳について、寐ても起きて、寸刻もその音に離るゝことが出来ず、自分は到頭之れが爲めに殺さるゝ、と云ふこと、警察へ駆け込んだと云ふことが新聞に見えたが、砂時計はコンな族の鎖經劑になるであらう。砂時計を蒙昧期のものと侮るを休めよ。今の文化の機械がやかましい音響を

發する間は未だ粗製の域を脱しないものだ。チト砂時計に見習つてもらひたいものである。

ペーパー・カッター

私は骨董道樂を廢めてから十數年経つが、まだどこかにその道樂の滓がこびり附いてゐる。近年各國のペーパー・カッター（紙切り）を蒐める氣になつて、しきりと漁つてゐる。日本、支那にも同じ様なものがあるが、西洋のと聊か其用を異にしてゐる。西洋では、小口を切らない書物が少からずあるので、讀書の際には必ず此物が要る。日本、支那には小口切らずの本は昔しない。（今は洋裝本に小口切らずの本もあるが）唯唐紙を切るなどに要するから、唐紙切りと唱へて、西洋のと稍ゝ似たものがある。

西洋諸國のペーパー・カッターは國々によつて其の趣が異なり、其の材料が異なり、其の製作が異つて、微物ながら各國工藝美術の標本と見られないでもない。矢張り文房の一で、机案の上の裝飾ともなる者だから、相當に意匠を凝らした者が多いが、日本には餘り多く輸入され

てゐないから、多く蒐める事が困難である。自分の蒐めたものはまだ三十點位しか無い。往年筆管の意匠の異つたものを百點集めた経験に比すると、此の蒐集は決して容易でない。大概世界の重なる國のものは手に入つたけれども、未だ甚だ懐かない感がある。

ペーパー・カッターの材料は金屬もあれば象牙もあり、又木や竹もある。西洋の紙は截り易いから、金屬でなくとも截れる。小刀のやうに銳利の刃は要せぬ。木でも、篋へらの如く薄刃であれば役に立つ。随つて製作は比較的單純であつて、截る處に格別變つた意匠はないが、柄には頗る意匠がある。英國では多く眞鍮を材料としてゐる。英國のブラスには一種の雅趣があつてよろしい。妙に無骨に出來てゐるが却つて味があつて、どこまでも英國流の堅實の所がある。柄にはいろいろのものが彫刻されてゐるが、人物では、シエークスピヤを始めいろいろの詩人、奈破崙などで、猶其他獸類を刻したのものもある。獨逸で最も喜ばるゝのはヘッケル製作のもので、英國の鈍製とは反對に頗る銳利の刃金を用ゐる、十分磨して、鏡の如くてらゝしてゐる。柄もおなじ金屬に種々の文様を淺く彫り、それに繪の具を喰はせたのが多い。奧太利のも稍々獨逸に似て居る。佛國のになると、流石美術國だけに垢抜けのしたのが多く、木を材料とした

ものに美人などを彫刻したものや、犬などを彫刻した者に云ふ可からざる趣味が存してゐる。伊太利の一特徴とも云ふべきは、木の細工で、柄には文様を打出しにした革で包まれてゐる。勞農露國のは木の細工が多く、柄には畫の描かれてゐるのが多い。私の藏してゐるのは、赤い衣服を着けた農夫が畑を耕してゐる圖が筆で描かれてゐる。概して質朴のものである。矢張り骨董同様時代を経たものに味がある。私の藏品中に、木製で柄に人物の像がある、一器は瑞西の作だが、頗る時代があつて、日本の文房に加へても調和するものである。實は此れが基もとで他を集め出したのだ。支那ものでは、竹製の唐紙切りと金屬製で七寶の柄のあるものがある。共に時代があつて古雅の味を感じる。近來日本で外國品を巧みに模造する爲め、いろいろのものが出來てゐるが、金屬で國々の特徴のあるものは模製にはない。象牙細工で埃及の文字を彫り付けたり、希臘式の人面を彫りついたりしたもので、日本製か外國製か、一寸辨別のつきかねるものもある。私は日本の工藝家が西洋のを模倣せず、日本の人物其他さまざまの史實を材料として、特色のあるものを作つてもらひたいと思ふ。更に一步を進めて、紀念品などに、ふさはしい意匠を凝らした、此の器を人に贈るの習慣の起ることを欲する。

小口切らずの本を自身で切り離つて讀むのは面倒のやうでもあるが、丁度揮毫の前に自から墨を磨ると同じ趣があつて、敢てわるいものでない。墨を磨る間に字や文の工夫も自然起つて、磨墨を樂みとする人もある。小口切らずの書物をペーパー・カッターを以て斷截するのは一層趣がある。第一、小口が切られずにあるのは、其の書物のヴァージンであることを表明するもので、己れに先んじ何人も觸れたことがないと云ふ處によい氣持がする。すべて或る程度の秘密は人の好奇心をそゝるものであるが、小口を切らない書物は錠が掛つてあるやうなもので、斷り離して見なければ、何が書かれてあるか知れない。其の知れない處に樂みもあり亦興味もある。随つて讀み随つて斷截して行く内に、意外な挿畫が現はれたり、大議論の題目が現はれたりする事は、なか／＼に興味をそゝるものである。人々の習慣で讀むに随つて追々斷截して行くのと、一舉に切り離つて後讀む人があるが、私は前者に左袒するものである。小口切らずの書物をして云はしめたなら、必然、讀む人だけ切り離して欲しい。然らずんば、他の讀む人の爲めに、其儘にして置いてもらひたいと云ふであらう。

東西文明の調不調

東方に東西文明の調和を説く政治家大隈老侯あり、西方に東西文明の調和を不可能とする詩人キプリングがある。キプリングは曰く、

Oh, east is east and west is west, and never the twain shall meet.....

嗚呼、東は東、西は西、此の二者決して相逢はずと。日本を見ての此の詩人の觀察は如斯で、其の告白は甚だ大膽である。由來詩人には偏見が多いのに、人種的偏見が手傳つて日本を見るから、往く所として不快ならざるはなく、何もかも疵だらけに眼に映じ、日本を罵倒し盡しての斷案が、前の如くであるが、かゝる偏見詩人は決して大詩人でない。大詩人は必らず一世を風化するの抱負と雅量が無ければならぬ。此の條件を以て判ずれば此の詩人の如きは落第者で、大隈老侯の着想は流石に幾等か高い。

哲學者流の撞着

李白の詩に「言ふものは知らず知るものは黙す、此語吾れ老君より聞く、言ふが如くなれば老君は是れ知る者、何によつて自ら著はす五千文」と云ふがある。これ、言ふまでもなく、老子が不言を賢なりとしながら、五千言を費して「道德經」を著はした撞着を皮肉つたのである。兎角古くより哲學者もおシャベリの爲めに遣り損ふものが多い。ニイチエなども恰もおなじい遣り損ひをやつてゐる。彼れは極端なる主我説を主張するもので、利己を知つて利他を知らぬと自白してゐる癖に、其の主張を滔々と辨じ、書を著はして盛んに宣傳したのは何故であらうか。彼れが自説の廣まるを望み、その行はれんことを欲したるは、これ取りも直さず利他の所業にあらずや。極端なる利己論者は、黙して自家の秘密を明さざるこそ本意ではあるまいか。老子の撞着はニイチエにも繰返された。當時此の撞着を摘發されてニイチエも困り、遁辭を設けて云うた。吾れの之れを云ふは、世間に行はんとするにあらず、さながら欠伸の如く、

又放屁の如く出るのだと。ニイチエも亦窮せる哉だ。假りにニイチエに對し其の遁辭を許すとするも、其の門流が囂々之れを敷衍し宣傳し、毫も自重しない、其の撞着は笑ふべきではあるまいか。

鰻 道 樂

鰻の道樂にはさまざま、おもしろい話が傳つてゐるが、中にも破天荒なのは、曾て海軍少將であつた柳橋悦氏が、其の隨筆に書いてゐる、左の事實である。隠れた逸事であるから爰に紹介する。

むかし天保の頃、藩の用人に湯淺某といふ鰻ずきの人ありけり。東海道の旅に、組板、庖丁、錐に焼火針、木炭、醬油など合羽籠に入れて荷はせ、鰻は所々にて買ひ得て、自ら調理して食ひ侍りしとぞ。此の人おのれが十四五の頃眼しゑに成られたり。鰻のとがなりなど人々云ひはやせり。其頃用人は供二十人餘りも連れ、槍、ハサミ箱、引馬などを具する身柄の人な

るに、みづから庖丁を取るなどいふことは奇と云ふべし。鰻道樂もこゝに至つては壓巻である。

魚類の飛行機運搬

飛行機が郵便を配達したり貨物を運送したりするやうに實用の具となつて來たので、此頃大阪から來た人の話に、中國から鯛を飛行機で取り寄せて鯛の會を催したと云ふを聞いたが、如何にも速力が早い上に、塵埃を絶する上空を慕しくらに運んで來るのだから、甚だ氣持がよい。いつぞや河豚を下の關から氷づめにして取り寄せた時などは、汽車に託したので多少の故障を生じたが、遠距離から魚類の如き生物を取寄せるには飛行機に限ると感じた。銀座の某店で近年初めたアドサトルといふ魚類の乾燥法、あれには越後の石油地にある一種吸力のある土を用ゐて、乾燥すべき魚類を間斷なく運轉してゐるが、あれも至極調法である。天日で乾燥するとなると、雨天では出來難い、自然塵埃が交る、蠅などが集まつて不潔を免れないが、

此の乾燥法は夜中でも行はれるし、不潔は全然ないから、甚だ氣持がよい。

燕巢と同趣の食物

燕巢は支那料理に尤も珍とする所だが、實は燕が魚を嚙んで唾と和し、巖のクボミに貯藏したものと正體が分ると、餘りよい心地がしない。日本には燕巢はないが、鳥の作つた食物を盗み取り來る點に於て、全く趣を同じうする者がある。それは「みさごの鮎ずし」と名ける、一種の鹽辛である。鶯と云ふ鳥が鮎を食つて、其餘りを巖の窪みに貯へ、それに小便をひりかけるのだ。此鳥の小便は甚しく鹽分に富むので、自然防腐の作用をもなし、通人は珍味として好んで喰ふと、松川二郎氏の「名物を尋ねて」の内に出てるが、産地は九州邊と思はるれども明記してない。

賣品にあらざる賣品

徳川時代に旗本、御家人の株が賣買され、與力の株も賣買された。これは幾んど公然の秘密であつた。幕末の亂脈時代だから不思議はないと云ふ人もあらうが、官職爵位の賣買は支那ばかりと思ひの外、我國でも現に勳章が賣買されて、賞勳局總裁が獄に繋がれた。政黨内閣で閣員を定める場合に意外の人が入閣すると思つて、裡面を探ると、その人が巨額の黨費を出してゐるからだと云ふ。これも金で大臣を買ふやうなものである。支那では顯官の價が凡そ定まつてゐると聞いたが、今は支那を嘲る譯には參らぬ。神社、佛閣なども賣品であらう筈がないが、事實賣るものもあり買ふものもあつて、およそ相場も定まつてゐると聞いた。相場は何に依つて定まるかと云ふに、信者と賽錢の多寡、財産の如何によつて定まるもので、其の賣買の法は神主や住職が金を取つて地位を譲るのである。華族の賣買の行はれるのも亦同様で、貧乏華族は持參金の豊かな養子に襲爵せしめることがある。これは恰も御家人株を買ふと一般で、事實

上の賣買であるけれども、現在はさまで目立たないが、華族が墮落するとこれが盛になるであらう。支那の學生は日本に来て金で卒業證書を買つて戻り、日本の學校を學店だと嘲ると聞くが、紀律のない學校は學店と評されても辯疏が出来ない。獨乙あたりでは料金を受けて卒業論文を代作する職業があるといふから、卒業證書の賣買もある筈である。それ所か、學校にも往賣り物があるとかで、此頃も其の實例を聞いた。兎角金次第で大抵な目的が達せらるゝ。鐵道を收賄で許可した事件は、前鐵道大臣の繫獄で人の耳目を聳動したが、これも一種の賣買である。他の道路、港灣、會社、取引所なども皆賣買される。さうして人間も往々其心を賣り主義を賣り、恬然たるものがある。淫婦が節を賣り、娼婦が情を賣るは常套の事で、賣買は人間にまで迫んでゐるが、更に賣買の手は氣候にまで延ばされてゐる。夏時の避暑、冬時の避寒は手近い例で、此の目的の爲めに家を離れていろ／＼の處に行き、狭くらしい室に收つて窮屈を忍び、多く金を費して意としないが、これなどは宿屋住居を喜ぶのではなく、氣候を買ひに行くのである。かゝる土地の宿屋は實は氣候を賣るの商店である。

雅邦の當意即妙

橋本雅邦翁は畫界の偉人で人格の高い人であつた。茲に翁に就て珍な話がある。或る時貧書生が翁を訪つねた。翁は例の謹厚の態度で、何用かと聞くと、一枚、畫を書いて戴きたい。實はそれを或る方へ持参すると金に代へてくれますからと、露骨に云ふので、翁は氣の毒に思つたか、即座に紙を展べてさら／＼と書いて與へた。それは橋の下に蓬髪ももの男が跪いて、首を低けてゐる圖で、誰れが見ても先づ高山彦九郎が三條の大橋に跪いて宮闕を拜する圖と判するのだが、實は、斯く見せて、別に皮肉の意を寓してゐるのだ。即ち橋下に低首してゐるのは畫を求めた書生本人で、翁の姓は橋本であるから橋をあしらひ、橋頭に哀を請ふ奴といふ目前の景を描いたのである。高山彦九郎らしく見せた處、如何にも當意即妙で、おのづから諷する所のあるのは流石に翁である。此の圖は藝苑の珍とされ、舊友近藤仙太郎氏が藏して居る。

外人の見たる男色の惡風

ケンプエルの江戸參府紀行は千六百九十年即ち我が元祿三年東海道を経て江戸に到る記で、當時の風俗が描かれてある筈だが、外人の筆に成る紀行に多くを望み得ないのは勿論である。吳秀三博士の譯本を此頃其の心して讀んで見ると、僅かに男色に關する記事が見當つた。それは清見寺附近の所見を書いてゐる中に、幾軒かの茶店が膏藥を賣つてゐる。その賣子は十歳乃至十二三歳の美少年で、何れも紅粉を施して立派に装うてゐる。これ賣子を装うて實は男色を好むの客を待つものである。ケンプエルの一行の檢使役たる日本官吏は、始終嚴格の態度を持ちながら、此處に來ると、特に駕を下つて茶店に憩ひ、美少年を侍らせて小半時休憩こはんときしたことを記し、不良の風俗を摘發してゐる。元祿の男色流行は海道筋にまで及んでゐて、それが外人の看破を免かれ得なかつたのは實は怪しむに足らない。

不自然な脚色

元祿頃の演劇の脚色が、今から見ると、如何にも幼稚で不自然で馬鹿くしいものが少からずある。こゝに其一例として、いづぞや逍遙坪内博士が語つたことを思ひ出して、大略舉げてみる。頼朝や義経、其他源家の豪傑連の人形を船に載せて、團十郎が片手で持上げて舞臺に出ると、平家の幽霊があらはれ出て、船を取捲くと云ふ趣向で、如何にも馬鹿氣てゐるのを、大人がをかしくも思はず之れを觀て打興じたとあるが、案外である。その頃ある人が團十郎に向つて、いくら人形だから輕いにせよ、片手で差上げて出るなどは餘り人を愚弄するではないかと詰ると、團十郎は冷然として、両手で差上げたとして、眞の人間や船がさうやすくと持上げるものでないから、五十歩百歩であるというて、改めなかつたといふ。成る程團十郎の言ふことに却つて理があつて、失は團十郎の仕打にあるのではなく、脚色にあるのだ。しかし元祿より遙か後になつて、頼朝、義経の廓通ひを脚色した芝居を、興がつて觀たことを思ふと、元

祿の昔しを咎めるのは野暮の沙汰かも知れぬ。

江戸奴の大言壯語

江戸の言葉は封建時代の覇府に於てやかましい空氣の中に自然發生したもので、一種無類である。曾て此事を坪内逍遙博士と語り合つたことがある。博士の云はるゝには、江戸兒の大言壯語をなす時の言葉などは多分町奴まちやっこに系統を引いてゐると思はるゝ。かのベランメーと云ふ言葉などは町奴の面影を語る名残りとも見るべきである。當時町奴が遣つた言葉を知らんとならば、助六などの臺詞せうごを讀むと、思ひ半ばに過ぎるものがあらう。彼等の大言壯語は文學者に教はつたのではない。全く自家製造と見るべきだが、實に奇想天外より墜ちるの概がある。辨天小僧の云々する壯語の如き、如何に奇なるかを見よ。「俺れが名前を手の平に書いて、三度戴いて管めよ。花街くさかに入つて嫌はれる氣遣はない」と云ふ如き、如何に思想の奇なるよ。彼等の頭脳には勿論教育は微塵もない。其の思想に誤りないとは云へぬ。併し彼等の頭には些しの拘

束がなく、先例だの規則などは全然ない。若し彼等の特徴ある言語を縦横に發達せしめたなら、或は浮世繪の如く、一種の異彩を放ち、長く保存されたかも知れないのである。貞享の町奴唐ぢやう犬權兵衛が法廷へ喚び出され、何故に汝の名は唐犬と稱へると問はれた時、權兵衛ガンドウ返へしに「今の將軍綱吉公が館林に在らせられた時は右馬頭で、將軍になられてから、犬公方と申上げるは如何に」先づ將軍家の犬馬の由來を承つてから、唐犬の由來を白状しませうと云つたときは彼等の意氣の一斑で、法廷に於てさへ如此である。彼等の壯語は其の意氣の現はれで、眞に極點に及んだと云ひ得よう。

梅曆の中の通客

爲永春水の著はした「梅曆」に書かれてゐる通人津藤と云ふは、假設の人物であるとばかり思つてゐるが、それが實在の人であることを、森鷗外氏の「山房札記」を讀んで初めて知つた。今京橋區である山城町に攝津國屋藤次郎といふ大きな酒屋があつたが、その主人が即ち「梅曆」

に在る津藤で、姓を細木と云ひ、相當に俳諧などをやつたので號を龍池と云うた。此人が富饒に任せて盛んに花柳界に遊び、通人を以て自から許し人も亦許した。勿論多くの取り巻きもあつたが、「梅曆」の作者春水も亦其二人であつた。「梅曆」はそれから材料を取つたので、餘り潤飾を加へず、其儘書いてゐるらしい。龍池も、それを書くことを敢て厭はなかつたと云はれてゐる。龍池の子に、子之助といふ親優りの遊蕩家が出て、一層の豪奢をやつた。此男も相當に文學があつて、香以の名で知られた。當時の文人、俳優などで、香以の幫間をやつたものが少なくなかつた。鷗外氏の書いたものを見ると、香以の經歷は全然遊蕩傳で、其遊蕩振りは鹿島清兵衛に優るとも劣りはせぬ。親の龍池も兒の放蕩を制しかねて、終に産を破るに至つた。鷗外氏は、妙な縁因で、氏の團子阪の住宅は、香以の身内の人の家を買つたのだといふ。尙又芥川龍之助氏が、香以の親族であるといふも耳寄りの話である。

美術として見た女帯

西洋の美術家も追々日本美術を理解するやうになつたと見えて、日本婦人の帯を觀て感歎措かずといふ話を聞いた。彼等が驚異を感じるのは、絢爛華麗の文様もんじやうや織様でなく、彼れが如き尺八寸の幅、丈一尺といふ長さに驚異を感じ、且つ感歎するのである。趣味を離れて實用一方から見れば、帯の丈一尺の大部分は隠れて仕舞ふのだから無駄だ不經濟だとの觀察もあるべきだが、美術としての觀察は全く別である。外國の美術家が日本の帯を鑑賞するは何れの點にあるか、未だ委しく聞く事を得ないが、日本婦人の服装と日本の趣味を理解するに於ては、帯に就ても讚美を禁じ得ない筈である。帯を腰に巻きつけて背後に結び、其の餘りをゆつたり下げたり、或はお太鼓に後ろを飾つたりするには、どうしてもあれだけの長さが要るのである。又胸下を飾るにはあれだけの幅も要るのである。隠れる所も顯はれる所と差別なく絢爛の美を極めるのは、含蓄を重んずる日本のゆかしい趣味から來るので、解く時も結ぶ時も人前に於てして少しも恥づるところがないやうに織られてゐる。潜在の美に重きを措くは愚だと云は、下着などのやうに人の見ないものは美でなくともよい譯であるが、その隠れた所に趣向がある處にゆかしさがあるので、それを解せねば日本の女装の趣味はわからないのだ。通人の好みは、

外装を粗にしヂミにし、内装を美にするのにある。ゆかしみを貴ぶのは高尚な趣味である。帯は女装の中樞であるから、之れに意匠を集中するのは決して偶然でない。帯は女の寶である。多くの價が之れに拂はれる。呉服商の儲けもこれに在りと云はれてゐる。精を盡した帯となると、二百圓のものを三百圓というても通るのである。外の反物と異つて價の標準がわかりかねるからでもあるが、一つは女流の嗜慾がこゝに集まるからであらう。或る人は云うた、價の知れかねる者は帯と古銅器で、商人の儲けは此の二つにあると、如何にもさうだ。呉服屋の宣傳書を見ると、帯は室内の衣桁にかけて置いても裝飾になる、さながら元祿時代の花見に小袖を花見の幕に掛けたやうにとあるが、これは寧ろ窮した宣傳で俗氣がある。そんな窮した理窟をつけずとも、帯は装身具として十分の價値がある。

文晁の進學圖

谷文晁の自筆稿本進學の圖といふを郷友から示された。戊午十月文晁製とあつて、圖中には

種々注が施され、往々塗抹した處もある。全く文晁の工夫から出た構圖と思はる。そして文晁が藝術の訓練に就て抱いてゐた考がさながら其口づから講釋でも聞くかの如く感ぜられて、種々の作品などを見るよりも興味があるから、爰に大略を録する。

紙面の下部一隅に唐めかしい門があつて、門外に立つてゐるものが三人、門に入つて人に揖してゐるものが一人ある。門内には圓形を畫いた道路があり、中央には湖水があつて、道の窮まつた一端に雲に駕して上天の人を畫してゐる。これが名人に達した者を表象したのである。門に入つてから、道路を經、或は湖水を涉つて、駕雲上天の目的を達するまでには、種々の曲折障礙があつて、それがすべて畫になつてゐる。先づ門を入つて僅かに數十歩にして、二人が遙かに駕雲の人を指さしてゐるのは、それに倣はんとの意氣を起したものであつて、又少しく行き、路上に佇立して遠く望んで思案するもの、あるのは、捷路を工夫するものである。船に乗つて前岸に到らんと擬するものがある。即ち捷路を求めんとするもので、一人、遂に意を決して船を漕ぎ出したが、泥濘が深く進みかねて困しんでゐる。捷路には通例かゝる困難が附きものであることを示したのである。道路の或る地點に横に通する一岐路がある。二三人其の路

に入る。注を見るに、本道を閉却して横徑を選んで得意とするものあれども、終に上手の域に到る能はずとある。之れに反して本道を辿り悠々として行くものあり、早駕籠を促して馳せ行くもある。注には、資力を頼んで早く上手の域に達せんと焦せる者あれど、如此は目の學問をこそすれ、業は拙なり。大名金持の藝がこれだとある。一人、駕籠に先きだち蹣跚としてよるめき歩くものあり、これは進行中精力盡きて路頭に斃れんとするものである。此人よりも遙かに前進し、幾んど彼岸に達せんとして彷徨する者がある。これは自負が起つて安心が氣ざし、僅か一步の處で彼岸に達しかねてゐるとの注がある。駕雲上天のものは、名人に達しても自負せず、益々勵むが故に、紫雲たなびき神女に迎へられて上天するの光榮を得るなりとは此圖の大略で、中學程度の讀本などに、挿繪として取り込むのにふさはしいものと感じた。

登山具を見て

毎年夏に入つて登山期になると、新聞の登山記事が日々私を刺激する。性來登山が好きで、

若い頃は夏期に一つや二つの山に登らねば気が済まなかつた。近年は登山熱が高まり、登攀法も進み、登山具の如き、私共の知らない便利のものがいろいろ出て来た。登山期になると、大きな商店は宣傳窓にそれを陳列するのが例となつて来た。私が登山具の陳列されたのを見た内、尤も意匠を凝らした商店は神田の表通りであつた。高山の状態を見せる爲めに白樺の樹木が植ゑられ、種々の高山植物が樹下に叢生してゐて、其の樹木の中に白樺で作つた山小屋が其の一面を顯はしてゐる。そこには疊んだテントもあり、樹の枝には帽子が吊してあり、ピッケルもあれば背囊もあり、アルミニウム製の輕便な種々の食器もあれば火器もあり、ウキスキーや、種々の鐘詰、藥品などの類に至るまで、凡そ登山に必要なあらゆる物が不秩序に置かれて、さながら實境を寫し出してゐた。私は店頭で足を停めて徘徊する能はず、坐ろに神馳せ魂飛ぶの情を禁じ得なかつた。しかし最早や山を征服するの年輩でないことを私かに歎じた。

曾て大隈老侯の晩年に横有恒氏を文明協會に招いてアルペン征服談を聞いたこともある。登山家として横氏と共に有名である朝日新聞記者藤木九三氏の編輯に係る「山の呼ぶ聲」と云ふ一書を文明協會から破格に出版したこともある。此の書は世界の巨嶽の圖を六十枚収めたもの

で、一部の高山譜である。山々が永久に融けやらぬ雪を以て埋つてゐるから、此の山譜は又一面雪譜でもある。山を不思議の怪物と云ひ得べくんば、此の書は怪物譜である。一枚々々繰り明けて見れば、山容皆異なれども、萬斛の涼味が紙中に漲り、膚に粟を生ずるの思があり、世界の群嶽が打寄つて何かさ、やいてゐるかの如き感もする。此の譜に對しては今更ながら人間の渺小を覺り且つ恥ぢるの感なきを得ない。

今は夢ならでは此等の山を跋涉することが出来ない。しかし這般の書を見ると、汗を流して山に挑戦するよりも却つて興味がある。此の「山の呼ぶ聲」の著者も其の緒言にノルマン・コリーの言を引き、「登山家の生涯を通じて最も貴重な時は、山の巨人に對して戦を挑んでゐる時ではなく、寧ろその惡戦苦闘を終へ、すべての事件が過ぎ去つた後、再びキャンプ・ファイヤを圍んで、靜かに回想に耽ける時である」と云うてゐるが、登山家の冒險談を靜かに讀んで味ふのも銷夏の一興で、必らずしも老を歎ずるに及ばぬ。

悪客

紅葉山人在世の或る歳の正月に、年賀の爲め牛込横寺町の宅を訪ねると、例の三階の書齋に導かれた。既に一二の客があつて祝酒が出てゐた。先客は私と交りのない人であつたが、一人はなか／＼の酒豪で、酒嫌ひの主人をそつちのけにしてお互に氣馱を吐き、酒が盡きると、主人に請ふまでもなく、私の酒敵が手を鳴らして酒や肴を取り寄せるといふ無遠慮には、主人よりも私が先づチト遣り過ぎると思つた位で、さん／＼に席を荒して去つた。其の途中に山人はさぞ迷惑であつたらうと感じた。

それから数年の後に山人が亡くなつて、硯友社から山人の遺書を出版することになり、日誌をも版にすること、なつた。丁度その頃小波山人に出逢つたから、談ははしなくも日誌出版の事に及び、小波氏の言ふには、紅葉は日誌に随分人を罵倒してゐる。あの食通だから、人から寄せた食物が氣に喰はぬとさん／＼悪口を加へてゐる。どうもそんな所は有りの儘出しかねる

ので筆を加へることを餘儀なくされたと言られた。私は其の時、日誌は有りのまゝの方が面白い。紅葉のは別してありのまゝであつて欲しいと言つたが、小波氏は「それは勿論だ、罵倒されても意に介しない友人に就ての事には毫も筆を加へない」と言つた。

それから月餘にして出版になり、逸早くそれを購うた或る知人から一枚の端書が舞ひ込んで來た。何かと思つて讀むと、吾等を新年の悪客と罵つた一節が抄録されてあるため、私は一讀一笑を禁じ得なかつた。

此事は既に舊聞に屬し、全く忘れてゐると、昨年の夏、所謂悪客の一人と名乗りを揚げた人に邂逅するの喜劇が起つた。昨年報知社が、梨本宮殿下を總裁に仰ぎ、浮世繪展覽會を開いた折の事である。私も委員であつた關係から、前日殿下に召されて其お邸に伺候し、茶菓の饗應を受けた。其際しきりに斡旋してゐた宮付の宮内官があつたが、言葉を交はす機會もなく、その日は退出したが、展覽會が終つて報知社の慰勞の宴に臨むと、この宮内官も亦席にあつた。宴會が終ると、この人が私に向つて「あなたは私をお忘れですか」と言はれるので、その人の風貌を見直しても、どうも思ひ出せないで、どぎまぎして、前日宮のお邸へ召された折の禮

などを陳べて、お茶を濁して居ると、その人は破顔一笑して、紅葉が新年の悪客と罵倒を浴せられた其の一人であるとの白狀で始めてわかり、私も哄然たらざるを得なかつた。その人は三雲敬一郎氏で、和歌山縣の人である。偶々紅葉の「十千萬堂日録」を翻して見ると、明治三十四年一月二日の記に、

市島氏來駕せしが、余の睡中なる由を聞き、かへりにとて去る。(大隈伯へ拜年に赴ける也) 十一時頃市島氏來る。(中略) 佐藤、三雲の二氏來る。午後四時に至るまで、佐市の二氏盃を置かずして盛に獻酬す。余倦むこと甚だしく、二氏を罵りて新年の悪客となす。春城子曰く、君に一つの疵あり、飲客を遇するの法を知らざる事是なりと。或は然らん。這是余の堪へざる事の一也。

これに依つて見ると、三雲氏は共犯なれども、幸運にも山人の筆誅を免れてゐる。畢竟、今宮家に奉仕し得るやうに、吾等よりも品藻が高いからであらうと、一笑した。

震災當時の思ひ出

大震災の際の思ひ出が一つ浮んだ。あの際には私の宅は火災を免かれたが、玄關と、それに沿ふ處が傾いた。私は其頃毎日圖書漁りをしてゐた頃で、書庫を有たない私は、玄關に隣る室に多くの圖書を置いてゐた。さてそこが傾いて取崩しを要すること、なつて困つたのは、書物の置き場の無い事であつた。一時大隈會館に預ける外方法が無いので、そこへ自動貨車で移した書物箱は二百程もあつた。會館も災後取亂してゐたので、置き場の工夫がつかず、假りに置かれた所が、老侯の書齋であつた。私は始め其の置き場を知らなかつたが、數日を経て會館を訪うて、どこに置いてあると係員に尋ねると、案内した所が侯の書齋であつて、ドアを押して入ると、箱が一杯に積み累つてゐて、それが爲めに室内が闇くなつてゐた。私は其時置き所もあらうに、假りとは云へ、妙な處へ入れたものだと思ひながら、一種の快感を覺えた。こゝは老侯が終日客を延いて談論された、尤も紀念すべき室である。自分も幾十百回此室で老侯の聲

歎に接した。併し夢にも自分の寄せ集めた書物が此の書齋に宿借りすることがあらうとは思はなかつた。全く不思議な因縁である。私の多くの圖書の中には老侯の趣味に適ふものもあつたが、一冊と雖も老侯に示す機会が無かつた。それがゆくりなく全部老侯の椅子の側面に堆かく積まれた。老侯の英霊、若し此の室に在すとすれば、一舉、萬餘の藏書を老侯の覽に供したやうな氣もする。コンな事は全く偶然で、企ても出来ないことである。假令ひ數日間でも一たび老侯の書齋のものとなつたことを思ふと、何となく喜ばしく、且つ感激に堪へなかつた。地震と大隈會館と私は不思議な縁因があつて、大震災の利那は書院にゐた。そして書物は書齋に宿り、後數年を経て、全部の書物を賣却に附した入札場も亦會館であつた。

墨に謝するの詞

私の日々磨する一笏の墨は使用に堪へぬ程短くなつた。此の墨は、本年の初、鳩居堂で購つたもので、長さ四寸許りの分厚のもので、價は僅かに五圓、勿論上等のものでない。墨は割合

に長壽のものであるから、價を吝むべきものでないと思ひながら、いつも安い墨を購ふのが例で、心竊かに我が吝なるを嘲けると共に、己れのごとき悪筆に佳墨は不要と辨疏してゐる。一年一笏の墨、それがどれほどの役をなしたかを見るに、毎日幾通かの手紙、毎日の日誌、幾んど日々筆作する雜録の外に、往々人に頼まれて拙毫を揮ふ。隨筆を書く原稿が便箋で約千枚。此外雜誌や新聞社などに依頼された原稿が若干。一切萬年筆と洋筆を用ゐない私が、これ丈のことをなしたのは偏へに一笏の墨の働きである。細書には墨は多く要らないが、揮毫となると一寸や二寸の墨を費さなければならぬ。書家の眞似事をやるのは墨に取つての大厄である。此の災厄を避ける爲めに近來揮毫には支那製の墨汁を用ゐはじめた。畢竟墨を惜しむからであつて、自分の仕事に墨が大なる援助を與へてゐることを思ふと、之れを惜しむの情無きを得ない。今別を告げるに臨み、其の成績をた、へて謝意を表さざるを得ない。それと共に少からず悪書、悪文、悪著を出したことを慙らる。

附 載

市嶋春城翁の『賴山陽』

内 田 魯 庵

市嶋春城翁の『賴山陽』は近來最も人氣ある名著である。小説を除いて此の如く人氣があるは誠に少なく、又人氣があるのも不思議で無いほど興味に富んでゐる。小説を除いて此の如く面白く讀ませる著述は滅多にあるものではない。小説以外の著述を滅多に覗いた事の無い文學青年で、偶然之を讀んで面白さに堪り兼ねて有頂天になつて激賞止まなかつたものが私の交遊内に有つた。

附 載

凡そ年齒の長じたものゝ作は如何に苦辛した著述でも生彩を缺いてゐる。學術的や思想的に勝れたものはある。考證的に貴いものや趣味的に面白いものもある。が、人氣を吸集するものは容易に求められない。年長者の著述を面白く讀むのは年長者で、壯齡者は感嘆し或は敬服しても面白く思ふものは無い。丁度老優の技は感服させられても牽付ける力はないやうなものだ。

春城翁の名著を我々が讀んで嘆賞するのは少しも不思議は無い。が、若い者までも牽付けて人氣を高くするといふは誠に異數である。春城翁が老來益々冴えて壯者の意氣を横溢するを知るべきであるが、春城翁の著常に必ず人氣を呼ぶのではない。翁の近什は少くも私の知る處で『蟹の泡』と『藝苑一夕話』と『大隈侯一言一行』と三部あるが、最後のものを除き前二著は今度の『頼山陽』と多少ドコかで共通する所がある風流傳であつて、相當面白く一部に讀まれ、現に私の如きも暫らく机右を離さなかつたが今度の『頼山陽』ほど盛んな人氣を呼ばなかつた。之といふのは前の二著は翁の博覽の産物であるが、今度の『頼山陽』は縱令時代を異にするも何十年間傾倒沈潜して殆んど相識の友の如く、所謂足駄を履いて其の腹中を駆け廻る心肝肺腑の底の底までも究め抜いてゐたから、山陽に就て語る恰も自己を語るが如くで、生氣が全幅に溢

れて讀者を牽付けずには措かない。翁は座談の雄。圓轉滑脱の中に機鋒を藏して聽者を擒縦するの妙を究む。翁は政治に奔走する何十年間、演壇の鬪將として雄辯を以て鳴る。が、演壇に立つて數百人乃至數千人を對手に長廣舌を掉ふよりは數人の小集に得意の風流を縱談横談する處に翁の本面目が現はれ、滾々盡きざる博通と快辯とが愈々冴えて讀者を煙に巻き酔へるが如くならしむる。如何に平凡の家常茶飯的話柄も翁の口頭に上る時は忽ち精彩を生じて活き／＼とする。翁の座中に在る恰も枯木花咲き三冬煖氣を生ずる趣きがあるので、群客自づからに牽付けられて翁の周圍に集まり、翁は常に座談の中心となる。圓滑にして俊爽、恬淡にして辛辣、機智縱横、諷諭百出、翁の座談は天下一品の稱がある。『頼山陽』は恰も翁と相對して此の巧妙な天下一品の座談を聽くの感がある。戸籍調べや履歷書か

ら初める傳記の從來の型を破つて、丁度フィルム劇が先づ登場俳優の素顔を映寫する如くに山陽自身を引張出して素顔を讀者にお目見えさせる。翁の巧妙なる話術は先づ讀者と顔馴染にさせてからツロ／＼と牽込む。翁の座談の緩絃急調のリズムは句々章々に現れて聲を聴くやうである。最も得意の壇場に入る時は紅を潮して破顔する翁の會心の笑聲が紙面から聞える。翁が竹田の描いた山陽の肖像を評して、山陽に親炙して何も波も腹に這入つてゐる名手の筆であるから活氣が自づからに漲つてゐると云つたは、其儘移して翁の山陽傳の評語とする事が出来る。

此の竹田の山紫水明處に主客相對酌する圖は本書發行後愛讀者から寫眞を送られた由で増訂版に挿入されてゐるが、山陽の面目と生活を偲ぶべき好畫圖である。暫らく此の小影を熟睞して瞑目すると竹田と代つて春城翁が山陽と對座款談する別畫

圖が眼裏に泛んで來る。翁と山陽とは時代を異にしてゐるが、恐らく翁は山紫水明處に主客對座する會心の場面を夢寐の中に幻想する事があらう。翁が山陽を語る殆んど自己を語る如くであるは實だ何十年來山陽に傾倒して、山陽に就て細大究めて知らざる處が無いばかりでなくて、山陽と翁とドコかで共通默會してゐる處があるからであらう。山陽は儒を以て起つて操觚に隠れたが、念々國事を憂ひて大義を唱へて止まなかつた。翁は今こそ讀書風流に緘晦してゐるが、本と政治に志ざして曾ては議政壇の候補を爭つた事もあつた。山陽は儒を任じながら句を摘み章を授くる師たるを喜ばなかつたが、經學文章は自づから門下に俊髦を集めて松陰鰐水等の異才を輩出した。翁は學者を任せず教育家を以て處らなかつたが、永く早稻田に席を置いて教壇にこそ餘り立たなかつたが諸生を董沐し、早稻田三長老の一人として推され

てをる。山陽が翰墨の技を以て鳴り書畫骨董にも亦暗からぬは翁の傳ふる通りであるが、翁も亦筆札に長じ遒勁雅馴は儕輩の推す處である。好事の趣味に造詣し且醜惡するは山陽以上であらう。就中翁と山陽とは一が青州從事たれば一は醴泉の大守、中山千日の醉も足らざるべく、翁が山陽の酒を談するや山陽の酒曆よりは春城先生の灘の禮讚を聽く感がある。若し夫れ酒中の三昧境に入つて品詩折花の風流に陶然たるに於ては翁と山陽と何れぞや。山陽若し存在するなら翁と相見て天下の英雄は使君と操のみと云ふならん。翁も亦恐らく、山陽と時を同うして生れて相共に對酌して伊丹の美醜を談する事が出来なかつたを終生の恨事とするであらう。

山陽傳の批評は春城論となつた。が、昔しから其友を見て其人を知れといふ如く、嘗に生ける友ばかりでなく會心の故人を見て其人が解る。況ん

や其生涯や業績を月旦し品藻するを聽けば言者の品性や習癖や好尚も亦自づから彷彿される。等しく山陽を評するにも翁と蘇峰氏と故思軒とは各々看方を異にするので三人三様の批評は各々各自の面を照らすの鏡とする事が出来る。が、夫は扱置いて山陽は何たる多幸の文人であらう。近代文人中山陽ほど多く評されたのは無い。其の尤なるものだけでも前記の翁と蘇峰氏と故思軒とに加ふるに木崎氏の著がある。小篇零冊断章片楮まで拾ひ上げたなら一部の山陽書史を作るは決して難く無からう。雲耶山耶の吟ぜられるは枯れすすきや籠の鳥どころではなからう。日本外史の賣れ高は恐らく今の人氣小説家の作の全部の賣れ高を合算したよりも多からう。人氣は眞價を決定する唯一の尺度にはなるまいが亦決して眞價を裏切るものでも無い。少くも人氣を沸騰させる魅力が著書にも人物にも有るのは争はれない。

山陽は既に論じ盡されてゐる。著書も人物も評價は略ぼ一定してゐる、外史の文章が漢文として成つてをらんでも歴史として出鱈目の小説野乘に過ぎなくても、外史の日本文學史に於ける位置は動かすべからざるものがある。又山陽の性格に幾多の缺陷があつて意外な暗黒面を持つてゐても、丸裸としても相當に値踏みされる一廉の人物であつた事は争ふ事は出来ない。

人氣のあるものは必ず半面に敵がある。判官最負といふ言葉があるほど人氣のあつた義經の花やかな成功を嫉妬するものが有る事無い事尾鱈をつけて觸れ散らしたのが後の世までも傳へられたのであらう。廉塾に於ける青年山陽の不品行の如きも、義經の艶聞と違つて較や信すべき根拠があるやうであるが、矢張山陽の後の人氣が招いた反感から若い時代の暗黒面が抉ぐり出されて吹聴されたのであらう。縦令事實であつても青年時代の所

謂若氣の過ちは後の業績と相殺して左して咎めるに足らないのは、若い日吉丸や藤吉が盜賊の居候をしても金の持逃げをしても後の太閤の偉業を毫も累するに足らないやうなものだ。

一體人氣は圓滿無礙の聖人や君子には湧かないものだ。多少の不良分子があつて面白味のある人間で無ければ人氣は生じないものだ。人氣は魅力であつて徳望ではない。徂徠と仁齋と比較して、仁齋の學徳人品は徂徠の敵では無いが、徂徠の方に人氣があつて護國は堀河塾の凡才庸器と違つて俊驍奇才が雲の如く集まつた。山陽時代の儒林を見渡して、小竹は市塵があつてホコリ臭く履軒は田臭があつて喰足らず、敬所は朴念仁で對手にならず、一齋は固苦しく慎堂はマジメ過ぎ、栗山は官僚臭があり、中齋は物騒である。見渡した處、多才多能往く處として可ならざる無く、時務に通じ世事に精しく、慷慨氣節あつてシカモ風流を解

し、詩を品し畫を談する清遊の友とすべく、醉歌亂舞の濁遊にも亦宜しき八面玲瓏の高才は山陽一人であつたといふも甚だしい最負眼で無からう。山陽が廉塾の不良少年であつたといふは必ずしも山陽の偉器を傷つける話では無い。維新の元老が青年及び壯年時代は敢て云はずもがな、老年になつてさへ屢々有らぬ噂を立てられたのは渠等の成育時代の空氣が悪い習慣を興へたので、渠等の環境を多分考慮して酌しなればならない。古今の偉人傑士は大抵各々多少の程度を異にした不良少年ならぬは極めて少ないので、聖人君子と云はれた人たちの生ひたちにさへも不良の事跡を残したものである。思慮未だ定まらぬ少年時代の多少の不良はワザ／＼洗ひ立てして咎めないでも目をねぶつて知らぬ振するが古人に對する禮儀であらう。

但だ一つ聞棄てならぬは山陽は利殖に精しく幾

分かシミツタレであつたといふ説である。が、富を卑しみ財を語るを不義とする封建の學者として苟くも殖利に觸れる逸話を残したといふは不似合であるが、土地の投機や株の賣買に熱中したり家賃や地代の取立てに忙がしく銀行の預金の利子を勘定して楽しむ學者が珍らしくない今から考ふれば擧げするがものは無い。山陽をして今に在らしめば國家の功勞者として少くも貴族院議員（山陽最負には不足だらうが）ぐらあにはなれるだらうし、理財の才幹からは會社の重役ぐらあにはなれやう。此の學者でもあり又理財家でもあるといふ點が亦幾分か春城翁に共通する。

由來學者や文人の仕事は書齋で營まれるから其の生活や行實の社會的に顯はれるは少ないのを常とする。随つて傳記を編まうとすれば呢近者に質すか或は交友間に往復した尺牘に頼る外は無いで、時代を距て、呢近者の多くは亡びたもの、傳

記は手紙が唯一の資料である。幸ひ山陽は筆豆で無数の手紙を残し、しかも生前からの崇拜者が多くて斷簡零墨も大切に保存された爲め、故思軒及び木崎氏が手紙を基礎として傳記を著述したに係らず、春城翁は別に遺墨を採訪して二氏が使用したのよりもヨリ以上の豊富の資料を集める事が出来た。此間の苦辛は喩ふべからざるものがあつたらうが、シカモ此の苦辛は山陽癖の翁が楽しんで満喫する處であつた。但だ之だけの資料を累積するには一通りで無い長い歳月を要したのは當然で、翁の著述的氣根の耐久は眞に驚くべきものがある。シカモ之だけではマダ満足出来ないで、發刊後僅に一年を経た第六版には其後取得した材料に由て復た新たに百頁を追補してをる。翁の山陽研究慾はドコまで行つても留まる處を知らないのである。

翁の研究は微に入り細を究めて學者著述家とし

て造詣や業績や見識や態度から日常細事まで萬遍なく行渡つてをる。門人某の筆録を基あとして猫騷動まで記述するに到つては如何なる些事をも見のがすまいとする翁の細心を知るべきである。資料の豊富なのと、洞察の犀利なると、一言一行一舉手一投足までも洩らさず記したのは恰もボスウエルの筆に酷似してをる。女弟子細香との風流韻事の如き、酸いも甘いも噛分けた苦勞人の翁ならでは容易に窺ふ事の出来ない極めてデリケートの機微にまで穿入してをる。恐らく翁の最も會心の一章であらう。

最後の山紫水明處を訪ふの記は畫龍點睛の一篇無韻の長詩である。叙景、咏嘆、感慨、懷想、情臻り筆隨つて綿々の餘韻盡きる處を知らない。讀畢つて暫らくは鴨漚の水莊に魂馳せて古人を懷ぶの情に堪へない。劇以上、小説以上に人氣を呼ぶのも不思議は無い、近來最も興味ある好什である。

21646

春城漫筆

春城漫筆終

四五二

昭和四年十二月十日印刷

(春城漫筆)

昭和四年十二月十三日發行

定價貳圓五拾錢

著者

東京市牛込區東五軒町三十五番地
市島謙吉

發行者

東京府豐多摩郡八幡町
大字下戸塚五十八番地
石野元藏

印刷者

東京市牛込區櫻町七番地
竹内喜太郎

發行所

東京市牛込區早稻田
早稻田大學出版部

(振替) 東京一三二四三
名古屋二二四二
大阪六八九〇五

日清印刷株式會社印刷

市島春城著

隨筆春城六種

趣味讀本たると同時に人生哲學

いかさま隨筆、ゴシップ雜文の横行する現代に於て、正に著者の隨筆は卓拔。著者は稀有の人情通、藝苑通、史實通、圖書通、政治通、等々であり而も縦横透徹の見識を語るに圓熟玲瓏の話術を以てする所、眞に天下獨歩である。銷夏新秋の高級讀物とのみ見るは當らず、就いて無盡の教養、趣味の啓發を享け給へ。

目次大要

- (一) 感興深き追憶
- (二) 檀窓舊夢談
- (三) 圖書その折々
- (四) 趣味談採餘
- (五) 意外錄
- (六) 衝口發

大隈侯一言一行 市島春城著

四六判五百頁
寫眞版多數入
定價 二・三〇
郵稅 二・二〇

東牛 京込

早稲田大學出版部發行

東京 東大 振替 〇〇九八六

市島春城著

春城隨筆

面白い隨筆を讀みたい人は先づ第一に本書を讀め!

讀書界の人氣を沸騰させ、幾萬の讀書子に深い感銘を與へた『隨筆頼山陽』の著者、春城先生が現代隨筆界の最大權威たることはいふ迄もない。事實、著者ほど博覽にして多方面の趣味に通じた者は尠かろう、本書はこの多方面の趣味を最もよく表現したもので、機智縦横、諷諭百出、筆鋒愈冴えて讀者をして酔へるが如くならしめる。眞に天下一品の隨筆集である。

目次大要

- 上篇 雅俗相半録——婦人の決闘——元祿義學の隠れた後援者、切支丹珍話、掏摸の著述、金貨し東叡山、縁切寺、以下百十數項。
- 下篇 趣味談叢——寺は趣味の淵藪、茶人の趣味教育、反古趣味書簡の區趣味、百本蒐集談、酒趣百則、以下十數項。

東牛 京込

早稲田大學出版部發行

東京 東大 振替 〇〇九八六

市島春城著

春城筆語

四六判四二五頁
總布函入美裝
定價貳圓五拾錢
郵稅拾貳錢

隨筆文學の極致、愈々絶妙

著者の隨筆に關してはおのづから定評あり呶々を要しない。本書は著者が漫興に驅られて筆を弄したもので、例の如く趣味談紙上に横溢し、世事に就ての觀察は奇警の内に眞理を寓し、その輕妙の筆は讀者をして卷を釋く能はざらしむ。著者の詩人的才藻と廣汎なる趣味性とは最も此書に發揮されてゐる。收むる所「漫興偶錄」「人物雜觀」「明治初頭文壇の回顧」「烟霞游記」「車上縱談」「百道樂」の六篇、著者が既刊の隨筆に較べて愈々出でて愈々妙を感せしむる。

東京 早稲田大學出版部發行 振替 東京一三二〇〇九八六

市島春城著

隨筆賴山陽

三六判七二〇頁
口繪多數入美裝
定價參圓
郵稅拾貳錢

▼本書は何故、無際限に賣れる？

(一)材料は著者が四拾年間苦心蒐集したもの、而も從來の著述中に漏れた斬新な材料を網羅したこと(二)山陽に對する褒貶的態度を超越して其人間味を赤裸々に表したこと(三)隨筆體に面白く描き、どの頁を読んでも趣味津津たること、などが主なる理由であらう。今回更に新發見の材料に依る記事八十餘頁及珍奇な寫眞數葉を添加した。殊に竹田が寫生した山陽竹田對座の圖は山陽の肖像畫として眞に天下一品である。

増訂新版

東京 早稲田大學出版部發行 振替 東京一三二〇〇九八六

市島春城著

藝苑一夕話

三六判全九百頁
總布函入美裝
價各貳圓參拾錢
郵稅拾貳錢

(上下二卷) ▼江戸文人詩客の逸話集

本書は『蟹の泡』の姉妹篇とも言ふべきもので、それが西洋の逸話を集めたのに對して、これは日本藝苑の逸話集である。即ち江戸文化が頂點に達して幾多の文人詩客を輩出した文化文政時代に於ける「ツムデ曲り」の人の逸話を中心としたもので、無邪氣で而も極めて味のある珍談は、一度手にすれば一氣に讀了せしめて了ふ底の魅力がある。

東京牛込 早稲田大學出版部 東京一六八〇三

小宮山書店
東京神田神保町
電(291)0286
3795

210-
7

2